明治三十四年九月五日發行
毎月一回五日發行

明治三十三年十二月廿五日
第三種郵便物認可

女學世界

第一巻第拾一號

口繪



女學世界第十一號目次



山階宮妃範子殿下



（雜報參看）

故獨逸皇太后フリードリッヒ陛下



(中村進午氏所藏)

墺太利女王マリアテレサの畫像

瑞西の山村



新刊豫告

文學士笹川臨風君著（九月中旬發行）

奈良朝

我邦昔文明の發達は奈良の朝廷時代を推すべし、唐朝制度文物の輸入、佛教の興隆、古事記、日本紀の編撰、假名文字の製作、皆此間にあり、而して道鏡の跋扈、押勝の謀叛其他著大の事蹟も亦此際にありたり。要するに歴史上最も重要にはた興味ある時代と云ふべし。本書は其人物風俗時情に至るまで精叙細論して、太平奈良の都の面影、一讀の下に歴然たるべし

全壹冊洋裝美本
正價四拾五錢
郵稅六錢

發兌元博文館

女學世界定期增刊

糸すゝき

第拾壹卷第拾貳號 九月十五日發行
正價貳拾錢
郵稅貳錢

口繪 内外人物風景等嶄新警拔なる寫眞銅版拾貳葉を添ふ

才媛投稿 ◉小說◉國文◉消息文◉普通文◉和歌◉新體詩等 何れも才媛淑孃の錦心繡腸に成れるものにして艷麗の文優婉の歌實に千紫萬紅

附錄 （富士のあけぼの（田山花袋）◉湖畔の夕暮◉米國女學生の狀態（江湖逸人）◉佛國婦人の眞相（菅原白峯）◉題未定（大塚楠緒女史）◉題未定（片山廣子女史）◉箱根紀行（中島眞子夫人）の美觀といふべし

發兌博文館

（甲の一）

新文藝

編輯主任　久保天隨

第壹卷　第九號

九月一日發行

目次

本誌體裁四六二倍
毎月一回一日發行
定價　一冊金十二錢◉六冊前金六十六錢◉十二冊前金一圓二十錢外に郵便稅一冊一錢づゝ

本誌は廣く江湖諸君の投稿を歡迎す
但し投稿は本鄕區西片町十番地久保得二方新文藝編輯所へ宛送附の事

發行所　東京市神田區仲猿樂町　新文藝社
發賣所　東京市神田區表神保町　東京堂

（甲の二）

▲教科用書新刊廣告▼

FAMOUS STOREIS
RETOLD BY
JAMES BALADWIN,
ADAPTED BY
H. SAKURAI.

櫻井彦一郎君校訂　女子英學塾藏版

逸事叢譚　フェーマス、ストーリーズ

美裝全壹冊
正價金卅五錢
郵稅　四錢

當時英米の學校にては從來の如く學生に授くるにリーダーを以てすることを廢し、之に代ふるに古人の逸話、名家の小品文並に歴史等の類を編述したるものを以てすることゝなり、此書の如きは即ち其一にして目下米國各所の學校に於て一般に採用せらるゝものなるが今之を移して我邦初等英學生の用に適せしめんが爲、幾多の訂正を施して出版することゝなれり
其特色とする處は
一古今の英雄哲人名婦の逸話四十餘編を綴りたるものなれば學生に與ふるに多大の興味を以てする事
一主として單音字を用ゐ固有名詞等には發音譜を施したれば第二リーダー程度の教科書に最も適したる事
一文章は米國の知名の教育家ジエームス、バルドウイン氏が精練の筆に成り、實用英語を學ぶに適切なる事
等の諸點に在りて高等小學校尋常中學校高等女學校及各種の學校の教科書となすに頗る其好なりとす

明治卅四年六月十九日　文部省檢定濟

ENGLISH STORIES
SELECTED
BY
MISS TSUDA.

津田梅子女史編　女子英學塾藏版

名家小品　イングリッシユ、ストーリーズ

美裝全壹冊
正價三拾五錢
郵稅　四錢

此書は津田梅子女史が多年教授上の實驗に基き實用英語の主旨により歐米大家の作に成れる小話數篇を撰ひ出で難解の字句には一々註を加へたるもの也殊に印刷紙質は共に文部省規定に準じて鮮明頁好なれば尋常中學高等女學校にて第四リードルを程度とする學年一期間の譯讀會話等の教科書となすに適し學生をして歐米の俗語を知らしむるに甚た便なり本書は既に日本女子大學校、女子高等師範學校、華族女學校明治女學校、女子英學塾其他男女學校の教科書に採用されたり

發兌元　東京日本橋本町三　博文館　◉　大賣捌　東京神田表神保町　東京堂

（甲の三）

在獨逸

醫學士 丸山秀雄先生
東京板橋病院長 守川南洋先生
日本藥學協會講師 鴨田修治先生 著

通俗衛生顧問

一名諸藥獨創術

全一冊三百頁正價金九十五錢郵稅六錢
上製金文字入正價一圓卅錢郵稅十錢

著者獨逸に研究の結果諸疾病起因症狀を
說發病前に防き或諸病發すべき起因を則
滅し或既に發したる病を治療す方法を病
名に依說明し又各其藥劑調合仕方を詳記

書中目次大略

食傷、食滯、胃弱、溜飮、癪のさしこみ、膓加答兒、霍亂、腸痛、便秘、痳疳、疝氣、眞田虫、蛔虫、蟯蟲、黃疸、腹膜炎、脹滿、腰痛、腎臟炎、膀胱加答兒、遺尿、腎虛、遺精、淫欲亢進、癩病、痔瘡、梅毒、咽喉加答兒、扁挑腺炎、感冒、鼻血、喉頭加答兒、馬脾風、氣管枝加答兒、喘息、喀血、肺炎、肺勞、肋膜炎、心臟病、痛風、僂麻質私、腦病中風、癲癇、舞踏病、依卜昆垤兒、脊髓勞、頭痛偏頭痛、痲疹、風疹、水痘、痘瘡、瘧疾、ペスト、インフルエンザ、コレラ、赤痢、脚氣、實布的里切創、刺創、挫創、止血法、銃創、丹毒、破傷風、狂犬病、鼠咬傷、疔、根太、癰、瘭疽、疣贅、疥癬、田蟲、いんきん田蟲、なまず、汗疹、夏月斑、飛火水蟲、はたけ、にきび、癩病、そばかす、ほくろ、わきが、脫臼、眼瞼緣、ものもらい、さかまつげはやりめ、トラホーム、雀目、近視、耳漏、耳鳴、子宮內膜炎、子宮實室炎、月經不順、及び閉止、髀私的里等此外三十餘病記載せり

發行所 日本藥學協會

賣捌 神田表神保町 修學堂

東海信文堂○良明堂○目黑○丸善
○大倉○服部○誠之堂○牛田屋

(甲の四)

八月十五日發行

圖書世界

第貳號

要目

◎圖書館論(坪谷水哉)◎支那に於ける歐洲印刷術應用(國府犀東)◎涼棚雜纂(岸上質軒)◎德川光圀卿(日東生)◎桂花園桂花(木圭山人)◎新聞紙上の浮世繪(吉岡芳陵)其他叢談圖書館、小說、文苑、批評等、材料尤豐富◎博文館發行圖書最近總目錄

每月一回十五日發行

每號寫眞銅版口繪入

正價 一冊金三錢◎六冊前金十六錢◎十二冊前金三十錢 外に郵稅を要す

發兌元 博文館

泰西名畫



佛國畫伯ビゼー、ルブルン女史の筆（圖中の母は女史自身也、

（ルーブル美術館備品）

風俗改良會唱首



板垣退助伯

日本弘道會々長



西村茂樹翁



伊太利公使大山綱介夫人久子

物故二夫人



故雨宮夫人信子



故佐々木豊壽女史

（前號雜報參看）





増酒資料（さけふやすもと）

壹斗の酒は直に貳斗となる大金儲的醸造化學作用の一大發明新法傳習望の方は郵券四錢送れば詳細なる傳習手續摘要錄など送呈す

東京市神田區五軒町拾九番地　日本授産館

わきが根治確證藥

何程重き慢性わきがにても誓つて根治し決して再發せざることと確證す價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固慢性症根治分貳圓卅錢の參種あり着金即刻送藥す

東京市神田區五軒町十九番地　日新館藥房

血塊月やく忽ち下る確證藥

本劑（藥名調經丸）は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も忽ち下す特効あり但し姙婦は流産の恐あるに付飲を禁ず價六拾錢特別製壹圓拾錢

東京市神田區五軒町十九番地　日新館藥房

可驚肉色の白くなる新劑

いか程色黒きも本劑特別製分貳劑を用ゆれば忽ち肉體純白色に變化し艶美の容貌となること確證す　價八拾錢特別製壹圓卅錢

東京市神田區五軒町十九番地　日新館藥房

速記法　自宅獨習生募集

二ヶ月卒業　月謝三十錢

○規則入用者は郵券二錢を投ずべし

東京市下谷區徒町三丁目九十五番地　速記學專修所

貴孃諸君に告ぐ

源氏物語を始め國文學書類品切れと相成居候もの陸續再版出來仕候間又々品切れと不相成內に御購求被成下度候

發兌元　博文館

新刊

日本體育會々長　陸軍中將男爵黑川通軌君序文

西川政憲君著

育兒體育　健康要訣

全壹冊　洋裝袖珍　貳百餘頁

正價金三拾錢　郵稅四錢

人生の幸福は健康にあり而して之を圖るには幼時に於てせざるべからず然るに從來の家庭を見るに育兒の方法其宜しきを得ず往々にして發育を妨げ反つて不健康を招くの弊あり著者茲に經驗する所を記して育兒の概要を世に公にし世に親たる人の參考に資す家庭上欠くべからざる要書あり

下田歌子女史著

母親の心得

全壹冊　和裝　正價卅五錢　郵稅八錢

西田敬止君著

育兒と衞生

全壹冊　洋裝　正價廿五錢　郵稅六錢

發兌元　東京　博文館

（乙の一）

博文館發兌 品切圖書增刷廣告

（乙の二）

- ◉ 二十七版 中等教育 日本歷史 上下 正價一圓十錢 郵稅二十錢
- ◎ 再版 四書新釋 大學 全 正價十五錢 郵稅四錢
- ◉ 十二版 正篇 千山萬水 全 正價五十錢 郵稅十錢
- ◉ 七版 帝國百科十一編 論理學 全 正價五十錢 郵稅十錢
- ◎ 七版 帝國百科十一編 論理學 全 正價三十五錢 郵稅八錢
- ◉ 五版 帝國百科二十五編 日本歷史 全 正價五十錢 郵稅十錢
- ◎ 五版 帝國百科二十五編 日本歷史 全 正價三十五錢 郵稅八錢
- ◉ 三版 帝國百科三十四編 近世美學 全 正價五十錢 郵稅十錢
- ◎ 三版 帝國百科三十四編 近世美學 全 正價三十五錢 郵稅八錢
- ◉ 三版 帝國百科三十五編 哲學汎論 全 正價五十錢 郵稅十錢
- ◎ 三版 帝國百科三十五編 哲學汎論 全 正價三十五錢 郵稅八錢
- ◉ 再版 帝國百科三十七編 提要造林學 全 正價五十錢 郵稅十錢

注意

◉印 洋裝上製符 ▲印 和裝美帙入符

◎印 洋裝並製符 △和裝裝書の符

- ◎ 再版 帝國百科三十七編 提要造林學 全 正價三十五錢 郵稅八錢
- ◎ 十版 日用百科十五編 祝辭演說法 全 正價二十五錢 郵稅六錢
- ◎ 五版 日用百科四十二編 海軍一斑 全 正價二十五錢 郵稅六錢
- ◎ 三版 日用百科四十五編 謠と能 全 正價二十五錢 郵稅六錢
- ◎ 十版 文學全書五編 中務內侍日記 和泉式部日記 其他全 正價二十五錢 郵稅三錢
- ◎ 十版 文學全書六編 濱松中納言物語 其他全 正價二十五錢 郵稅三錢
- ◎ 十版 文學全書七編 宇治拾遺物語 其他全 正價二十五錢 郵稅三錢
- ◎ 十五版 文學全書十四編 榮花物語 中編 正價二十五錢 郵稅三錢
- ◎ 十二版 文學全書十五編 榮花物語 下編 正價二十五錢 郵稅三錢
- ◎ 十五版 文學全書十六編 太平記 上編 正價二十五錢 郵稅三錢
- ◎ 十五版 文學全書十七編 太平記 中編 正價二十五錢 郵稅三錢
- ◎ 十五版 文學全書十八編 太平記 下編 正價二十五錢 郵稅三錢

	版	叢書	書名	正價	郵稅
◎	十五版	文學全書二十三編	水鏡、大鏡 全	二十五錢	五錢
◎	九版	支那文學四編	老、呉、孫、列子講義 全	二十五錢	八錢
◎	九版	支那文學五編	韓非子講義 上	二十五錢	八錢
◎	六版	支那文學二十二編	史記列傳講義 上	二十五錢	八錢
◎	四版	支那文學二十三編	史記列傳講義 中	二十五錢	八錢
◎	四版	支那文學二十四編	史記列傳講義 下	二十五錢	八錢
△	三版	家庭文庫三編	詠歌の栞 全	三十五錢	八錢
●	四版	帝國文庫二編	眞書太閤記 卷二	六十錢	十六錢
●	再版	帝國文庫四編	眞書太閤記 卷四	六十錢	十六錢
●	十二版	帝國文庫九編	道中膝栗毛 全	六十錢	十六錢
◎	十二版	名勝地誌二編	東海道の部 上	三十錢	八錢
◎	四版	名勝地誌八編	南海道の部 全	三十錢	八錢
◎	再版	名勝地誌九編	北海道の部 全	三十錢	八錢
△	五版	圍碁全書一編	圍碁入門 全	十五錢	四錢
△	再版	圍碁全書二編	圍碁初步 全	十五錢	四錢

	版	叢書	書名	正價	郵稅
◎	四版	日本歴譚二十四編	威海衛 全	八錢	四錢
◎	四版	世界お伽四版	魔法博士 全	七錢	二錢
◎	再版	世界お伽十六編	猿智惠小僧 全	七錢	二錢
◎	十二版	日本昔噺十六編	猿と海月 全	五錢	二錢
◎	十二版	日本昔噺十七編	安達ヶ原 全	五錢	二錢
◎	再版	内外遊戲二編	新游泳術 全	十二錢	四錢
◎	再版	内外遊戲三編	ベースボール、クリッケット 全	十二錢	四錢
◎	再版	内外遊戲五編	銃獵案内 全	十二錢	四錢
●	五版		歐米小觀 全	四十錢	六錢
●	四版		時代管見 全	三十錢	六錢
●	再版		文藝評論 全	三十錢	六錢
●	四版		風月集 全	三十五錢	六錢
▲	十版		日本女禮式大全 函入	一圓	重量四百匁
●	十版		日本女禮式大全 洋裝	七十五錢	十六錢
●	五版		成功要錄 全	二十八錢	四錢

- ◉ 再版 カーネギー 全 正價二十五錢 郵税四錢
- ◎ 九版 蔬菜栽培法 全 正價七十錢 郵税十二錢
- ◎ 九版 果樹栽培全書 一卷 正價三十錢 郵税六錢
- ◎ 三版 佛教大原理 全 正價二十錢 郵税二錢
- ◎ 四版 新體詩學 全 正價十五錢 郵税四錢
- ◎ 十二版 西國立志編 全 正價二十七錢 郵税八錢
- △ 新撰 明治字典 全 正價三十五錢 郵税四錢
- ▲ 新撰 日本字典 全 正價九十五錢 郵税八錢
- ▲ 三音四聲 字貫 帙入 正價五圓卅錢 重量八百匁
- ▲ 三音四聲 字貫 函入 正價六圓 重量一貫目
- △ 明治女子書簡文 全 正價四十錢 郵税四錢
- △ 六書通 三 正價七十錢 郵税六錢
- ◎ 五版 日本歷譚 十八編 平田篤胤 全 正價八錢 郵税四錢
- △ 二十版 農業讀本 上卷 正價十四錢 郵税四錢

- △ 十五版 農業讀本 下卷 正價十四錢 郵税四錢
- ◎ 再版 農學講習全書 全 正價四十五錢 郵税八錢
- ◉ 再版 軍事小說 戰塵 全 正價三十錢 郵税六錢

治肺新法

附錄 肺病全快實歷談

此書は拙者肺病全快に付其實地經驗の方法を詳記したる物郵劵三錢封入申込者に無代施本致べし

東京下谷上根岸町百十一 藥學得業士 金澤巖

（電話本局二二一五九番）

◉奏效確實 器械不要 簡易複寫インキ

蒟蒻版寒天版及び其他の印類又は器械藥品等を要せず此のインキ一品にて簡便迅速座上立どころに同一の文書圖畫數十百枚を印刷し得べし○即ち此インキを以て書したる原稿より直接他の白紙へ字痕を透徹する者にして一枚の原稿より凡七八十枚宛を寫し一瓶のインキにて原稿百數十枚を作り複寫壹萬餘枚を得るものなり

（使用法說明書を附す）

◉本品は既に諸官衙及郡區町村役場等の御用品たり

●定價 二オンス 堅裝瓶入 送料共 金四拾錢 爲替神田郵便電信局郵劵壱割増●

發賣元 神田區末廣町三十八番地 中村屋商店

（乙の四）



和蘭國首府アムステルダムの河岸

京都圓山





山城國宇治川（宇治川ヨリ興聖寺ヲ望ム）

（日本名蹟雜話參照）

近藤氏意匠改良禮服



（雜報參照）



梶田氏意匠改良服

近藤氏意匠改良袴服



成女學校（遊戯の圖）





（學事欄參照）

近刊廣告

坪谷善四郎君著（九月上旬發行）

市制町村制釋義

全壹冊洋裝　菊判二百餘頁　正價四拾錢　郵税六錢

市制村制の始めて施行せらるゝや坪谷君は市制町村制註釋を著し盛に世に行はれて版を重ぬると既に十七回に及ぶ然れ共其後法令の改正せられ又は解釋の進化せるもの多く今に及べは註釋の不備なるもの又は誤謬あるもの少なからず坪谷君近來自ら東京市會及牛込區會等の議員となり平生經驗する所多し故に今回新たに本書を著はし最も簡易明白に法律の理由を解釋し且つ市町村制に伴ふ一切の法令を附記し以て市町村の吏員及議員の爲に座右の寶典たらんとを期せり既に出版に着手せり近日公にせらるべし

市岡正一君編纂　◉　改正戸籍事務取扱全書　全壹冊洋裝　賣價金壹圓廿錢　郵税拾六錢

宮川大壽君註釋　◉　理由詳說 改正戸籍法典　全壹冊洋裝　正價金三拾錢　郵税八錢

坪谷善四郎君著　◉　改正府縣制郡制釋義　全壹冊洋裝　賣價金三拾錢　郵税六錢

鷲見金三郎君編纂　◉　改正府縣制並郡制關係法規　全壹冊洋裝　正價金五拾錢　郵税拾錢

市岡正一君編纂　◉　戸籍吏必携 戸籍事務實行問答　全壹冊洋裝　正價金貳拾五錢　郵税四錢

神津禎次郎君著　◉　民法戸主必携　全壹冊袖珍　正價金三拾五錢　郵税六錢

博文館編輯局編纂　◉　卅四年新法令　全壹冊洋裝　正價金三拾錢　郵税三錢

（丙の一）

發兌元　東京　博文館

鶯亭金升君著

風雅文庫

全部六册袖珍美本

都々逸の栞

全一册上製
正價貳拾錢
郵税六錢

鶯亭金升君の情歌に於ける世既に定評あれば喋々を要せず、本書は斯道作者の參考書として天文地理鳥獸虫魚等各部に別ち今古の秀吟を添へ季題と雜題とを親切に說きて卷頭には初心の爲めに作法を集揭け卷末には雜題見立物詠込折句其他數百吟を集めたる無比の珍書にして、啻に雜俳家のみの重寶にはあらざる可し、尙近刊の第二編以下續々發行の題號を左に揭ぐ。

風雅文庫續刊目次

冠句の栞
狂俳の栞
狂句の栞
狂歌の栞
雜俳の栞

上記の六册を纒めて美帙に裝ひ明窓淨凡の下に備へて花月の好伴侶とせば百年の長齡も此の浩氣を養ふの原素となるを得べし雅客たる人必ず一本を購入せざるべからず

書類

新刊 俗曲大全 全壹册
鶯亭金升君校訂
正價金六拾錢郵税拾六錢

再版 都々逸一千題 全壹册
鶯亭金升君編纂
正價金參拾五錢郵税六錢

(丙の二)

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

太陽増刊

世界國勢要覽

九月十日發行
第七卷第十一號
正價金參拾錢
郵稅參錢

世界の交通頻繁なるに從つて各國民は世界萬國の形勢に曉通せざる可らず是れ獨逸國に「ホーフカレンダー」佛國に「アルマナック」英國に「ステーツマン、イーヤブック」其他歐米の各邦亦世界形勢通覽とも稱すべき書籍の年每に出版せらるゝ所以也我國に至つても亦此種一二の書あれども材料既に陳腐にして活世界に用ふ可らず茲に本館が太陽定期增刊として發行する者は最新の材料を基とし世界現在の形勢を傳ふ其編纂の法は繁雜に流れて却て讀者に不便を感ぜしむることを避へ努めて簡潔に而も明細に記述して毫も遺漏なし讀者若し一書を坐右に置かば地球上諸邦の成立より現今各方面の狀況に至る迄一囘の漫遊をも試みずして而も明瞭に會得し得べく以て世界の形勢を論じて言肯綮に當らざるなからむ

目次

發兌元
東京日本橋區本町三丁目
博文館

(丙の三)

通俗百科全書

全部五拾冊　全壹冊菊版三百二十頁　每月壹回發行

第貳拾貳編
河上清君著
通俗獨逸歷史
（製本出來）

全壹冊
菊版
三百廿頁
正價卅錢
郵稅八錢

本書は先づ第一編に古代史を記し日耳曼人の風俗日耳曼人と羅馬人との關係を詳明ならしめ第二編中世史には最初の日耳曼種族の狀態それよりフランク王朝時代サクソン王朝時代ホーヘンスタウヘン王朝時代ホワルクセンブルヒ王朝に移る過渡時代の諸王に及び夫より墺太利王朝即ちパブスブルヒ王朝の勃興より文藝の復興までを詳記し第三編近世史に入りて更に墺太利王朝カール五世即ち宗教改革より日耳曼帝國の解體に及べり進んで四編には十九世紀史として日耳曼列邦と那翁一世との戰爭を記し各聯邦の成立文藝の發達聯邦に於ける革命的運動より普佛戰爭日耳曼の統一憲法の制定及び最近の狀勢に記及して精細洩す所なし近來稀有良好の獨逸史は夫唯だ本書あるのみ

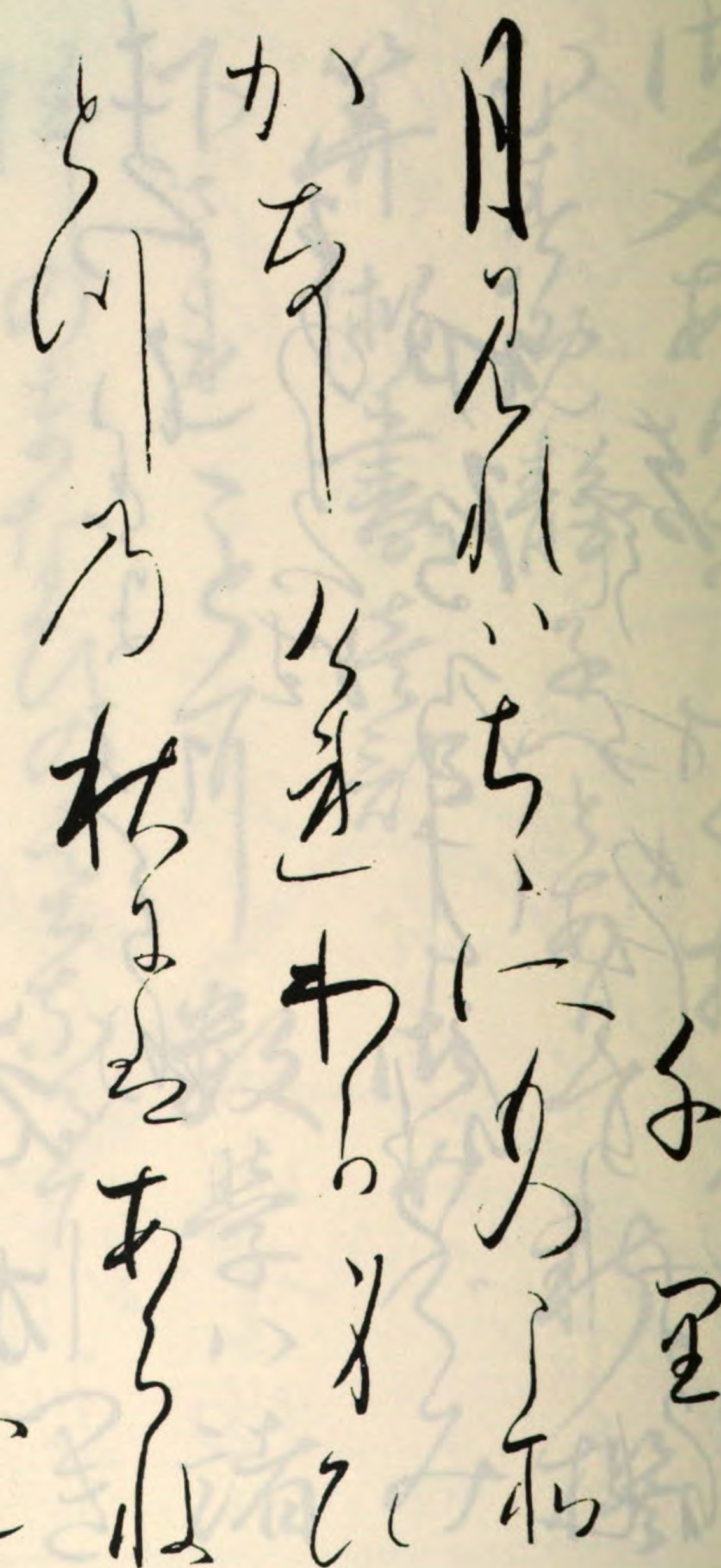
既刊目次

正價前金　●自一編至十五編一冊廿五錢　●六冊壹圓四拾錢　●十三冊貳圓七拾錢　●十六冊以下一冊參拾錢　●六冊壹圓七拾錢　●十二冊參圓參拾錢

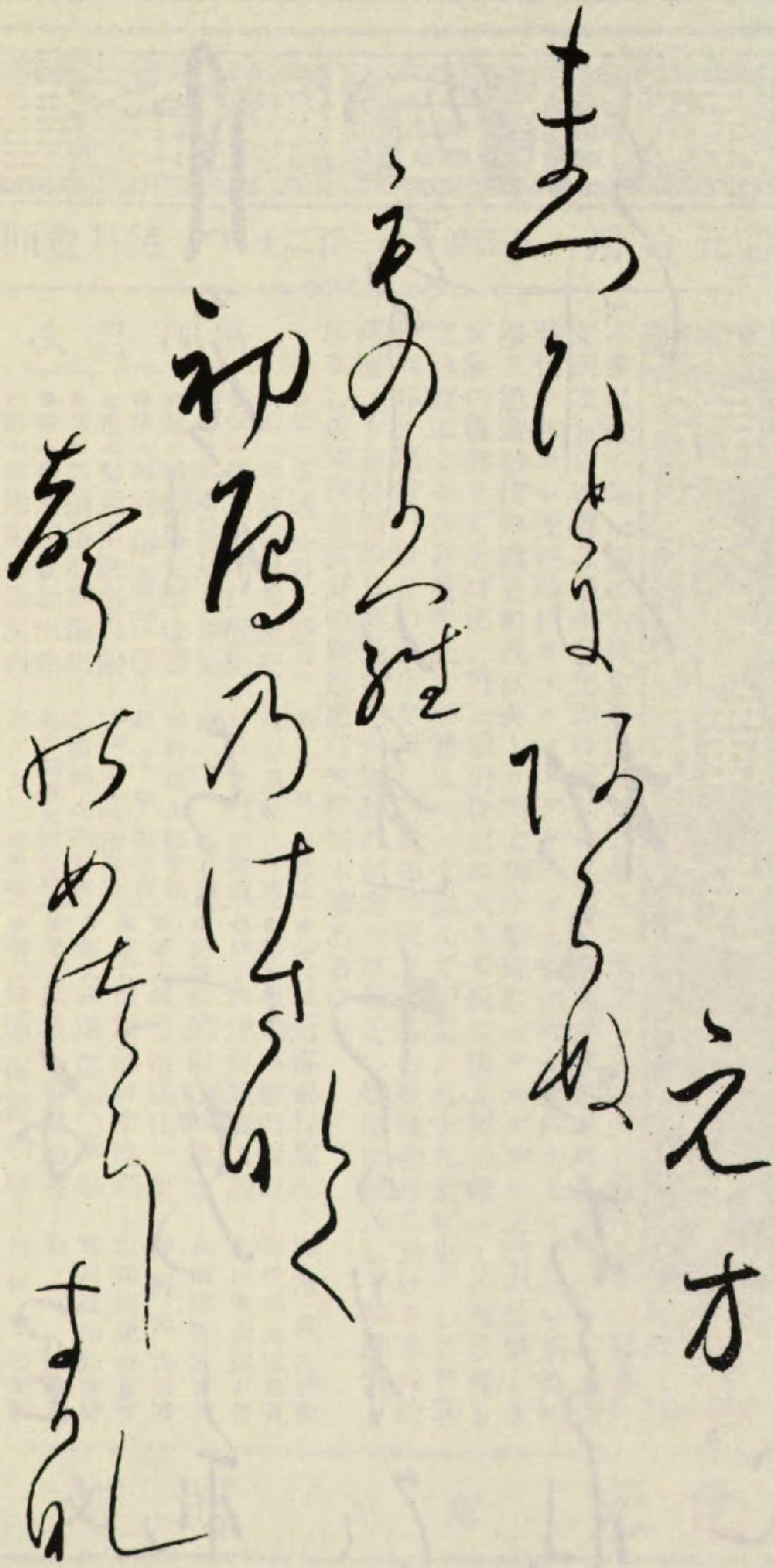
發兌元　東京　博文館

（丙の四）

多田親愛先生筆



多田親愛先生筆



坂正臣先生筆

此文ありてこそ拝見いたしは
むすめ静子へとありて新撰
算術書壱部此めぐみ
下されたり数学は諸
科のまなびのもとゐなるなりつき
なまよりし深くよろこばせ給ひ

こまごとの御諭し一二御究と
なじ系くせんその寸計まで
みちびきゝすゞくん御書物ハ
長々秘義いくゝせかすゞくん
とゝあつまがく糧までこのこと
りける



野口小蘋女史筆

野口小蘋女史筆





野口小蘋女史筆

野口小蘋女史筆



石井研堂君著　有名畫伯挿畫

理科十二ヶ月

全部拾貳册　毎月一回刊行

正價　一册金拾錢　◎　拾貳册前金壹圓拾錢　◎　郵税一册四錢

全部目次

一月	新風船	二月	雪達磨
三月	花の錦	四月	汐干狩
五月	植物園	六月	蜻蛉祭
七月	游泳嚢	八月	富士詣
九月	暴風雨	十月	銃獵者
十一月	幻燈會	十二月	歸省錄

九月發行

暴風雨

全壹册　正價拾錢　郵税四錢

年中第一の厄日なる二百十日は平穏なるか暴烈一なるか一年の國勢に大關係あり暴風雨に關する理科の智識は必用なり少年諸君是非一讀あれ

◎十月　銃獵者　續刊

發兌元　博文館

巖谷漣山人著　有名畫伯挿繪

世界お伽噺

毎月壹回發行◎全部壹百册◎洋裝菊判美本

正價壹册七錢◎六册前金四拾錢◎拾貳册前金七拾八錢◎郵税貳錢

製本出來

第三十二編　（中川葦舟畫）

南亞米利加　虹の橋　附新世界

全壹册正價七錢郵税貳錢

此お噺は原著を「ガックルの旅行」と云つて南亞米利加の有名なるお伽噺です鳥や獸の聲を聞き判たお蔭で一羽の鴨に案内され虹の橋も後れば雲の洞へも入りとう〱神様に人間の大將になれと命せを享けると云ふのですが「新世界」も北亞米利加お噺でこれもガックルに能く似た面白いお伽噺のですからサア〱讀で御覽じろ讀んで御覽じろ

◎續刊

第三十三編　浮れ胡蝶　近日發兌

（十の二）

◎文武堂藏版近刊豫告

少年史譚

全部拾貳冊洋裝大判
美本　毎月一回發行◎毎編讀切◎密畫數個挿入
定價一冊金拾五錢◎六冊前金八拾七錢◎拾二冊前金壹圓四拾錢◎郵稅壹冊四錢

偉人の傳紀は人生の嚮導者なり、慰籍者なり、譬へば雪中に印せられたる足跡の如し、後人之に據りて進むを得べし、人を鼓舞して勇往せしめ、又人を慰籍して艱苦の中にも失望せさらしむ、書を讀み志を立てむ者、座右常に傳紀なかるべからず。言ふ勿れ古人の傳のみと、觀察の新を以てすれば、數百年前の古人の傳にも、豈新世紀の餘師なからむや。少年史譚の著者は、見識筆力共に當代の撰、而して平生私淑せる古人を擇び、滿腔の同情を寄せて、以て描寫せられたるもの、血わり、涙わり、古英雄の面目紙表に躍動す、實に傳紀中の好傳紀也。

第壹編　平相國　文學士 高山樗牛君著　小堀鞆音君畫　九月下旬發行

第二編　鎭西八郎　國府犀東君著　武内桂舟君畫

第三編　鬼吉川　文學士 大町桂月君著　水野年方君畫

第四編　旭將軍　文學士 中内蝶二君著　倚井年峯君畫

第五編　俠僧文覺　文學士 高山樗牛君著　鈴木華村君畫

第六編　北條時宗　國府犀東君著　村田丹陵君畫

第七編　小楠公　文學士 大町桂月君著　梶田半古君畫

第八編　眞田幸村　文學士 中内蝶二君著　尾形月耕君畫

第九編　上杉謙信　國府犀東君著　武内桂舟君畫

第十編　俠商利兵衛　文學士 大町桂月君著　富岡永洗君畫

第十一編　北條早雲　文學士 中内蝶二君著　小林永興君畫

第十二編　常盤御前・静御前・奴小萬　文學士 大町桂月君著　國府犀東君著　文學士 中内蝶二君著　小林永興君畫

發兌元　東京日本橋本町三　博文館◎大賣捌　東京神田表神保町　東京堂

（丁四十）

(一〇三)

堺枯川著

家庭の新風味

第一册 家庭の組織

▲結婚論 ▲夫婦論 ▲家族論

▲附錄 春風村舍の記

枯川曰く「謹んで此書を世の娘達と細君達とに呈する、又敢て舅姑に呈する、又敢て青年男子に呈する。」

壹册 金貳拾錢 郵稅二錢

全部六冊豫約前金壹圓郵稅八錢

第二 家庭の事務
第三 家庭の和親
第四 家庭の文學
第五 家庭の娛樂
第六 家庭の教育

(以上續々刊行)

(東京神田區南甲賀町八番地)

發行所 内外出版協會

秀才文壇

第一號 十月廿日發行

投稿〆切 九月廿日

毎月一回發行 定價 一册(大判八十頁)金拾錢○六冊前金五十七錢○十二冊前金壹圓八錢○郵稅一册一錢づゝ◎爲替本郷駒込局郵券代用一割增

詳細の事は載せて本誌第一號にあり見よ

玆に滿天下の少年諸君の爲に文學雜誌『秀才文壇』を發行し廣く散文韻文詩歌等を募集し名家の點删を乞ふて優等者に賞品を與へ、斯道研鑽の資に供せんとす、四方の諸君續々投稿あれ

●當撰者の肖像又は筆蹟を紹介す

▲題は隨意、半紙へ廿四字三十行以内に認めらるべし

發行所 東京市小石川區指ヶ谷町百三十三番地

文光堂

●新刊豫告

文學士笹川臨風君著

遊俠傳

洋裝上製 袖珍美本

紙數二百六十頁

正誤

前號の廣告中日本情史著者、西鄕醉夢君とせしは西村醉夢君の誤なり依て玆に正誤す

(下の四)

明治三十四年九月五日發行

女學世界

第壹卷　第拾壹號

紀元二千五百六十一年　西暦一千九百一年（辛丑）

論説

男女交際論

日本女子大學講師　高島平三郎

人間には種々の希望がありまして、或は生れながらにして直に起るものもありますれば、又年を重ぬると共に、次第に發達して參るものもあります。是等の多くの慾望を大別して見ますれば、身體に就いての慾と、心に就いての慾との二つと爲すことが出來ます。身體に就いての慾とは飢えて食物を需め、疲れて休む事を需めるなどの類でありまして、是は生れながら誰も有つて居る所のもの

であります。又心慾と申しまするのは、追々心の發達するに從つて、起つて來る所のものでありまして、其數も多くありますが、中にも所有の慾、權勢の慾、名譽の慾、智識の慾、交際の慾等は其の重なるものであります。是等の慾は人に依つて強いと弱いとの別はありますけれども、何人にも必ず備はつて居るものでありまして、人は或る方面から觀ましたならば、是等の慾望を滿足する爲に生活して居るのであると云うても可い程であります。偖て是等の慾は、一方が強くなれば、一方が弱くなると云ふ樣な關係はありますけれども、互に其の滿足を得やうとして働いて居る有樣は、孰れも負け劣りの無いもので御坐います。例へば智識の慾望の盛んな人は、丁度飮食の慾が飢えたる人に盛に起るやうに、非常に強く起つて、智識を得なければ、寢ても立つても居たゝまれぬと云ふやうな、強い力のあるものであります。是と同じ樣に、交際の慾と云ふ事も、人間の自然の情から起るものでありまして、社會の進歩と共に益々盛に發達するものであります。それですから、一旦多くの人と交際を爲し經驗のあるものは、交際を狹め、又は之を絕つと云ふことは、非常に苦痛であつて、丁度飢えた時に物を食べずに居るのと、其の苦みは少しも變つた事は無いのであります。斯の樣に多くの慾望をほど／＼に滿足させて其の調和を計つて行くと云ふことは、人間の世渡りの上に大切なことであります。

偖て人は自分の仲間と交はると云ふことは、前に申したやうに、なか／＼強い慾望でありますが、取り別け自分より異つて居る性のものと交はることは、一層強い望を有つて居るものであります。

何故かと申しまするならば、凡そ人の望と云ふものは、自分に無い所のものを求むる心から起るものであります。それ故に金の無いものは益々金を得ることを望みまするし、煙草好きが煙草が無くなり、飲酒家が酒が無くなりまするならば、其の飲み度い情は益々強くなるものであります。其の如くに、總ての慾望は皆自分に無い所のものを得て滿足しやうとする心から起るのであります。即ち男子は女子の有つて居る種々の美しい性質、思想、感情、容貌、態度等を有つて居りませぬ。又女子は男子の有つて居る剛勇の精神、行爲、態度等を有つて居りませぬ。斯樣に互に自分が欲しいと思つても、自分に得られぬ所のものを、一方の相手が有つて居りまするから、是等の人と交際致しまするならば、互に其の無い所のものを交換して、恰も外國貿易が國家に大なる利益を與ふるやうに、銘々に尠からぬ利益を與へることであります。是等の理由からして、昔に於ては、男女の交際と云ふことは非常に盛に行はれて、それ〳〵人間の慾望を滿足させて居たに違ひ無いことでありませう。我が國の昔に行はれて居た歌垣なぞと云ふ遊戯は、西洋の夜會や舞踏會と同樣に、男女交際の慾望を滿足させて居つたものに違ひありませぬ。然るに何故斯樣な風俗が益々發達せずして、交際を妨ける樣な種々のむづかしい道徳の法則などが起つて來たかと云ふ事に就いては、次に聊か研究致して見ませう。

凡そ道徳の法則と云ふものは、始めから理屈を考へて立派に成り立つたものではありませぬ。色々其社會の狀態に從つて必要を感じ、次第に發達して來たものであります。其故に昔の法則は、今日

必要で無いものもありまして、其の儘今日に使ひますならば、大に不都合のものも尠くないことでざいます。古人が「男女七歳にして席を同うせず」などと云ふて、非常に男女の交際に制限を致しましたのは、斯樣な制限をする必要があつたのでありませう。則ち昔の人は今日の人の樣に智識も開けず、交際も狹く、感情は習練されて居りませぬから、動もすると、一方の慾望を非常に強く起しまして、是が爲に自分を害し、又社會を害すると云ふやうな、惡い結果を來すことが起つたことでありませう。印度で釋迦如來が佛敎の戒律を作られたのも、矢張斯る次第で、始めから彼の樣な多くの戒律を作つて出されたのではあらずして、多くの弟子の中に、情に馳せ、慾に迷ふて種々の罪を犯すものがあつた度每に、其の戒律の必要を悟られて、加へて行かれたものであると申します。支那は勿論一般東洋には、男女交際が非常に嚴格であつたと云ふことは、矢張一般の智識道德が進歩して居らずして、動もすれば猥りがましい結果を來して、世の中を害することが多かつたから、止むを得ず聖人が是等の道德上の法則を立てゝ、人に示されたものでありませう。是等の習慣から、男女交際と云ふことに就いて、東洋と西洋とは非常に異つた考を有つて居る樣であります。西洋では男女の交際と申しましても、別に忌むべき不道德の感念は之に聯想して來ることは無い樣でございますが、東洋で男女の交際と云ふことを稱へますならば、直に厭ふべき感念が聯想して參るやうになつて居るのでございます。是等は實に東洋の道德の低いことを現はす一の印章でありまして、寔に慨くべきことであります。

以上の次第でありますから、文明の進歩致しまするとともに、道徳上の規則も種々と變へて來ねばならぬことが大層あるのであります。男女交際の如きは即ち其の一でありまして文明が進歩して人々の道徳思想が發達致しまするならば、嚴格な規則、殊に七歳にして席を同じうせずとか、男女相授受するには手を以てせずとか云ふやうな窮屈なる規則は全く不用に屬することゝ思ひます。私の今日望みまする所は、日本の文明も最早支那の孔子や孟子時代のものとは同日に論ずべきではなく、長足の進歩を為して居ることゝ思ひまするから、何時までも數千年前の法則を墨守して居らずに、新しい社會に適する適當の習慣を養ひ、法則を定むるやうに為たらば、宜からうと思ふのであります。尤も男女の交際を開くと云ふことに就いては、非常に注意を要することは勿論の事でありまして、唯西洋文明の生噛りをして、其表面の形ばかりを觀て、其の根本に怎麼云ふ習慣があるか、又怎麼云ふ法則があるかも察せずして、直に極端なる交際法を開かうと為るやうな突飛な論には絶對に反對であります。先年西洋熱の大層流行した時には、隨分斯る禮儀も法則も無い男女交際や自由結婚を斷行して、社會に害毒を流したことも尠くないやうに思ひます。併し又斯様な惡い事があつた為た、男女の交際と云ふことは、何時までも宜くないやうに思ふのは、牛肉を食べ過ぎて病氣に成つた為に何時も肉食をしてはならぬと云ふものと、少しも異つた事の無い妄論であると思ひます。凡て物は先づ、少く珍しい時には、非常に人からも注意をされ、又珍重がられるものであります。例へば四季折々の魚にしても、又野菜にしても、其の物の始めて市場に出ました時には、人々が爭

つて之を買はむと致しまする。乃で經濟學上、需要供給の道理から、大に値段も騰貴くなつて、多くの人に賞讃されることとてありますが、併し段々日が經つて、其の物が多く市場に上る樣になりますれば、値段が下落ると共に、誰の口にも入るやうになつて、別段人も注意せず、普通の飲食物と同樣に認めるやうになります。男女の交際も斯の通りでありまして、數百千年の習慣で成年未滿の男女が、互に相會つて談話を爲ると云ふやうな事のない所へ、偶々一二の男女が交際を致しまするならば、世間の人が注意するのは勿論のこと、男女兩方共に非常に珍しく感じて互に珍重する心を起すでありませう。其の故に始めの交際を注意致しませぬならば、段々深入りして、間違つた結果を來すと云ふやうな事もあるでありませう。併し是も充分な智德の習練を經た所謂紳士淑女と謂はれるべき人々が神聖な、純潔な、交際法を開いて、次第に模範を示して、一歩々々に其の範圍を擴めて行きますならば、十年、二十年乃至三十年、五十年の間には、自ら男女交際の習慣も出來法則も起つて、間違も少くなることでありませう。天下の事と云ふものは、餘り前途の前途まで心配して居つては、老母が孫を旅に出すやうなものであつて迚も思ひ斷つた事の出來るものではありませぬ。思ひ斷つた事を爲なければ、進步と云ふことも、改良と云ふことも、出來るものではありませぬ。其故に男女交際と云ふ事も、今の日本の狀態では未だ早いとか又危險であるとか、種々氣遣ふ人もあるやうでありますが、私は是等の心配に拘はらず、或る部分から、着々男女の交際を奬勵して行くと云ふことは、今日の敎育上、又社會の風俗改良上非常に大切のことであらうと思ひま

す。

何故男女の交際が教育や風俗改良に大切であるかと申しまするならば、前にも述べた通り、異性の者と異性の者との交りと云ふことは、人間の天然に稟け得て居る強い慾望でありまして、到底人爲を以て斷つて仕舞ふと云ふことは出來ないものであります。所が日本の社會では、紳士淑女の間に純潔なる交りを爲して斯の慾望を滿足さする方法が立つて居りませぬから、止むなく之を滿足させる所の厭ふべき方法が行はれて居るのであります。其の方法は何であるかと申しまするならば、私が申すまでもなく、諸孃が御存知の如く、藝妓又は酌婦なぞと云ふもの丶類であります。又女子の爲にも俳優藝人の如きは、一種の交際の道具となつて居る傾きがあります。是等のものは、勿論道德に於ても、學識に於ても、今日の社會に於て、高尚なる教育を受けた所謂紳士淑女と同じく見ることは出來ませぬから、是等の者の間に行はる丶男女の交際は實に厭ふべき結果を生ずると云ふことは必然のことであります。試みに青年學生の墮落は勿論、是等の學生が社會に出で、是から事業を爲して發達せうとする時に墮落する原因を考へて見るならば、斯樣な不正な男女の交際から來ると云ふことは疑ひないことであります。其の外此頃學生の墮落と云つて、色々男女の關係上面白く無い事の新聞に現はれまするのは、皆正當なる交際に慾望が滿足されぬ所から、種々秘密の交りを結ぶと云ふ結果から起つたことであります。何でも事は公明正大に致しまするならば、害の少いものでありますけれども、秘密に致しまするならば、縱令善い事でも動もすれば、惡い結果を來し易

いものであります。殊に青年男女の交際なぞと云ふことは、一歩を誤れば、直ぐ道德の罪人となり、社會を誤ると云ふやうな怖しい結果が來るものでありますのに、之を秘密にするのでありますから、怎麼しても惡い事に陷るのは免れがたいとであります。それ故いつそ青年の敎育者や父兄達が奮發して、適當なる方法の下に、公然と男女の交際を許して、其の道を開いたならば、決して今日の如き厭ふべき結果が多く生ずるものではあるまいと信じます。所が今日多くの女子敎育者なぞは、女子と云はゞ、腫物のやうに。考へて、少しも交際の愉快を滿足させないで、小說さへも見ることを禁じ、眞正な人權の一として認められて居る信書の秘密さへも打ち破つて、學生の所へ來た手紙を一々舍監の眼前で開封させて見ると云ふやうな實に壓制の極、野蠻の至りとも云ふべき方法を以て、男女の交際を遮つて居るのが多いやうであります。是等は實に情ない次第であつて、日本社會の道德の程度が低いと云ふ事を示して居る譯であります。併し如何程人爲を以て斯樣に禁めましても、道路を歩けば幾何も異性の者に出逢ひます。又家に歸れば必ず異性の人に接せねばならない次第でありますから、到底天然の要求に逆ひ、周圍の事情に打ち勝つと、云ふことは、出來ないのであります。斯樣に交際を遮つて敎育を施します結果は如何であるかと尋ねて見まするならば、必ずしも良い結果を得るとは斷言することは出來ませぬ。成る程學校に居りて、非常に嚴重なる規則の下に束縛されて居りますから、奴隷の樣にして、舍監や敎師の命令に從つて居りませうが、一旦學校を出て自由の身となりますれば、前にお話したやうに、交際が非常に珍しいから、相手を撰ぶ暇無く、得る

に從つて交りを結むで、終に生涯の身を誤るやうな結果を生ずるものが少く無いのであります。宗教學校なぞの非常に嚴格に慾を制する教育を受けたものが、極端なる墮落を致しまするとの比較的に多いのは、全く斯の理由であらうと思ひます。

併し斯の交際を實行致しまするに就きましては、經驗のある男女の教育者が、深く研究を積むで、深重なる方法を採つて始めなければならぬと思ひます。私の考では、教育者又は宗教家などの家庭に於て、折々親しい男女の朋友又は學生などを招いて、茶話會又は懇親會と云ふやうな事を開いて其席では種々男女が樂しく語り、睦しく遊び、充分純潔なる交際を保つことの出來るやうに爲たらば、宜しからうと思ひます。日本の宴會が非常に亂雜であつて、酒を飲み、歌を歌ひ、跳ね踊るなどと云ふ樣な騷動を致しまするのは、高い教育を受けた婦人が一所に宴席に連つて居らないと云ふことが大なる原因を爲して居るだらうと思ひます。其故に成るたけ交際を簡單にして、誰でも其席に臨むことが出來るやうに注意して、飲食と云ふ樣な味覺上の快樂を貪るよりも、見聞の快樂即ち視覺聽覺などの高尚なる感覺より起る快樂や、又思想上の樂み、氣高き情想より來る所の樂み、などを宴會の快樂の中に附け加へるやうに致したいと思ひます。斯樣に致しまするならば、教育ある紳士淑女が共に席を同うして樂むでも、少しも不都合なく、又猥りに間違ひの起る氣遣ひも無いことゝ思ひます。斯樣に致しまするならば、婦人は勿論、男子も所謂交際の慾を滿足させて、決して無教育なる酌婦、藝妓等が交りを求めると云ふことは無くなることゝ思ひます。畢竟今日の紳士

と謂はるゝ者が、是等の婦女に交ると云ふのは、一は紳士の修養が低くして、趣味の下劣なるのに因りますけれども、又一には教育ある立派な良家の淑女と、純潔なる交際を爲る道が開けて無い所以でありますから、唯今申したやうな美しい集會が社會の上流殊に宗教家、教育家の間に於て行はれるやうになりましたならば、必ず我國の風俗を改良する大なる助けとなることは、疑ひを入れざることゝ思ひます。尚ほ其交際の方法等に就きましては、他日改めて委しく論ずることゝいたしまして今は唯我國に於て純潔なる男女の交際を開くべき必要が迫つて居り、又其の時機は決して早くなく、且つ其の事件は必ずしも恐るゝには足らぬと云ふことだけを述べて置きませう。（完）



家庭



衣食住の改良

伯爵　板垣退助君

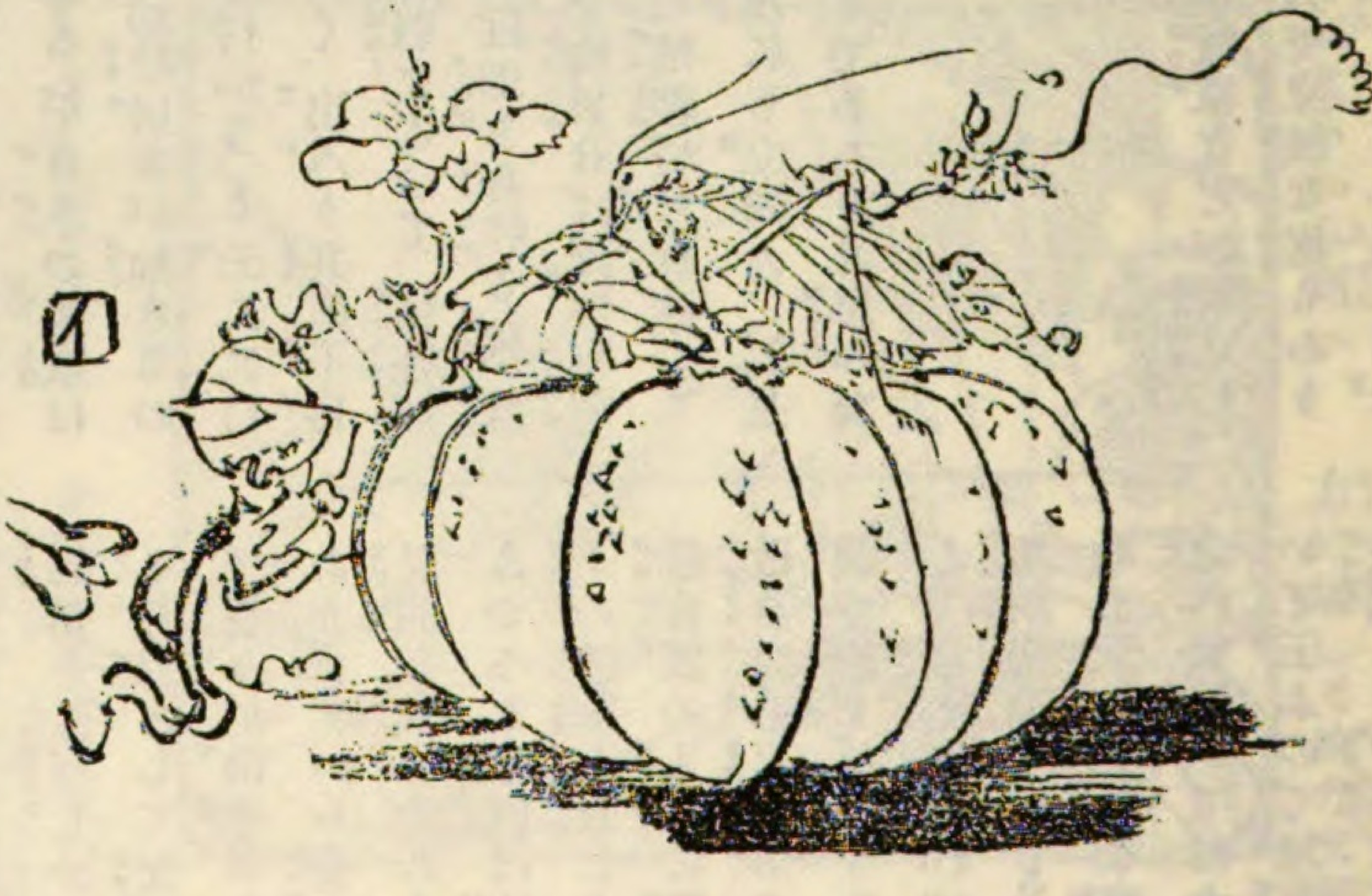
近來我國運は長足の進歩を致しまして國家の機關に觸接する方面に於ては稍吾々の滿足するやうな改良も出來ましたが併ながら他の方面即ち社會上の方面を顧れば實に見るべきものは少ない、就中風俗の如きは舊風俗破れて新風俗未だ起らないと云ふやうな狀態である若し遠くから我國のヿを見ると、制度、法律、敎育、兵制と云ふやうなものに就ては成程立派な文明國だらうと云ふヿを想像するであらうが一朝來つて實際に之を視察したならばどうであるか日光の如き又東海道の如き京都の如き奈良の如き若し旅行を致して一般人民の風俗の醜陋にして野卑なるヿを目擊せば輕侮の心を生ぜざるを得なからうと思ふ又開港塲などへ參りまして我が商人の有樣はどうであるかと云ふとまづ唐棧の着物羽織前垂をしてチヨン髷で腰を二た重にして屋敷に行くと稱して西洋人の店に出入をする是は昔の噺のやうであるけれども唯チヨン髷を取て除けたと云ふことだけで其狀態は依然たるものであらう又他の方面即ち彼の朝鮮などへ我國民の參つて居る話を聞きますと暑中などには猿股一つで店先に大の字になつて晝寢をして居る、さう云ふ狀態をして居るにも拘はらず彼の國を弱國なりと侮つて其國民を蹴たり、叩いたり、するやうなヿがあるさうです如何に外交に巧みなる人が骨を折つて見た所が所謂權兵衛の種蒔外交であつて一方で感情を破つて往くと云ふやうな有樣である今日は世界共通で交際貿易なども頻繁であります此競爭塲裡に立つて兵力を爭ひ經濟を爭ふヿが斯の如き狀態で出來るであらうか、決して出來得られぬヿである之を約めて言つて見れば國と國との交りは出來るが人と人の交

際は出來ないと云つて宜しからうと思ふ併し之れに就て政府が法律を以て改正をして宜いかと云ふと、是は政府の直接にやるべきものではない。して見れば吾々民間の者が奮發をして改良を圖るやうにしたい、そこで吾々は容儀、服飾、飲食、居住、饗讌、慶弔斯う數へて是より改良の案を立てやうとして居る塲合であります。

衣服家屋の改良

そこでまづ私は風俗改良の重なる部分、即ち衣服家屋の改良意見を述べて其精神のある所を明かに致したいと思ふ凡そ人と云ふものは勞働をして衣食を足すと云ふとが定則である先づ歐羅巴の衣服家屋に就いて見ると、勞働に適する便利と云ふとに於て發達をしたものであらうと思ふ、しかるに日本はどうであるかと云ふと所謂唐風を模倣してあッて唐の服を取つたものと思はれます、然るに其本家本元の支那はどうであるかと云ふと、愛親覺羅氏が滿州に起つて支那一般の服制を變更致した、日本などに較べて見れば比較的先づ支那は勞働に便利な服になつて居るけれども彼の女が爪を伸し足を小さくし勞働しなくつても食へるのである即ち勞働しないと云ふとの證據となつて、さうして貴婦人として人の上に驕つて居ると云ふとがありますが日本はどうであるかと云ふと先づ公家と云ふが人の上に立つて手袖徒食で人に誇つた者である、然るに武を忌み兵器を執らない即ち此武藝と云ふのも勞働の一つでありますが之を賤むやうになつて來る、さうして自らは徒食して下民に驕る、彼の武門武士なる者等は長袖の人焉ぞ兵を知らんと嘲つたのでありますが、所謂兵農全く分かるゝ樣になッて後は世襲の武士となつて徒食するやうになつて彼の德川の亂を忘れさするの政畧に誘はれ、遂に此武士なるものも又同じく長袖の人になつて啻に武士のみに止まらずして下等社會迄が長袖の人になつて、一朝事あつて人と戰はねばならぬ時には襷を掛け、股立を取る、斯う云ふ不便利な衣服となりました、一ッ働らかうと云ふの形容の言葉としては切歯扼腕と云ふとを言ふ又下等社會になると喧嘩の

時は尻を端折て諸肌を脱ぐ、て彼等が働こうと云ふヿの形容には一と肌脱がう、斯う云ふヿを言ふ、それで兎角に着物が邪魔になるし即ち不便利だから邪魔になる、斯う云ふ譯になつたものであらう然るに其勞働者と云ふものを直接に視れば彼の腹掛股引パッチ半天斯う云ふ身輕な扮裝である若し此上流社會が今日の狀態に反して便利と云ふヿを主にして發達して往つたならば歐羅巴の服に近いものになつて居たらうと思ふが如何せん上流社會は勞働の便利に離れ、又下等社會は賤まれ又自らも卑屈に致して發達が出來ない、さうして下等社會には此便利な勞働の服があるけれども是は發達をして居らない、斯う云ふ目下の有樣であらうと思ふのでございます、又女に於ても其通り彼の勞働者を見まするとタチッケのやうなものを穿いて居る、甚だしきは股引を穿いて居る、それから又少し美術を加へて居る者は前掛の廣いような腰巻と云つて宜いか、さういふ物を卷いて脚袢を穿いて居る、それは勞働に適しただけの服をやつて居りますそれから上流の婦人を視て見まするとなか〳〵働くどころじやあない、唯道を歩いて居ても向ふ風に前を合し兼ね、ヒヨロ〳〵して居るやうである迚も働きは出來ないものであらうと思ひます、是れと同じく又日本の家屋が惰風を養ふやうに出來てゐる譬へば洋服を

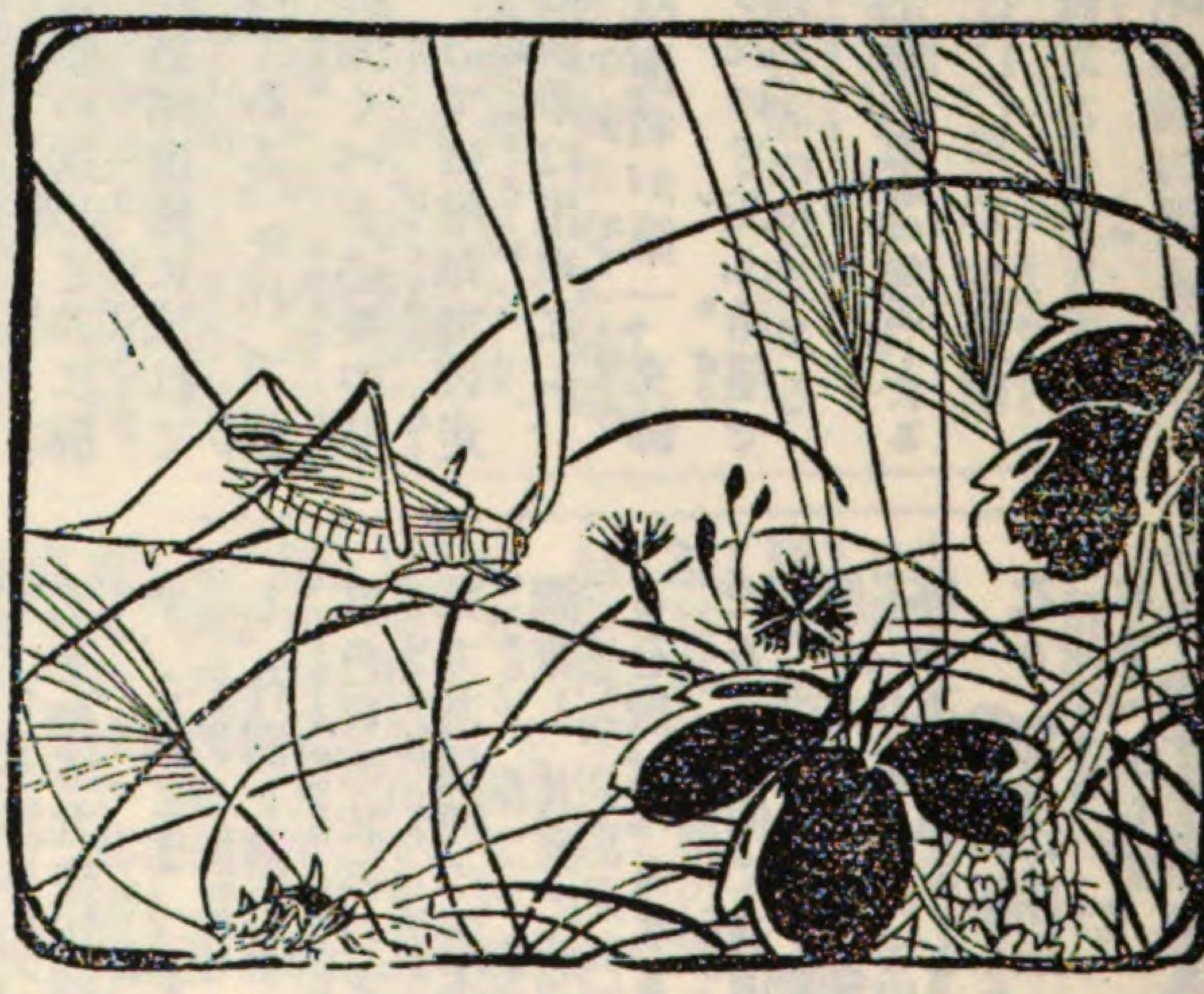


着て靴を穿ッて居れば直ぐと戶外に出られ、又內に這入ッて來る、極く心安く出入が出來るが日本の座敷はどうであるかと云ふと恰も寢臺に始終居るが如きものであつて、ごろ／＼轉て居る、出て行かうと云ふには着物を着替へ、下駄を穿いて出て行く、出入り共に不自由でありまして、是れが爲め體が軟弱になつて、精神が怠惰になる、之れにも改良を加へれば卽ち身躰も强壯になり、又精神も活潑にならう是を概言せば國の富强に關係するのである身躰が弱くなり精神がだらける斯う云ふものになつて見れば何の用にも立たない、是れは經濟などにも大に影響することであらうと思のであります

外部の改良

扨て此風俗改良と云ふとは何時か宗敎家などが献立した事がありますが、それは少數の人で立派な案もありますけれども實際行はれないのであります、是れは先づ精神から改良して外形に及ぼさうと云ふのでありますから、ドウも何時も行はれない、それに就て私などが風俗を改良しやうと云ふとは是は外形の上で、如何にも粗暴にして交りが出來ぬ斯う云ふやうな交際を害して親みが出來ない斯う云ふとを改良致さうと云ふのでありますから全く外形の改良を致したいのであります又同じ風俗でありましても家庭の風俗一夫一婦とか云ふやうな事柄は決して混へんのでありまして全く外形上の改革を致したい、それで其精神に向つては宗敎家敎育家の人々に賴んで置きまして吾々は外形から之を改良致し又風俗の改正など〻云ふとは唯少數の人の決議で決して往くものではありませぬ所謂世の風潮を制して往かなければならぬ世の風潮を制すると云ふのは所謂輿論である、全國の輿論か是は改めんければならぬと云ふやうな譯になつて初めて行はる〻であらう、之れに就いては十分な有力な決議でなければ行はれないと云ふので地方に支部を置き、地方の方から先きへ決議して中央は支部の決議を集め果して異議がなかッたと云ふことを纒めて中央で決議するやうな運びにし

たいものである、而かも亦此改革と云ふとは極く容易の事即ち爲し易い事から行ふて往きたい、又唯立派な議論をして見た所が行はれぬとは致方がないから例へば此靴を穿いて椅子に寄るやうにして、さうして家屋も亦た天井を高くして出入りにも便なやうにと云ふとでありますけれどもこれは今日實際に行はれまいと思ます日本人の正座は足利後の事であります――それで其前に戻つて彼の緣座の如き物を敷いてさうして胡座をかくと云ふ位の古い所に復しましたならば、それよりは寧ろ此椅子が便利であると云ふとになつて往かうと思ひます、それから又風俗改頁會は何もしないと云ふやうな不審がありますが、案は澤山にありますあります が唯中央で決した所が實際行はれぬとであらうと思ふ



ので、そこで此案を立てるには中央では唯理事、評議員位で先づ案を拵へまして、唯總會には掛けず其案を地方に廻して地方支部の決議を中央で纏めまして是は輿論であるもう決しても宜しいものであると云ふ所で中央大會で決議する斯う云ふ樣な手順にしたいと思ひます、それ故に諸君に最も希望致しますが、どうぞ支部を立ててお貰ひ致したい、さうすれば中央から議案を各地に配布して全國の輿論を纏めて斯う云ふ運びに致したいと云ふの希望でございます、抑も社會の事と云ふものは根本であらうと思ひます、如何に宜い政治を致さうとしても社會の地盤が固まらざれば恰も砂上に樓閣を築いた如きものである、之よりして各國との競爭に兵力であり又は經濟でありましても之に打勝つと云ふ

には我國の風俗を改良致さなければ迚も彼等と競爭は出來ない、今一つ辯じて置かねばならぬは西洋の風俗が誠に活潑に出來て居るとこう申すと歐羅巴を崇拜するやうであるが決してさうでない文物の進歩と共に弊害の伴ふものであつて今日歐羅巴の虚禮虚飾に流れて居ると云ふとは確かに認めて居るのである、それで我國の禮儀も極く簡易に致して人民に働くべき必要の時間を多くして虚禮虚飾に流れず又一方では唯華美に走らず質素にしてやらなければ彼等と競爭は出來ない、そこで此改革を簡單に由して見れば便利が第一、文飾が第二、斯う云ふやうな精神でやりたいと云ふ希望であります。

本篇は板垣伯が知事同情會にて演說されたる大要を記者の筆記したるものなり

家事經濟（一）

高本とし子

器物の保存取扱法

家財諸道具は衣食住と相伴ふて一日も缺ぐべからざるものなり、中流以上の家にあつては言ふまでもなく其以下の社會と云へども一家としては具はれる什器も其家の舊きに隨ひて種類極めて夥多にして悉く其の名を知り其使用の道を覺へんにも中々容易の事にあらず、されどまづ大凡の點を掲げて諸孃の參考に供すべし、什器を購求するには第一先づ其使用の目的を考へ其色質形狀等の之に適せるものを撰ばざるべからず、即ち其價額の廉不廉を考究し、十分に其の質の強弱を調查し、其家に適し其の時期に應じ便利にして恰好なるを撰ぶべきなり。

たとへ如何に高價なる物品なりとても周圍のものに相應せざるは片腹痛きものなり、況してや其保存取扱ひ等の不行届にして汚れ損じたるは甚だ見苦るしきものなり、器具の購求及其取扱ひ方は能く〱注意して苟にすべからず。

日用什器千差萬別なるも是れを大別すれば大凡左の三種に屬す、曰く金屬類、曰く陶器類、曰く木具類是れなり、而して此の什器には專ら實用を主とするものと美

術品、即ち重に裝飾品として用ゐらるべきものとありされば是等の事によりても亦其の品質形狀を異にせざるべからず例へば實用を主とするものには特に使用の便利あると保存の宜しきものを撰び裝飾に用ゐるものは其外觀の美麗にして意匠の高尚なるを主とするが如く、器具を購求するに當りて注意すべきは其價額なり物品の價額は勿論不廉ならざるを要すべきもすべて價の低廉なるものは勢ひ其の品質製作等の粗惡なるを免がれ難し。

家政に就いて經驗の淺き人は兎角外見の美なるに眩惑して脆弱の品を購求する等多し能く注意すべきなり、且つ一時の費用の寡少ならん事を欲して妄りに粗製の品を購求するが如きは却つて經濟上の理に戻れるものといふべし、日用使用ずべき品物は先づ第一に質の強固なるを撰ぶべし廉價なりとも早く毀損すべきものは購求すべからず且又富豪の家なりとも餘り珍奇に過ぎたる物品はなるべく求むべからず、殊に一對一組と揃ひたる珍什の破損する時は再び用ひ難きに至らん且つ殊更に奇を衒ふて異俗殊風の器具のみを置き並べたる如きも甚だよろしからず、また餘りに燦然しき物品は奥ゆかしきものにあらず、澁くして地味なることそよけれ、總て品物は其家屋に相當するやうに注意すること肝要なるべし。

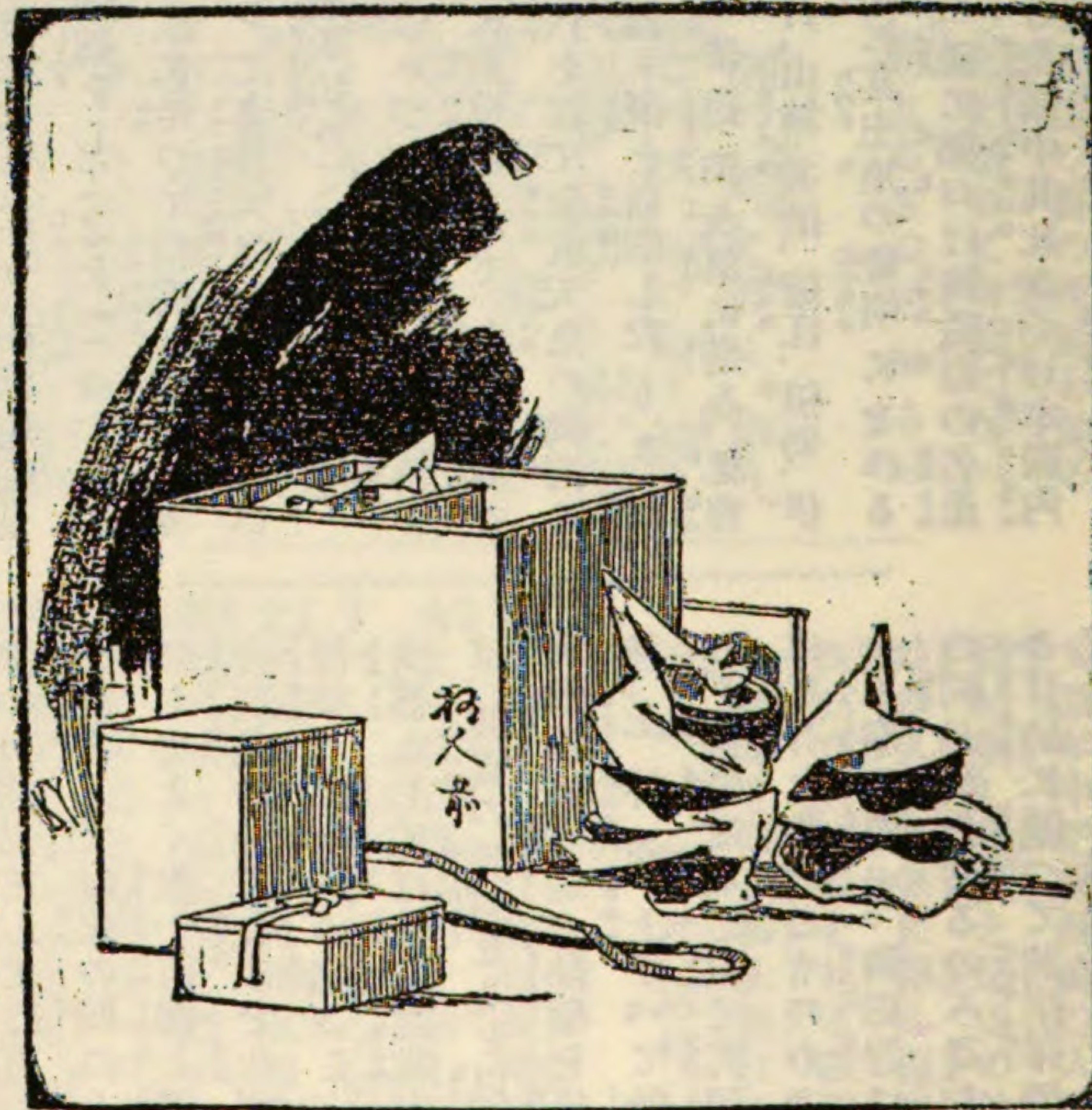
◎金屬器

日用什器中金屬を用ゐるものは實用品としては、鍋、釜鐵瓶、藥鑵、刄物、銅盥、火鉢、火熨斗等種々あり、第一鍋釜は其の金屬の厚さの適度ならんことを要す、是れ食品煮沸の遲速及其器物の保存に關すること少からざればなり、鍋には鐵青銅眞鍮等あれども衞生上には鐵を以て最も良とす其他の物は多く酸化の恐れあれば其內面には必らず白鑞を敷かざるべからす、之を怠る時は不測の害に罹る事あり、されば之を使用了りたる後は直ちに洗ひ其濕氣を去るべし然らざれば白鑞の早く剝脱する患あり、又鐵鍋には其の內面に釉藥を施したるものあれども之には往々鉛を含み食品に害毒を及ぼすを以て成るべく用ゐざるをよしとす。

銅鍋などに鑞錫を懸くる方法は先づこれをかくべき部分を能く磨き置きてこれを火の上に載せ錫の溶解すべき温度になりし時他の器にて溶解し置きたる麻布を以て其錫を塗るべし、然すれば鍋の中忽ち白くなりて緑青を生ぜざるなり、總じて銅及び眞鍮の食器は使用したる毎にすぐ是を磨き且つ十分に燥かし置くべし然らざれば緑青を生ずる恐れありされば是等の器にて食品を煮たる時は其未だ冷へざるうちに他の器に移すべし、永く入れ置く時は食品に銅毒を及ぼし且つ其器の保存を悪からしむるものなり。

鐵は銅鍮に反して人身に益あり故に食用器具としてはなるべく鐵器を用ゆべきなり、鐵瓶等を取扱ふには毎朝湯を上より濺ぎかくべしかくすれば鐵色うるはしくなり且つ斑點を生ずるとなし、又鐵瓶に湯垢のつきたる時は通常の曹達少しを入れて沸騰せしめ、其儘一晝夜置きて然る後徐々と洗ふべし、土瓶も同様なり、爰に注意すべきはすべて鐵瓶藥罐の類を新調せし時は其始めまづ兩三度沸騰したる湯を捨て其金氣を除き去り然る後飲料用に供すべし、鐵器は人體に害なきものなれども其新らしきものは食物をして黒色を帶ばしめ且つ錆を生し易きが故に之を用ゐるに當りては先づ其鐵氣を去らざるべからず、其法は蕎麥粉を入れて煮るか甘諸或は糠を入れて煮沸するをよしとす、總て鑛物屬には鹽氣の附着する時は忽ちに錆を生ずるものなれば能く注意してもし鹽氣の附きたりと見れば速かに拭ひ去るべし、金銀の如き貴金屬の器物は漫りに實用品として使用すべきものにあらず多くは裝飾品、美術品なり、且つ高價のものなれば如何に心なきものなりとも輕忽に取扱ふと少かるべしと雖も、元來金銀は其質軟きものなる故に銀瓶などまゝ凹みのつくものなり、能く注意すべきなり、金銀器はすべて使用したる後は軟き布もて能く拭ひ拭ひて取藏むべし暈り又汚點等の生じたる時は湯にて徐かに煮布片軟草、又は海綿等にて徐々と洗ふべし、麁造なる磨粉にて洗はゝ微疵を生ずべし、又錫器は金銀に次いで清潔にして調法なれども用ひて直ちに能く乾かさゝれば濕氣の溜りたる所より

錆を生じて腐敗すると速かなり、錫器は金屬器中第一に凹み易きものなれば能く取扱に注意すべし。眞鍮の火鉢銅の盥、金杓子等もすべて鹽氣など付きたるまゝに置くときは之を腐蝕する恐あるが故に直ちに之を拭洗し、清潔に保つを可とす殊に銅盥等は時々磨きて汚染を防ぐべし。刃物を求めんには十分鍛錬して容易に撓まず之を擊つときは其音響冴へて表面翳のあるものを撰ぶべし、又之を使用するに當り熱湯に浸すときは切れ味を鈍くする恐れあるものなれば冷水にて洗滌し能く之を拭ひて濕氣を去りおくべし、刃物の錆を防ぐには胡麻の油を塗りおくをよしとす。



○陶磁器類(附硝子器)

庖厨用家具として最も便利にして且つ最も廣く使用さるゝは陶磁器なり、上は紳縉富豪より下は貧家に至るまで如何なる家にても食器として陶器の使用されざる處なし、我が國にありては陶器は遠く神代の鴻世よりありき、當時和泉の國に陶邑といふあり、此所にて甕、手抉(是は今の手にて揑造する樂燒の如きもの)碗(今の椀の類)甒(今の土鍋)の類を製出せり、勿論當時は陶工とて定まれるものなく唯其の初人々僅かに日用に便ずる爲めに土を揑造して製するものに過ぎざりしが、垂仁天皇の御時に至り始めて諸國に土師の職を置き

彼の歴史上に著名なる野見の宿禰の如きは土師の臣として土師の司なりし事知るべし、尤も此頃の土師は人馬の形を埴土にてこしらへ墓陵に立てたり、所謂埴輪是なり、土師部の民を定め土師職をして之を管せしめてより雄略天皇の業を勸め玉ふに至つて稍盛なり是より後陶器の類、歳月に多く下つて孝徳天皇の御世に及び筥陶司を置かれ諸國の陶業始めて盛大となりたり、されど當時製出する所の器はいづれも未だ釉藥を施すに至らず陶器と云へば一般に素燒にして、今の土器のやうなものなりき、其後數代を經て聖武天皇の御世に至り工人始めて陶器に釉を施す事を發明したりき、其後幾多の世を歴て、諸國の陶業磁業次第に進み、肥前の唐津、長門の萩、尾張の瀨戸、山城、美濃、遠江、伊勢、伊賀、備前、薩摩、岩代等の諸國に其土地の發明になれる器の製出せらるゝに至れり、殊に瀨戸は陶磁器の名產地にして品質の精巧奇麗なる全國中其比なく日本國內は勿論遠く海外諸國に輸出して聲價高く、本邦に於て直徑五尺より一丈に及ぶか如き巨大の碟盆を造るもの此の地を措いて他になし。

扨て陶器及び磁器は其種類夥しくして枚擧に遑あらず、其の日用品としては庖厨用の茶碗皿小鉢より、其の裝飾品としては床の間の七寶の花瓶、古瀨戶の花挿、一品にしてよく數十百圓を價するものあり、元來陶磁器は金屬具の如く金氣を生ずることなく、又木具の如く液汁浸染して臭氣の移ることなく清潔を保つに便利なれば食器としては特に適當なるものなり、唯金屬に比すれば、其質の脆弱なるを以て稍劣れりとするのみ。

陶器には素燒と釉藥を施したるものとの區別あり、保存上外觀上すべて釉藥を施したるものは素燒に勝ると數等なるを以て其用殊にひろし、然れども釉藥には鉛分を含めるものあるにより購求の際其色澤に注意せん事を要す、陶磁器は其產地の異るに隨ひて外觀の同じからざるのみならず堅硬脆弱の相違あり使用する目的に隨つて其撰擇に注意すべし。すべて陶磁器の堅硬なるは陶窯にて燒くに其の時日を久しく費やしたるが故なり、世に備前燒といふものあり、多くは花瓶等

に造られたるものなるが其色銅造にて恰も古銅器の如き外觀を有せり、陶器中堅硬第一と稱す、陶器中瀨戶の產は比較上質の硬き方なり。又陶器の質の硬脆を知るには一見して辨じ得べきもまづ之を撃ちて音響の冴へたるは堅く、冴へざるものは脆弱なるものと知るべし。

硝子は石を碎きて粉末となし、法に從て煉り、造りたるもの本邦にて古來之を吹玉といひ、其の造り始められたるは隨分舊き事なり、昔し出雲の國より盛に產したるよし、其色に紫あり碧あり、黃あり赤あり皆多くは玉として貴人の器の裝飾に用ゐたるよし、其後戰國の頃肥前長崎に南蠻の工人來り硝子を造り且其法を我邦に傳へたり、本邦に於て硝子を製すると復此に起り是よりして長崎の工人硝子を以て玉及び諸器物を作りたりと其後支那の工人長崎に來りて支那風の硝子の工を傳へ又阿蘭陀より舶來するものあり工人是を模造して盛に製出するに至れり、維新以來衣食住の改良に伴ひて硝子の用は甚だ其區域を廣め、日用の食器として使用するもののみにても其種類甚だ少なからざるに至れり。

元和年中肥前長崎の人濱田屋彌兵といふものあり南蠻に航し眼鏡を造るの法を習ひ還り來りて其巧を長崎の人生島某に傳ふ遠眼鏡、虫眼鏡、數眼鏡、近視鏡及び日月天象を見る眼鏡を造りしは此時より始まるそれより後京都大阪江戶の地にて工人玉廛を開き念珠、卷軸、簾、皿、酒杯、簪、鏡等の諸器物を造りて賣り出したり。

陶器及硝子器は其の使用せんとするに先だちまづ釜に水を入れ食鹽少しを和し弱火にて徐々と煑て後に使用すべし、其質鈍くなりて容易に破損せざるものなり、又之を保存するには紙又は布片にて包みて丁寧に取扱ひ箱中に納めて動搖を避くべし、即ち茶碗、皿の類にて十組となりたるものは一つ〳〵間紙を入れ一組毎に箱に藏て其上に何々の模樣、又は何々燒譬へば客茶碗十人前九谷燒錦襴手、有職模樣などゝ記すがごとし、斯すれば久しく保存せらるゝのみならず、出入の時にも至極

便利なり又多數を藏する家にては番號をつけ置くべし
切又陶磁器の汚染を清潔にせんには灰又は砂にて洗ひ又は灰汁にて煮るべし、硝子器ならば木炭末、小石等少許を器中に入れて之に水を注ぎ振盪して洗ふ時はよく其の汚穢を去るとを得べし徐々と煮て後其灰汁にて洗ふべし、又生灰を水に和し藁のたわし、布片等にて洗ふも可なり水瓶等の液類を入るゝ器物は時々光線に曝すべし、水類は腐敗を生じ易きものなり、硝子器を久しく用ふる時は白黄色の汚垢着くものなりこれを除くには鹽酸を水に和して薄く解き洗ふべし、乳汁を入れたる器は少量の灰汁を水に解して洗ふべし灰汁中の加里分、牛乳の脂肪と抱合して自から石鹼となるなり陶器硝子器の破壞したるをつぐには鷄卵の蛋白に生石灰を適度に混ぜ乾酪少しを加へて練れば良き接糊となるものなり、又杯などの破れたるをつぐには熱湯にアラビヤゴム一オンスを溶解して之に石膏を加へて濃糊となし刷子に附けて破目に塗り繼ぎ合すもよし。

割烹實習

女子職業學校 割烹科教員　井上善兵衛講述
岡野をりえ筆記

▲紫蘇巻番椒

紫蘇を葉ばかりつみ、沸騰した湯のなかへくゞらせザツト湯出る、直に笊へ取り、さめた時、葉の表の滑の方を板の面へつける樣に並べる。』別に鍋で並味噌百目を生酒五勺で緩め、砂糖五十目を加へ、其中へ青番椒を細かにきざみて入れる。但し青番椒を初めから入れると、香が失せるから、これはやがて味噌が煮へあがらうとする時、味淋五勺を加へるゆへ、それと同時に入れて間もなく鍋を卸す、味噌はさめて固まる、これを前の紫蘇の葉で小指の太さ程に巻く、鰻串二本並べこれに巻た紫蘇四個五個見計ひ刺して、玉子燒器で兩面を燒く、更に又横であつた方を上に串をさし直して燒く、すると丁度四方から燒くわけになつて滿遍なく火が通る。

▲伽羅蕗

蕗をよく洗つて長さ一寸三分位に切る、(一日日にあてゝ萎る方がよろしい。)これを鍋に生酒一合、醤油五合(蕗大束一把の割合)で、凡二時間程煮て味噌一合ばかり加へる。それで黒く鼈甲の樣に煮る、煮てから三日程經てモウ一度生酒で煮て置くと、幾日間でも風味がかはらず、保存される。

▲茄子の鴫燒

茄子一個を凡そ四ッ位に輪切りにする。魚串二本に右輪切を四個乃至五個を刺す、注意はその輪切りの厚の平均して厚薄のないやうにする事である。輪切の兩面を串の尖でやたらに突き(油のしみるやうに)。胡麻の油を引き、火にかけて燒く。』別に上赤味噌百目、砂糖入十目、生酒五勺を加へて摺り、裏漉にかけ、鍋へとり、味淋五勺にて味噌のかたくなるまで煉る。皿へとつて少しさめたとき、玉子一個を入れかきまはす。ナゼ玉子を入れるかなら味噌の乾きをよくするためである。』茄子は燒けたら下へ一度醤油をかけ、それが乾いたら、まへの味噌を盛つて表へ出る方へ多量につけ、一寸わぶればそれで鴫燒になる、これは丼物にする。

▲麥羊羹

寒天一本について水二合五勺を入れて煮る。』別に鍋に砂糖六十目鹽五勺、水一合を加へて溶解し、これへ麥こがし一合を入れ煮つめ水嚢で漉す。まへの寒天をこれへ流しこみ、火へかけて十五分ほど煉る、大概杓子で上げて見ると垂下つて下までつゞく位を度に、これをブリキ器(外何でも有合せの容器)へ流し、二時間程經つとかたまる。庖丁で適宜に切つて侑める、暑中には賽の目に切つて、氷の中へ入れ侑めるのもよろしい。

▲南瓜蒸し

南瓜はなるべく最小なのがよろしい、洗つて南瓜の筋を立てゝ原形の通りに皮を剝き、それから上の方



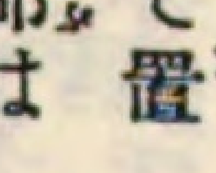
この圖の横筋の邊を切りはなし、内部を悉くり抜とる。』別に合鴨の肉も皮も共に叩き、小さく切り、摺鉢へ入れ摺る。合鴨一羽につき鹽十匁を入れる。これへ萎切三勺、生酒三勺、煮け一合を入れ又摺る。』別に

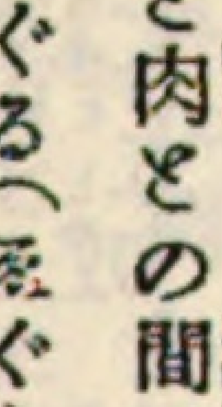
馬鈴薯五個程皮をむき、湯煮をして裏漉にかけ、前の合鴨の肉の中へ交ぜる。よく交ぜ合つたら、これを前の南瓜のゑぐつた中へ詰め、切りはなした上部の分を元の通り蓋にして、竹皮を細く割き。つなぎ合せ、これで蓋のとれぬ様に十文字にしばる、鍋へは煮汁を南瓜のかぶる程入れこれへ合鴨の骨小さく切り加へ、味淋五勺、生酒五勺、鹽五匁、砂糖二十目、醤油三勺程入れ、これでまへの南瓜を凡そ一時間程煮る。南瓜が鼈甲色になつた時、汁の加減を見て、もし甘いなら醤油二勺程を加へ、又三十分ばかり煮る、大概汁の引た時分に卸してよろしい、是は一人につき南瓜一個盛りにする。

▲てんふ煮

是は紙湯葉をぐる／＼巻き、端から細かに切る、なるべく細いだけが綺麗である。』別に鍋に生酒一合、味淋三勺、砂糖六十目入れ、五分間程煮立て、鍋を卸し、指で試みて觸はる事の出來るくらゐのさめ加減を度に、これへ前記の湯葉を入れ掻きまはす。スルト湯葉は丁度金絲の様になる、湯葉を入れてから火へかけてはならず。』別に又青隱元を二片にへぎ、種を除き、これも竪に細く切り鹽を和して二三分間置き水で洗ふ、と種は皆落ちて仕舞ふ、これをよく絞り、沸騰の湯でサッと湯煮をして笊へあげる、鍋に生酒一合、鹽五匁、砂糖五十目入れ煮立つたなかへ、この笊の隱元を入れ、煮立つたら隱元だけはすくひあげる、あとは汁ばかり煮つめて、再びまへの隱元をこれ一しきりかき回して直に引あげる。そこで前記の湯葉と[illegible]隱元とを盛り合し、その上へ南部霰をふりかける、拜見が綺麗で、精進料理の口取の向盛り、又は丼に盛つてよろしい。

▲茄子の龜の甲燒





茄子はなるべく大きいのがよろしい、切らぬ内よく洗ひ、蔕もそのまゝつけて置く、是も南瓜の様に上部は横筋ほど二分位切りはなし、下部の厚い方の面の周圍、皮と肉との間へは、皮へ庖丁尖が突通らぬを度にゑぐる(ゑぐりとるには及ばぬ)、庖丁はなるべく深く這入る様にするがよろしい。ゑぐれたら、次には圖の如くこれも皮へ通らぬを度に、深く庖

丁を斜形に十字に入れる』胡麻油は一寸煮立て臭氣を拔き、これを前の斜形にきつた面へ引き、金網の上へその切つた面の方を伏せ燒き、又返してあほ向けて燒く、』これへかける汁は味淋五勺、煮汁五勺、醤油五勺を湯立て別に作つて置き、燒きながら幾度も茄子の上へかける、スルト上からグツ／＼煮立て來る、魚串でさして試ると、やはらに通ほればそれでよろしい、皿へ盛つて花鰹をもんでそのうへにかけて侑める。

▲批把羹

寒天一本凡二合五勺にとかし、砂糖七十目位入れ煮つめる、批把は皮を剝き、核を除き鍋へ入れ前の七十目の砂糖の內二十目ほどを分け、外に酢二勺ばかりとを批把の中へ入れ五分ばかり煮る、寒天は兩分にわけ、一半はブリキの箱、又は切溜などへ流し、他の半分は鍋のまゝ、湯煎にかけて置く(湯煎は別に鍋へ湯を煮立てその中へ寒天の鍋を鍋ごと入れて置く)前記流した寒天の中へは、煮た批把を入れ、すこし凝固つて來た時一方湯煎にかけてある寒天をその上から流しこむ、こうすると丁度批把が心の樣になる、放冷て固つた時、切つて口取につかふ。賽形にきり氷の中へ入れて、楊子を添へて侑めるのもよろしい。

▲晒し鯨

鯨はなるべく薄く切つて、豆腐滓又は糠でよくもみ、上から、沸騰の湯をかける、それから幾度もつめたい水で洗ふと丁度鯨の洗ひとでもいふ樣にちり／＼して來る辛子味噌又は酢味噌で食す、つけ合せには押茄子又はサラダ菜などもよろしい。

風俗の沿革

水原翠香

昔は綿といふ物なかりしかは衣服は皆袷にてわた入なし上流貴人は絹布の袷を幾つも／＼も重ねてめされし故に十二ひとへの稱ある也十二といへばとて其數十二あるには非す何にても物事の滿足れるを十分と云猶餘裕あるを十二分と云に同じ貴人は富めるか故十分暖

なる上にも猶襲てめさるゝを云又綿なければ木綿もなし下民は皆麻布又葛を織て衣服と爲たり又葦の穂を綿となせしと云いづれも今の木綿の如く暖かき物にあらずされは綿種の渡來せしより木綿服の廉にして暖かに尤下民の服に適ふ物なれは昔の麻布は只夏の暑き頃の外又着る者なく成ぬ

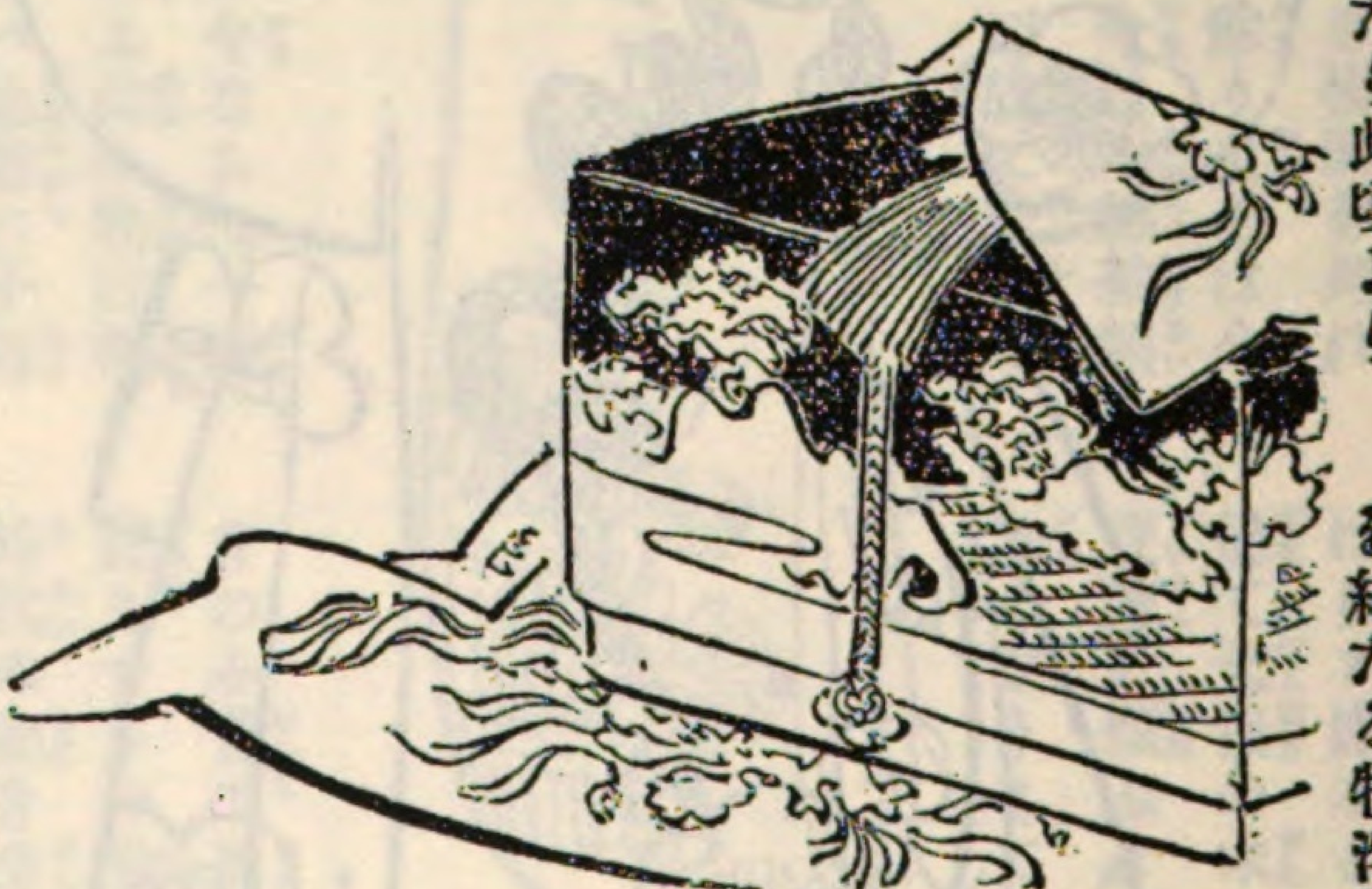
高貴の御裝束は下に白無垢の御衣をいくつも襲ね召て其上に緋の袴を着其上に五つ衣を被り其上に裳と云てひだを折たる物を脊の方より腰に結びたるもの也此裳を附るを女一人前と成たるしるしとする事にて後世下民の袴着紐解など云が如く重き祝ひとし其裳を附るに長者を請待して腰結と云事男子の元服に烏帽子親を請ずるに同し○韓衣袙汗衫小袿衣等みな女官の裝束也○

頭髮は　男子の方は古より結ひたりしは冠烏帽子を被るに便ならしめたる成べし女子は只額にて二ツに分たるのみ脊の方へ長く垂らして結び上る事なしされは自然長く延びて脊丈に餘れるも多く有しなり下ざまの女は勞働するに髮長くては不便なれば首の下脊の上にて束ねて引結びたりとみゆ上流は勿論民間にても少し身分ある女は決して結ふ事なく白拍子の類迄も皆髮は脊に垂るまゝなりし也

因に云昔の器物に亂箱と號して文庫の懸匣の如くふちの外へ反て廣蓋に似て廣蓋よりも深き物梨子地蒔繪又は紋散し其他種々惣て結構美麗なる品也是昔は女き髮ゆはざるが故に其寢る時此箱を枕元に於て其長き髮を枕上に出して末を縮ねて入おく爲の具なり後世の女子は夢にも知らぬ事なれは筆のついでに記す天保時代迄の雛の道具中稀に此物あり御圖司黒棚に附屬せる者とす今樣の雛には有事なし況や實物は公家衆の持傳へたりしも皆外國へ賣飛してある事なしと云

其後世々に少し宛の沿革はありしも大差なく南北朝の頃迄も猶身柄よき女は官女ならぬも緋袴に袿を着たりしとみへたり外出には衣被とて薄もの、單衣を頭の上より被きて前にて打合せ此被たる衣の上に黒塗の笠を戴きたる事伏見常盤の繪をみても知るへし又頭上

には袂らすとも必す袿を前にて端折て着たりし是を壺折姿といへり今にては能の女姿是也豊臣徳川の天正元祿頃の畫巻物にも猶此風俗にゑかゝれたり此頃より髪を首筋元にて打紐にて結びて脊に垂たる事今の少女の如き樣爲たるも有髪にさす物は櫛の外何もなしそれも髪を梳るに用ゐて飾に非す但し生の花を枝折にして髪に挿たる事は古よりありとみえたり此頃より漸々と衣服の染摸樣なとにも種々考察してユミに成たりされと大かたは大もやうにてばらりと附たるが多きか如し或は波に水車又は鷺規なといふ字を大きく籠字として中へ鹿の子を入て鷺には梅時鳥には藤又あやめ等をあしらひなとみえたり袖は今の筒袖を少しふくらめたる程の薙袖にて振袖といへども今の女兒等か袖程の長さのみ袂はやはり丸く仕立たる事次に出す圖の如し



帶は四五寸に過ざる巾の物を二ッに折て引結びに爲たり又丸絎の紐帶或は打紐の長きを只くるくと巻て[illegible]を結たる物浮世又平の筆なる遊君の繪にあり

徳川幕府の治世打續きしかは萬事漸々花美になりて年々歳々新工夫を凝して文化文政の頃に至り京都には仙洞御所光格天皇百廿代關東には徳川十一代家齊公大御所と稱して東西にて花麗風流を好みたまひしかは上を習ふ下萬民皆豪奢を競ひて衣服道具の類ひも此時代ほど至り盡せし時はあらず前後未曾有の盛世と云べし京都にては文政七年甲申十月修學院御幸ありて供奉の官女一樣に遠州濱松の景摸樣の衣裝を揃へて給はりし御事あり江戸にては大御所の御手がゝりの女中幾人と云數を知らす男女の御兒九十人の夥敷に及べりと云かゝる光景なるを以て衣服の摸樣にも其下繪をば有名の畫工を顧

みて花鳥はさら也嵐峡松島橋立其他名高き名所の景色或は業平の東下り清女簾を捲の雪景又は六玉川の古歌の意或は春夜桃李園蘭亭曲水の宴等其他有とあらゆる和漢の古事を採て以て衣服の摸様に畵かゝせ殆屏風掛幅にひとしき物あり其摸様の附方にも種々の名目あり全體に附るを惣摸様と云裾の方にのみあるを裾摸様と云衽より衿にかけたるを吉原摸様と號し衽のみにあるを棲もやうと稱し衽より前に斜の筋を引て染色を異に爲たるを奴褄と云際を立ずしてぼかしに裾の色を替たるを曙と云中に就て尤遊きは表を無地とし下前の衽の裏面にのみ極ちいさく高尙なる物を金泥を以て畵がきたるは三十女房のうがちたる好み也是等の物好を有名の畵工に依頼するに潤筆を惜まず其頃の畵工は衣服の下繪は染職工の仕業なるが故に是をかけば賤業者として畵師仲間にて擯斥せらるゝなれど本職の繪畵よりも遙に其潤筆の實入よきが爲に秘密に是を諾して名を顯さず畵かく也されば其筆勢といひ圖案のよき事染職工と同日の論にあらず故に豪家は多く畵工に金を與へて眞の下繪やに任す事になし我母より讓られたる袿(文政年間新調の物)に地は空色繻子にて脊の上より袖にかけて富士山を白糸にて繡霞を金泥にて引裾に三保の松原を極彩色の如く

天正元祿時代の服袷也



生色の糸にて縫たる物其下書は有名の亀岡希齢の筆になれる傑出の品にて視る人毎に感ぜぬはなかりし夫に緋汐瀬の裏を附て有しが其新調の時の古き帳面を見れは何百何拾目とか其頃の金相場にて五兩餘り也とは今の人に語るともよも實とは思ふべからず今は木綿紬類にても五六圓の物多し我實家は舊家なるが故に昔より何事にも家の法則ありて別家の女兒の緣附する時は本家より其支度料として金子拾五兩を遣はして荷は五荷の定なりし事我幼時毎度小耳に聞込て今に忘れず昔は拾五兩にて嫁入支度の調ひたりしとみゆ今ならは一反の表のみも廿圓近く出さゝれは是はと思ふ程の物は非ず其懸隔の甚敷は雲壤もたゞならずうべ也昔は十兩金を以中人一家の財と云しとぞかく少額の金にて何物をも買得られしが故に富豪の家にては衣服手道具何によらず有が上にも新調して大家の婚禮には嫁の荷物五十荷白荷の夥敷に及びそれが爲聟方にては土藏一ケ所を新築する等敢て珍しからぬ事なりし也凡何事に拘はらず盛なるは衰ふるの理に違はず文化文政の盛世を過て天保の末より世上何となく騒々敷なりて萬物共に衰運に傾ぶき終に明治初年の大變革にて世は別世界の如くなりもて行萬事萬物悉皆改りて衣服の如きも西洋流行して何物も改良々々と口實にいへど其實は甚しく麁惡になりて又昔日の如き結構なる品は非ず今三井呉服店に至りて見れば美麗なる染模様など飾り立てあれども只其色の新らしくて一見うつくしきのみ昔の眞によき物を見知りたる眼よりみては其意匠もやうの附方等是はと感心しがたき物多く文化文政時代の如き全美を極めたる物は一もある事なしそれも其筈今にして昔の如き衣裳を新調せば一の表ばかりに百圓をかけても猶足るまじければいかなる富豪なりとも今は又新事業に大金の入る事多き世中にさる物好な



る注文を爲人なきなるべし

○扨昔話は參考品として今は今の事をいはざるべからず女生徒あがりの若婦人達の衣服新調の爲に注意せん凡染色は同じ元料を同一の分量として染ても其反物の地合により又いさゝかの手加減によりて二度は二度ながら三度は三度ともに似たる色には成ても精細に吟味する時は決して一時に染たる如くにはならぬ物にて少し宛の濃淡は免かれず況や縮緬と絹又同地にても地の精麁目方の輕重に依て各々其色を異にするなれば始に色本をみて此通と注文するも染上りたるをみれば間違ひしには非ざるかと思はるゝ事ある物也されば始より克注意して其染る物と同地のきれの色本を以て定むるをよしとす、たとへば縮緬を染るには縮緬の色を撰ぶべし然れども、もし同地の色本に好ましき色なき時は是非に及ばず先外地にても是ならばと思ふを假に定めて扨其染むべき縮緬の耳を切取て其定めたる色に染させてみるべし扨今少し薄しとか濃過るとか思ふ存分に小言をいひて染さすれば大體は意の如く成べき也又紋及模樣は餘程念を入て誂へざれば間違易し唯口頭にて紋は梅鉢裏桔梗などいふとも梅にも桔梗にも種々あれば決して思ふ通にならざる事色よりも一增甚しければ成べく此方より紋本を出すか然らずば一應かゝせて見て後定むるをよしとす模樣を撰ぶ事又甚巧拙あり自ら經驗あり見識あらばともかく何事にも馴ざるうひ〳〵しき身ならばか樣の事に熟したる老婦人を顧問官として相談すべくそれもなきならば寧呉服屋染職の多く手がけて自然と熟練せし番頭に其撰を任すがましなるべし祝儀の衣裳なりとて昔より千萬人の用ゐ古したる松竹梅蓬萊山も餘りに陳腐なり、しかし是も又其書のかきやうによりよくみゆる事もなきには非ず若松に折鶴はみる〳〵田舍女兒らしく艸花なども緣日の植木店を見る如くやたらに多く陳列したるはうるさきものなり

簿記の心得

桐蔭女史

本誌第九號に(女學生の經濟)日記帳について申しましたが、もはや皆さんはあれをつけて御覽になりましたか。または私が申さない前から、つけていらつしやいますか。どちらにしましても金錢の出納を記しておくといふ事は前々號で申したやうに實に有益であります。そこで、この有益なことを實行していらつしやる方々に今一段進んでおすゝめしたい事があります。これは左のやうな表を作ることです。

月	入				出									殘金
	越高	學資金	雑入	入ノ合計	食料	月謝	被服費	學用品費	圖書費	雑品費	雜費	臨時費	出ノ合計	
一月														
二月														
三月														
四月														
五月														
六月														
七月														
八月														
九月														
十月														
十一月														
十二月														
合計														

この表は年計表と申しませう。前に申しました日記帳は日々の金錢の出入を一々記入するものでありますから、これによつて一々の出入を知ることは出來ますが、大抵一月或は一年に、どういふ費用にどれ位いつたか、どれ位金がはいつたか、といふ事を一目瞭然に知ることは出來ません。從て各出納目の金高の比較、またはある目の月々の金高の比較は六ヶ敷い事であります。ですから、これ等を知るために前に示したやうな帳簿卽ち年計表が必要なのです。

其のつけ方は何も六ヶ敷はありません。毎月の末日に日記帳の中から各出納目の金高をびろひ出して其和を作り、これをその月の各目の下に記入するのであります。そうして一年の終には各目の合計を求むるのであります。

今、次に、日記帳のお話をする時に示しました第一例の記入をしませう。左の如し

月	入				出					殘金
	越高	小遣	雜入	合計入ノ	學用品費	圖書費	雜品費	雜費	合計出ノ	
一月										
二月										
三月										
四月										
五月										
六月										
七月		1,000		1,000	190	135	430	30	785	215
八月										
九月										
十月										
十一月										
十二月										
合計										

右の表が一枚あれば各出納目の金高は一目見て直に知ることが出來、また月々或は年々の同じ目の金高を比較することが出來ます。

女學生諸君におすゝめする簿記帳といふのは、前に示しました日記帳とこの年計表との二つであります。これ等の帳簿をつけることは、只考へますと、おつくうでありますが。しかし、つけて見ると決して左樣なものではなくつて、且有益でだん／＼面白くなるものでありますから、是非／＼實行なさることを切望します。

菓物の製法

▲菓物の効能

天然自然に出來る食物の中で菓物ほど旨い物はない、菓物の特効は酸素に富んでゐて一種の淸涼劑食物として世上に賞翫されてゐる。尤も菓物ばかりでは生命を保つことは出來ませんけれども菓物の中にある有機性の鹽分と酸分とは人の身躰の健康を完全に保つには是非なくてはならない。英國のエリオットといふ醫學者は菓物の効能を左の八箇條に別けてゐる

(一)食物の種類を増加する一効能

(二)身躰中に水分を送り、渇をとゞむるの効あり

(三)滋養になる成分を與ふ

(四)良き滋養に缺くべからざる處ろの有機性の鹽分を與ふ

(五)腎臓を刺激し、小便の通じをよくす

(六)菓物を適度に用ゆれば通じを緩和にするを以て緩和劑ともなる、

(七)食欲を進め、また消化をよくす

(八)菓物は血を淸潔にする効能あるを以て壞血と稱する汚血病を防ぐの効あり

能く熟したる菓物は煮燒するに及ばざるのみならず、料理せずして食する方遙かに味よくまた滋養も多し又菓物を食するに宜しき時は食事の初めか、若しくは食時と食時との間をよしとす食時の了りたゞ後直ちに菓物を食すれば胃液を減じて消化の妨をなす。

▲食物としての菓物

シヤムの製法　食物として菓物を用ゐる方法は種々あれども、シヤム(砂糖にて菓物の實を濃く煮詰めたる

菓膏）はその良法の一なるべし。

葡萄ジャム　外皮を去りて陶器皿に入れ、子實は他の鍋に入れて火上に懸け蓋をなし、焦げざる樣注意して煮沸し、子實のくづれ、種子の離れるまで攪きまわし、火より下ろし種子をして器底に沈降ましめ、汁液を注出すか若しくは濾過して再び器に入れ同量の砂糖を加へて徐に煮詰め、時々攪きまわしながら、一時間に至らは、之を硝子瓶に移すべし、此の所ろや〻呼吸あり、

桃、巴丹杏、李は、ジャムに適せる良好のものにて其の種子を除き前條葡萄の方法と同じ煮方もて煮つむべし、貯蓄置くには同量の砂糖を要すれど當分の用ひ料には砂糖を尠くするもよし、風味は酸氣多くして却てよきものなり、

菓實の飲料　各種の菓實の液汁は水と砂糖とを混じてまた佳き飲料とする事を得べし、水一ガロン（三升五合餘）を煮沸して酸味のある林檎一斤を四つ切にし水に入れて軟かくなるまで煮て汁液を濾し取り再び砂糖半斤を加へて煮たて、上浮を去り瓶に入れて涼しき所に貯ふべし、此の割合にてすれば多くも少くもうまき林檎水を得るなり。

李水　李半斤に乾生姜二匁水一升二合を注ぎ粥狀となし濾し煮て上浮を去り瓶に貯ひ。此方法にて牡丹杏の類を水に製すべきなり

輕便蔬菜料理

炎天にて魚の不漁なるを憂ふる勿れ、市に蔬菜、鷄卵、鷄肉あれば、以て料理するに足るべし、よしや活き〲とした青物なしとても、南瓜、白瓜、胡蘿蔔、茄子、葱等は今や其の盛りを極めたり、世間の家にては何を食して暮らすらん、内のものは何故に味よき料理を得ざるにやと縮むる額の皺をのばして少しく料理の法を調べたまへ手輕くして美味なる料理の法は幾何もあるべし。

▲白瓜の卵燒

能く熟したる白瓜の皮を剝き、二つに割り、中の種子を

サヂにて掬ひ去り、一寸四角位に切り、目篩にならべて其上よりベラリと鹽を撒り、暫時をきて水氣を去りたる後、鷄卵の解きたる中にひたし、引上げてパンの粉の上へ轉ばし、油をしきたる鍋にて燒くべし。

▲玉　葱

玉葱はよく保存し得るが故に、此頃の如く魚肉青物に乏しき時の料理には、最も間に合ひてよかるべし。

第一西洋料理の好きなる人の用ゆる一法は、ねぎの上皮の赤きを去り、二三分位に輪切にして、一時間計り鹽水に漬しおき、引揚げて牛乳にて煮上げ温かき上よりバタを掛けて食すべし。

第二牛の脂を解かし、湯出たる玉葱を入れて炙り、之れに一二合の水と鹽、胡椒、麥粉、極少量の砂糖を入れ、二十分の間度々掻き廻はしどろ／＼になりたる時、炙りたる麵包の上に掛けて食すべし。

第三玉葱の皮を去り、薄く切りて茹ては絞り、茹ては絞り、二三度水を代へ、臭氣の抜けたる時、湯出抜玉子の黄味計なるを少さく刻みて、鹽を加へたるものゝ中に入れ、玉葱と黄味とを能く混和し、味淋酢、若しくは砂糖、酢を掛けて食すべし。

玉葱は、能く湯出こぼす時は惡臭全く去り、老人小供の歯のなきものにても噛むに難からざれば之れを丸る湯出になせしものを、砂糖醤油にて堅魚出しにて煮付け、もしくは牛肉の中に入れて、煮る時は淡泊にして一種の風味あり。

▲鷄肉の調和煮

柔らかな鷄肉を、小さく斬り、別つに大根、胡蘿蔔、葱、生揚、銀杏、じやがいも、さつまいも等種々なるものを骰の目に斬り味淋醤油にて長く煮、柔らかくなりたる處、先きの鷄肉を入れ一と沸へ立ち沸へたる處へ、葛をとかしたるものを入れて、どろどろにして食用とす。

▲かすていら卵子

ジヤガ芋をおろして、之れに卵子と、砂糖、鹽、うどん粉を入れてかき廻し、油をしきたる卵燒きに入れ、蓋をなし、蓋の上よりも少しばかりの火を置き、上下より蒸

し燒くべし。卵は鍋の燒けたる頃入るゝを可しとす。

▲卵花玉子

鰹魚の出しに味淋醤油を合せたるもの五勺に鷄卵二個を入れて能くかき廻し、花形の器、若しくは茶飲茶碗に入れて平たき鍋の中に沸騰せる湯の中に入れ、湯の入らざる樣に注意しつゝ湯出上げて用ゆべし。

▲白瓜の玉子煮

白瓜は通常あまり甘き食物の中に算ぞへられざれども、そは料理の法の宜しからざるためなり、左の法に隨がへば鉛も化して黄金となるべし。

二三個の白瓜の皮をむき、種子を去り、縱に切り五分計りの間、西洋うどを湯出る如くにざッと湯出、水を捨て、之を鹽、胡椒、バタにて加味し、然る後白瓜を引き出して皿に盛りをき、後どの汁るに少量のうどん粉と水とを入れ、十分計り沸騰せしめて後、二個の鷄卵と青味少し計りと、能ふべくはクリームをも入れて、能くかき廻し、之を皿に盛りたる白瓜の上よりかけて食膳に供すべし。

▲白瓜の佛蘭西料理

中位の白瓜、二三個の頭と尻とを切り棒にて中の種子をおし出し、之を牛乳か水に鹽を和したるものにて湯出をき、別にパンに牛乳をかけ、づく〳〵に濕したるものを二重鍋に入れて沸騰せしめ、その中へ鷄肉牛肉のたゝきたるものを加へて鹽砂糖にて加減しその内へ鷄卵三個を入れて混和せしめ、好みによりては葱の湯出汁を加へ、能く混ぜ合せて先きの白瓜の中につめ込み、バタを澤山引きたる鍋の上をころがして一寸外かわを温ため、之を輪切りとなして皿に入れ、その上より牛の煮汁もしくはクリームの汁等をかけて食用に供すべし。

▲白瓜の葛煮

大なる白瓜を五分位に小さく切り鹽水にて湯出水を捨て、更らに牛乳を入れ代へ、その中に鹽とバタと胡椒を入れて加減し、沸騰したる時、葛もしくはうどん粉の解したるを入れて、葛づゝりの樣になすべし。

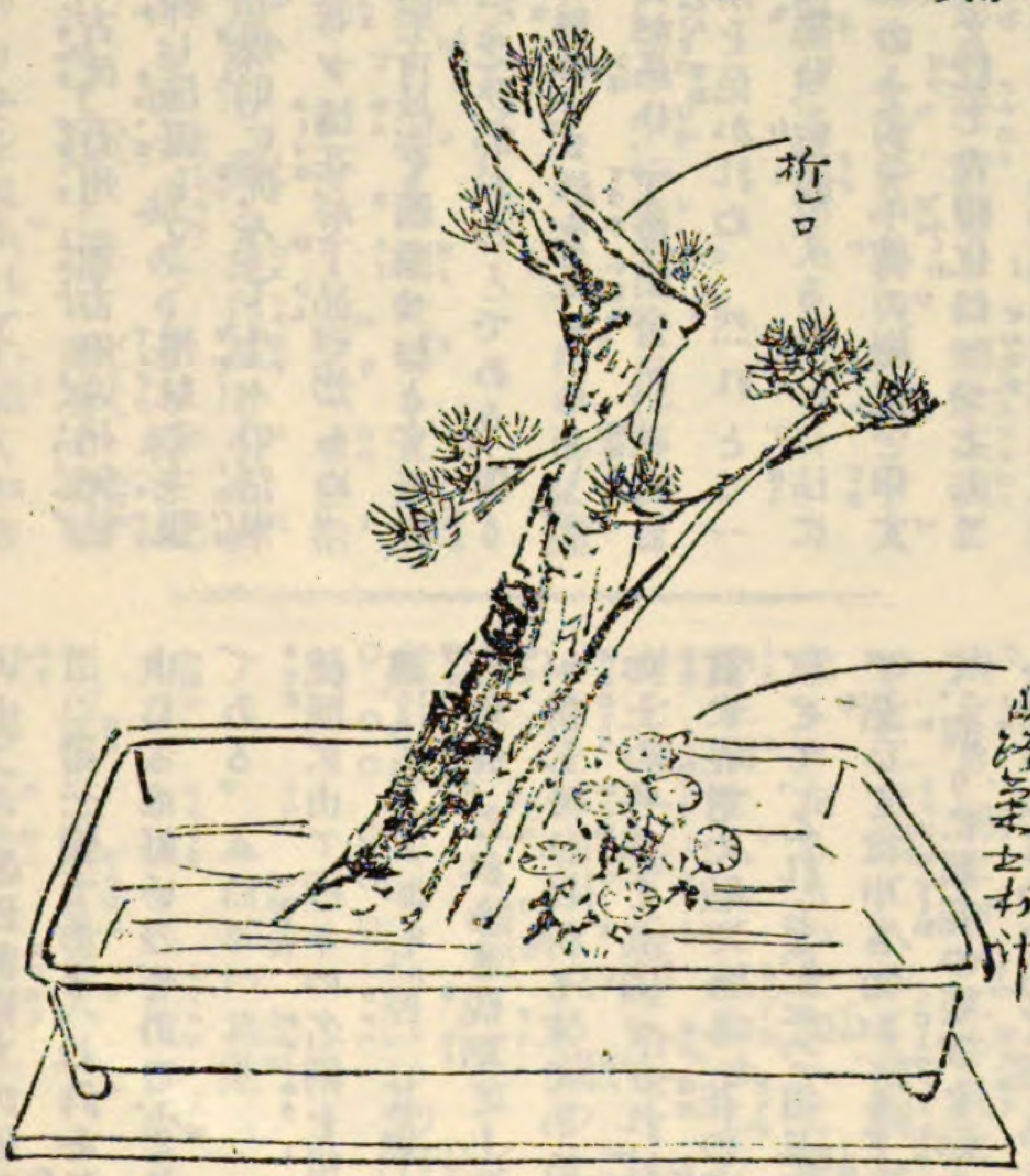
挿花新式

近藤嘉三

池坊流も悪くは無い、松月、古流、石州、新古の遠州何れもそれ〴〵の雅致がある、然し流派を立て、傳統を主張するの弊は、まゝ格法に拘り規則に泥みて生々の活氣を缺くの恨がある、加之ならず挿花が下品でならぬ。それは强て人爲の格法を以て自然を羈束せむとするからのヿて、餘裕と云ふものが乏ひからのヿである、獨り餘裕の乏ひ計でなく變化も無ひ、どれを見ても〳〵千變一律で然かも趣勢に無理が多ひ、丁度田舍の花嫁を見る樣で、何所やら俗な所を免かれぬ。然れとて一概に格法を無視するのでは無ひ、無視する所か格法に軌脫せぬ樣にわり度く希ふのである、彼の變化と申すも一々格法に伴ふので格法を脫した變化は一つとして無ひのである、然しその格法なるものが自然的でなくてはならぬ。女郎花はくねりて立てる所に彼が格法を存し、籬下の寒菊は霜に逢ひて侘びしげしげなる所にその狀性を示す その他長松の亭々たる、野梅の淸瘦なる、一々その趣味と性格を示さぬはない。その性狀に從つて趣致を寫すが挿花の要粹であつて、又實に花道の第一義である、これを外にして挿花の法は無いと申しても好いのである、これが花道の術語で申す出生である。

流派に由て種々の名稱を附する、眞、そへ、とめ。又は眞、うけ、ながし、控。其他、右花、左花、眞の花、草の花、行の花。これらも規則として多少の價値で無てはない、が併しそれは抑も末である、恐くは要粹てはあるまい。如上の各部を具備せざれば挿花で無き樣に敎ふるは、實に花道の賊である、花の美を損ふものである。然ればとて、これらの三つ道具五つ道具を備ふるものが必ず惡いとは申さぬが、もと初心の輩を敎導するに當りて、假りに瓶花の姿狀を示す法則に過ぎぬもので、いはゝ然らぬものを以て然るもの、如く作爲する法てある。故に金線や、絹を以て造り花を製するには適當の法かも知らぬが、そのものは既に一種の性格を具備せる

草木花卉を挿むに當りては寧ろ不適當と申しても善いであろふ。更に他の比喩を以て申さば俳優に對て由良之助に粉せよ太閤に粉せよと云ふは可なるも、眞の秀吉に對て良雄に對て師直に粉し、將門に粉し、酷しきは中將姫や常盤御前の如き女性に擬せしめんとするが如きは、到底なし得ざる事柄たるのみならず强て爲し得たりとも斯の如く性情に戻り品格を矯る所謂人格の作爲は品致も無く風彩も無いと同じ事である。梅を挿みて桃に似たる、山吹を挿みて萩に類するもの、職としてこの法則に拘泥するの餘弊である、况んや梅も櫻も松も、時としては百合



花や撫子花迄をも同一の規則を以て律せむとするは、丁度秀吉にも家康にも靜御前にも辨慶にも、同一の人物たれと注文する樣なものである、况して同じ秀吉にも藤吉郎時代の秀吉あれば太閤の秀吉もある、同じ家康にも今川家に人質としての家康、織田の客將としての家康、征夷大將軍としての家康それ〳〵に一種の光彩を放つて居る。春霞が一面にたなびいて居る野邊の姫松は若々として可愛らしく千歳の末の榮え見ゆる樣に挿むが大切であり老松を挿みては雲を凌ひで龍吟するの形容を浮動せしむるが肝要である、これは一樹木に就ての時代である

が、過現未と申すことは必ずしも蓮花計りの傳では無い何れの樹、何れの草にも無くては叶はぬ事である、况して、同じく松と一概に申しても、磯邊に生ふる磯馴松の海風に吹かれて姿おかしげなる、懸崖に根さしを留る古松のひよろ〳〵として覺束なげなる、峰の寒松、庭の姫松、一々特殊の姿狀を具へねばならぬ。

其他陽に面する枝葉の濃艶にして陰に向ふ枝の清疎なるが如きも大切である。前に振り出でたる枝の葉色あしく花褪せたるが如き、後部の枝の濃密なるが如き、これらは實に自然に背くの甚太しきものである。それから一枝の上にも過現未と稱して、方に開かむとするの莟、既に開くの花、うつろひ方に近き花、これを自然に隨て配置することも大切である、それも決して萬木一樣では無い、春在南枝既十分と申す梅花の梢より開き始むる、下葉より先づうつろひ始むる萩の如き各その花木の性質に由て區別せねばならぬ。

それから餘裕である、兎角挿花者流の花には餘裕が無い、窮窟でならぬ、それは一部を寫すことをなさずして全部を寫さむとするからの事である。櫻を挿みては吉野山や嵐山の形狀を摸せむことを思ひ、紅葉を挿みては立田川の風致を擬せむことを欲する、丁度狭小なる器に澤山な物を盛らむとする樣なもので、餘裕がなく鬱陶敷見ゆるのである。櫻を挿みて吉野山を想ひ起さしむるは可なれども、櫻を以て吉野山を作ろふと思ふてはならぬ、趣を得るは多きにあらず、盆池泉石の間に煙霞具足すとは、實にこの機微を漏したる破的の言葉である。花が多ひとて風情あるにも限らぬ、若し一輪の牽牛花を釣舟の花器に挿みたる、凉露の溥々として下る所、曉風に葉末の微動する所、趣味は決して入谷の朝顔棚に數千鉢の朝顔を賞するの比ではない。

要するに挿花の要粹は、右花とか左花とか眞副留などの部局の名稱以外に求めねばならぬ。以上述ぶる所に依てこれを示さば

一　花木の性格を失はざること
一　花木の經過せる年所を示すこと
一　一瓶の中に過現未を表はすこと

一部を寫して全部を寫さゞること

其外變化を知ることが大切である、それは形狀の上の變化である、雷公に折られし野中の一つ松が、幹折れて眞の短きが傍に勢よき蘗を生したるが如きはその一例である、然しいつも〳〵斯くせよと申すのではない。

水浴の心得

（一）水の溫度は決して攝氏十五度（華氏五十九度）以下なるべからず。

（二）攝氏十五度の水に入らんとする者は初め此中に留るは三分を超ゆべからず。次に五分、斯くの如くして之に慣るゝを要す。水の溫度は溫き程長く其中に留まるも害なけれども、冷なるときは速に之を去るべし。

（三）羸瘦したる小兒等は肥滿したる人に比すれば冷氣に堪えざるものとす。

（四）兒童に於ては左の規則を守るべし。

（水の溫度）	（水中に在る時限）
攝氏十五度（華氏五十九度）	一分乃至二分
攝氏十八度（華氏六十四度）	三分乃至四分
攝氏廿度（華氏六十八度）	五分乃至七分
攝氏廿二度（華氏七十一度）	七分乃至十分

（五）第一浴には先づ水中に浸るべし。爾後且出で且入る事を可とす。

（六）强壯ならざる過敏なる兒童は最初は隔日乃至三日おきに水浴し、其慣るゝに從ひて每日とす可し。蓋し日々水浴するときは身體を鞏固ならしむる効多し。

（七）若し健康なる人にして水浴、水泳の後不快を感ずる者は、蓋水中に長居したるに坐す。

（八）水浴、水泳に適當なる時刻は、

午前八時より十一時。　午後二時より五時。

迄とす。日中は必ず之を避く可し。

（九）何人と雖滿腹の節入浴するを許さず。然れども又空腹の節に入浴する事をも許さず。若し然らざれば痙攣及頭痛を發す可し。若し然らざれば暫時にして大に疲勞し、且つ浴後不快を感ず可し。

（十）充分强壯ならざる者は浴後直ちに少しの食物を採る可し。

（十一）水浴に熟練せざる者は、決して一人にて水浴す可らず。

（十二）水浴場に於て磽确なる岩石、高き波浪急に深き淵ある所、近傍に汚水の流入する所凡そ不潔なる臭氣がる水を避く可し。

（十三）水浴場に行く者は緩步を要す。其身體の熱せざらん爲めなり。最も可なる所は水藺莨、浪なく、遠淺にして、床の砂地なる者これなり。

（十四）若し身體の熱し若くは發汗したる者は衣服を着たるまゝ五分乃至十分間休息し、呼吸及び心悸の靜穩となり、汗の乾くを待ちて始めて水浴す可し。

（十五）衣服は速かに之を脫す可し。且半股引又は犢鼻褌を纏ひ、脫したる衣服は之を釘にかけ、若しくは樹木の上に置く可し。是は一に通氣消毒せしめん爲め、二に蟲類等の附着するを避けん爲めなり。

（十六）水浴に慣れざる者と雖水中に入りたるときは、直ちに全身を（頭部を含む）水中に沒し、水泳の眞似を爲す可し。若し此際爲す事なく水中に起つ時は、第一に頭部に充血を發し、第二に感冒に罹る可し。

臺所改良の話（承前）

建築技師　平野勇造

其三

次は竈のことで此話の主要なる問題である手取り早く申せば我輩は竈廢止論者で結局ランジ即ち置き据の西洋料理に使用するストーヴに取代ふる方が最も便利で寧ろ必要であると云ふ迄極端の説を持つて居る然し是れは時世に投合するかどうかと云ふ掛念もあるから先づ竈改良のことから述べやう、即ち竈には烟突、火力の加減板を付ける、竈は鑄物又は煉瓦續にする、銅壺を廢して竈の中に鐵管を設け別に湯沸釜を設けて湯を沸す樣にする、焚口と灰受取口とを別々にする、內にロストルを設ける、外に鐵蓋を取付ける、炭壺を廢する爲に鐵蓋及び加減板によつて密閉せしむることの出來る樣にする、焚物は石炭コークス又は瓦斯を使用することの出來る方法を採用する、受皿を備へ又竈を七輪にも代用せしむる樣に構造する、蒸燒の場所を設け、大小の釜及び鍋を乘せることの出來る樣若しくは其器物を同時に二個以上併び得る爲めに釜の輪又は上蓋を改良する、同じ火で煮物に火力の差を附け得る樣にする等のことで一々お話しをすると長くなるが、兎に角是れは容易に出來ることであると判じて宜しい、試みに其內の一二要點を摘んで申せば、竈を少しく高くする必要がある烟突及び竈の場所は成るべく壁へ寄せた方が便利である烟突は成るべく煉瓦が宜しい鐵だと火事の用心に大に注意せねばならぬ、湯を沸す鐵管から別に前申す湯沸釜を設けて之から流し元、湯殿、顏洗場に通ずる樣にする蒸燒場は竈の二ツ以上併ぶ場合は其間の懷に設け一ツの時は橫傍に火焚口の橫から出し入れし若し竈が壁の方に寄ツて居らなければ後ろの方から出し入れする、尤も此場合には火を焚く邊は成るべく鑄物にするが宜しい、ソして其の周圍に火の廻る樣に構造せねばならぬ、釜の輪の形を變化さするは誠に造作はない即ち穴に大小を拵へて其上に蓋を量ねる樣にすれば夫で宜しい右に述べた外の事は更に建築師に相談せ

なければならぬが玆に彼是を通して一つの大問題は焚物である、日本では大抵薪を焚き又木炭も焚くが是れは中々考へもので薪は焔の延びるものであるから薪を焚く近邊は火の用心が惡く場所も塞げる、火焚場即ち竈の容積も大きく要る熱が割合に出ない、即ち其割合は斤量で石炭の拾五に對して堅木は七、五位である其上直段が中々高い木炭に至りては一層損なものである今我輩の調べた所で見ると

茨城無煙石炭	一萬斤に付	四十圓六十錢	一斤	四厘〇六
コークス	同	五十六圓二十錢	同	五厘六二
薪堅木松其他六種平均	同	七十四圓八十錢	同	七厘四八
堅炭	同	二百十八圓	同	二錢一厘八

又石炭瓦斯を燃すときは和石炭一斤丈けの熱を出さしめるには十四立方尺を要する、東京瓦斯會社では之を三錢二厘六毛で供給して居るさうだ、扨て前表五種類の焚物を代價、生熱量、取扱の便否、有効熱、危險害毒、不潔等の項目に分ち其の合點數を有効率として現はせば左の通りの比例になる（石炭を標準とす）

石炭	一〇〇
コークス	八〇
石炭瓦斯	七四
薪	四三
木炭	三〇

此表に於て高價なる石炭瓦斯が有効數に於て高點となる譯は燃料から發熱する其殆んど全部を利用することが出來るからで他の燃料は焚付けてから其熱を利用する迄又使用の後全く消す迄に多くの熱量を徒費せねばならぬ、目下市中の湯屋では大抵石炭を使用する樣になつたが是は實際上自然の結果といつて宜しからう七輪用に使用する樣に竈を構造するにしても此場合の焚物は矢張り木炭を使ふのが上等である、コークスで焼た肉は少しく面白くない臭氣を感ずる、馴れたら良いかも知れぬが一寸硫黄抔い香もする樣だ、吸込みの良い竈又はランプならば直接に火を掛けることも出來るが左もないと落ちた油の煙、肉の焼いたときの香、別けて鮭、鰯抔の香は家中に充ちて嘔吐を催す樣になる、竈を七輪に代用する場合には焚物を乘せるロストルを

上げ下げすると上部の釜の輪の大小を入れ代ふることと、最う一つは上に薄鐵で拵へた箱の覆ひを被せ其上部の一端をも煙突に連續せしめて是等の惡氣を排出せしむるのが宜しい西洋では之をブロイラーと云つて一般に使用して居る

斯う研究して見ると日本の臺所には改良せねばならぬことが澤山ある、之といふも其家の主人が臺所の事を輕視して仕舞つて妻君の思ふ通りにさせず金も割合に掛けないので道具が不足勝ち、臺所が不潔勝ちといふのであらう、

で、若し多少とも金を掛けるとすればだ我輩は第一に竈を賣つてランヂを造ります、大小は固よりお好み次第で、ブロイラー附で皿を煖める處があつて、火床の周圍に水管が通つて飯釜を載せる樣にして、お菓子でも何んでも燒かれて、一度に澤山の鍋が掛られて仕舞の時は奇麗に掃除が出來るそれに火加減が自由自在、西洋料理支那料理日本料理何んでも來いです燃料は石炭でも木でもコークスでも瓦斯でも焚かれて火の用心が良つてそれで近處が汚れない場所は隅ッこの方が却つて宜しいと云ふ譯だから誠に重寶と云はねばならぬ日本の女で支那の各港或は米國の都會に働いた人の話によれば最初二三日は勝手が違ひますが其後は大層便利だと云つて居る、

其 四

之れから器物のことを述べやう、蠅張は成るべく臺所の外に置くが宜しい臺所は溫い處だから腐敗し易い蠅張の造り方は四角な箱で高さ二尺位、棚を二段許り附けて取外しの出來ることにして四方は五厘目位の金網を張り氷室の物置か又は仲の間か或は庇し下の風の吹通す冷かな處へ通行の邪魔にならぬ樣吊つて絲で上げ下しの出來るやうにしたい

次に氷函は氷室のない家では暫時貯藏す可きものを入たり又は夏分冷たいものを食べる時抔に必要である、普通は高さ三尺五寸幅四尺奥行二尺位、被せ蓋は蝶番で上に跳ね上けて其中子に氷塊を入れる、中子の底は二段になつて段の周圍に透しがあつて冷氣は下部に沈

降する溶解した水は外に流れるといふ仕掛けにする、又氷函の前は兩開きの戸で内部は亞鉛引を張つて棚が二三段ある周圍の側阪は二重に張り込んで棚は透しの鐵が宜しい、上等の氷函は大理石で拵へるが近頃外國では高さの高いのが便利で經濟だと云つて流行る夏分はミルク杯も入れて宜しいミルクは氷函のない家では蠅張の中に入れても好いが西洋では外にミルク棚と云ふものを拵へて置く、鼠入らずは菓子杯も入れることもあるから成るべく四方より塵埃の掛らない樣に前申した戸棚の樣な構造と蠅張と合併した樣なものにしたい足を高くして蟻の這入らない爲めに水盤の中に其足を浸すか又は下部に眞綿を卷くが宜しい眞綿は蟻の足を取るものである

臺所を一切立て働く處とすれば料理臺及び腰掛けが入る、料理臺が一寸したテーブルでも宜いが上が厚板で引出しを附て脚を丈夫にしなければならず、引出しには料理本、料理用の小刀、刷毛等の小道具を入れる、裁板が別に入るのであるが是れは野菜其他の物を直接に載せ仕事を仕舞つた後は掃除して巾を覆せて置くのだから高さは二尺三寸位が適當で周圍は塗りにして、上部丈けは是非白木の儘にしたゝ腰掛けは腕掛けの付たのと何んにもない丸い平たいのが必要である雇人の食事は其上を巾を掛けて喫る巾は場合により油巾を使ふこともある、ソレに前申して手拭掛けも、必要である

壁には漁獵の圖とか、古代の臺所の繪圖などを揭げて置くのが趣味がある或は雪中の景色、野遊、海上の樣子遠山杯も宜しい、大時計はボン〳〵で秒の大回りするのが玉子牡蠣杯を煮るのに便宜である、それから細君の部屋と連絡す可き話　管は西洋では臺所として當然附くものと極まッて居る、或は室内電話も宜しい

餘り微細のことに立入る樣だが話の終りだから述べますが臺所用の諸道具で今日不足のものが澤山ある先づ申せば飲水を漉すもの(水道の水でも漉して飲むものである)秤、寒暖計、勘定器、肉用鋸、ミルク鍋、コーヒー用諸道具、肉潰し器、洗濯鍋、大魚鍋、蒸燒用諸道具、菓子用餅用、麵包用、氷用諸道具庖丁 磨器械皮剝器械、乃

物研ぎ砥石、野菜切小刀、木鉢、干飯の粉挽器、鍋釜爬キ落し器、灰入れ、カベツ煮鍋、温菓臺、玉子錬り、砂糖鍋、芋潰し、肉押し、改良フライパン抔である、殊に洗濯用の道具に乏しい道具さへあればカラやカフスを洗ふのも造作はない、總て道具の有る無しは臺所若くは其家の整理如何を推測するに足るものである

夫れから臺所の日課を極める必要はあるまいか、假りに一週間毎に繰り返すとすれば月曜日は洗濯日、火曜日は流し棚回りの掃除日、水曜日は窓硝子の拭掃除日とか日曜日は休む樣にするとか云ふ風にしたらどうであらう

油物肉類を洗ふには石鹼を湯に溶して洗へば奇麗になる、モツト上等にすれば洗ひ盥を二ツ併べて二度洗ひにする焦げ附いたものを落すには細い鎖を繋いだもので擦れば落ちるストーブ竈の鐵物類はブラツキングと云ふものを酢に溶いて刷毛で塗り込めば黒く光る、火箸や其他眞鍮抔は磨き粉又はサポリチ石鹼で擦すれば光る或はメタルポリシユと云ふものもある、金銀類はエレクトロシリコント云ふものを賣て居るから之を毛布につけて磨く或は銀石鹼と云ふものある、皿抔を暖い湯に入れて洗ふとき手を入れられぬ程であるならば木綿絲で拵へた羽叩きの小さなものを使ふが宜しい雜巾には柄を付けたもので拭けで力が這入つて疲れない手の屆かぬ處でも掃除が出來る雜巾盥、柄杓抔もブリキが輕くて宜しい

(終り)

▲故英國女皇の美談　最近の英國ブリツチシ、ウイークリー雜誌に故英國女皇に關する感動すべき一小話あり昨年夏季の事なり女皇はチツチーの陸軍病院に南阿より歸りたる傷兵を見舞はれたるに傷兵中彈丸の爲に面部蜂の巣の如くなりたるものありたり女皇は之を御覽じていと不憫に思召され「朕は汝の爲に助力すべき事なきや」と尋ねられたり傷兵は身に餘る勅語に感泣し負傷の苦痛を忍びながら「陛下よ臣は陛下の御助力を仰ぐことなし只臣の爲に看護夫の勞を謝せられん事を祈るのみなり」と答へたり女皇は耳を傾けて傷兵の言を聞かれ直ちに傍なる看護夫に向はれ涙を含み玉ひて「朕は此負傷したる憫なる朕の子の爲に盡せる汝の親切に對し熱心に謝意を表すと述べられたり」と云ふ

禮法

女子の作法

實踐女學校教授
禮法講習會師範　田島秀子

刄物の扱ひ樣

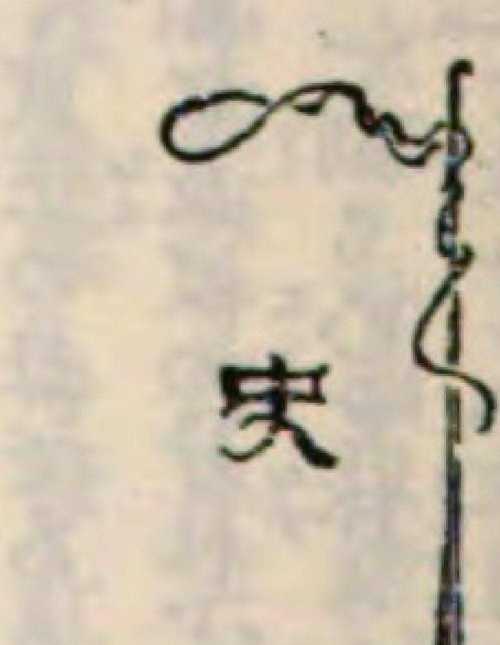
すべて小刀洋刀、其他鞘あるも又鞘なきも、皆刄の方を左に向けて出します。只此上もなく鋭利な物は、其事を一寸注意して渡します。受け樣は扇等と同じで、宜しう御座います。又金子布帛其他之れと同じ樣な物は、孰れも相應の臺に載せますが、其長い物は頭を左にして載せ、又横に短い物は竪に致し、左の手にて其裏を受け、右の手にて緣を持ちて出で、右より左に取り廻して進めます。其他は書籍等と同じで御座います。手拭は先づ横に半分に疊み、横四つに折り、又其れを竪二つに折り左の掌の上に載せ、右の手を輕く持ち添へて進めます、又小さき盆に載せても宜しう御座います、暑き時分冷水にて絞りて出す時は、前の如く疊みたるを水に浸して、絞つたまゝ擴げず、盆又は手拭置の器に載せて進めます、又受け樣は疊みある物ならば、右の手にて右側を持ち、左の手を下へ添へます、若し絞てあつた時は、器のまゝ前の如くにして取ります、又下に置かれた時は、只目禮したまゝで使ふ時に取り上げて宜しう御座います、さうして手を拭ふには竪に折りあるを、左右の手にてそと開きたるまゝで使ひます、凡て絞つたまゝを出されますのは、皆打ち解けた時の事で御座いますから、顏手の汗を拭ふのは宜しう御座いますが、襟をあけて胸のあたり迄も、押拭ひ等致してはいけません、使用した跡は、元の如く疊みて置くので御座います、又草花等は根を上に致し、木の花は梢を上にし、左の手を其下にそと添へ、持ち出でゝ進める時は、左の手先きを一寸下につきます、然し紙に包み水引の掛けあるは、水引に人指を其直下に、拇指をおく樣にして持ちます、次は烟草盆で御座います、之れは如何な形の物でも、正面

を始めより向うにし、兩手にて其兩側の半程を持ち、拇指を横に宛て、あとの四指を能く揃へて裏に宛て、客の前三尺許りの所に座り下に置き、三寸許り押進め、前申した様に一禮して退きます、又撤き様は前の如く座り、兩手にて烟草盆を少し我が方へ引きよせて、前の如く退きます、さうして何によらず、物品を持ちては故なくして他所見など致してはいけません、烟草盆には烟管を添へる事が御座います、其時は吸口を客の右の前におきます、持ち搬びには手の附けある物でも、手を持つてはいけません、灰は能くふるひて中央へ熱をいけ、灰は四方より壓へ、灰吹は能く掃除して水を少し入れ置きます、さう致しませんと、烟が急に消えないでいけません、客の前の火入の火の盡きたる時、取り換るには、外の同じ火入に火を入れて盆に載せ、兩手にて持ち出で、例の如く座し、煙草盆の上なる火入を兩手にて取り、我が前下座の所におき、盆の上の火入を兩手にて持ち烟草盆に据え、我が前のを取り盆の眞中へ載せて退きます、然し替火入のなき物及び平常は只盆斗り持ち出て、烟草盆の上の火入を取り盆に据ゑ、持ち歸りて火を入れ持ち出てゝも宜しう御座います、又は外の烟草盆に火を入れて出ても同じで御座います、火鉢は其手掛のある物は其れに兩手を掛け、なき物は兩手で横側の所より、確と底を持ち置く時に、徐に下の手をはづして横側に添へ、客の右側に押進めます、撤く時も例の如くにして宜しう御座います、然し手掛なくして底に手を廻さねばならぬのは、我が方へ三寸斗り引き、兩手を掛る時少し浮す様にして、そと手を下に差入れます、又火を直しますには、外の火鉢に能く入れて持ち出で、客の前にあるのと取り換へて宜しう御座います、其時成る可く揃ひたる火鉢を出します、次は料紙硯で御座います、之れを持ち出ますには、料紙の折目を右に、客の方からよき様に致し、其上に硯箱を載せ、右の手で料紙と硯箱を持ち、左の手を料紙の裏に添へ、例の如く坐し、其まゝ我が右の方へおき、兩手にて硯箱斗りを自分の前に据ゑ、蓋を兩手で取り、我が左の方へおき、右の手にて水入れを取り、其時左の手を箱の左側に添ふ、

さうして宜き程に水を入れ、元の所へ水入れをおき、左の手を硯箱へ前の如く添へ、右の手に墨を持ち、徐かに摺り、墨を向うの縁によせ掛け、筆を取り左の手に持ち換へ、右の手にて鞘を抜き、箱の内へ入れ、更に墨を右の手にて取り、左の手にて筆の尖を硯石にあて、墨にて尖を押へ宜き程に和らげ、墨を元の所へおき、筆を右に持ち換へ、能く筆尖を直し、箱の向う縁へ掛け、兩手にて料紙を客に進め、次に同じく硯箱を、右より左に取り廻して押進め、次に蓋も同じに廻して出します、さうして退きます、料紙硯を使ふには、先づ料紙を右の手にて取り、左へ移し中より一枚ぬき出し、左の手にて元の所へ置き、右の手に筆を取り、物認め終らば、それを自分の右の方へおき、筆を左の手に移し、右にて鞘をはめ、右の手に持ちて箱の内へ納め、兩手にて蓋を取りて硯箱に被せ、紙は箱の上に置き、取り廻して三寸程向うへ押出しおきます、撤く時は例の如くして、持ち樣は始めと同じで宜しう御座います、箱なき硯は打ち解けたる時の物で御座います、其れを出すには小蓋樣の小さき盆に載せ、筆墨を添へて、出します、次は色紙短册で御座います、之れは書いてあるのでも、又無いのでもよき程の台に、色紙を左短册を右に載せ、若し一種なる時は中央に載せ、先づ自分の方を正面に向けて持ち出で、例の如く取り廻して進めます、次は花瓶の置き方で御座います、挿花の瓶は先つ花台を兩手にて持ち出で、置物より下座の方乃ち床上におき、次に花瓶を其上に据ゑ、さうして水つぎに水を入れ、布巾を口の所へ添へて、徐に水をさし、若し台の上に水の滴の落つる事もあらば、布巾にてそと拭ひ、前の如くして持ち歸ります、又一對の花瓶を据ゑるには、一つを置物の上坐へ一つを下坐に、据ゑて宜しう御座います、次は燭台燈台の類を申ます、之れらを持ち出るには、右の手にて棹の中程を持ち、左の拇指を台皿の縁へ掛け、殘の四指にて底を受け、持ち出て客の前三尺位の所におき、能く位置を直し、一膝退きて立上るので御座います、又一對出だす時は、上坐を先きに下坐を後に致します、燼切掛の附きあるは、それを下坐の方へ向けます、一對出すに

は、兩方より對ひ合はす樣にして据ゑます、燈切つばには水を少し入て、台皿の上燼切掛の下になる、所におきます、蠟燭は一旦ともして吹き消しおき使用する時、更に火を移すのが宜しう御座います、燈台は台と別に台皿のあるが本當で御座いまして、其れを持ち出る時は能く注意してすべらぬ樣に致し、又燭台には台皿のなきも三つ足なるも御座います、三足は二足の方を上坐に、一足を下坐の方に据ゑますが、一對の時は二足を向ひ合ふ樣におきます、蠟燭を立て換ふる時は、先づ新らしき蠟に火をともし、手燭を立てゝ持ち出で、燭台の前下坐の方へ坐り、手燭を左の方におき、右の手にて新らしき蠟を持ち左の手にて燃殘りの蠟を拔き取り、新らしきを燭台に立てます、其立る時は右の藥指にて、そと蠟立ての所を探り見ると宜しう御座います、それは若し蠟を立つるに妨のない樣の爲めで御座います、さうして左の手に持ちし殘りの蠟は、其儘手燭に立てゝ持ち退きます、又數本の蠟を立て換ふることは、大抵略して盆の上に新らしき蠟を、幾本も載せて持ち出てゝも致します、此次は熨斗三寶の扱を御話し致します

史傳



班婕妤（其二）

文學士　久保天隨

婕妤は東宮に退いて、自悼賦を作つた。これは、自己が薄命の經歷を述べた一篇の抒情詩である。はじめに、先祖の遺德を受けて、一朝宮闕に入り、優渥なる聖恩を受けた分外の光榮を述べて、

承二祖考之遺德一兮、何性命之淑靈、登二薄軀於宮闕一兮
充二下陳於後庭一、蒙二聖恩之渥惠一兮、當二日月之盛明一、
揚二光烈之翕赫一兮、奉二隆寵於增成一、既過二幸於非位一
兮、竊庶二幾乎嘉時一、每寤寢而累息兮、申佩離以自思、

（この賦は、文字が六つかしいから、特別に注釋を加へて置かう。以下之に傚ふべし。——祖考之遺德は祖

父や父の德、承は受け嗣ぐといふこと。性命之淑靈は人品標致のすぐれたるをいふ。下陳は女官、登薄軀の句より以下は、身早く宮掖に入りしを指す。日月之盛明、光烈之翕赫の二句は、風條を鳴らさぬ太平の御世に、天子の恩遇を得たことをいふ。增成は宮名、前に出づ旣過幸於非位とは、帝寵分を超えて、婕妤となりしをいふ。非位はふさはしからぬ高位といふことにて、謙遜の意。竊庶幾于嘉時とは、動きなき御代一しほに榮えよかしと望む心。絫息は溜息。佩離は結んだ帶で、女子が他家に嫁するとき、父親が自ら結んで之を戒めたもの、今之を解いて、往日を追懷し、自ら尋思して過失なからむを期すといふのである。

かくの如くして、戰々兢々、古しへの賢女烈婦を學ぶも、元來の天貧、愚であつた爲に、到底能くするに至らなかつたとて自ら謙遜し、年月人を待たす、さしもの顏華漸く衰へむとするに至つたのを悲んで、

陳二女圖一以鏡監兮、顧二女史一而問レ詩、悲二晨婦之作一戒兮、哀二褒閻之爲一郵、美二皇英之女一虞兮、榮二任姒之母一周、雖二愚陋其靡一及兮、敢舍レ心而忘レ茲、歷二年歲一而悼懼兮、閔二蕃華之不一滋、

（女圖は、古しへの賢婦人を畫いたもの。陳は展べる。鏡監は、鏡に向ひたる心にて我身を引きくらべるといふ義。女史は、宮嬪に扶持する老女、後世に監宮などいふと同じ者であろう。晨婦は、牝雞の晨といふ忌はしき振舞を爲す女。換言すれば、夫を無視する女のことで、古へより、戒むるものである。褒閻は、褒姒、周の幽王の妃で、後に周をして東遷せしめた古今無比の妖女である。郵は、尤と通じ、こゝでは禍の義。皇英は娥皇女英、堯の二女で後に舜の妃となつた。任姒の任は太任、周の文王の母で、姒は太姒おなじく武王の母である。次の二句は、此身とても、皇英姙姒に及ばぬけれど、常に其跡を學ばうと思つて居て、一刻も心を休め之を忘れたことは無いといふ心。之を承けて、年月の早く經つにつけて、何も爲す所なきを悼み懼れ、やがて花の色の移り行くを自ら

憫むといふに歸着せしむるのである。かの產見を失ひたるより初めて、今日の不幸は、要するに皆天命であつて、今さら誰を恨むべき由もない。そこで畢生退養、この玉の緒の絶えなむ後、せめては骨を御陵の下に埋めたいといふ意を述べて、

痛ニ陽祿與ニ柘館一兮、仍繈綵而離レ災、豈妾人之殃咎兮、將天命之不レ可レ求、白日忽已移レ光兮、遂晻莫而昧幽、猶被ニ覆載之原德一兮、不レ廢ニ損於罪郵一、奉ニ共養于東宮一兮、託ニ長信之末流一、共ニ洒掃於帷幄一兮、永終レ死以爲レ期、願歸ニ骨於山足一兮、依ニ松柏之餘休一

（陽祿、柘館、ともに宮中の殿名で、妃嬪が子を產むとき籠るところ。晻は暗と同じで、莫は暮と通ずる字。この二句は、天日の影、漸く暗く黃昏るゝといつて、己が身の恩寵が衰へ行くに比したものである。「覆載の二句は、「さりながら、天子の德は天地も啻ならず、此身に罪過ありと雖も、廢棄し玉はざる有り難さよ」といふ意。以下太后長信宮に共養することを述ぶ山足は山麓。餘休の休は陰。）

重ねて第二章に於ては、專ら孤閨寂寞の幽怨を抒べて、下の如く言つて居る。

潛ニ玄宮一兮幽以淸、應門閉兮禁闥扃、華殿塵兮玉階苔、中庭萋兮綠草生、廣室陰兮帷幄暗、房櫳虛兮風冷冷、感ニ帷裳一兮發ニ紅羅一、紛綷縩兮紈素聲、神眇眇兮密靚處、君不レ御兮誰爲レ榮、俯視ニ兮丹墀一、思ニ君兮履綦一、仰視ニ兮雲屋一、雙涕兮橫流、顧ニ左右一兮和レ顏、酌ニ羽觴一兮銷レ憂、惟人生兮一世、忽一過兮若レ浮、已獨享ニ兮高明一、處ニ生民一兮極レ休、勉虞レ精兮極レ樂、與ニ福祿一兮無レ期、綠衣兮白華、自レ古兮有レ之、

（玄宮は、奥まりたる宮殿、つまり長信宮を指したのである。應門は正門。禁闥に階前の戶。扃は鎖すと見る方が分りが善い。以下四句、解するまでも無い。帷裳の二句は、其上に風冷冷となるを承け「風がそよ〳〵吹き入りて、我が衣に觸るれば、裾から紅の色の羅が見え、歩くにも、ざわ〳〵と音して、絹地が摺れ合ひて聲をなす」といふので、退處しても、身のたしなみを怠らざるをいふものである。感は觸。綷縩

は衣聲である。密靚の靚は靜と同義。かく盛裝して心しづかに待ち居ても、君は來給はず、何の甲斐もないといふ心のしほらしきを見よ。履綦の綦は履の下の飾。この六句は、專ら君を思ひ、さびしさに堪へ難く、強いて自ら慰むる狀態である。以下八句は「人の一生は甚だ短く、やがて命の盡きなむとき、譬へば泡の水に浮ぶ如く、果敢ないことは今更いふまでない。しかるに、己は兎も角も高貴の位に上つて、人民としては幸福を極めたものである。だから、今の不幸も天と諦らめて、精を娛しましめ、樂を極め、長しへに自ら安んずべきものであろう。だが、飛燕姉弟の威張り居るは、古ながらの例とはいへ、國家の爲に、聊か憂ふべきことであるとの意である、享は當たる、或は受くる。休は美、又は福。虞は娛。綠衣白華は詩經に出て居る詩の篇名で、ともに妾が夫人を讒し位を失はしめたのを刺つた詩である。

詞意纏綿、辭氣敦厚、嗟して怨みず、哀んで傷らず、これが誠に宮掖淑女の言である。或人は之を許して、賦の藻思は、司馬相如に勝るとまで謂つて居る。之に次いで擣素賦といふがあつて、彫心鏤骨の才の程が、容易に知れる。その

佇二風軒一而結レ睇、對二愁雲之浮沈一、

（夕風涼しき高殿の上に佇みて、恨は長き雲の色を見め居る）

といひ、

廣儲懸レ月、暉水流レ淸、桂露朝滿、涼衿夕輕、

（廣き庭には、月の影照りみちて、遣り水に映つればきら〳〵しい。又朝には桂花の露濕ひ夕には、涼風袖に入る心地よき景色、何とも言はれない。）

といふは、未してあるが、燕姜趙女の媚態嬌容を描き盡して、

若乃盼睞生レ姿、動容多製、弱態含レ羞、妖風靡曼、皎若二明魄之升下匡、煥若二荷花之昭晣一、調鉛無二以玉一其貌一、凝朱不レ能レ異二其唇一、若二雲霞之邇下日、似二桃李之向春、紅黛相媚、綺組流光、笑笑移レ妍、步步生レ芳、

（盼睞はながし目に見ること。多製は身ぶり樣々に變

化すること。弱態、妖風、いづれも媚しい形。日魄は月。荷花は蓮。調鉛はおしろい。凝朱はべに。紅黛は口紅と眉黛。綺組流光は衣の美しきを形容したものである。この一段を譯せば、下の如くでもあろうか。――ながし目に見やりたる樣、一しほの趣あり、一たび身を動かせば、百の手ぶり艶ならずといふことなく、媚しさの限を盡し、たとへば曇らぬ月の山の端にさし上りたる如く、蓮の花の鮮かに水を出でたる風情あり。色は飽くまで白ければ、脂粉も其用なく、唇は丹の如くなれば、紅など背むるにも及ばし。朝に彩りし雲霞の色、春咲き匂ふ桃李の花も、これには、勝らじと覺えつ。口紅と眉黛と相映し、綺羅を着飾れば目も醒むるばかり、にこやかに打笑みて人を眺めつゝ、輕く歩みて近くさま心も言も及ばぬばかりなり。)

といふ如きは、他に比類少き絶妙好辭といつても差支ない。なほ最後に、

表ニ纖手於微縫一、庶見レ跡而知レ心、計ニ修路之遐夐一、怨ニ芬芳之易ニ泄、書既封而重題、筒已緘而更結、慙ニ行客一而無レ言、還ニ空房一而掩レ咽、

(微縫は袖口。修路は長き路。遐夐は遙かに遠しといふこと。この一節の意味は、「細き手を袖口より出して、筆を把り、故郷へ送る文を書いた。どうか、涙ににじむ墨の跡を見て、我が心を察し玉へ。たゞ心配なのは、路が餘りに遠いから、やがて墨の香もぬけて、雨などに濡れると、文字さへ讀めなく成はせぬかといふ事である。たから、手紙は封じ終はつても、更に幾重にも包み直し、なかなく是でもう善いとは思はない。だが、之を持ち行く旅人の待ち居るに愧ぢて、言なりて渡して遣り、その後、わが居間へ戻つて、殘る愁の限を泣いだ」といふ樣なことである。

といへるなど、温籍の情趣、さながら其人と相似た者がある樣だ。一體婕好の作つた賦は、規摸の宏大、措辭の蒼勁な點に於て、他の男性作家に及ばないけれども、女は女だけに、物とはなしに、涙もろき所があつて、羞を帶びつゝ、言はむと欲して言はざるしほらしく、いぢら

しき所になると、一片の眞情、掬すべき者があつて、眞似の出來ない趣がある。婕妤には集があつたといふことだか、今傳ふるところ、上に擧げた二賦と次の一詩に過ぎないのは、頗る惜むべき事で、崑山の片玉、その價は愈よ高いものである。

その一詩といふのは、外でも無い。人の善く知つて居る怨歌行で、身を扇になぞらへ、うき世に秋の風立ち初めてからは、要なき此身、長しへに箱の中に納められて、又手にせらるゝ時のないのを嘆息したものである。温柔敦厚の旨、至情人を動かすは怪しむに足らない。

新裂㆓齊紈素㆒、皎潔如㆓霜雪㆒、裁作㆓合歡扇㆒、團團似㆓明月㆒、出㆓入君懷袖㆒、動搖微風發、常恐秋節至、涼飈奪㆓炎熱㆒、棄捐篋笥中、恩情道絶、

(齊は國の名。紈素は絹地。合歡は別に意味なく、唯だ添へたばかりであるが、夫妻閨房の用に供すといふ意があると見れば、尚ほ面白い。涼飈は涼風。この詩の意味を即席出鱈目ながら、七五調の新體詩といふものに譯せば、下の如くにでもあろうか。

世にも妙なる遠國の雪より白き絹地にて
造り成したる唐團扇月の如くに圓かなり
我背の君の胸のあたりなつかしげなる涼風や
やがてつれなき秋の來て暑さいつしか收まれば
投げ棄てられし箱の中契絶えぬる悲しさよ

この詩に關する古人の評語など、一々取り出てゝ書き立てるのは煩はしい事であつて、唯だ古來棄婦閨怨の典故となつたものと云へば、それで十分であろう。

一たび長信宮に入つてから後、婕妤は再び出づることが無かつた。兎角する中、成帝は病を以て崩ぜられたものかだら、婕妤は舊日の歡樂を追想して、面白くなく、月日を送つて居たが間もなく、帝の跡を追ふて死なれたものだから、兼ての望の通り、園陵の中に一處に葬られて終まつた。婕妤の一生は、ざつと此の如く、絶代の佳人はその聰慧を以て、終に薄命の嘆を免かれなかつた。

いふまでも無く、婕妤は才貌兼備、神識絶倫、善く婦道を守り、その上、天命に安んじて、自ら其身を全うし

た者で、成帝に對して同輦を辭し、又誣告を辯じた數語の如きは、確かに無限の敎訓を後世に垂れたものである。だから、劉向の列女傳には、下の如き論讃を加へて、嘆美褒稱、殆んど至らさる處もない位である。曰く、「君子謂ふ、班婕妤同輦を辭せし言は、蓋し宣后の志なり。李平を同列に進めしは、樊姬の德なり。詛咒の讒を釋きしは、定姜の知なり、供養を東宮に求めしは、寡李の行なり。その賦を作るに及びては、哀んで傷らず、命に歸して怨みず。詩に云ふ、有レ斐君子、如レ切如レ磋、如琢如レ磨、瑟兮僴兮、赫兮喧兮、有レ斐君子、遂不レ可レ諼兮と。其れ班婕妤の謂なるか、と。」あゝ此の如き佳人は、又と世にあろうか。二賦一詩、いつ／＼までも、有情の人をして痛涙を濺がしむるのも、至極道理のあることは言はねばならない。

（完）

◎◎蓋世女傑マリヤ、テレサ

筑峯女史

墺國女皇マリヤテレサは西曆千七百十七年五月十三日を以て墺都維也納に生れ玉ひぬ。御父は日耳曼皇帝チヤールス六世、御母はブランスウヰツクのエリサベスクリスチナと稱し。千七百四十年十月二十日父王の崩御ましますや、其封土を繼承し、たまひ墺太利の公主、日耳曼の女皇、匈牙利及びボヘミヤの女王といへる尊號を得られぬ、時に芳紀正に二十四歲

女皇は曾に其容姿の婀娜艷麗なるのみならす、御身の丈高くましまし且つ、擧止溫雅にして、而かも堂々たる威風を具したまいぬ故に一たび微笑たまへは、百媚生じ、人をして其心膓を融解せしむるの力を有しぬ。女王は實に其性質に於て、妖艷人を迷はしむる婦人の勢力と、又剛毅にして不屈不撓なる男子の氣力とを併有し以て、自然に宰臣統御の才能を具備したまひぬ。故に常に内に在りて、帷幕に參與し、父王を翼贊したまいしが。千七百三十六年二月十二日ロレーン公フランシスス、テフヘンと結婚の約整ひ、維也納に於て、華燭の典を擧けたまひぬ。

當時女皇が王位に登りたまひし時、墺太利の國勢は至つて微弱なりしが。國庫には僅々四萬弗の蓄財あるのみにて、而かも國債は積むで山の如く、陸軍は僅かに三萬餘人にして、而かもそれさへ規則立たす。その上糧食給與せられず、武器に欠乏せるを以て、兵士の不平は常に絕ゆることなかりし。而のみならす田野は既に荒蕪に歸し、維也納の市街は飢饑起り、其の近郊には一揆さえ蜂起して、市府に押し寄せ來らん模樣ありき。斯の際ありき政府は瓦解し、相續の權利は爭はれ、バヽリヤ公は王位を得むことを主張しつゝ、今や大軍を率ひて、維也納に進行中なりとの風聲遠近に傳播したりけり。去れば遠隔の州郡は、皆墺太利の羈絆を脫せんとし、ボヘミヤは動搖し、匈牙利の貴族は兵を擧げ、土耳其の保護に依賴して、其祖先世襲の權利を回復せんと努めたり。その上ならす歐洲列强の朝廷は、尙未だマリヤ、テレサの相續權を承認せす。而して當

時の内閣諸大臣は無氣力不能力の顔揃へなりしほどに。女皇は尙は年少無經驗にして、且つ臨月に臨み、身躰さへも健全ならざりき。内外の國歩當にさ多事多難の秋なりき。

斯の時に當り、霹靂一聲迅雷耳を掩ふか如く、全歐を震動せし事こと起りたり。普王フレデリック第二世は開戰の宣告を爲さず、墺太利の領地シレシヤに侵入し、遂に略取せしこと是なり。普王は、主張して曰く、シレシヤは其祖先か日耳曼皇帝より應さに受取るべき土地なりしと、然れとも其理由たるや、全く根據なきの口實のみ。普王は其父より七十餘萬の精兵と、三千萬弗の軍資さを讓受け、新たに王位に即けり。彼は之を使用するの餘地なく、頗る髀肉の嘆あるに困めり。然るに今や墺太利は少若の女子漸く王位に即き、國内は動亂せり。是れ疑もなく彼か機失ふべからずと、思惟せし所以なり。故に普王は陽にマリヤ、テレサの權利を保持しつ、陰に兵を伯林の近郊に集め、突然シレシヤに侵入し、一擧して之を略取せり。マリヤ、テレサは此の凌辱を與國に訴へ、以て其救援を乞ひしが、與國は只其救援の約束のみを與へて、絕へて之を履行するものなかりしかば、マリヤ、テレサは茲に於て全く孤立となり、只其勇氣に依賴しつゝ、少許の軍隊をモラビヤに召集し、其指揮をノイペルグ伯に委任し、以てシレシヤに向はしめたり。時方に嚴冬寒烈肌を裂き、積雪脛を沒し、通路險惡にして進軍甚だ困難なり。フレデリックは之を諜知し、雨雪に乘し、大擧して墺軍をモルニッツの郊外に邀擊したり。墺軍は直ちに之に應戰せしかど、遂に大敗したり。是に依りてシレシヤは全く普魯亞の有に歸し、茲に有名なる墺太利王位相續の戰爭其端緒を開始せり。

普軍の勝利は大に列國の朝廷を震驚したり。佛蘭西、バ、リヤ其他の諸國は普魯西に聯合して、墺太利を分取せんことを謀れり。斯の時に當り公然墺太利の味方たらむと宣言する朝廷は、一もなかりき。英吉利は如何に高貴の代價を拂ふも、普魯西の和親を買ふべきことを切に墺廷に勸告し、ロレーン公フランシスも亦熱心に封土の一部を割きても、全般の安寧を保持するの利益なることをマリヤ、テレサに忠諫したり。然れどもマリヤ、テレサの剛毅高慢なる氣象は、斯かる事變に屈撓すべきものにあらず。彼女は意氣頗る軒昂して曰く、朕は領土の一吋たりとも、之を他人に讓與するを欲せざるなり。與國若し朕を助けざれば、朕は國家と共に亡びて已まむのみと。時にフレデリックは大本營をモルニックに進め、佛蘭西、バ、リヤの使節と共に軍議を凝らし、更に餘念なかりけり。嗚呼此同盟の擧動は實に盜賊の所爲と云ふも、敢て過酷の言にあらざるなり。而して今や西班牙王フヒリップ第五世も、チヤールス第五世の血統を名として、墺太利の王位を請求し、波蘭王アフガスタスは其后妃マリヤの權利を主張し、サルヂニヤ王チヤールス、エマニウルも、亦曖昧の口實を打立て、相繼て此の盜賊の群に加盟したり。フレデリックは是等諸國の兵士の向ふ所を部署し、各國か分配すべき土地を議定し、墺太利分割の計畫大半成就しけり。英吉利は墺太利に向ひ、普魯亞と和睦せむことを切に勸告したれども、マリヤ、デレサは餘飽くまでもシレシヤを讓與して、和議を買ふことを拒絕して曰く、天若し墺太利家を滅亡するの意あらむか、バ、リヤ公の爲めに滅するも、將亦ブランデンブルグ公の爲めに亡ぶるも同一なり、天若し墺太利の運命を絕ざらむか、何の懼るゝことかあらむと。マリヤ、テレサは斯の如く千軍萬馬の中に在りて國事に鞅掌せるの間、三月十三日遂に月滿ちて、玉の如き皇子を分娩したまひぬ。公爵ジヨセフ即ち是れなり。今やマリヤ、テレサは獨り其身の爲めのみならず、又其子の爲めに、墺太利全土を保有せざるべからず。抑も彼女は幼少の時よりハプスブルグ家の高貴と、尊嚴とに對し、誇大

なる觀念を懷抱せり。又彼女は其王位は神聖の委托にして、神に對し、之を保存するの責任ありと信ぜり。斯の信仰の主義と、家系の高慢とは、今や慈母の愛心に結合して、益々其天稟剛毅の志操を鞏固にせしめたり。時に佛蘭西の大軍は來因河を渡り、バーリヤの軍勢に合し、進むて維也納を距る僅かに廿四英里なるボルテンを略取したり。フレデリツクも亦佛蘭西、バヽリヤの軍に合せむとて、其軍隊を整頓せり。墺太利王國は今こそ危急存亡の秋とぞ知られたり。マリヤ、テレサは實に絶望の極に在りしなり。斯の時に當り、此の憐憫なる女王に忠節を盡し、克く勁敵を防禦せしものは、獨り匈牙利の領地のみなりき。さればマリヤ、テレサに此際匈牙利の都府プレスバークに於て、即位の式を擧行したり。斯の時女皇は僅かに出產の臥床より起き出てしのみにて、身體未だ健全ならざりしも。纖弱なる身體は却つて其天然の艷麗質と相合し、人をして憐憫の情を催さしめたり。禮式了るの後ち、女王は公宴を張りて、匈牙利の將士を饗應せり。女王は食卓の首に在りて其微笑と、威嚴とを以て匈牙利の將士に接しぬ。親しく女王に謁見せる匈牙利の高潔なる將士等は、斯く歐洲大半の君主に攻擊せられ、獨力之に當らむとする女王の心中果して如何なるやを推察せり。彼等か忠勇は此瞬間にぞ醒起せられたり。玆に於て女皇は肅然として紅を潮する唇を開いて曰く、「今や國歩の艱難は國家の危急、皇位の存亡旦夕に迫りたり。朕の與國は既に朕を見棄てたり。故に朕は唯匈牙利人の忠義と、武勇とに依賴するあるのみ」と。悲憤慷慨の演說をなしたり。義俠に凝りたる匈牙利の武士は、此の悲酸なる勅諭に對して、感激措く能はず。彼等は一齊に絕叫して曰く、我等は我等か王マリヤ、テレサの爲めに死せんと。玆に於て匈牙利全州は擧つて女王の師に從ひ、忽ちにして維也納城を堅めたり。同盟軍は斯の有樣を見て、大に戒嚴せり。斯くて墺軍と同盟軍とは數回の戰爭ありしが、フレデリツクは到底墺太利の屈伏すべからざるを知り、和議を提供し、シレシヤを得て墺太利と平和を締結せり。而して列國も今や憐憫の情に動かされ、荷蘭、サルヂニヤ、露國も亦墺太利を救援せり、是に於て墺太利の軍氣頓に奮起し、漸次領地を回復し、遂にマリヤ、テレサはボヘミヤの王位に即くに至れり。時に千七百四十三年五月十二日なりき。

千七百四十三年の初葉、マリヤ、テレサの前途は實に多望なりしなり。英吉利、荷蘭、普西亞、サルヂニヤは皆其味方となれり。是に於て墺太利は今や却て攻擊の地位の立ち、佛蘭西に攻め掛れり。日耳曼皇帝チヤールス第七世即ちバヽリヤ公は斯の勢に、狼狽し、一切墺太利相續の權利を放棄したる。マリヤ、テレサは玆に至りて、其世襲の封土を悉く回復し、戰勝に乘じて今は却つて英吉利の使命と、佛蘭西分割の策を議ずるに至れり。蓋し小を呑み弱を凌くは、當時歐洲の常態なりと雖も、又一にはマリヤ、テレサか英武傲慢なる氣象に基したるなり。

マリヤ、テレサは右戰爭中、其良人ロレーン公を內閣總理大臣と爲し、政務を處理せしめたり。然れども主權に至りては女王獨り之を掌握したり。故にロレーン公は只女王の命令を奉じて、其意見を實行するに過きざりき。蓋しマリヤ、テレサは己の上に一の勢力を許さゞりしなり。然れども彼女は決して其良人を愛慕せざりしにあらず、日耳曼皇帝の尊嚴なる位は、己れは女性の身なるを以て、之を繼受し能はされば、ロレーン公に之を得せしめ、其權力と尊嚴を增加せしめむと熱心せり。然るに此の尊位は端なくバヽリヤ公の占有する所となれり。此に於て女皇今はバヽリヤ公を廢し、その良人ロレーン公をして日耳曼皇帝の尊位に就かしめむと熱中したまへり、英吉利は此れに同意せず、却つてバヽリヤ公を保護したりければ、マリヤ、テレサは容易に其目的を遂することと能

はざりき。而るに千七百四十五年一月二十日日耳曼皇帝チャールス第七世即ちバ、リヤ公崩御せしかば、日耳曼の選擧公等はフランクフォルトに選擧會議を開き、遂にロレーン公を選擧して、日耳曼皇帝と爲せり。之をフランシス第七世と稱す。

斯くて女皇は、其後數年間に於て驚くべき精勵を以て其の府庫を充實し、其の陸軍を精錬し、十萬八千の常備軍を編制せり。而して常に之を訓練し、之を各處に配置し、以て何時にても一處に集中し、一致の動作を爲すことを得せしめたり。女皇の一念は只シレシヤを回復して、會稽の恥辱を雪ぐに在りしなり。然れども斯の如きことは公然發表すべきことにあらざるを以て、女皇は只其内閣員と共に窃かに評議を凝したり。而して女皇か政治の熱心は、其活潑の心情と、天稟剛毅の性質とに結合し、女皇をして其内閣諸大臣よりも、一層敏慧機警ならしめたり。故に女皇は事毎に自己の意見を以て處辨し、内閣大臣の意見を用ゆること少なかりき。

墺太利は數年間英吉利と親交を繼續したりしが、英政府の墺太利に臨むや、常に自國の援助を以て、危急の場合を救ひしことを恩として、傲慢無禮の擧動のみ多かりしかば、墺太利は怒りて英吉利を離れ、遂に意を佛蘭西に傾くるに至れり。而して間もなく墺佛同盟の條約は、容易に陰密に締結せられたり。既にして佛蘭西は兵を出してハノーバルを襲擊せしかは、英政府は墺太利に迫りて援兵を督促せしも、墺太利の答辭曖昧なりしかば、英政府は遂に怒りて普王に結び、墺太利と絕てり。是に至りて歐洲政治舞臺の局面は全く一變せり。マリヤ、テレサに斯く佛に結び、又普と親しみ、兵を日耳曼の國境に出したり。是に於てフレデリックは其理由をマリヤ、テレサに詰問したり。而して正確なる答辭を得ざりしを以て、フレデリックは遂に兵を卒ひて、サキソニーに侵入せり、

多年の平和茲に破れ、戰爭再び起れり。是を有名なる七年戰爭の端緒とす。

此戰爭は千七百五十六年に始まり、歐洲の中原に於て、稀世の英雄と、絕代の女傑とは、各陣頭に顯はれ、火花を散らして七年の長き星霜間奮戰苦鬪せり。然るに墺太利の軍利あらずして、遂に敗北に歸せしが、千七百六十三年平和の條約に調印し、和睦を爲すに至れり。

斯の時に當り、マリヤ、テレサの長子ジョセフは、年齡已に二十三歲に達したりしが、父母の勢力に依りて、父君崩御の後は、日耳曼皇帝となるべきの選擧を得たり。而して父君日耳曼皇帝フランシス第一世は、多年中瘋症にて腦み給ひしが、遂に其年の八月十八日黃泉の客とかりぬ。ジョセフ代つて日耳曼皇帝と爲れり。マリヤ、テレサは其良人の死を悲めり、皇女は自ら親衣を製して、之を死骸に着せて埋葬したまいぬ。斯くて女皇は以來死に至るまで、喪服を解くことなかりき。然れどもマリヤ、テレサの其良人を哀悼するの情は、世の匹婦か痴情に溺されて、其情人を悲むか如きに非ざるなり。彼女は其良人の永折よりも、一層悲哀惜く能はざるものを有せり。何ぞや曰く、シレシヤの土地を失ひしこと是れなり。彼女は幾萬の生靈を殺し、幾億の國帑を費しても、之を回復せむとしまたいぬ。而してシレシヤは遂に回復すべからず。是に於て女皇は新たに領地を見出して、其損毫を補充し、以て其過失を贖はむとせり。彼女は之か爲みに八方を回視せり。而して間もなく好機會は正しく到來せり。何ぞや波蘭分割の陰謀是れなり。抑も波蘭は墺太利、普魯西、露西亞の三國に隣接し、内政亂れ、國力微弱なりしかば、フレデリックは波蘭分割の策を定め、之をマリヤ、テレサ及びアザリン第二世に謀れり。マリヤ、テレサは其謀に同意を表し、其子ジョセフを普魯西に派遣して、フレデリックと協議せしめ、談判此に整ふて千七百七十二年

八月五日三國の間に條約を締結し、第一回の波蘭分割を實行したり。此の條約に由りて「墺太利は波蘭の最豐饒なる地方二萬七千英方里、人口二百五十萬を得たり。斯くて三國は殘餘の波蘭を傍觀すること二十餘年なりしが、是に至りて再び分割を始め、遂に之を滅ぼせり。此分割に因りて墺太利は前後合せて土地四萬五千英方里、人口五百萬を得たり。

マリア、テレサは七年戰爭の後、專ら心を內政の發達改良に用ゐ、殖産を奬勵し、軍備を整頓し、其府庫には貨財を積集し、其陸軍は精鋭强悍當時歐洲に於て、之と匹敵せるものは只普魯亞の軍勢のみなりしと云ふ。晩年に至りては政務を太子ジョセフに委任し、已れは只其大綱を總攬したるのみ。然れども敎育事務に至りては、大に心を用ゐたりと云ふ。千七百七十四年より千七百七十八年の間、マリア、テレサは普通敎育法を制定せり。是れ今日墺太利普通敎育の基礎と爲りしものなり。

マリヤ、テレサは母として、端正嚴格なる人にてありき。國難に際會し萬機の煩勞に逼迫せられたり。之を尋常の人に求めば、其心緖紊亂の極に陷るべきに、其豪氣は毫も衰へず。而して兵馬倥偬の間に處して、十六子を舉けたり。然るに女王は過度に神心を勞したる爲めにや晩年に至りて肺疾を患ひて、病床に臥したまひぬ。日を重ぬるに從ひ、疾漸く重くなりたれば、今は餘生の幾許なきを知りたまひ、後事を計畫したまふ所ありしが、愈〻死期の近きしを見て、其親族を枕邊に召集して宣はく。朕は既に死期の近よりしを知れりと、又皇帝ジョセフを顧みて曰く、我見よ朕か死後朕か所有物は悉皆卿の有に歸すべし、朕は朕が見女を卿の注意に委託す。乞ふ彼等の慈父たれよ。卿は之を約諾せらるゝを以て、朕は滿足して死すべしと。又公達姫君を顧みて曰く、皇帝を卿等か主君として能く仰事せよ、皇帝に順從し、之を敬重信用し、萬事に就て其助言に從ふべし。皇帝は必ず卿等に友誼と保護とを與ふるなるべしと。女王は尙其家族其國事に就きて、憂慮措く能はず其夜は皇帝を招致して、國事に就き細大遺言敎訓する所ありて數時間に亘りぬ。斯くて翌朝女皇は遂に永眠したまひぬ。實に千七百八十年十一月二十九日、享年六十四歲、位に在ますこと四十一年。

中將姬（承前）

田村松魚

（七）

さるほどに都にては中將姬失せたまひぬとて上下騷ぎあひけるが、翌る年の春、峯の雪消ゆる頃、御內伺公の侍達大臣豐成公に申しけるは、彼の紀州有田の御所領は獵くらには此上なき所と申し候、いかで一度此の山に御獵したまひなんやと申すに豐成公一議にも及ばず、彼の所に行き玉ひて、鹿を狩るに、今日は一つの得物だになければ、唯奧深く進み行くほどに、とある木蔭のわびしきに幽かなる草の庵の見えければ、豐成公あやしみたまひ、如何なるものゝ住家ぞ、杣家か、或は桑門にもあるかと、視入りたまふ所に、內には外の物音に驚きて稍々立出でゝ顏さし出したまへば、大臣殿これ

を視て、あな世に不思議のこともあるものかな、捨身沙門の身ならんには知らず、斯る深山にさも美くしき天女とも見ゆらん若き女の形見ゆることいと〳〵怪し、是は化性のもの丶所爲にやあらんと、上ざしの鏑矢取つて一矢と思召す所に、姫君驚き恐れて其所に轉び臥したまふにぞ、大臣いよ〳〵怪しみ左右なくは矢も放たず、名乘れ〳〵、名乘らば生命助けんと呼はる。姫君いと〻耻かしけれど名乘らざれば此身の大事と思召し、是は都に聞えたまへる右大臣豐成の息女なり、繼母の計らひによりて此の山に打殺ろさるべかりしを、武夫に扶けられ、甲斐なき露の生命をとゞむるものぞ、とのたまへば、大臣馬よりころび落ちて、さてはわが娘の中將よな、あな懷かしの姫よと斗りに泣き臥したまふを、姫も父君と聞きて夢か現か、あふ嬉しやと暫時が程は親子手に手を取り合し、四つの袂のうれし涙にぬれけるぞあはれなる。

（八）

大臣殿は思ひもよらぬ獵のゑものを具して都に歸りたまふに、此事早くも內裏にきこしめして、これは不思議のことなり、大臣のうちへはかなふべからず、其儘大內へ奉るべしと宣旨嚴かなりければ、即ちすぐに其方に入らせたまふ。

されども姫君は常に道心の御志日に副ひて深く月にまさりていよ〳〵淺からざれば、目前に世の無常を觀じて、何んぞ無爲の國常住の身を願はざらんやと、其御心のみ强かりしが、姫君十六歲の御時當今第一の后に立ちたまふべき宣あり、大臣を初め上下萬民、此の世の面目一生の思ひ出、これに過るものやあるとよろこびをなせども、姫君は兎角に心すゝみたまはず、無常の殺鬼は王位をも恐れず炎魔の使は後宮にも情をとゞめず、いはんや拙なき此身をやと思召して、更に請け引きたまふ御心はあらざりけり。

其頃大和の國當麻寺といふあり、人皇三十一代用明天皇第四の皇子麻呂古王と申させたまふが、御兄君聖德太子の御勸によりて推古天皇の御代に河內の國交野山田の鄕に一寺を建てたまひ、これを萬法藏院と名けたり、

其後年を經て天武天皇の白鳳二年に靈夢によりて萬法藏院を役小角練行の地に移すべしとありければ則ち小角が住ひたる大和國北葛飾郡當麻村に移す、初め寺名を禪林寺と云ひたりしを、後に當麻寺とは云ひしなり、また一説には麻呂古王の孫當麻國見と云へるが、天武天皇をたすけたてまつりし功によりて此の寺を河内より移して當麻寺と名づくとも云ふ、まことに當代の名刹閑居の靈地にして佛法修業には此上なき處なれば、姫君は何卒して此寺に世をのがれんものと思召し立ちたまひしが、今一度父御の御顏をも拜しまゐらせんと、さあらぬ體にて父御に逢ひたてまつりしが、兼て思ひ定めしこととながら、そゞろに涙に咽びたまふ、父御あやしみて其故を問ひたまふに、その御姿の漸々に衰へさせたまふことの悲しとて猶泣きたまふに、父大臣も涙をしぼりたまふ。

やがてして姫君は西の峰に向ひて、日の暮るゝを待ち、忍びやかに御館の中を出でさせたまい、當麻寺への道程七里ばかりなりけるを急きたまふほどに、馴させたまはぬことなれば、御足を流るゝ血は道芝の夜露を染めなしていとい たく、されど道心いよ〳〵堅固なれば、さまでに疲をも覺えたまはで、やがて當麻寺に着きたまへば、とある僧坊に入らせたまひて、出家を望むよし聞えさせたまふに、僧達姫君の御容躰を見て、これ世の常の女性にあらず、後日のこともあるべければ、輕〳〵しく御心に任せ難しと辭退するに、姫君已むなく暫時お身を閑居に寄せたまひ、一つの庵をしつらへ、これを紫雲庵と名づけて、玆に彌陀超世の悲願をたのみ、極樂不退を求め、しば〳〵道場に詣でつゝ、讀誦觀經、書寫念々稱名の信心世に殊勝に見えたりけり。

かくて御年十六歳の秋の頃彼の稱讚淨土經一千卷の書寫遂に成就しければ、寺庫の經藏に納めたまふ、その御手跡のさまなど世に比もなくめでたきにぞ人々皆奇異の思をなすばかりなり。

其後天平寶字七年壬卯六月十五日といふに、御年十七歳にして御かざりを剃したまひて、御名を法如大姉とよばせたまふ。

（九）

法如大姉は禁戒いよ〳〵深く道心ます〳〵堅固にして歳月を送らせたまふ、或時法如比丘尼正身の彌陀如來を拜みたてまつらんことを誓ひたまひ、若しこの本願相遂けずば我誓つて此の伽藍の門戸を出でしと勇猛精進したまふ所に、同じき月の廿日の酉の刻といふに一人の比丘尼忽然として目の前に現じたまふ、法如これを見たまふに、禪容色あざやかにして三衣の袂馥しく、おもむろに法如比丘尼に對ひてのたまはく、汝が懇懃の粧を見るに感嘆のおもひに堪す、我今淨土の變相をあらはし、汝か諸願を成就せむとおもふ也、今明の間に百駄の蓮莖を集むべしといふ、法如比丘尼觀喜身にあまり、感歎胸にとほりければ、此化來の比丘尼の言葉を天聽に達しけるに、叡感斜めならずして、即ち忍の海の連に詔して蓮莖を集めしめたまふ、かくて一兩三日の中に大和、河内、紀伊の三國より九十餘駄の蓮莖を取り集めてこれを化身の比丘尼に供へしかば、比丘尼その蓮を折りて絲をぬき、寺のたづみの方に井を掘りて、この絲をすゝぐに、水は一色なれども、絲は美しく五色に染りければ、そを井の傍なる櫻樹の枝にかけて乾したまふ、これを絲懸櫻といふなり、またこの寺を染寺といふも、これより起りしことゝいふ。

さて同じき月の廿三日の夕つ方、また一人の化來の女人現じたまふ、容色禪娟として眛相人に越へ、年の程二十四五ばかりにして上界の天女の天降れるかと疑はる。此の女人、先の比丘尼に問ふて曰く、彼の蓮の絲調ひたるや、比丘尼これを渡すに、即ちその絲を取りて道場の乾の隅にて、油三升を藁三把にひたしてこれを灯とし一夜三時の間に九尺の間にて一丈五尺の太曼陀羅を織あらはしたまふ。曼陀羅とは淨土の實相を具備せるものにして、即ち觀經一部を具さに寫しあらはしたるものなり。この大まんだらには本末にのみ節ありて中に節なき一トよの竹を軸とせり、この竹一夜に生ぜしゆゑ一夜竹と名づくとぞ。

（十）

かくて曼陀羅も成就しぬれば、彼の女人は掻き消す如

くに失せたまふ、化來の比丘尼中將法如に曼陀羅を拜がましめて、觀無量壽經の說によりて曼陀羅の甚深の旨を示し、七言四句の偈を作りて古佛靈仙の往緣をしめして曰く

往昔迦葉說法所。　今來法起作佛事
卿懇西方故我來。　一入是場永離苦

此時法如觀喜の涙を垂れて善哉、善智識いづくより來り玉ふ、また先の女人は誰人にましますや、比丘尼答へて曰ふ、我は西方の彌陀如來なり、先の織女はわが左面の弟觀世音なり、本願によりて汝が諸願を成就せしめんとて玆に來ると、云ふかと見れば、忽ち紫雲に乘りて西方の天に飛び行きたまふ、法如驚きて空を見たまふに、

我哀レ汝故　降ニ於下々一
汝隨レ我故　昇ニ於上々一

といふ聲聞えければ、法如比丘尼信心肝に銘して隨喜の涙を流したまふ。

かくてそれより十歲餘りの歲月を經て光仁天皇の寶龜六年乙卯三月十四日といふに、妙香室に薰じて聖衆の迎にあひたまひて大往生を遂げたまひぬ、まことに平生の大德、臨終の奇瑞は云ふにおよばず、五障三從の女人の身にして斯る有難き一生を終えたまふことまことに比稀なりといふべし。

附記す、或書に、

豐成は不比等の孫、武智麻呂の子、惠美押勝が兄なり、押勝が亂によりて豐成も天平寶字元年七月二日に大宰府に謫せらる、同七年六月中將姬十六歲にして、和州當麻の禪林寺に入つて尼となり、如法と名づく、(先には法如とあり)姬が母は百能と云ふ、是も不比等の孫麿卿の子にて豐成とは從兄弟なりといふ。さて姬が薙髮より二十年以後、延曆元年にこの百能といへる死せりとあれば繼母の讒によりて雲雀山にすてられしことは誤なり、父豐成大宰府にうつされ、叔父押勝は誅せられしがば、中將姬はそれが爲に無常を感んじ薙髮せられしものなるべし、といふ說もあり。

文苑

和歌

鸚鵡（八月宮中御歌會詠進）

おもひふかきみくにとからとりもまつちゝはゝ
をよひならふかな　高崎正風

人のことよくもの言へと世の中のとりの中をは
はなれさりけり　久我建通

宮姫ののりのをしへを末つひにまねふあうむの
こゝろかなしも　渡邊千秋

外と國の鳥もみくにの人かほにみくにことはを
まねひてそなく　黒川眞頼

あやしくもことゝふとりのまなひやにすたつす
ゝめの聲はしらねと　本居豊穎

ものとへは其言の葉を聞しりてこたふるあうむさ
かしかりけり　津輕承昭

人としてなと人こゝろなかるらむひとのまねす
る鳥もある世に　渡邊清

ひとのいふ言葉をよくも聞わけて眞似する鳥そ
あはれなりける　小畑美稻

うつせみのひとのことくに物はいへとなほこま
れとりをはなれさりけ　大谷光尊

人とはぬ宿もあらむをかひなれて言の葉かはす
友となりけり　東久世通禧

かひならすあうむの聲を忘れては友のよふかと
おもひけるかな　竹屋光昭

人のいふ聲をたくみにまねふかなきくことさと
き鳥にしあれは　牧野忠敬

くちまねをよくなすものはあまたあれとこのあ
うむには及はさりけり　小原迪

このうちになれてあうむのかたらふを人の聲か
と思ひけるかな　千種任子

うなゐ子もかひならすらしいふことをいふなる

鳥のおもしろしとて　小倉文子

家ひとのわれをよぶかとおもひしはこにかひな
れしあうむなりけり　園　祥子

はしたなく語りしことをやさしくもあうむの鳥
にまねられにけり　姉小路良子

聞馴てものいふ鳥もあるものをまなひえすとて
思ひすてめや　小池道子

ちゝはゝをかなしこゑしてよひつるをたれかと
みれはあうむなりけり　藪　粂子

人まねをよくする鳥もあるものをいはれぬこと
のあるそわひしき　北島いと子

こゑをはこふ人にならひてこのうちにこもるあう
むも口眞似やする　津室好子

いふことく云ふをおもへはこの鳥は山彦とりと
よふへかりける　宮地巖夫

とつくにの人のことをもまなはるゝ御代をあう
むもうれしとおもはむ　坂　正臣

なく聲は人のことはに似たれともなほ鳥の名は
はなれさりけり　萩原嚴雄

ことの葉の花の林のこゝかしこ聲こそしきれ
あはれこの鳥　中村秋香

この鳥もひとり言葉をおほにめやかしこきもの
は敎也けり　鎌田正夫

おのかなくこゑこそなけれいたつらに人のこと
のはまねふあうむは　大口鯛二

みくみにも親を呼ぶ鳥わすれては子ともやある
と思ふ時あり　千葉胤明

人のことかたるあうむもはかなきはたゝものま
ねに過ぬなりけり　遠山英一

みちのく百首の内

佐々木信綱

村長のはなよめぎみのさとがへり
荷うまつゝきて春のかぜふく

はげしくも鞭うたれゆくやせ馬の
やせ／＼ながらあらむ此世か

花かげの芝生にねぶるをさな子の
　ゆめをまもりて舞ふ胡蝶かな
うつら／＼夢うつゝともわかなくに
　こはゆめなるか君の來ませる
まめやかに正しき道をわれふまむ
　父のかたみのわが田つくりて
世のつらさ樂しさ知らで老にけり
　ちひさき村をあめつちにして
石おほき湯の山ごえのなゝまがり
　湯のけかをりて百合の花さく
淺間山やけ石おほきふもと原
　こゝにもさけり姫百合のはな
病いえて温泉をかへるをとめ子の
　馬につけたりやま百合のはな
衰ろへし家おこすべき我身病みて
　今年のあきもまた暮れむとす

縱屋雜詠

坂正臣

宗尊親王

うづもれぬみふでの跡もあるものを
　北野の雪になになげきけん

露底朝顏

あさがほの花の色にはさけらじを
　明くるまがきの露なはらひそ

物へゆく道にきぬあらひたる水よねか
　したる水のながれてきたなかけりれば
くはずしてきずして人のすまれなば
　いかにこの世の淸くあらまし

あるあした

つばめとふためいけばたの小杉垣
　あさよりさけり晝顏の花

海人といふ題を得て

ことのはの海には玉もかつぎえず
　うをとるあまの身にやかへらん

田舎より都の友のもとに

大塚楠緒子

背戸の茄子畑一面にうす紫の花をつけそめ、やりはなしにまき捨て置き候ひし朝顔も、自然の手におのづから育てられ候て、此頃はいとよう繁り合ひたる葉の隙より、ねぢれたる蕾の二つ三つはやほどけかゝりて、紅か瑠璃か、明日の朝は釣瓶つる破れ袖に匂ひ候べしとたのしみ居り候都の空如何なる風か吹き申候らむ、茗溪の水櫻が岡の梢、馴れし身には振り捨てゝもさすがに戀しく、鷄の聲に破られ候わけがたの夢はいつもそれに候、五月雨のあがりし朝御前樣と二人、摺鉢山の頂きにもすその泥濘によごるゝも知らで、互の理想語りあうて餘念もなかりし其思ひ出もわけくれ、附き纏ひて、はなれ申さず、今は其君と其我れと、都田園にかくは懸け離れ候も運命の爲せる業外國びとにさへ技量を視し給はねばならぬ外交官の夫人にて、それの夜會、これの宴會に、かねて御得意なりし英佛の語を、けふ此頃はいかに巧にあやつりゐたまふらむと、美しきトレーン引きて花毛氈の上に立ちたまふ御姿など、親しき友の身にはたゞ／＼嬉しう思ひ浮べまゐらせ候、此處にはペン軸の折れのはら／＼手箱の隅よりまろび出で候に、昔は橫つ文字書きし事もありしよと思ひ出て候のみ、愛でにしテニソンが詩集の金文字も塵にまみれて綠の表紙には、此頃の雨に黴の生え居り候やうなれど、手に觸れて拂はむとも思はずなり候まで、我身の老いぼれ候を御憐びくだされたく、中には、彼の、彼の、君にのみは語りはべりしと覺ゆる、彼の人にもらひし菫の花の挿みてある筈に候へど、如何なる色に褪め果て居り候かわけて、見むさへ物憂く、失戀の跡とふらはむ程の熱血もいつか冷えて、たゞ生きて息を致し居り候樣のみにも考へられ候、去年擧げ給ひしたしか御名は明樣とか、父君に似給ひ母君の性受け給ひて、いかに御悧溌にて大きうならせゐたまふらむと御うらやましう、こなたにはさる心まぎれも未だ出で來申さず、良人は例

の繪筆のみ握り候て、驕りて腰折る事を好まぬ美術家の癖とて、抱負のみ大きなると申居り、側に見るめも痛はしきばかり瘦せさらぼひて、大作に氣魄を絞り居り候へど、妻の身には行末の事の心細う、胡粉溶き手傳ふ指のうへにをりふしはわれ知らぬ涙のたぼしり落る事もこれあり、いかで神もあはれみ給ひて、良人が思ふ程の作をめぐみたまひあかるき方へひき出させ給はずやと念じ候も、たゞ身びいきの愚かさにや、思へば西鶴の沙翁のと生意氣なる口吻に似非なる事をさへづり候其程の空想より、斯かる現實のけふの日を生み出さむとは、夢にも思ひがけざりし事に候へど、今はいとよく安むじ居り、良人は能く我れを信じ我れはよく良人を愛し居り、浮べる雲の榮花を願ふにも候はねば、着實に平和なる家庭とはこれを申すに候べし、僞の假面の剝がれて眞の女の、これも一つの生涯に候べし、同窓の山樣は仙臺に、鈴樣は九州に在し候由、御氣の毒なるは德子樣、御連れ合に殘され給ひしより、彼のクリスチャン嫌ひなりし御方のいつかそれの熱心なる信者になり給ひて、傳道の事にのみ有髮の尼の安心を守りゐたまふとか、運命はまことに人を翻弄するものと存じ候、猶かきたき事御話し申たき述懷のたんと御坐候のなれど、たゞ今何やら裏口に人の音ない申候、大かた畑一つ越えし隣の家の婆なるべく、初孫が初節句の祝にとて、いつぞや良人の鍾馗の繪かきて遣り候ひしを、斜ならず喜びて其後はをり〳〵畑のものなど持てまゐり候が、また瓜のはつちぎりなどとて呉れ候のに候べし、かゝる田園にひなびたる交りながらまた都には知られぬ興味もこれあり、彼の寄宿舍の窓に鉛筆ひねりしその程なりしならばオーヅオースまねびたる駄句の一つ二つ、強ひても得むと必ずあせり候事ならむと存ぜられ候へど、さる事はや走せ去りし月日の追ひかけられぬ遠き昔となり候ぞ是非もなく、いざやその婆あげて茶のひとつも呑ませむと存じ候を、惜しけれど筆とめ申候、物賣る店もとぼしく候を、あやしき筆の毛さへ禿びたるに加ふる惡筆の、御とがめもなくば御かへり事給はりたうかしこ。

蓮を見るの記

白魚女史

さめざらましを。夢と知りせばさめざらましを。あはれいつくしき父君、御なつかしき御袖にすがりて山路を越ゆると見たる、よしや、その山、死出の山にありきとても、さめざしましを。夢と知りせばさめざらましを。くやしくもさめし夢かな。はひまはるうばらに袖をやぶり、からたちに手をかき、くゞりくゞる木の下に、ふと咲き伏す姫百合の花をながめさせ玉ひて、

世の中はうばらからたち鬼あざみ
　　こゝろして咲けひめ百合のはな

と、かつて旅路より送らせ玉へる御歌を誦し玉ふよと見しは、夢なりけるよ、夢にてありけるよ。なつかしな、父君。滊車の窓より見送らせ玉ひし御面影、福子勉強しつゝまてよと仰せられし御聲、今もあり／＼と目にうつり、耳にひゞきて、忘られぬ。堪へすなりて、天戸ひきあけて、暁の空をながむれば、迷ひの雲深く、鐘の音をさへ埋めたり、何となく身にしみ亘りて、知らず知らず鐘の音の聞ゆる方に足をすゝむれば、いつしか上野には來りぬ。おとゝしの今日は、父母にたづさはり、朝とく此の不忍池の蓮をとひ、入谷にまはりて朝良の美くしきをあがなひ、千なり瓢簞をやう／＼求めて、持ち歸られけるよ。それも、これも皆我がため、我が書の道のためには物もをしませ玉はず、御心をもつくし玉ひたるものを。拙き身、御心にも報い奉る事能はずして、春花とめぐしたゝれし君にははやも世を隔てたり。今は誰がためにか咲かん、誰れに錦をよそほひてか見せん。悲しくて、昨日まで一年あまりは筆も墨も捨ててはてけるを、人々になぐさめられて、またや筆とる心にはなりにたれど、ともすれば、思ひ立ちし一すぢの心もたわまんとす。なつかしき父よ、此の蓮葉を見るにつけても、戀ひしや、悲しや、なつかしや。おはしまさば、今年もたのしく、うれしくながめんものを。かへらじと思へば、いとゞ戀ひじく、せんなしと思へば、いとゞくりかへさるゝよ。袖をしぼりてたゝずめば、彼方の葉にも、たまらぬ露のこぼるらむ。ほろ／＼と

風に亂るゝ音す。いよ〳〵身にしみてながむれば、また何となく涼しく、いさぎよく風にゆらめく白妙の花のかげなつかしく、えならぬ香り袖にみち、くりかへるゝ糸のみだれもとけてすゞしく、何となく淨土に來たりたる心地。そゞろに書かまほしき心になりて、筆とれば、つねにはまさりたる墨の色、これも父上のなほ我が業を導きたまひてなるしるしならむか。いとかしこしや。

昔の日記（日曜日）

山崎とね子

日曜天氣よし。午後友とまゝごとを爲し、たんぼの方へと遊びに行きたり。おもしろかりき。夜、本の下讀をす。

四月と書きたる昔の日記の一くだりよ。今は無き伯母君に、都のつとにもらひたる手帖に、五日六日書きつゞけたるを見いだしぬ。朧げにもかきたるかな。されどさやかに心にのこりたる故郷の春の一日よ。此日の事にやありけむ。

母君〳〵、友達の來ませしにまゝことせんと思ふを、其棚の上の箱とりて給へと、取らせまつりて、人形いだく箱たてゝかさりたるは、昔の家の南むきの椽側よ。障子のうちには母君物ぬひてゐたまひし春の日かけ長閑なるひるまなりき。人形には今ひるけの料買ひて來むに、たゞ暫しまてよといひ殘して、二人つれだちてゆく。築山こえて垣根めぐりて、八百屋魚屋こそ遠かりけれ、箱のふたに椿の花のあかき白き二花入れつ。これやがてあつものにも、なますにもなるなりけり。薺の花も草かたばみの葉もつみて、飯には何をせむと見やる井戸端に、女の米しらけてゐるに、ふきの葉に少し入れさせて、貝殼に水もすくひぬ。吸物にて茶にもなるべきなり。かたへの桃の花も一枝折らせて、急ぎ歸りつ。まちかねつやなど友の人形いだきていふをきゝながら、小さきまな板いだしつ。庖刀も揃ひたり。小さき皿に椀にもりわけて、小さき膳に載せつ。松の葉を箸に揃へて、人形の前にすゝめて、二人して暫し見まもりたる

に、障子あけて母君笑ひ給ふ。あまり親めいて物いひしをきゝ給ひしなりけりと、少し恥かしうなりて、膳の上のもの箱にあけて、器あらひて來むとてかけ出でし門の外に、我を呼ぶ友の聲す。答聲高く入りたまへといへば、入り來て、摘草に行かむといふ。まゝごとよりおもしろからむと、箱とりかたづけて母君のみゆるしうけ、裏の門をいでぬ。道二つ三つ折れまがりて、とざしたる學校の門の前をとほりて、流れはやき小川にそひてゆく。右かなめ垣遠くつゞき、李さきたる板屋根の家、桃さかりなる瓦屋根の家、入れまぜにたちたり。片かたは水を隔てゝ麥畑菜畑、みとりと黃色とさま〳〵の形にかぎられて色を分ちたり。其彼方は馬車ゆく道、その彼方は春の田遠くつゞき、其彼方は何ならむ、只一色に霞みたり。ゆき〳〵て土橋ある處にゆききぬ。渡らむとする水上に、櫻の大木二本今まさかりなるかげのひくき門より、同じ級の友一人いでゝ來つ。これも打むれて橋を渡るに、菜の花の花の中道、遠き村に通ふべくよき道あり。くる道にも菫など少しつゝ群れて咲きゐしかど、こゝは畑の間の少の草ある所には、只紫に見ゆるやうに咲きつゞき、道をへだてし田の畦道には、れんげの花の赤き莚しきつめられて、其ひま〳〵をたんぼゝの黃なる花こそ色どりたりけれ。何ならむ、大きなる木のかげ少し芝原にして、こゝは土筆のおほ所、つばなもまじれり。花をつみつ、鬼ごとをしつ。遊びつかれし頃は日も傾きぬ。すまひに勝ちし菫は束にされて、まけてちぎれし花は芝の花のやにうちこぼれたるを、心なくふみしだきつゝ土橋までくれば、此處にて一人に別るべきなり。其友の、土筆を父の好みませばと、人より多くつみて持ちゆくを、まことの料にこそあれ、たうべらるゝものかと驚けば、いと甘しといふ。一人の父君の好むとならば、いたづらに捨てんより、これも持ちゆき給へと心して揃へたるをやれば、我も〳〵と其友の袂に入れて、あふるゝまでになりぬ。嬉しがりて禮いひて歸りゆく。かの門のにやあらん。其水上のにやあらん。櫻の花の白うちりて流るゝかに

そひて我も歸る。我家の門に二人とまた別れて、見おくれば春の夕風さむう吹きてうす暗くなりたる道を、一度ふりむきて二人手をとりて走りゆきたる、少しさびしかりき。友の名も一人〳〵に覺えたり。今もさだかに目に見え心に浮ぶ。其日の事にやありけむ。奇しくも殘りし日記こそをかしかりけれ。其夜のさまは夢のやうにだに覺えねど、よみたる書は小學讀本などにやありけむ。

山みち

旅にして秋にして、山道の暮こそ悲しけれ。車三つはかりにて、日ねもす走りたる十里の旅、なほ山一つ越ゆべくして暮れそめつ。畑より歸りたる人の酒のむしろ、家の業しはてたる宿の夕げに、樂しき笑聲みちたる村をあとにして夕日消えたる山かげに入るはいと心細し。ゆくてやう〳〵山高う木立暗うして、吹く風もよそよりことに身にしみとほる心地す。まして道をれまがりて、道つれの車、ゆけと〳〵見えぬ、いかになりゆくらむ、あはれ守らせ給へと念すれど、道はたの石のみ佛たゝ冷やかに立ませる影も寒し。秋ならずや。木ゝの梢えにあかうてあらなんと思へど黃に染めたるさへまた少なきに、薄墨さしたらむ如き夕への色のかゝりたるのみ。さらば、わが山ゆりよ、撫子よ、目さふるはかり咲きたれと思ひつゝ見つゝゆけば、是は心ときにやあらむ、さらずば昔の秋の悲しかりしを、語り合せてや咲きし。いづれもいと疾う盛すぎて今は魄なきやうにうらふれたてるもはかなし。女郎花はた、靑かちの色して、半朽ちたる御社のうしろなどに、一もと二本便なげに咲きたる、かなし。桔梗のむらさき、人はいざ殊に寂しき色なりと思ふが、まれ〳〵に心細げにぞ咲きたる。中にもさむけなるはわれもかうの花、やせたる莖にさゝへられて葉はありとばかりなるに、秋風におのゝきつゝ衣ほしと思ふらむ。我も寒うなりて袖かきあはせつ。山はいよ〳〵せまりぬ、いつか杉のむら立に入て、暗き道のつゝきたるに、車ふと止めたる、わらんじの緒をゆひなほすなるべし。うつふきて居たるほど、今まで心つかざりし谷川の音きこへきたりぬ。

學藝

日本名蹟雜話（口繪參照）

文學士　喜田貞吉

山城のつゞき

京都市中の名所をはじめとして、其近郷の古蹟もすでにほゞ巡り終えて、我等はこゝに京都鐵道を逆戻りし今や再び市南の京都條○七停車場に到着せり、之より更に奈良鐵道の便を藉りて、伏見宇治等、すべて南部山城の地を一周せんとす、

◉奈良鐵道　といふは、京都より出でゝ南の方大和の奈良に通じ、更に南して大和の櫻井といふ所まで達して居る線路にして、其沿路附近には歷史上の遺蹟甚多し、此線路の、京都條○七より發して、はじめての驛は即ち

◉伏見　なり、こは古へは呉竹の伏見の里など、歌にもある所にて、今日の如き繁花の地にてはなく、いと靜かなる片田舍なりしものなり、されば古歌にも、

伏見山、松の蔭より見渡せば、
　明くる田の面に秋風ぞ吹く、　俊成

おみなへし花の下紐打ちとけて、
　誰ぞ伏見の野邊にさくらん、　道經

など、詠めり、然るに三百年前豐臣秀吉こゝに城を築き、南方なる巨椋の池、宇治川などに大土工を起こし、難波より淀川を逆る船をして、直ちに此所まで航する樣に成りたれば、之より京都大阪の交通上最も必要なる地となり、遂に今日の如き繁花を見る事となりしなり、今日にては久口も二萬に近く、市街は殆ど京都と連絡し、酒造の業盛にして、將來ます〳〵發達の見込ある地となれり、

伏見の盛大となると反對に、次第に衰微したるは

◉淀　なり、其地は古へ與渡の津とて、難波より淀川を漕ぎ上る船の終つる津にして、頗る必要なる地なり

しも、船の更に其東なる伏見まで通ずる樣になりては、爲に其必要を失ひて、次第に衰へ、而も維新前までは、尙稻葉氏十萬石の城下として、相當の繁榮を維持するを得しも、維新廢城の後には殆んど全く其舊觀を失ふに至れり、

こゝに淀と云ふは、土地低くして、山城の四境より出づる諸川いづれも此所に落ちあひ、其水淀むが故の名なり、古歌に

朝まだき、淀の渡りのわたし守、　　慈鎭
　霞のそこに船呼ばふなり

船落とす淀の川瀨の朝霧に、　　爲家
　たえ〳〵見ゆる岸の徒歩人、

などあるもの、よく河畔の有樣を示す

◉淀より淀川を西南に下る事小許、河北に
◉山崎あり、河南に
◉男山あり、山崎と男山と兩々相對して山城平野の咽喉を扼するなり、

山崎は天王山の山の崎にして、古へは河陽とも呼べり、山には南を陽と云ひ、河には北を陽といふ事、古來のならはしなれば、此地も河北にあるにてかく呼びしものなり、朝野郡載といふ書に此地の事を書きたる文あり、曰く、

與杼の津〇即淀より巨川に浮びて西行する事一日、之を河陽といふ、山陽、南海、西海の三道に往返するもの、此道によらざるはなし、云云

以て其必要の地なりしを知るべし、土佐日記に、紀の貫之が京なる家に歸るにも、此地より上陸せしものゝよし見ゆ、其文に

十一日、雨いさゝか降りてやみぬ、かくてさし上るに東の方に山の横居れるを見て、人に問へば八幡の宮といふ、之を聞きて人々拜み奉る、山崎の橋見ゆ、嬉しき事限りなし、云云、

十六日、今日の夕つかた、京へ上る序に見れば、山崎の店なる小櫃の繪も、まがり〇水を呑む器なりの法螺の形も變らざりけり、賣る人の心をぞ知らぬとぞ云ふなる、……

などあり、こゝに八幡の宮といふは、男山の八幡宮の事にて、今も昔のまゝに川を隔てゝ鎮座す、所謂石清水の八幡なり、又此文にて、千年のむかしこゝに已に物賣る店などありて、便利の地なりしをも知らるゝなり、むかしは此地に

◉河陽の離宮 ありき、今山崎停車場の傍に離宮八幡宮とてあるもの之なりとか、

更に東の方伏見に戻りて町の東なる

◉桃山 に上る、桃山は即ち豊臣秀吉築城の地にて、當時伏見城と云ひ、天下を平定し、朝鮮支那迄をも席捲するの勢を以て築きしものなれば、城廓の堅固なりしは云ふ迄もなく、其装飾また華美を極めしが、大阪落城して豊臣氏滅亡したる後は、さしもの名城も遂に廢滅に歸して、今は僅に其建築物の一部分を京都西本願寺の飛雲閣、東山なる豊國神社の唐門等に殘して、豊太閤榮花の跡を止むるあるのみ、

伏見城廢して其あとは桃林となる、之れ桃山の名ある所以なり、今は梅樹多く、探梅の勝地となる、梅林の間、尙當時の城郭のあとをたどるべく、巨石の各地に散在せるを見る、また少しとせず、

桃山の東南に

◉木幡山 あり、むかし應神天皇近江の國に幸し給はんとて、木幡村に來り給ひし時に、美しき乙女に道に遇へり、天皇遂に之を納れて妃となし給ふ、之れ即ち菟道稚郎子の生母なる、宮主矢河枝媛なり、菟道は木幡の南方にして、地相連れり、皇子が宇治に成長し給ひしもの、實に其生母の家にありしによるものなるを知る、凡そ古への婚嫁は、今日の如く、婦其夫の家に嫁入りするにあらずして、婿より其妻の宅へ通ひし事、普通なりしが如し、而して其間に生れし子は、また母の家にて成長する事、また普通にして、實に應神天皇と、其妃及び皇子の御住居の地、其好例を示せるものと云ふべし、されば古への習慣たる、もとより一夫多妻にして、男子は其力次第にて、各地に妻を持ち、各地に其子を有す、其子互に父を同うすと雖も、其母を異にする時は同母兄弟の如く親しからざるが故に、異

母兄弟の間には、常に婚嫁の關係も成り立ちて、少しも怪しとせざりしなり、稚郎子の異母兄仁德天皇が、稚郎子の同母妹、即ち天皇の爲には異母妹なる、八田の皇女を妃とし給ひしが如きは其例なり、斯の如きの關係は決して古代に珍らしからず、而も後世と大に其趣を異にして、今日より見れば却て耳新らしき事に屬するが故に、本題なる名蹟とはさまで關係なきも、筆の序にかくは書き添えつ

木幡山は藤原氏墳墓の地なり、藤原基經此地を其一族の墓地と定めてより、代々の氏人は勿論、藤原氏より出でし皇后、中宮、及び其御腹より出でし皇子達の御陵墓も往々此地にありて存す、今奈良鐵道の木幡停車場より、東方の山に上れば、山上に圓丘形を成せる古墳の無數に相並べるものあるを見る、之れ實に前記の藤原氏代々の人々の墳墓なり、然るに王室一時衰へ、藤原氏亦從つて其力を失ひ、天下亂れに亂れたる際にありては、恐れ多くも天皇の山陵すら、其所を失いて或は田圃と化し、或は藪林と成り、狐狸の巢窟と成りしものすらありし程なれば、此藤原氏の墳墓も大に荒廢し、遂に全く何れを何れとも識別する事能はざるに至れり、然るに其識別すべからざる多數の墳墓の中には、皇后、中宮、或は諸皇子の御陵墓も混在するものなるが故に、今は此木幡山なる古墳の全部を擧げて木幡陵とし、山麓に遙拜所を設けて、嚴に之を保護し、猥りに庶民の入るを許さゝる事と成せり、

木幡の南方は即ち

◉菟道にして、茶の名產地なり、此地に禪宗の一派なる黃檗宗の本山萬福寺あり、此宗は寬文三年に、支那明朝の僧隱元禪師の渡來して開創せし所にして、伽藍すべて支那風を擬し、境內廣濶壯麗地方に比なし、菟道の東に喜撰ヶ嶽あり、もと宇治山と稱す、喜撰法師こゝに庵を結びて歌あり、

我か庵は都の巽しかぞ住む　世をうち山と人は云ふなり

菟道より宇治川を夾んで

◉宇治町あり、宇治橋を以て之に通ず

◉宇治橋は大化年間に僧道照の始めて架する所、碑あり久しく埋沒して世に忘れられたりしを、寛政三年に土中より其斷片を發掘し、後其不足を補ひて、今は其全形を見るを得るに至れり、但、此碑には、橋の架橋者の名を僧道登となす、玆に於て道昭と道登とに就いて古來種々の說あり、今詳說せず、

橋より少し下流、右岸の方○菟道に

◉稚郎子の墓あり路傍を去る一町餘、もと岡山と稱せしものを以て先年御墓と考定せしものゝよし、日本紀に菟道山の上に葬るとあると符合せぬは如何ぞや、

◉宇治川は上流を勢多川と成す、近江琵琶湖の末を受け、山間を過ぎて、宇治に出づ、其山間を過ぐるの間、奔湍岩に激して、米かし、鹿跳等の絶景を成す、河畔に沿うと上るもの、行く〳〵山水の奇を賞すべし、

◉宇治の地、南方より京都に入るの要衝にあたり、近江の勢多と關聯して、古來東西の決戰場たり、其中にも佐々木梶原兩士が先陣をこゝに爭ひし時の如き、最も有名なりとす、此地螢を以て名あり、慈鎭の歌に

夜もすがら、我こそは見め飛ぶ螢
　宇治の小川の松の梢を

とあるを見れは、古くより著しかりしを知る、こゝに

◉平等院あり、もと河原の左大臣の別業にして、陽成、宇多、朱雀の三帝こゝに遊獵し給ひ、離宮を建て給ふ、後に藤原賴通こゝにありて宇治左大臣と稱す、遂に別業を以て寺となり、寺に鳳凰堂あり、尾上に雌雄の鳳凰を置けるを以て名とす、建築古雅、而も當時の美術の粹を集む、先年米國市俄古大博覽會に際して此堂の模形を出品し、大に我國の建築美術の特長を海外に發輝せり、

宇治より南、鐵道は木津河畔に出でる

◉玉水驛に至る、所謂井手の玉水にして、橘諸兄の玉の井の山莊のありし地なり、こゝに

◉玉川あり、和歌の名所として、古來其名高し、古歌に

　駒とめて尙水かはん山吹の、
　花の露添ふ井手の玉川、　俊成

この玉川の外に、攝津の三島の玉川、武藏の調布の玉川、近江の野路の玉川、陸奥の野田の玉川、紀伊の高野の玉川を併せて、日本六玉川と稱し、つとに人口に膾炙する所なり

井手より水津川を隔てゝ、西の方多々羅村あり、こゝに、仁德天皇の皇后盤之媛が、天皇の八田皇女を妃とし給ひしを恨みて、身を避け給ひたる

◉筒城宮の舊地あり、後に繼體天皇亦都をこゝに移し給へり、これより北、田邊村字薪といふ所に

◉酬恩庵あり、一休禪師の開基にして、寺に禪師の墓あり、こゝに名物納豆の產あり薪納豆と稱す、雅味あり、

井手より南すれば、やがて

◉木津なり、名古屋より大阪に通ずる關西鐵道は、こゝにて奈良鐵道と交叉し、爲に南部山城に於ける交通上の要地となれり、

木津の東方に

◉鹿背山あり、古への恭仁京中の地にして、泉川其北を流れて東す、泉川とは木津川上流の古稱なり、其東方は即ち

◉瓶原なり、古歌に

　みかのはら分きて流るゝ泉河
　　いつみきとてか戀しかるらん

とあるもの此所にして、もと瓶原離宮あり、聖武天皇の恭仁の大宮の大極殿の遺趾の如きも今尙見るべきものあり、此都一時は頗る榮えて、

　みかの原くにの都は山高み
　　河の瀨清し行きてやは見ん

など、民の之を謳歌せるものも往々古歌に見ゆれるも、聖武天皇ひと度奈良に還幸し給ひてよりは、さしもの帝都も忽ち荒れて

　瓶の原くにの都は荒れにけり
　　大宮人の移り去ぬれば

の嘆あらしむるに至り、其大極殿は國分寺に施入せられて、今僅に、其巨大なる礎石の、其場所を示すあるのみ、

瓶原に至らんには、木津より關西鐵道に移乘して、加茂驛に至るべし、加茂驛より更に東すれば、笠置驛あり、

◉笠置山　あり、驛の南に峙つ、山は後醍醐天皇の賊塵を避け給ひし所、「行宮遺址」の四大字は、巨岩に彫り付けられて、汽車の窓より望見するを得べし、山中巨岩多く、彌勒石、文珠石、虚空藏石、藥師石、胎内くゞり、太鼓石、搖ぎ石、石門等、岩石の奇に富み、大なるは高さ數百尺に達するもの少しとせず、殊に搖ぎ石の如きは、重さ數千鈞の巨岩、平石の上に留まり隻手をもて之を挿すも、暫時にして兀々前後に動き、而も轉ぜず、最も奇となす、太平記に此山の狀を記して、

彼の笠置の城と申すは、山高うして一片の白雲峯を埋み、谷深うして、萬尋の青岩道を遮る、九折なる道を廻りて上る事十八町、岩を切て堀とし、石を疊みて塀とせり、されはたとひ防ぎ戰ふものなくも、たやすく登る事を得難し

とあるもの、多少誇張の言なるも、また以て其狀を盡せりといふべし、

（山城の部終）

太陽の話

女子高等師範教授　岡田美津子

我々は萬物の靈だといひながら、如何すると、愚にもつかぬ事を怒つて見たり、つまらない事を悲しむで見たりして、誠に馬鹿らしく月日を送ることがあります。それは此の天地の中で、人といふものは、どの位の價値のあるものか、又どの位つまらない者であるかといふ事を、忘れるからであります。その時分に、少し目を高くし、思を廣くして、自分の周圍を見まはすと、必らず違つた思ひが浮ぶでせう。

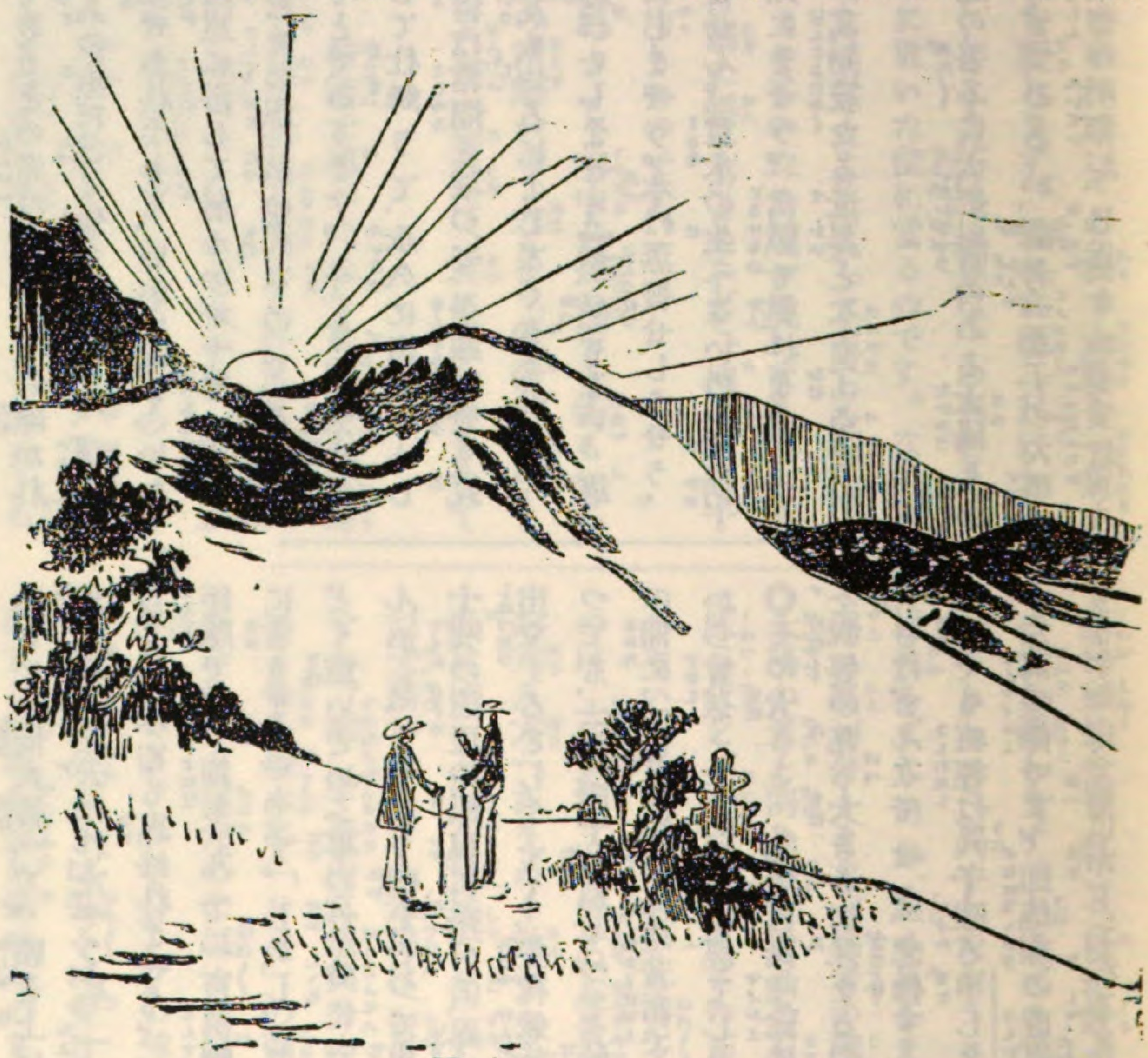
古の詩人は、人の身をはかなんで、長江は萬里窮りなく、山は永久に蒼々たりなど〻云うて、山や川を羨ましがつて居りますが、考へて見れば、永久にかはらぬといふその山だとても、河だとても、地球から見れば、地瘤か水溜位なものですから、地球が一つ破れ〻ば、

それぎりです。そのまた、地球だとても、宇宙に比べたらば、たゞの一小分子たるに過ぎますまい。ところでその宇宙といふものは實に、廣大無邊なもので、人の目の及ぶかぎり見渡した所で、人の考のとゞく極み想像したところで、上下にも、縱横にも、とゞが極限といふ際涯もありません。その中間にポツンとかゝつてゐる日は、何萬年前からあのやうであるのやら、之から何萬年の後まで照らすのやら。夜間に燦々たる無數の星は。各如何な歷史を持ち、又如何な變化をなしつゝあるのやら。空には寂として聲はありませんけれども、之を仰げば、莊高幽遠な思が自から心に浮びます。之を思へば、人間は蠅除玉にブン〳〵騷いでゐる虫にも及ばない心地がして、其の苦しみ、その悲みなんて、何といふつまらない事かと思はれます。

しかし人はかくまで、實際つまらない者なのでせうか。「時」の海の波間にたゞよひ漂うて、やがて無限の底に沈みゆくのが、人の運命でせうか。一方から云へばさうでもあるが、また大きにさうでない事もあります。御覽なさい、宇宙は如何に大きく、如何に廣くても、その大きいのを知り、その廣いのを感じてくれるものがなくては、何の甲斐もありません。而して、それを知るものは、この宇宙の最小微分子の、吾々人間でありますす。實に我々人間のみなのであります。だから、かく思へば、人間もなか〳〵すぐれたもので、人と生れた甲斐はあるのです。その人間が一度智惠を揮ひ腦を絞れば、足も及ばぬ、目も屆かぬ所へでも、思を走せ考を向けて、自然の理、造化の妙を悟り、之を取つて自分の用に供し、又同類の幸福を謀ることか、いくらでも出來るのです。ですから、人は人たるの眞の價値を知つて、徒に小事に齷齪して、無益の事に小さい胸を騷がせず、雄大高壯の考を持たなければならない譯です。

そこで今度は暫らく、地球をはなれて、空中に旅行して見ませう。まづ比較的我々に近くて、しかも吾々が非常の恩惠を受けてゐるものは、太陽でありますから、之について御話いたしませう。

◎赫々たる光明を放つて、朝から夕まで慈愛深く下界を照らしゐるあの太陽。世は移り、物は改つても、變つたとも見えぬあの太陽。夜の寂寞ははや終つて、曙の光が東山にきらめけば、塒の鳥も覺ず、囀の聲を發しますし、落陽が西に沈まうとして、金波が水面に躍れば、心ない野人でも吾知らず歩を止めます。あのいかめしい太陽。此の懷かしい太陽を、誰



か愛せないものがありませうや。誰か敬はないものがありませうや。世の開けない時分には、人の智識が幼くありましたから、何でも人の意で測り知ることの出來ない物は、皆神として崇めたもので、この太陽なども、無論大切な神様として禮拜せられました。これは誠に無理もない事であります。次第に世が進むにつ

れまして、太陽は神であるとの考はやう／＼に除かれましたが、同時に昔の人の未だ嘗て知らなかつた、種々の新らしい事實が發見せられまして、いかに多く、いかに深く、我等がへの恩惠に浴して居るかが一層明になりました。即、太陽は光の源、熱の源なので、その光熱は實に世界活動のもとであります。今、もし太陽がにはかにその姿を隱して仕舞うて、永久に出ないとしたらば、如何でせう。世は常闇となつて、金銀珍寶も見るによしなく、父母朋友も知るによしなくなりせうか。それのみならばまだ忍びもしませう」が、熱もない。堪へがたい寒さを如何にしませう。水は蒸發せしませう。ず、從うて雨もふりません。草木の生へないのを如何かうなつては、人も死にませう。禽獸も斃れませう。地球は凍つた一大塊、萬劫寂たる世界となり了るでありませう。

◎地球よりの距離　此の吾々に大影響のある太陽と、地球との距離はどれほどであるか、御考へなすつた事がありますか。支那東晉の明帝が、日近きか長安近きかといふ問に答へて、頭を上げれば日を見る。未だ長安を見ずと云はれたやうに、一寸頭の上にありますから、さのみとも思はれませんが、實際驚かるゝばかりの距離です。即ち、九千一百萬哩以上（一哩は十四町餘に當ります）です。しかし、この數は申した所で、只ひどく遠いといふ事の外、心にしかとした考は浮びませんから「よくいふ例をとつて申しませう。一時間に三十哩の速度の汽車に乘つて、今、地球から太陽目がけて出立するとしますと、晝夜兼行で瞬時も休まないで行つても、三百四十年かゝつて、始めて到着かれます。その間に、下界では浦島の昔話ではないが、子から孫、孫から曾孫と、十何代か經てしまうてありませう。

◎その大きさ　九千百萬哩餘の遠くにあるものが、日々我等の見る大きさに見えるのですから、その實際の大さはどんなでせう、想像するに餘りがあります。我地球でも直徑は八千哩と申しますが、太陽の直徑は八十六萬哩餘です。即地球の直徑を百七つよせたほどあります。て、前に申した汽車に乘つて、地球を一周する

のに一ヶ月を要するとすれば、その割で太陽を一周するには、十年ばかりを要します。假に直徑二尺ばかりの球をもつて、太陽としますれば、地球は一の豆をその球から一町餘の距離に置いた位に當るのです。なんと太陽は、大きいものではありませんか。太陽の容積は、百二十萬個の地球をよせてかためて一にしたものとまお均しく、その目方は割に輕くありまして、地球を三十萬ほど集めた目方と均しいのです。

九千百萬哩の遠くに居つて、空中を飛行する術も知らなくとも、かく太陽の距離から、大きさ、容積に至るまで、チャンと測定した人間の智識は、實にえらいものではありませんか。

◎その光と熱との量　前段で述べたやうな極大の太陽から、年々歳々出す光と熱との分量は、これまた大したものであります。まづ、光について申しますに、地球上で光度の一番強い光は、石灰光といふものなので、これは酸素と水素と二の瓦斯の燃えてゐる炎の中へ石灰を入れるのです。すると熱度が高くありますから、石灰は熾灼せられて、目が眩んで見ることが出來ない程の光を發します。之ほどの光の強いものを、太陽の光とならべて、黒くしたガラスを通して見ると、石灰光は光るどころか、黒く見えます。之だけでもその光の強い事が分ります。學者の調べたのに由りますと、太陽の光と同じ強さにこの石灰光をするのには、石灰光を、太陽の大きさの百四十六倍にしなければならないさうです。しかし吾々が受けてゐる光といふものは、太陽から出る光の全量ではない。太陽の光線は四方八方へあまねく散ずる事、丁度燈火を室の中央に置けば、その光線は室の四隅に達するのと同樣で、地球が太陽からうける光線は、實にその僅少部分にすぎません。即全量の二億萬分の一にもあたらぬ位なのでする恰も燈火に「ピン」の頭が照らされる位な割でせうそれほど僅だのに吾々は日々それで以て、萬般の仕事をしてゆくのであります。熱についても仝樣で、ごく僅少部分よりは吾々は受けないのであるが太陽から發する熱の全量を他のものと比べて見ると太陽の表面

の三尺四方のひろさから發する熱は、吾々が千五百貫の石炭を一時間に燃して、うる熱の量に勝さつてゐます。だから太陽全躰の熱を、もし地球と同じ大きさの氷塊の上に集めたならば、その氷は二分を待たないで溶けてしまひませうし、そのとけた水を蒸氣にするには、僅に十五分で十分だと申します。光にしても、熱にしても、もしその全量を吾々が受くるのでしたならば、到底堪へられますまいに、まことによくしてあるものです。

◎光と熱の波及　さてこゝに一つの疑が起るでせう。いかに太陽が光熱の源であるとしても、どういふ工合にして、九千百萬哩の道を通つて、光や熱は來るのであらうか。言ひかへれば、光や熱とは何ものであるかといふ事です。これは少しむづかしい事で、昔から學者の中にも説がありまして、光は光素と申すごく／＼細かい測ることも出來ない分子が、太陽の實躰から出て、それが宇宙を旅行して、地球まで來て、そうして吾々の目に觸れると光と感ずるのである。熱は同様に、温素といふものが來るのだと、かういふ人もありました。又ある人は光素なんていふ實物が、飛んで來るのでなく、光も熱も一種の振動である。太陽の微分子が振動すると、その振動がだん／＼に傳はつて、遂に我々に達するのだといふ説を唱へました。その後の説を、波動説と申します。之は例で御話するとよく分るので、例へば水の上に石を投げると波が起ります。その波は、始め石の入つたところに出來て、だん／＼に四方に擴がつてゆきます。その四方に擴がるのは水自身が四方に動いてゆくやうですが、よく見るとさうではなく只その運動が、次／＼の水に傳はるので、水は各、自分の場所で、上り下りしてゐるのみです。稲穂に實のる時分に、風が吹くと、田に稲穂の波が起ります。これで見ても仝様、まづ一つが風の爲に伏すとするとその次の瞬間には、今のが起きて次のが伏し又その次の瞬間には、今伏したのが起きて次のが伏すといふ工合になつてゆきます。即運動だけ傳はつて、いつて實際の稲穂は上下に動くのみです。之等を御考になつたら、太

陽といふ遠い處で運動が起こると、その運動の波だけが、傳はつて來るのだといふ合點が參りませう。それで今はこの波動說が皆學者に信じられてゐるのです。ところで運動が傳はるのには何か傳へるものがなくてはならない。水波は水から水に傳はるが、太陽と地球その間に立つて、太陽の運動を傳へるものは何でせうか。人の話の他人に聞こえるものは、音響といふものが、空氣によつて傳はるからである。光はやはり、空氣が傳へるのでせうか。もし、さうとすると、困る事があります。空氣は地球のまはりを取り卷いては居ますが、僅かに高さが四五十里しかありませんから、その先、太陽までは何も傳へるものがないわけになります、そこで學者はかういふ事を申してゐます。太陽の光も熱も空氣によつて傳はりはしない。エーテルと云ふものによつて傳はるのだと。エーテルとは何であるかと、申しますと、目にも見えず、手にとる事もできぬ至微至細のもので、しかもどこでもあらゆるところに無い事がなく、所謂宇宙に瀰漫してゐるものといふのです。それで太陽の分子が猛烈な勢で、相衝突し運動しますと、その運動がその周圍のエーテルに傳はる。すればエーテルも振動せざるを得ないで、振動をはじめる。その振動がだん／＼に傳はつて、遂に下界まで來ますとこゝにも亦エーテルが充ちてゐますから、それに傳はつて、人の目に入つて光となり、皮膚にふれて熱となるのであるといふ事になつてゐます。

この次には太陽の本體はどんなものであるか、望遠鏡で見た有樣はどんなか、又日蝕とはどんな事かといふやうな事を述べる積りであります

茶の湯手びき（つゞき）

利休流家元　正瓢庵宗月述
坪谷水哉補

濃茶爐平手前

座敷の準備既に整ふて、亭主合圖を爲せば、客は順に入り、飾りつけを見たるのち席に着き、上客より咳して

着席の合圖を爲せば、此時亭主は通ひ口を明け出で、挨拶し、客も之に對して總禮す。次に亭主は先づ建水を持出して通ひ口を締め、建水を持ちて座に着き、建水は勝手の方に置き、身搆ひして貌を正し、精神を靜め、柄杓を左の手にて柄の節の所の中程を取り、右の手に持替へ、蓋置を左の手に取り、右の手へ移し、柄杓は左の手に持ち替へて膝の上に搆へ、蓋置は左の方の前に置き、左りにかまへし柄杓を右に持替へ、之を蓋置の上に載せ、其の柄を引て下に置き、然る後客に對して安座の挨拶を爲す。此時客は總禮し、挿花を賞め、又は什器などを賛む。亭主は之に對し輕く挨拶し、先づ茶碗を左の手に取上げ、右の手にて前に置き、次に茶入を取り、茶碗と膝との間に置き、茶入の袋の緒を解きて其の口を明け、袋の儘に茶入を右に持ち、把り上げて左の掌に上げ、袋を開き、右の手にて茶入を取り出し、之を膝の前に置き、次に袋の形を通し、其の留緒を右へ廻し、袋を建水の向ふへ置き、更に帛紗を行に捌き、左に茶入を把り上げ、蓋をぬくひ、之を右方の前に置き附け、次に帛紗を眞に捌き、茶杓を把り行に拭ひ、(拭ひ方に眞行草の三種あるなり)之を茶入に掛け、次に茶碗を出して茶入と置合せ、帛紗にて水指の蓋の前の方を一文字形に拭ひ、茶巾を其の水指の蓋に載せ、柄杓を取り、帛紗を右に移し替へ、柄杓を搆へ、右の手にて釜の蓋を締め、其の上を帛紗にてゆの字の如くに拭ひ、次に蓋を取り上げ、湯氣を切り、蓋置の上に載せ、帛紗を腰にはさみ、柄杓を右の手へ持替へ、湯を汲み、茶碗へ入れ、其の柄杓は左の手に持替へ、帛紗にて釜の蓋を爲し、柄杓を蓋置へ載るなり。次に茶せんを把り上て茶碗へ入れ、茶筅とうじを爲し、茶筅は元の所へ置き、茶碗を右の手に取上げ、左の掌へ載せ、能く滌ぎ、右の手へ茶巾を把り、茶碗の湯を建水へ明け、茶巾にて廻りを三ふき半に拭き、中をゆの字に拭ひ、若し深き茶碗なれば中より拭ひ斯くて茶碗を右の手にて膝の前に置き、茶巾を取出して疊み直し、之を水指の蓋へ載せる。(棚物の時は臺の上へ載するなり)次に手を清めて後に茶匙を把り、左の手は、茶入を取り上げ、蓋を把り、柄杓の柄に載せ掛け

置き、茶をすくひ出し、茶杓を茶碗に載せ置く。普通に濃茶は一人前凡そ五分程づゝの割合にてすくひ出すなり。斯くして後茶入の口を拭ひ、蓋を爲し、茶筅と置合せ、茶匙を把り上げ、左手を茶碗にあしらい、茶匙にて茶をならし、茶匙にかけたる茶を茶碗の縁にておとし、其の茶匙を茶入の上に載せ置き、柄杓を取り、帛紗を腰より外して釜の蓋を把り、之を蓋へ載せ、湯を汲み、少しく茶碗へ入れ、次に柄杓を釜へ掛け、茶筅を把り、能く湯に合せて、茶筅は其の儘に茶碗の内側の左の方へ寄せて置き、又湯を汲み、左の手を茶筅に持ち添へ、湯を茶筅の穂に向けて能き加減に入る。次に柄杓をかまへかけ、然る後茶を點るなり。

斯くて亭主は茶を點てる茶碗を取り上げ、左の掌に載せ、右の手をあしらひ一膝繰り替へ茶碗の表を客の方へ向け、釜の鐶附を見合はせて出し置き、懐中帛紗を把り出し、茶碗に並べて出す。上客は一と膝繰り出て、先づ帛紗を取り、次に茶碗を把り前へ引き、自分と二客の間なる疊の縁り外へ帛紗を下へ敷き、茶碗は其上に載せて置く、斯くして茶の點加減を見る。一同も之を拜見す。其の拜見終れば上客は次客へ禮を爲して、右の手に帛紗を把り、左の掌へ載せ、茶碗を把り上げ、帛紗の上に載せ、戴きて一口飲む。此時亭主より服加減は如何かと問ひ、客は、至極服加減宜しき由を答へるを法とす。第二客は上客の一と口飲みたる節に次禮して少しく膝を上客の方へ繰り向けて待てば、上客は三口半喫み、其の飲口を右の食指にて左の拇指にて、右へ、また中指を左へ總べて三遍拭ふて其手を懐紙にて拭ひ、茶碗の表を前へ廻し、少しく膝を第二客の方へ繰り向け、茶碗を手より手へ渡して禮を爲す。此時第二客は其の茶碗を受けて戴くなり。次に茶碗の請取渡しは末座まで皆な同樣なり。若し此の時婦人の相客あれば、會席順序の如く、茶碗、帛紗とも其間に並べて送り、禮を爲すなり。

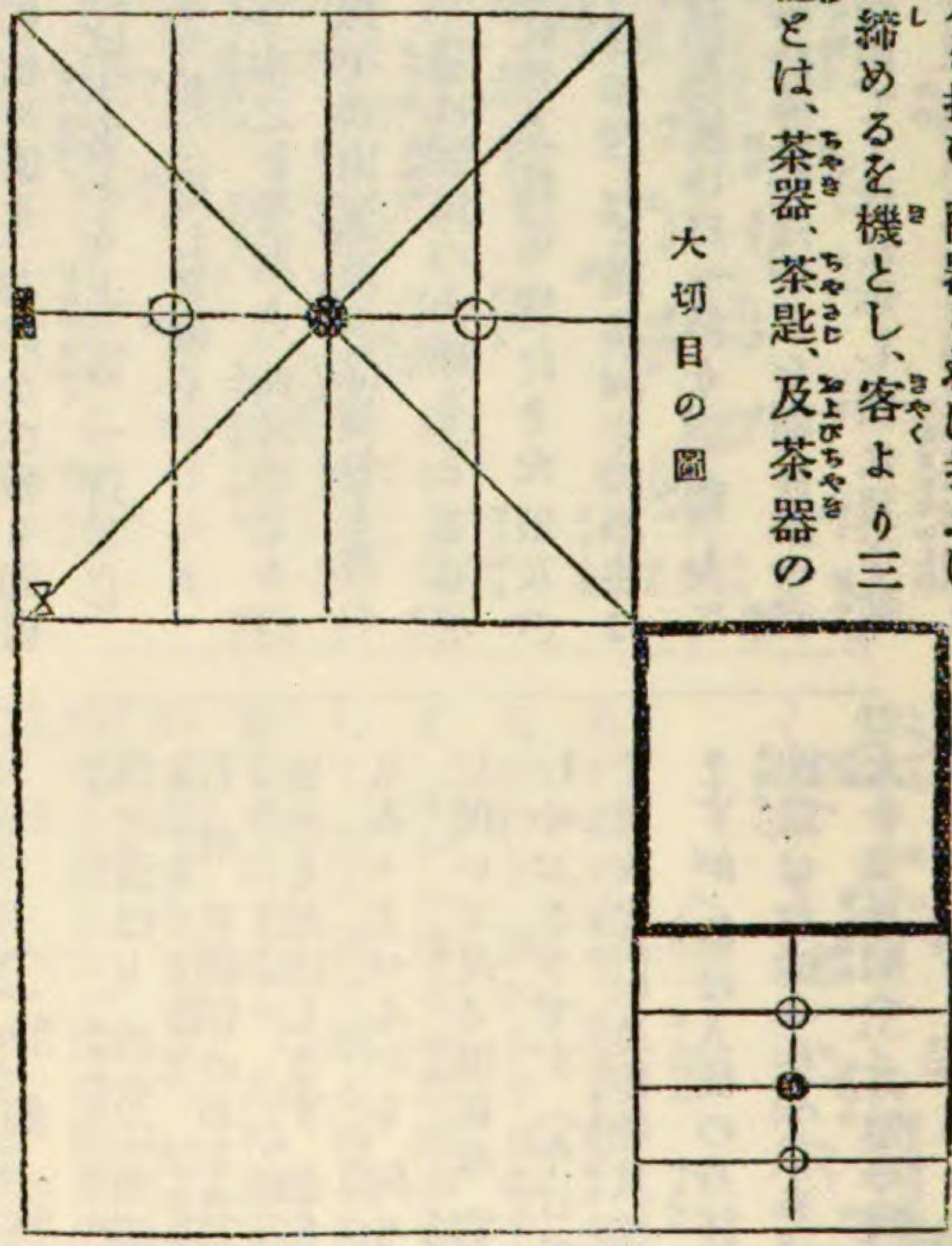
亭主は客に對して服加減の挨拶濟めば、茶碗の二客三客に廻る間に、直ちに柄杓を右に把り、之を左へ移し、服紗にて中仕舞の蓋を閉ち、帛紗を腰へ着け、柄杓を建

水の上に載せて少しく下げ、蓋置を建水の跡に置き、茶碗の末座まで廻りたるを持ち、姿勢を正し、蓋置を出し、建水を進め、柄杓を左に持ち、帛紗にて釜の蓋を取り、蓋置へ載せ、柄杓を右の手に移し、釜へ掛け、茶巾を釜の蓋の上に直し、水指の蓋を把り、茶碗の戻るを待つ。

此時茶碗は末席まで廻り、茶を喫みきりたるときは茶碗を上客に還す。上客はまた茶碗を把り上げ、香を嗅ぎ、順に末客まで廻せば、一同同じく香を嗅ぎ、終りて末客より之を上客に戻す。上客は其の茶碗を二客との間に置き、次禮して之を我が前に取り寄せ、茶碗の形及び表裏とも熟覧し、了りてまた元の如く二客その間に直し、次に帛紗を覗て同く二客以下へ順に廻すなり。二客以下はまた次禮し上客の如くす。此間に上客は茶師の氏名と茶の銘を問ひ、又は茶の佳良なること、碾き方の精密なることを賞し、茶碗の由緒を尋ねなどすべし。末客見終りて後上客へ返し、上客は例の如く少しく坐を進め、末客と斜に相對して、之を受け、向を直して舊の位地に返すべし。

茶碗返りたらば、亭主は帛紗を懐中し、茶碗を常の如く把り上げ、香を嗅ぎ、呑口を右へ廻して前に置く。此時客より總禮すべし。亭主は之を受けて、次に湯を汲み、茶碗へ入れ、右の手にとりあげ、左の掌へ載せて能く滌ぎ、建水へ流し、前に置き、薄茶は追て差上ぐべき旨を告ぐ。客また總禮にて之を受く。それより亭主は水を汲み、茶碗へ入れ、常の如く茶筅を把りて滌ぎ、舊の所へ置き合せ、茶碗を右に把り、左の掌へ右に茶巾を持ち、建水へ流し、茶巾を茶碗に納めて前に置き、茶筅も茶碗に入れ、帛紗を眞に捌き、茶匙を把りて拭ひ、帛紗に茶の着きたるを建水の上にて拂ひ、又茶匙を帛紗にて拭ひ、茶碗へ載せ、帛紗を腰に挾み、右に茶碗を取りあげ、左にて疊の大切り目を割りて置き、柄杓を眞に持ち、水を釜へさす、此の水のさし方は、一度か三度か又は五度と、奇數に注ぐを法とす。斯くして湯返しして湯を切り、柄杓を陰に廻して左に移し、手にて釜の蓋を締め、柄杓を蓋置へ引き、次に水指の蓋を締めるなり。此

に云ふ柄杓を陰に廻はすとは、爐の場合にて、風爐の時には陽に廻はすなり。陰と陽との前扱へ方は、實際に臨みて手づから學ぶの外無るべし。また水指の葢を締めるにも、塗葢なれば下の方を拭ひ、陶器なれば拭ふに及ばず。斯くて水指の葢を締めるを機とし、客より三種の拜見を乞ふなり。三種とは、茶器、茶匙、及茶器の袋を云ふなり。亭主は之に應じ、柄杓を建水の上に載せ、些しく引下げ、葢置を右に把り、左の手にて柄杓の柄の下へ置き、茶入を右の手にて身の前へ置き、左の手にて茶碗を大切目へ、直し帛紗を行に捌き、茶入の葢を把り、中を改め、葢を締め、帛紗にて葢を拭き、廻して肩を拭き、帛紗を懐中にし、一と膝座を繰り、右の手にて釜の右に鐶附の通りへ三ッ一に割り左の一チへ茶入を出し、更に膝を元へ直し、茶杓を把り、草に拭きて中央へ出し、帛紗を腰に挾み、左りの手に袋を把り、右の手にて茶匙の次へ並へ置き、膝を元へ繰り、柄杓を左の手に



大切目の圖

爐　入切目

把り右へ移し替へ、葢置を左に把り、右の手を柄杓の柄の下へ持ち、建水を左に持ち、勝手口へ至り、建水を下に置き、葢置きも下に置き、柄杓を建水へ載せ、勝手口を明けて出て、次に茶碗を引き、次に水指を引き、通ひ口にて三種の客より返り來るを待つ。

上客は亭主が建水を引きし時に、三種を引き把り、次禮して後、まづ茶入等を疊緣の外へ置き、懐中より帛紗を取出し、身の前に置き、茶入を帛紗の上に載せ、篤と形を見、右に持ちて左の掌に載せ、右の手にて葢を把

り、帛紗の上に載せ、懐紙を出し、茶入の口へ充て、底を一覽して後蓋を爲し、次客へ廻はす。此時もまた疊のへり外へ出すなり。次客以下の見ようは皆な上客に倣ひ、順に廻はして末座に留め置き、茶匙及び袋も同樣に巡覽し、一同拜見終れば末客より上客へ持參し、上客之を受取り元の坐へ折り返しに置く。

三種を客より返すとき、亭主之を受取り、此時客より總禮し、上客は先づ茶入以下の由來、及び品質等を尋ね、其次に茶匙も同樣に尋ね、袋は裂地の由緒などをも尋ぬるなり。亭主は一々之に答ふれば、客はまた箱及び添書などあらば之をも拜見したしと請ふべく、亭主は之に應じ、直ちに三種を持ち、通ひ口へ戻り、一禮して通ひ口を締め、道具を仕舞ひて後、通ひ口を明け、一禮して、箱幷に書類あらば持出て丶客に示し、次に菓子盆、烟艸盆を持出し、客と丶もに樂しむべし。此時亭主より、喫烟ありたしと挨拶あらば、總禮すべし。暫らくして薄茶を進むるなり。薄茶手前の事は尙ほ一回次號に說くべし。　（つゞく）

日用化學叢話

農科大學　K　M　生

（一）銅

銅と云はゞ、淑女に如何に感ぜらるゝか知れんが、我々百姓に關係のある者は、直ちに足尾銅山等の鑛毒被害地を想出します、但し私は未だ見た事も、調べた事もありませんから、何も申しませんけれど、調査した人に聞いて見る時には、實に慘憺たる光景で、誰しも涙にむせぶさうです（今日の事は如何であるか、そは述べません）此は農作物及び其他に對しての、銅の害でありますが、銅は人間の身躰にも毒です、故に食物の上にも注意せねばならんです。

大きな豆類や、其他の野菜物などの青漬には、能く銅が含まれて居る者です。之は天然の蒼々した色を、常に保つて失はぬ樣にする爲めでありますが、斯樣な者を多量に食すれば、誠に危險です。

さて、青漬などの中に、銅が有るかないかを驗べるに

は、青漬の汁を、清潔なコップに搾り込んで、其中へ少し計り酢を入れ、次に能く磨き立てたる針をば、其のコップの中に入れて、そして一晝夜も其儘にして置くのです。若し銅を含んで居れば、其針に銅が附いて、赤褐色になるから判ります。

此の試驗に限らず、液の中に銅が有るかないかを見るには、何か酸を入れて(酢は醋酸です)、其内へ磨いた鐵を入れて試すのです。但し初めに酢や其他の酸の中に、銅が若しあれば夫れは用ゐられません。

只今青漬の汁中に、銅を含むと云ひましたが、些か異樣に思はるゝかも知れません、が然し、銅は種々の藥品に容易く溶ける者で、倘鐵でも銀でも溶け、金白金の樣な者さへ、鹽酸と硝酸で造つた王水には、容易に溶けるものですから、銅が溶ける位の事は、別にをかしくは有りません。

殊に銅は、酢にさへ溶けるのです。即ち酢には醋酸と云ふ酸があるからですが、(酢の酸ばいのは此の醋酸の爲めです)、倘玆に溶けて出來た者は、醋酸銅と云ふ者で、繪具の方では綠靑といひ、餘程毒性の有る者です、だから料理する時に、若し銅の鍋を用ゐ、倘酢を加へて煮る時には、多少酢の爲めに銅が溶かされて、醋酸銅が出來るから、爲めに危害を招く事があります、倘又味噌や醬油で煮付けたり、又牛乳を煮たりする時にも、成るべく注意して銅の鍋は用ゐぬ方が宜しいです。

(二) 酢

序に酢の話をしますが、酢には色々上下種類が澤山あるけれど、酒からするのと、木から製るのとの二樣です、木から造るのは或木の碎片を、釜に入れて下から熱して、其の出て來る氣を冷やして、玆に出來た液體から酢を造出すので、此は林業者の業ですが、日本では皆酒から造る斗りです。即ち簡單に說明すれば、酒を高き所から落して、此の滴を何遍も鉋屑の中へ通すのです、之は要するに、酒をば充分に空氣に觸れさせる爲めです。

元來空氣中には、バクテリヤの樣な眼に見えぬ微生物が、澤山に居つて、其内でアルコールを醋酸に變化する

奴が、其酒に觸れて、酒中のアルコールを醋酸に變化するから、酢が出來るので。鉋屑などを用ゐるのは、全く空氣に觸れ易い樣にする爲めです。だから折々臺所の酒が幾時の間にか酢になつて、酸ばくなるのも、決して無理はない譯です。

故に酢を造る人に取つては、酒を酢にする奴がなくては困るし、酒屋に取つては、左樣な者が有つては困るのです、然も此等の者は皆顯微鏡でなくては見えないのですから、誠に興味があります。

尚次號には、物の腐敗作用をお話しますが、バクテリヤの樣な微生物は、水の中にも、土にも空中にも、何處にでも居るのです。然し、繁殖の成し易き處でなくては、活きて居られぬのは勿論の事で、即ちペストや、コレラや、チブスの樣な黴菌が、何處にでも居ると云ふ譯ではなくて、ペストは鼠の躰内とか、チブスは不潔の水中とかに、殊に多く居るのです。だから衞生の事を八釜敷く云ふのは、人間に害ある者を寄せ付けぬ爲であるし、又酒や酢や味噌などを造るには、効能ある黴菌を撰んで盛に繁殖させるのです、勿論日本などでは譯も判らずに、自然に任せてやるから、資本を放棄する事が、屢々製造家に多いのです、そは兎も角、黴菌には惡むべき奴と、愛すべき者とがあるので、一概に黴菌と云へば、傳染病を聯想して、一も二もなく縮み上る程の事はないのです、現に麴の華の如きは、愛すべき者の一例です。

（三）ラムネ

夏になる時には、氷や水や、ラムネなどを盛に飲みますが、此も隨分危險が多いです、第一氷を嚙むのは餘り能くない爾です、西洋人はアイスクリームを舌の上へ溶してから、初めて喉を通す樣な調子で決して、氷は食べないさうです。次に夏の生水、（大分衞生學に近くなりましたが）、勿論危險です、有害なるバクテリヤが居易い、殊に時候が暑いから繁殖し易い、だからコレラ等の傳染病は多く夏季に流行するのです、故に必ず沸騰した湯を飲む樣にしたい者です、

次にラムネに就ても、隨分危險が多い者で、殊に古い者

などは不可いから、注意せられよ。

偖て、ラム子の製法を簡單に述べますが主要なる點は、水の中へ炭酸瓦斯を多量に含ませるに過ぎないもので、即ち普通には石灰石、大理石の樣な、炭酸石灰を粉末にして、其内へ强い酸を加へるのです(鹽酸や硫酸の樣な)然る時は、炭酸石灰なる化合物が分解して、炭酸瓦斯が出て來ますから、此瓦斯を充分に水中へ通して、夫れを瓶に詰むるのです、即ちラム子の口を開く時に、盛に泡立つのは、之れ炭酸瓦斯の出る勢でなるのですから、盛に泡立つ奴が宜しいのです、(ビールの泡も炭酸瓦斯です、)尚成るべくは蒸溜水を用ゐたラム子を飲む方が勿論宜しい。さて瓶の外から驗査するには、別に良き法もないけれど、先づ瓶を直立にしたり逆にしたりして見て、若し澤山に浮遊物がある樣な者ならば、決して飲ぬ方が宜しい、斯樣な者は下等な水か古い水を用ゐた證據です。

即席にラム子を造るには、重炭酸曹達(俗に重曹と云ひ食過の時などに苦味丁幾と混じて服む者なり)を水に溶し、之に砂糖を混じ、次に酒石酸又はクエン酸を適量に投ずるのです、然る時は盛に泡立ちて、一寸ラム子が出來ます、(餘り酸ばい時は重曹を加ふべし)。

市中に懷中ラム子などゝ云ふ者がありますが、あれは角砂糖の中へ、斯樣な二ツの藥品を別々に離して入れて置くのです、故に之を水中に投ずれば、二ツの藥品は水中にて化合して、炭酸瓦斯が出來て、ラム子になるのです。

又中には、角砂糖へ苦味丁幾と薄鹽酸とを塗り付けて、懷中ラム子どなゝ云ふのもありますが、此等はラム子とは云へません。

(四)　アイスクリーム、

ラム子の序に、アイスクリームを話しませう、アイスクリームは、牛乳と雞卵を氷らせた者で、冷くもあり、味くもあり又滋養もある。夏向は上等の氷菓子です、偖て之を造るには只の氷位では迚も不可いです。

即ち牛乳と雞卵と砂糖とを能く混ぜて、ブリキの樣な器に入れ、尚其中へ少量のレモンを加へて、此器を外か

ら冷すのですが、夫れには氷と鹽とを混ぜて用ゐる計りです。何も鹽を混ぜたからと云つて、氷よりも冷くなる筈はない様ですが、實際不思議に冷くなる者て、實に氷點以下三十二度にも至るのです。

元來寒暖計には三種類ありますが、躰温三十七度などヽ云つたり、又沸騰點百度などヽ云ふのは、攝氏寒暖計の事です、又今日は百度位の暑さでせうかなどヽ云ふのは、華氏寒暖計の度で、普通柱に掛けて有る寒暖計です、そして此の華氏寒暖計は、外の二つよりも澤山に度盛がしてあるので、攝氏では氷點が零度であるけれど、此れては三十二度に成つて居ます、然らば何故に氷點を零度としないのでせう、之は氷と鹽とを混ぜれば、氷よりも非常に冷たくなつて、昔は此よりも冷い者は外になかつたから、其を零度としたのだ爾です、だから氷點も從て高くなつて、卅三度などを指すのです。（然し今日では最つと冷い者がいくらもあります）。

（五）　植物の生長

今蒸溜水を以て、フランチル又は濾紙を潤して、其の上に、麥又は菜種の如き種子を播く時には、數日の後には芽を發し、遂には莖葉及び根をも生じて來ますが、之れは何に依て生長するのでせう、勿論種子の中の營養物に依るには違ひないが、重量が增したり、容積が大きくなつたりするのは、少しく不思議です、即ち水分と空氣と日光の外には何もないのに、而も盛に生長するのです。人間や動物は如何ですか、迚も此の三つでは生長しません。否、忽ち衰弱してしまいます、然らば如何なる營養物を何から取るでせうか？

說明する前に、一の試驗をしませう。コップへ井水を一盃に注いで、其中へ新しい青葉を二三枚入れて、其のコツフを逆にした儘、水の中に入れて、日光に晒して見ませう。勿論コップの底には、少しも泡の無い樣にして置くのです、然る時には暫くして、葉の面に小さな泡が澤山につき、夫れがコップの底の方に昇つて來ます、偖て之は何の爲めかと云ふに、井水の中には酸素や窒素もありますが、炭酸瓦斯も溶けて居るので、之の炭酸が、植物の葉の作用に依て分解して、酸素と炭素とに分

れて其酸素が泡になつて底の方に昇のてす。そして分れて出來た炭素は、植物に吸はれて此が滋養物になるのです。即ち青い葉の中には、葉綠粒と云ふ者が有つて此が日光の助を借りて、空中の炭酸瓦斯を分解し、其炭素が澱粉とか纖維とか種々の物質になるのです、そして其際離れた酸素は空中へ飛散するのです。此を植物學では同化作用と稱しますが、最一度言ひ換へれば、葉綠粒を持つて居る植物(通常青々した草木の葉などには皆有ります)は、日光の助によつて簡單なる炭酸瓦斯から、復雜なる有機物を作ッて、之を植物躰の各所へ送るのです。勿論空氣中の炭酸瓦斯は、僅に千分の四位しかないのですが、植物の同化作用は、實に勢のよい者で、炭酸瓦斯を吸收する力が激しいから、之で充分なのです。但し炭酸瓦斯ばかりでは生長は續け惡い、そこで根からは炭酸以外の無機物を吸收して、即ち根からと葉からと兩方の要分で以て、生長するのです。然し茲に述べる試驗の樣な折には、根からは水しか吸はない、だから大きくなッたり、重量が增したりするのは、全く炭酸瓦斯に依るのです。

一寸注意して置くのは、植物も動物の如くに呼吸して(葉から)酸素を吸ッて炭酸瓦斯を吐くのです、と云へば同化作用とは全く反對の樣ですが、實際兩方の作用を常にやッて居るので、只だ晝間は太陽の光線に依て、同化作用の方が呼吸作用よりも非常に勝ッて居ますから、晝は盛に酸素を出すけれども、夜は同化作用が出來ぬから、只だ呼吸作用斗りです、即ち夜中は植物も動物の如くに、酸素を吸ッて炭酸瓦斯を出して居るのです。

(六) 食物の要素

人間は食物を動物界及び植 物界より取ッて、身躰の消耗せる物質を補はねばならんですが、今其の營養物の要素を化學上で分てば、水、蛋白質、脂肪、炭水化物、灰分等であつて、蛋白質は窒素の結付いた有機物、例へば卵の樣な者、又脂肪とは牛馬の脂肪や又油類を云ひ、炭水化物は砂糖、澱粉の類で、以上は燃せば皆燃える者ですが、灰分と云ふ者は燃えぬ者を云ふので、鐵とか燐酸とか石灰の樣な者です、但し何れも總稱であるから、種々雜多の種類は有るのです。特に動物質と植物質とに

依つては要分が異つて居つて、肉類卵等は蛋白質脂肪灰分に富んで居るけれども、植物質の食物は炭水化物が主要で、即ち過半は澱粉の類です。然し人間は右に述べた要素を一も缺く事は出來ないのですが、日本人は主として植物質の食物を用ゐるから蛋白質に乏い、從て多量の食物を用ゐなければ、充分の滋養分は取れない。日本の農夫が大喰ひなのは、實は養分に乏しい植物質を主とするのに依るのです。農夫などは少しも肉類などを口にせぬのに、然も壯健なのは不思議ですが、之は我々の常食とする米や麥や、又豆腐味噌の如き者には、存外多量の蛋白質を含んで居ッて、倘消化が宜しい上に、特に勞働と食物とが調和して居るからです然し成るべくは、蛋白質や脂肪に富んだ者を撰んで食する事が必要だと思ひます、無暗に蛋白質とか滋養物とか囃し立てゝ、多量に用ゆれば、却て反對に體內の蛋白質を消耗する者ですから、成るべく適量に常に用ゐる樣にするのがよいです。

（七）豆腐

豆腐は大豆を煮て摺潰して、袋で搾つて粕を捨てた殘を「ニガリ」で固めた者です、我國では上下を通じて、一般に多く用ゐますが、元來大豆は蛋白質と脂肪に富む事が夥しく、殆んど植物質中で第一等です、殊に能い大豆ならば、半分近くも蛋白質が含まれて居るのです、だから米麥飯の樣な者に、大豆又は大豆にて製りたる物を添えて食べて居れば、充分に健康を保つ事も出來るのです、又脂肪も頗る多量にある者で、北清の方では豆の油を搾取て、此を食用又は燈油にして用ゐ、倘其搾粕は肥料として、日本へ澤山に輸入されますが、要するに、大豆は蛋白質と脂肪とを澤山に含むで居るのです。(だから豆のソップなども大に上等なのです)

偖大豆から製した者には種々の者があつて、即ち味噌醬油、納豆煮豆の樣な者ですが、其內尤も良い者は豆腐です、何となれば豆腐は非常に多分の蛋白質を含むで.殆んど三分の二以上にも及び、倘特に貴ぶべき點は、其多量の蛋白質が甚だ消化し易い事です。何ほど滋養分があるとも、何ほど味い者でも、消化の惡い者ならば何

の効能もなく、只だ胃腸を害する斗りですが、豆腐の蛋白質は、殆んど皆消化されると云つてもよい位です、だから醫士も大抵の病人には豆腐を許します。然し嫌いな人などは、豆腐は豆の腐敗した者だとか、又食べない方が食べるよりもましだなど〻云ひますけれど、決して腐敗した者でもなければ、又決して無功の者ではありません、夏など折々豆腐に中てられる事があるのは、古い者を煮ずに食するから害を被るので、新しければ大丈夫です、否實に豆腐は日本食中の第一等の滋養品です、其上價が非常に安いから、普通の人民の食物に供するのは、誠に能い事です。

（八）　人乳と牛乳

凡て食物は勞働や、體量、氣候によつても其分量は違い成人と小兒とは又大に趣を異にします。だから少壯の者には甚だ良くても、小兒には不可い者が澤山にある。世間の人々は兎角牛乳を貴んで人の乳よりも優る樣に考へますが、成程牛乳は非常に上等ではあるけれど、乳兒に取つては人乳の方が良い、此事は既に第七號の小兒養育訓の劈頭にも書いて有りましたが、其理由は第一乳の成分が大に差違ある事です、即ち牛乳は蛋白質が多過ぎて、糖分等に乏しい、然し人乳は其割合が誠に都合よく出來て居るのです。第二には人の乳なれば、小兒が直ちに乳房から哺ひますから、乳房さへ清潔にして置けば、有害な黴菌は居りません。

何れ次號には牛乳の御話をしますが、元來牛乳でも人乳でも、まだ出た儘の折には黴菌は居ないけれど、牛の乳房は實に不潔であるから、從て牛乳も不潔で黴菌が多い、尚其上に、搾つてから長い時間を經なければ、小兒の口に入らぬ故に、其間には實に無數の黴菌が飛込んで來て繁殖します、從て沸煮て殺菌する必要があるのです、又煮るから牛乳の消化が餘程劣つて來る、斯う云ふ有樣で此の二の點からして、大に牛乳は人乳に劣つて居るのです。

然し母が病氣であるとか、又身躰が弱いとか、又乳が不足する時には、勿論牛乳が第一で、是非牛乳を用ゐなければならんです、但し上述の如くに牛乳は蛋白質が

多過ぎて炭水化物が少いから、沸養した牛乳へ水を加へて、倚糖分を増して薄くするのです。此等の事も精しく養育訓に表になつて居ましたから、略しませう。

月の話

木村小舟

◎私等の世界を夜晝守る、二つの大きな物は何てせうと、こう假に問ねましたなら、誰しも、夫れは日と月だと答へませう。本當に太陽は、毎日々々、雨風に論なく、休暇祭日に休みなく、下界に照臨して、あまねく萬物に、その清き光と、暖かき熱とを、絶えず供給して呉れます。若しこれが、休日だとか、雨降だとかを口實として、一日でも缺勤せられたものなら、實に大變、夫れを思へば、何も暑いの寒いのと、云はれた次第ではないのです、つまり命あつての物種と同じて、太陽あつての物種、して見ればこれは命とかけ變への代物……、さて此の太陽が、晝の間のお務めを終つて、こゝを去りますと、(其實地球)が今度は又新規に。太陰!、即ち月が出て、その優しき光りを以て、夜の世界の守護を致します。彼は煌々として、その光りが強うて、何となく男らしく、是は皎々として、光り弱く、何處ともなく、女性らしい處があります、さればにや、彼をば太陽と云ひ、是をば太陰と申します、今は即ち女性に縁ある、月のおはなしを致しませう。

◎月は如何して出來たものだか、或は地球の子だとも申しますが、夫れは漠然として、雲をつかむ樣な話、なに雲より上にある月だから、とても知ることの出來ない話と致した處で、地球の樣な、しかも夫れよりか、遙かに小さな、一つの世界だとは、慥な説なのです。さらば其月の大きさは、左樣!、さてこれをお話しする前に、太陽と地球との大きさを、ざつと述べておいて、月との較べつこを致して見たら、面白からうと思はれます。太陽は月球を去る、九千三百萬哩の高さにあるのに、地球と月球との差は、やつと二十三萬八千八百哩程で、鐘と提灯、とても釣合の出來ぬ話です。して見れば、

月と太陽とは、下界から一寸見た様な、同じ位の大きさてはなくて、月がいくら小さい事か、知れやしないことが解るてはありませんか。さて夫れならば、太陽と月、その差はどの位だろうと申しますと、さらばです、今度は一つ、一寸小さい處て、地球と月との比較をして見ませう、大きい太陽とでは、私達の想像だも及ばないから。夫れで地球の周圍は、二萬四千八百哩、面積はと云ふと、一億九千萬方里！、月は此の地球容積の、四十九分の一で、若し太陽の大きさはと問はゞ、地球



三十二萬個と、相匹敵すと云ふ、太陽をしも盆大と見做さば、地球は正に櫻實なるべく、月の小なる粟子粒と見ばいでせう。

◎太陽は、毎日々々、休まず缺かさず、照るけれども、月は時々刻々、其形狀を變えて、滿月となり、新月となり、三日月となり、臥待月と云ひ、居待月と呼ぶは、抑々、如何なる譯なのでせうか。これも又、太陽と地球との、關係からこうなるのです、全躰月は、夜毎に下界から見らるゝ様な、清麗愛すべき、光りを放つものではなくて、これは太陽から、一寸

借りて來るばかりなので、其實質はと云はゞ、累々たる地球の蛻の樣なものださうです。

夫れがあの樣に、うつくしい光線を、即ち太陽の光線を受けて、その半面が地球に反射するので、あの新月と云ふときは、月が地球と太陽との中間になつて、光りは少しも見えないのです。のみならず、太陽、地球、月ともに、時々刻々運轉を休止致しませんから、月の光る部分も、時々刻々變化しつゝ有るのです。で月に盈缺の出來るのは、日光を受けて、地球に對する處の、位置の如何に依るものです。

◎夫れにしても、彼の清麗掬すべき月面の、岩石磊磊たる、荒郷だとは、誰しも請け取り難い話しの樣です。荒唐かは知らぬが、故事を探りますと、隨分月宮へ參つた人があるやうです。嫦娥不死の仙藥を盜んで、月宮に遁れ、かぐや姫は我富士の山から、月の都に歸り給ふとして有ります、して見れば、古人も月界には人類の有つたことゝ想像して居た樣です、が其昔し、今よりは餘程の大昔しにあつては、或は生物を有して居たかも知れません。けれども今は、生物絶え、火水なく、空氣なき、空漠たる蛻のみ。たゞ所々に、兀突たる、非常に大きな山岳があるさうで、さうして多くは、火山の遺跡、夫れなのださうです。あゝ茲に、億萬歲前に於ける、月球滅亡の歷史を語るの人がありますれば、恐らくは凄慘聞くに絶えぬことだらうと思はれます。私等が滿月の夜每に見る處の、月面に於ける陰點こそ、實に火山の噴出した、其空洞なので、こゝには光線が射り兼ぬるので、あの樣に薄暗く見えるのださうです。

これが又、東西古今、幾多の人が望み見て、幾多の迷解を下したのもお可笑いです。例へば日本では、兎が餅をついてるのだと云ひ、西洋では天の鏡だと云ふて、此の鏡にうつる陰影こそ、大陸の影だと云ひます。話は橫道に入りますが、之を見ましても我國の解釋法は狹くて、島國的!、西洋の迷信は廣い、大陸的ではありませんか。

◎月球には生物がありません、けれども若し假りに、誰かゞ月界にあつて、此の地球を觀下すことが出來る

ものとしたならば、矢張り天上に、大きな一個の月を見るでせう。しかも地球から月を見る、夫れよりも十四倍の大きさある、月なのでせう。そして其表面には、處々に明暗の點も見えます、光るのは大陸及び南北兩極の氷山なので、暗いのは海水だとの事です。

新月となり、三日月となり、滿月となることも、少しも違ひません、けれども、たゞ地球の滿月は月球の新月、彼の上弦の夜は之の下弦と云ふ有樣て、其方向は全く反對の位置にあるのです。夫れはさておき、太陽の餘光を受けて、僅に夜の世界を守る太陰の、其光りの薄いことを申しますると、丁度月を一として、太陽が五十五萬倍に當るのだとの事です。して見れば天に滿つるの月球をかゝげ出した處で、中々彼一個の太陽には、匹敵することが出來ないのです。

◎國の東西を問はず、時の古今とは云はず、往古から彼の月に對しては、幾多の英雄、豪傑、佳人、才子をして或時は笑はせ、又或時は泣かせ、しましたが、一躰に美の心に富める我國の人は、殊に此の感慨が、一層に深かつた樣に思はれますのも、まんざらの僻目ではありますまい。阿部仲麿の唐にある時、歸心矢の如く、正さに彼の土を辭せんとする時、月に向ひて『天の原、ふりさけ見れば春日なる、三笠の山に出てし月かも』と、故郷のなつかしさを泄らし、藤氏道長は、萬事我意の如くなるを誇りて、『此世をば、我世とぞ思ふ望月の、かけたることの、無しと思へば』と喜び、藤原俊綱、水上月の題にて歌むしろを開いた時、賤しき兵士來て謠ふ歌に『水や空、空や水とも見え分かず、かよひてすめる、秋の夜の月』と、在五中將は『月やあらぬ、春やむかしの春ならぬ、我身一つは、元の身にして』と梅月舊懷の情を述べ、其他菅家の『去年今夜侍清涼』など、ひとしく月に對して我感慨をのべたもので、千古の英雄と云ひ、豪傑と稱する人も、月見れば千々に物こそ悲しけれの心は皆一樣と思はれます。

◎噫！時太火西に流れて、金風漸く梧桐を渡るの時、正に、仲秋觀月の良夜を迎えんとするのとき、月に對しての古今の學說、感慨など連想するも又、一興ではあり

ませんか。

（完）

裁縫科

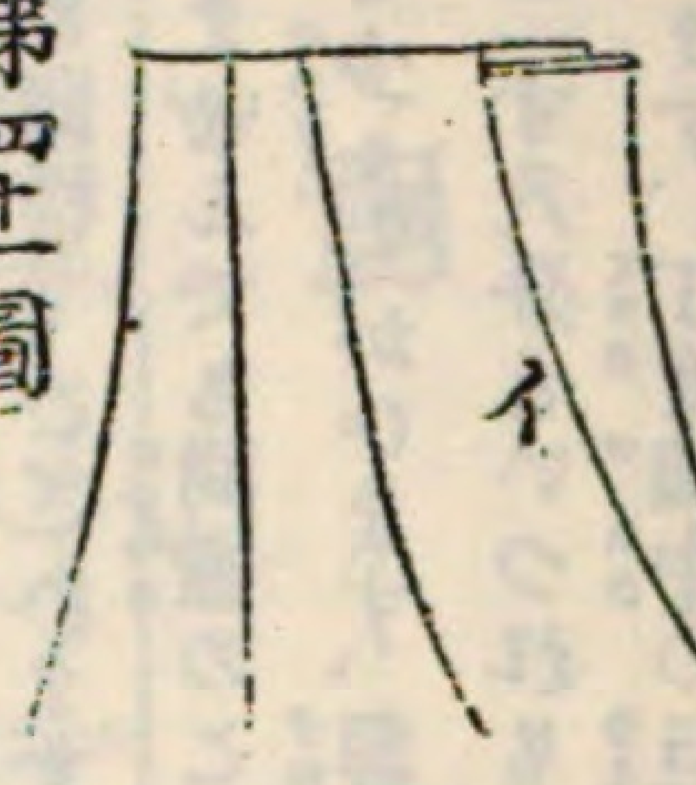
女子職業學校教員　金子銅子

男袴（承前）

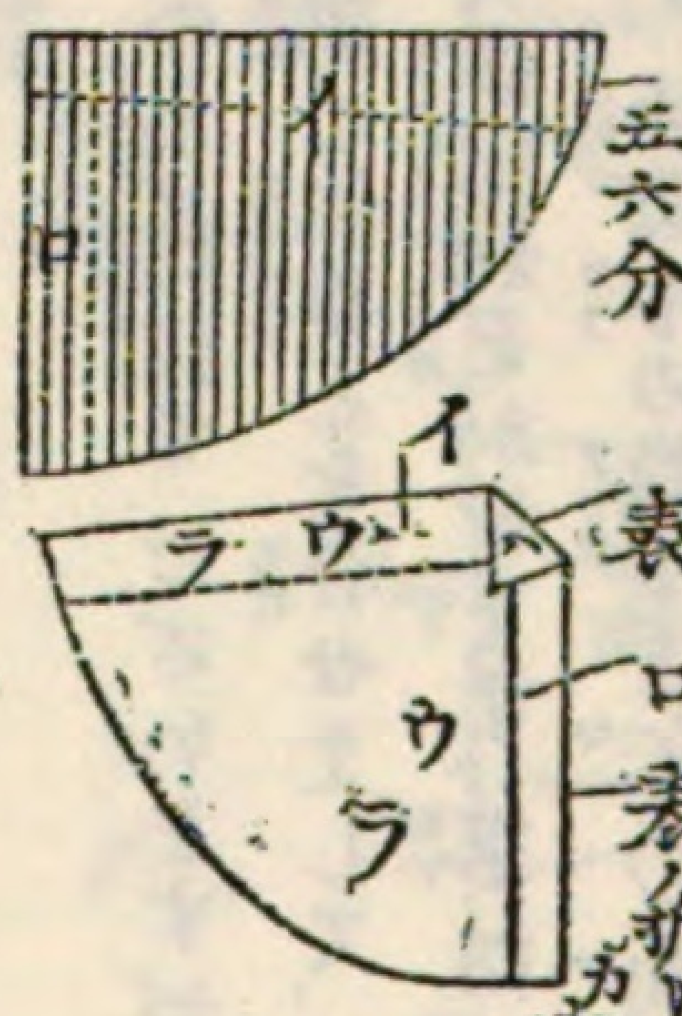
次には後紐を腰板に縫ひつけ、次に前紐をつけます、此前紐は袴の前の中央一分位深く縫ひ込む樣にいたしまして、丁度紐の付の所が弓なりになる樣にし、紐の縞目は曲らぬ樣につけるのでございます、此弓なりにいたしますのは、兩方とも一の襞積より中の方丈をいたします、先つこの樣の仕度にして、半紙をたてに四ッ折に致しましたものを、二枚入れて此紙と共に紐を縫ひつけ、襞積の所は皆返し針致します、總躰がつけ終りましたらば、直にくけます其前に縫ひ込みのうすき所には、紙若くは切を入れて平にしてくけ上げます、次に腰板のつけの所に、裏腰を縫ひつけ置きまして、腰板をとり裏腰を手前に、腰板を向ふにあて、第四十二圖の通りの數字の順序に針を出してつけます、五と十二とは裏腰の切を縫ひつけずに、附菱の尖を共につけ、十六は表に針目の出ぬ樣にして、針どめを致します、又十五の所より腰切の裏にかへしてある切と切とを取つて、外に針を出さぬ樣に、十六の所にて、絲をしめてとめるともあります、すべて腰板は少しく外にそる樣に絲をしめて置くのでございます、絲のかゝりめは第四十三圖の通りでございます、前紐と腰板とをつけるときは、絲を二本より合せてつけます、これより裏腰の切を表より五厘ほど巾も丈も引きまして、折をつけ表によく合せて、粘にてつけます、先つこれで出來上りましたから、絹物なれば、ヒノシをかけ、木綿物なれば、疊みて壓を置きます、それより紐（前後の紐）を格好のよき樣に疊み紙を五分ほどの巾に切りまして、中央と兩端とを卷きて仕上けを致します、一寸申し殘しましたが、褶かけを致し終りましたらば、直に相引の上にカンヌキドメを致します、これで袴の裁方仕立方は終りました樣でありますが、なか〳〵種類の多きものでございまして御話もいたしつくすとは一寸はできませんが猶二三種

に付て申上て置うと思ひます、それで次に申ますのは矢張り大人用の袴でございます、これは用布が短くて紐下の丈の長き時に用ゆる仕方で即ち第四十四圖の通りの裁方でございます、しかしこれは切のつかひかたが充分でありませんから、蹴廻しがせまく、袴を穿きました所の躰裁はあまりよろしくはありません、積り方は、總尺より腰切の丈と、紐丈とを減じて、三寸四分(形の總尺)を加へて八分致しますれば、後布の丈を得られます、又紐下の寸法がきまりて居りますれば、之に三寸を加へ、八をかけ腰切丈と紐丈を加へて總尺即ち用布丈を得るのでございます、扨圖中後布の丈は前の積り方で八分して得たもの、後の積り方で紐下に三寸を加へたものでございます、これも後布を裁ちました時は、前の袴と同様直に圖にある通りに標をつけます、圖中(ス)の所は三分づゝの形(サ)は前申しました通り後布の巾になる所で八寸三分(シ)三寸二分五厘(キ)と(オ)も同寸法(ツ)は一寸一分の斜の餘り切(テ)の所にと四分斜

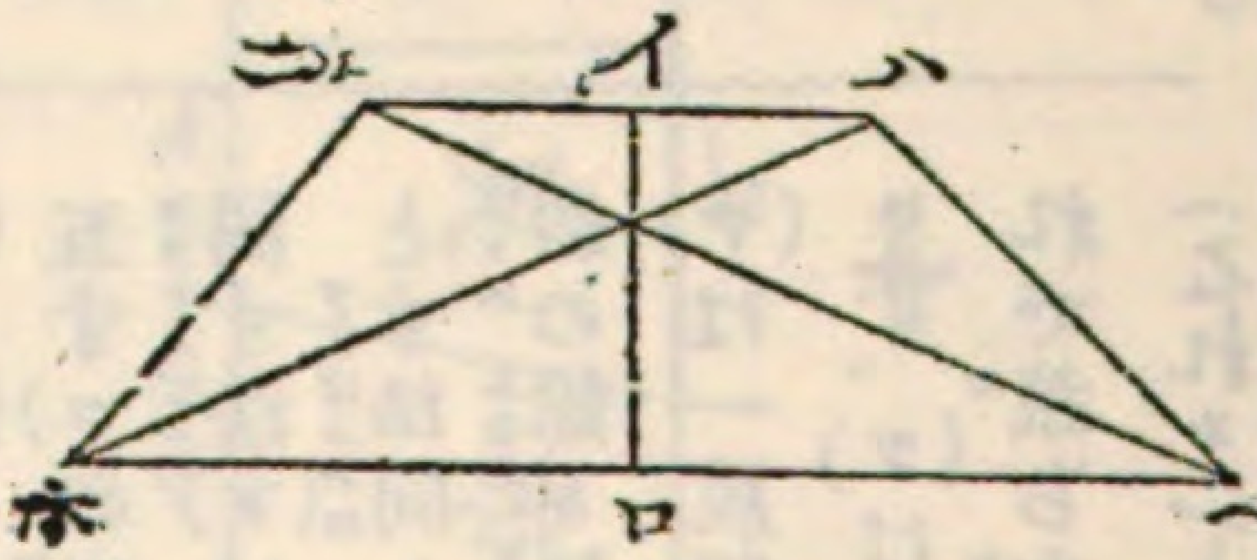
第三十九圖



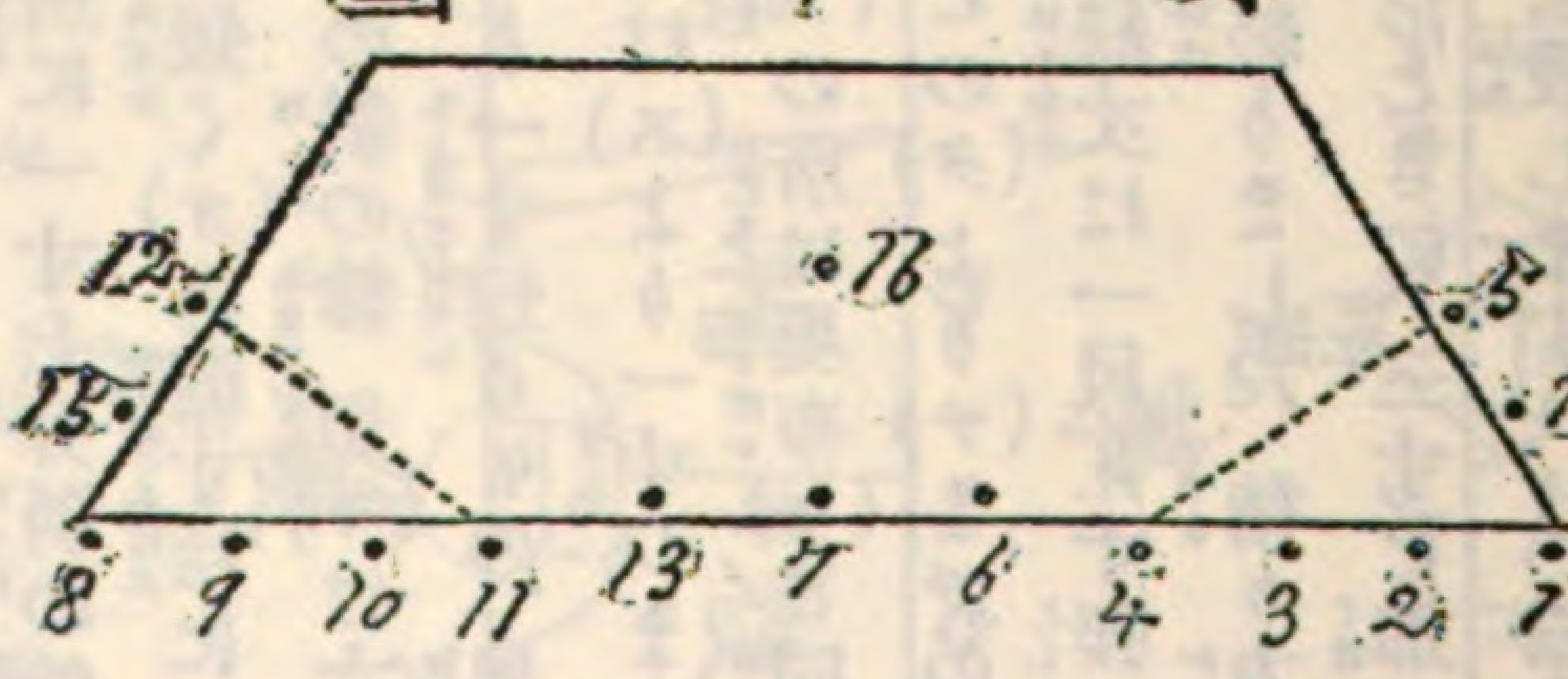
第四十一圖



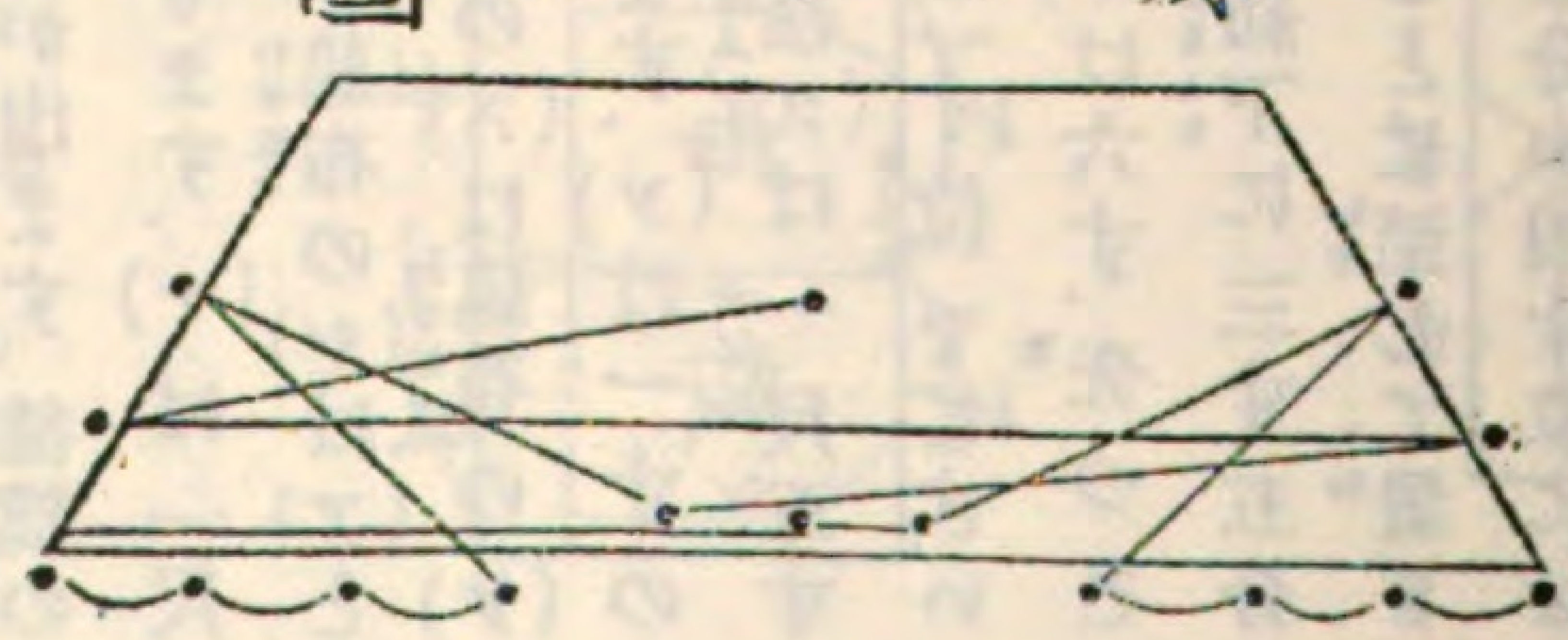
第四十圖



第四十二圖



第四十三圖

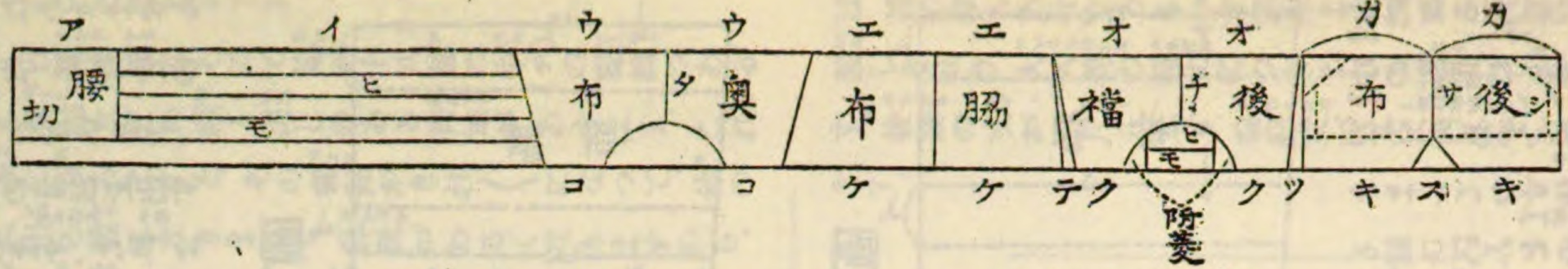


の餘り切が出ます、後襠の(チ)三寸(ク)一尺四寸脇布(チ)は後布の(カ)と同寸法(エ)は(チ)より七分少きもので奥布の(ウ)と同寸法でございます、奥布の(ニ)は一尺四寸、(タ)七寸、紐丈(イ)一尺八寸、腰切(ア)六寸以上裁ち終りましたら縫ひ方にかゝるのでございます。

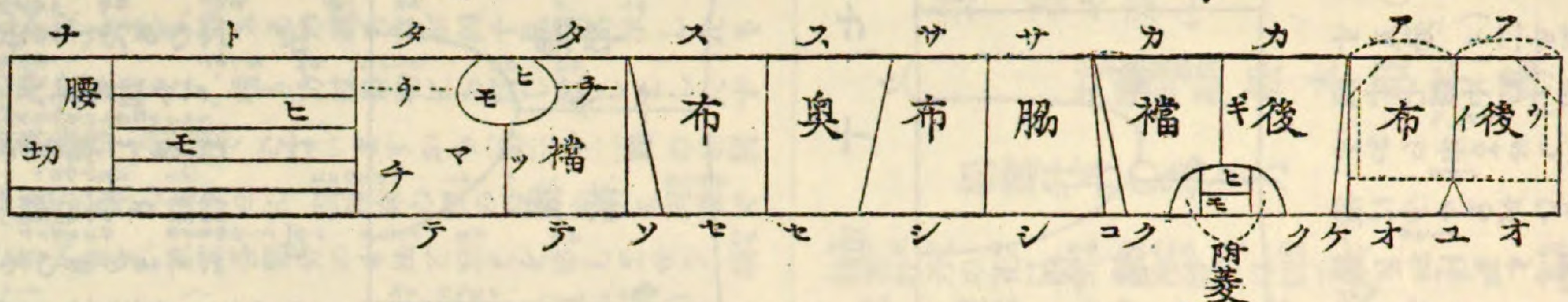
縫ひ方は、前に申しましたのと、同樣でございますが、前襠がありませんから、後襠と奥布とを合せまして、縫込みは奥布の方にかへし矢張隱鋲をかけます、第四十五圖の(チ)の所でございます、此圖中の數字と矢の向きは前に御話し致しましたのと同樣でございます、これより後のは別に說明を致しませんでも同樣のことと御承知を願ます、襞積は前のと少々ちがひます、即ち四十五圖の(ア)四寸八分(イ)二分(ウ)二寸八分といつれも縫込みを除きました寸法でございます、丁度圖中の巨線の通りで、これが襞積の山になるのでございます、その他は前のと少しも違ひません。

次にお話し致しますのは、前と反對で布を充分につかひまして、蹴廻を廣く致します裁方で、襞積も深く〳〵とれますから穿ました工合もよく、立派に見えます、即ち第四十六圖の通りの裁ち方で後布をとりましたらは、これも亦圖の通り(前の馬乘袴の樣に)標をつけます、圖中(イ)は八寸三分これが後巾(エ)三分つゝの形、(ウ)三寸二分五厘、(チ)の所に一寸七分斜の餘切が出ます、後襠の(カ)は(ア)より三分短く(オ)と同寸法になります、(チ)は一尺五寸(コ)の所七分の斜の餘切(キ)は六寸、脇布の(シ)は(ア)と同寸法(サ)は(シ)より一寸短きもの、奥布の(ス)は脇布の(サ)と寸法同しく(セ)は(ス)より一寸つまります、(ソ)は一寸の斜の餘り切れ、(テ)の所は奥布(セ)と同寸法(タ)は一尺五寸(チ)は一尺四寸、この(タ)より(チ)までの間二寸位でございます、(ツ)は四寸、紐丈は一尺九寸腰切(ナ)は六寸、先つこれで裁ち方だけ終りました、積り方は紐下に三寸五分(これまではこのときに、三寸を加へるとに致して置きましたが、充分に致しますれば、三寸五分か四寸位にせねばなりませんからこゝでは三寸五分と致しました、他の場合にも充分に致しますには三寸五分か四寸に致しますのでございます)を加へて、之を卞倍して、腰切

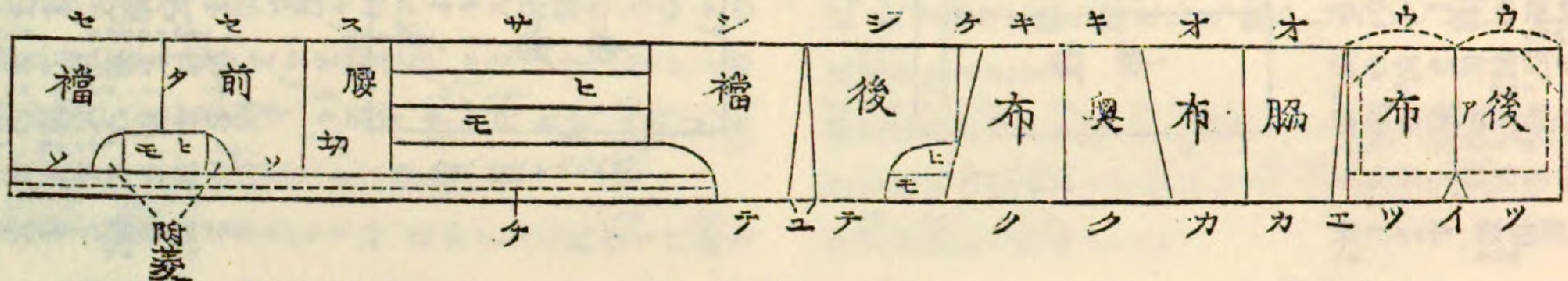
第四十四圖



第四十六圖



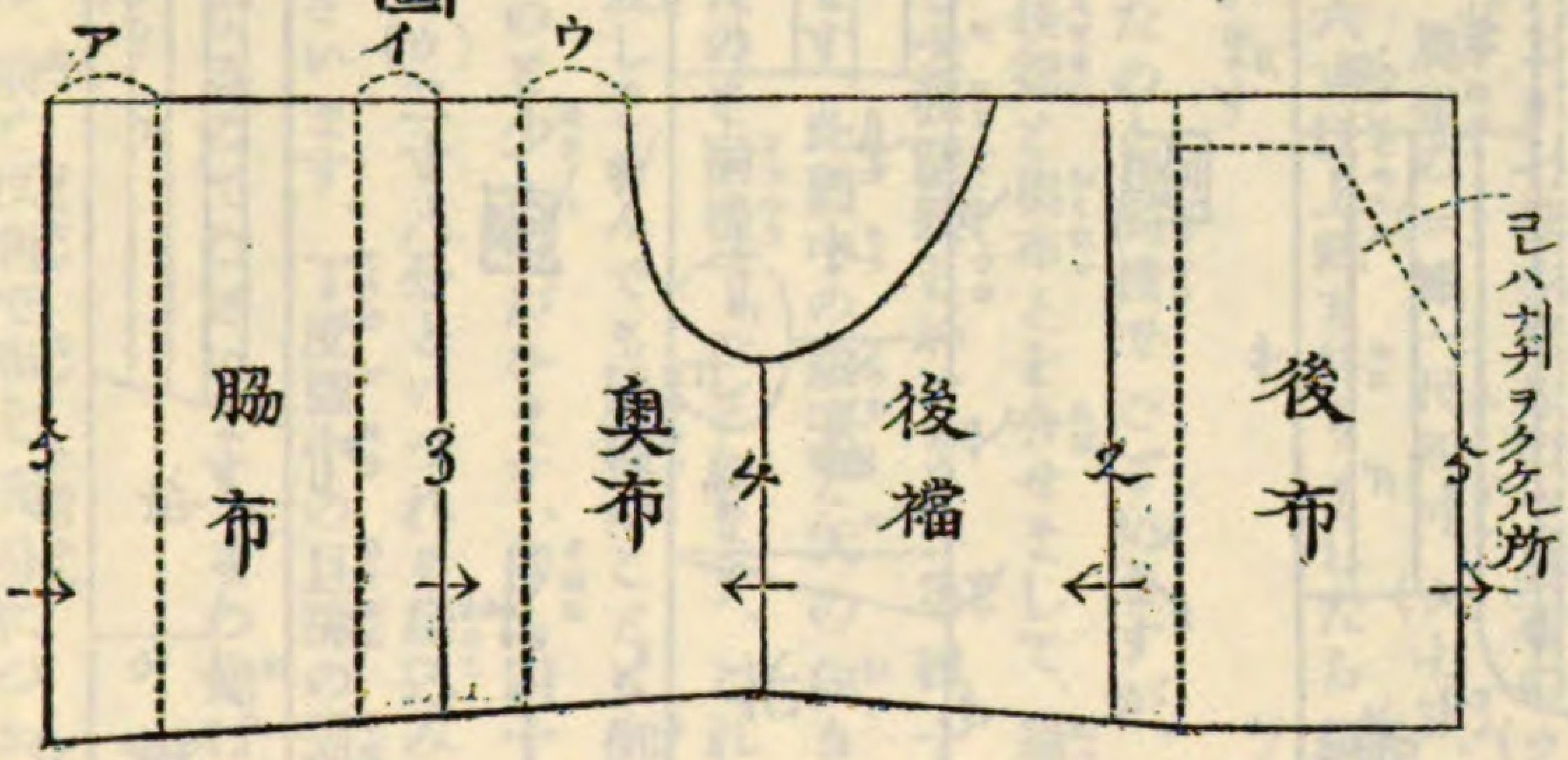
第四十八圖



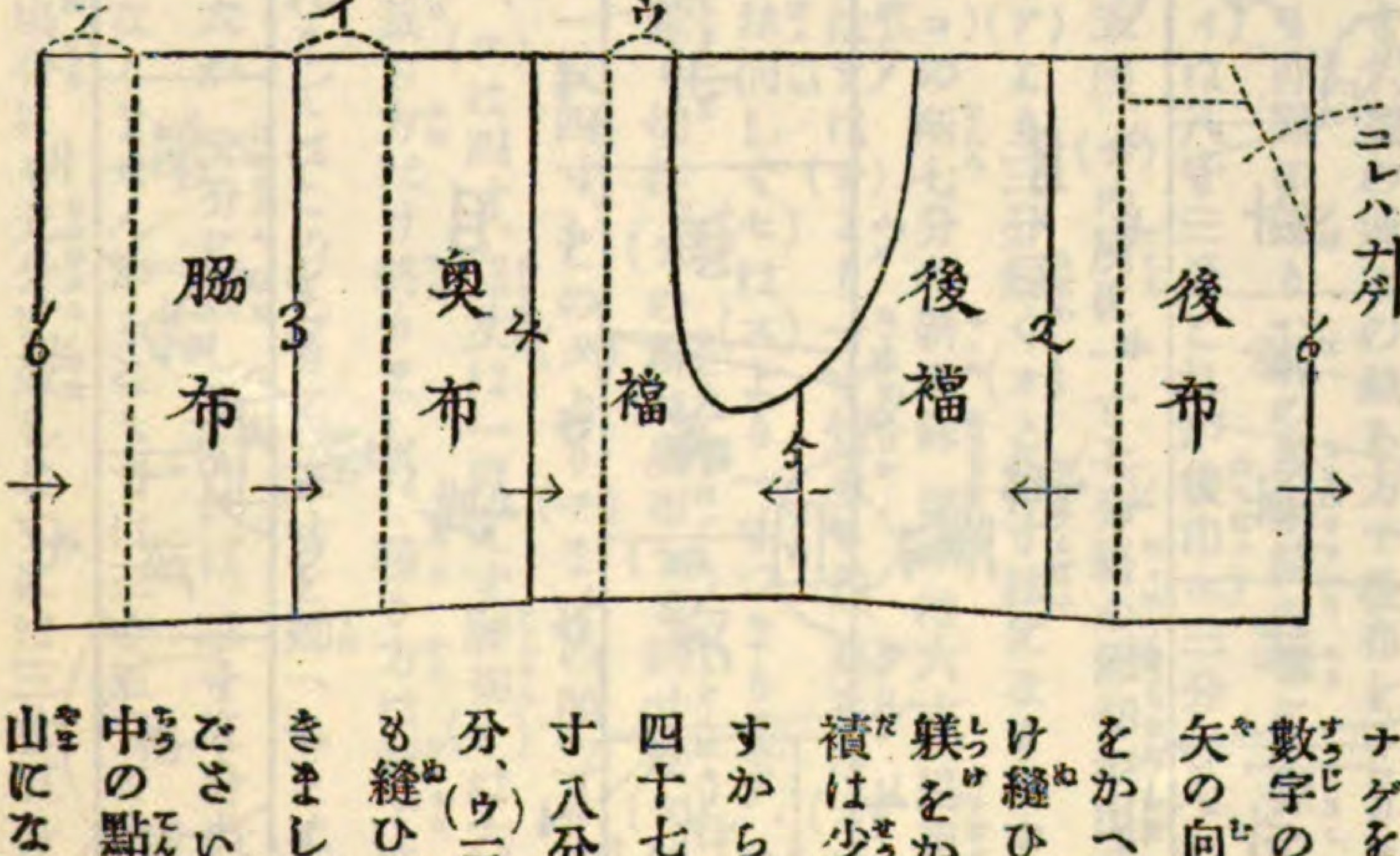
の六寸と紐の長さ一尺九寸とを加へ形の總尺の八寸をひきて用布をはかります、又總尺を計て後に各部分の丈をつもりますには、腰切丈と紐切丈とを減しまして、八寸を加へて、十分ましたもの之を後布の丈といたとします、これより他の寸法を出すのでございます、

縫方は、さほどの違ひはありません第四十七圖の通に

第四十五圖



第四十七圖



致します、最初に、、、ナゲをくけあとは數字の順序に縫ひ矢の向きに縫込みをかへし(5)の所だけ縫ひ込みに隱躾をかけます、縫積は少々ちがひますから申ませう、四十七圖中の(ア)四寸八分、(イ)二寸五分、(ウ)三寸いつれも縫ひ込みをのぞきましての寸法でございます、又圖中の點線は、ヒダの山になる所でございます、其他に少

しのちかひはございません、前申した通りに仕立れはよろしいのであります。
次には博多織などにて第四十八圖の中(チ)の點線のある所に獨鈷などの織り出しのある袴地があります、これは並に裁ちますと、その獨鈷がきれ〴〵になつて、他の所に出る樣になりまして、躰裁がわるくなりますから、か樣の場合にはこの織り出しを紐に取りますのをよしといたします、即ちその裁ち方が四十八圖に示したものでございます、積り方は最初にお話し致しました十番馬乘袴と同樣でございますから(第三十二圖のと同樣)別に申し上ません、又後布の標の付けたかも同樣でございます、只其各部分の寸法と形とを申しませう、後布(ア)八寸三分(イ)三分つゝの形、後布の(ウ)と脇布(オ)とは同寸法、(カ)と(ク)と同寸法(キ)は(ク)より八分短きもの(チ)の所八分の餘り切(シ)と(ツ)と同寸法、(コ)は一寸三分ッゝの斜の切れ、(テ)一尺四寸、(ト)五寸、(サ)一尺九寸、(ス)六寸、(セ)一尺六寸(ソ)一尺四寸、(タ)三四分。
大人用の袴につきましては、なか〳〵これ位では終りませんが、先づ大概この位の所を御承知になりますれは、袴の裁ち方仕立方も一寸出來ますからこれだけに致しませう、大人袴の紐丈につきまして、申して置きます、後紐の丈が一尺八九寸、前紐丈が九尺内外でございます。

造花科

女子職業學校造花教員 松本和子述

松葉牡丹の造り方

松葉牡丹の花は、絹、寒冷紗又は絖で作りますが、其内で絖が一番宜しう御座ります、絖か、絹で作りますなれば、先づ初めに晒し膠をしき、乾かしまして、圖のやうな形をきります。
松葉牡丹の花の色は、色々御座ります故。一鉢に植へましたものを造ります時にも、白、赤、黄など取交ぜます方が美しう御座ります。

白の色は、「グリーン」と「チウラミン」を合せました液で淡く下の方を彩色致します。赤は、「スカレット」に「フロクシン」を合せました液で、花瓣の下の方、即ち點の打つて御座ります位迄の部分を殘しましてあとを彩色致します、そして下の方は「チウラミン」で淡く染めます黄に染めますには、下の方を「マゼンタ」で極淡く、染め、其餘の上の方は「ウチラミン」で染めます、又桃色に染出しますのは、上の方を「ローダミン」下の方を「チウラミン」で染めますかやうに適宜に花瓣を染め終りましたら、次に蕊を作ります。

第一圖



雄蕊を作りますには、先づすが絲を花瓣の色と同じやうに染め置きまして、二分程の長さに切り、細い針金で堅く結び、其先に「チウラミン」で染めました米の粉を付けます、又雌蕊を造りますには、二十番位の「カタン」絲と三分位の長さに切りまして、先の方凡一分位の所の絲のよりを戻し、五ツ又は三ツに割ります（即ち第一圖の（イ）のやうに）そして、其先に一寸灰をつけ、以前のすが絲で作りました雄蕊の中へ差込み置くので御座ります。かやうに出來上りましたら、厚紙で極小さな丸い形をきりまして、蕊の下に通し、夫れに花瓣をつけるので御座ります。

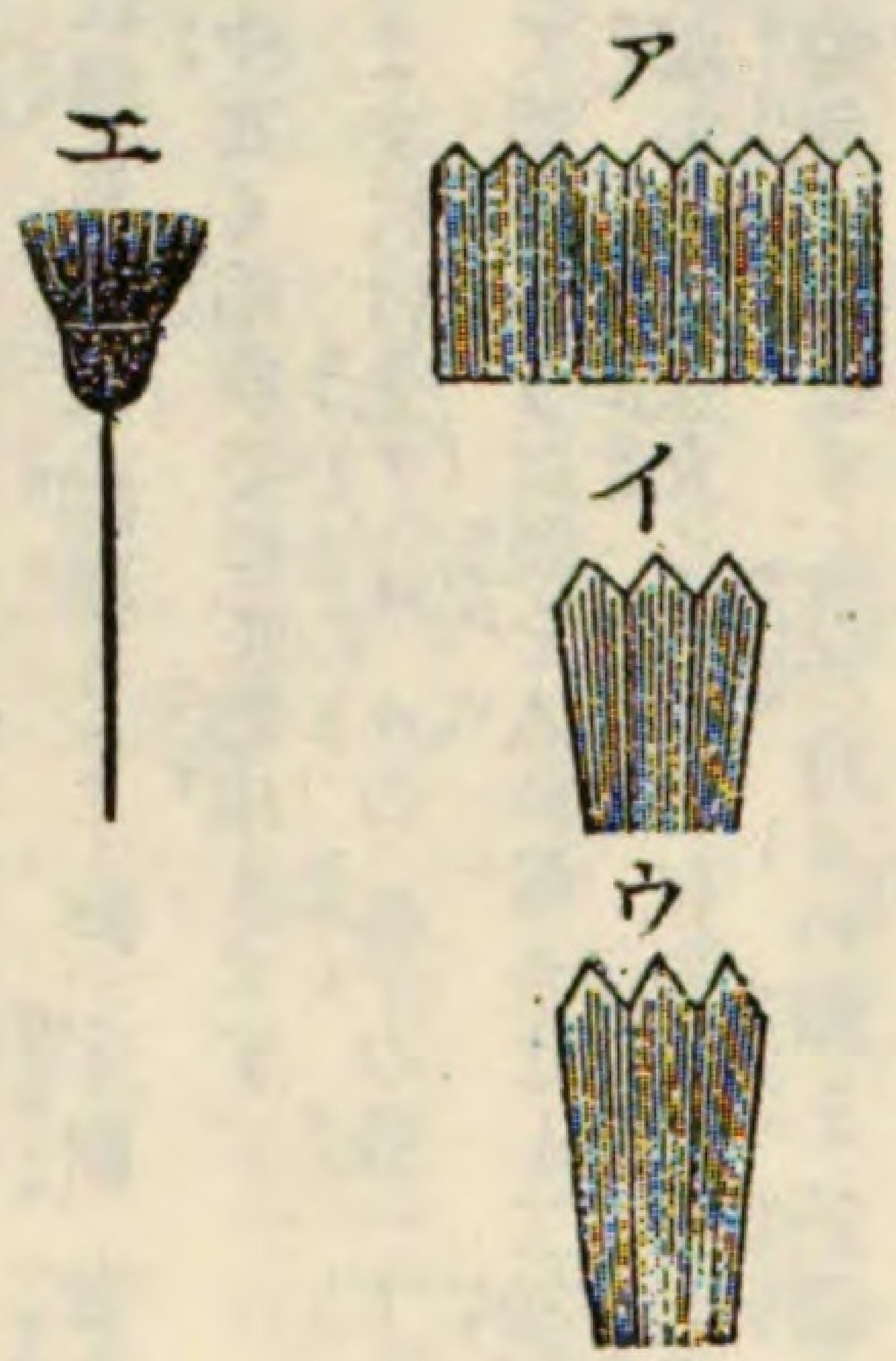
花瓣に鏝をあてますには、先づ「中の瓣鏝」で裏から上の方の兩端をあてゝ尚返しまして表から同じ鏝で下の方ばかり少し丸みを付けます、かやうに致しましたものを開きの花に五枚つけます、半開の瓣には、只表の方ばかりに丸みを付けます、

蕾は、雁皮紙に極少し綿を入れて作ります、作り方は、是迄も時々御話致しました、薔薇の蕾など、同じやうに致しまして、花と同じ色に染めるので御座ります。

萼は、葉の色よりも少し淡めに染めまして、第一圖の（ウ）のやうな形に裁り、「中の瓣鏝」で丸みを付けます、そし

て前に花瓣を付けました丸い厚紙の見へませぬやうに二枚つけます。

葉を造りますには、眞鍮の針金を延ばしまして、夫れを一寸五分か、二寸位の長さに切りまして、其先に綿を實物の葉の大さに巻きつけます（第一圖の（エ）のやうに）又其長さは三分、五分、七分此三通りを作ります、そして淡糊を三四度も夫れにしきまして、光澤を出しました上、「グリーン」「マゼンタ」「チウラミン」の三色の溶液で短い葉を淡めに、長い葉を濃い目に染め乾かします、乾きましたら、青紙に「マゼンタ」をしきまして赤く致しましたものでまとめます、併し白と黄との分は葉莖に赤味が



第二圖

御座りませぬ故、只の青紙でまとめて差支ない事で御座ります。

蝦夷菊の造り方

蝦夷菊の花を造りますには、先づ寒冷紗をとりまして、其儘竹シンシに張り、淡く解しました姫糊を裏、表から平らに引きます、夫れから、第三圖のやうに、三通りの瓣の形をきりまして、「ビチレット」を薄く解かしました液を筆に付け、（ア）の瓣は上を白く殘し、下の方を淡く模糊し染に致します、次に（イ）（ウ）の瓣は八枚ばかり重ねまして、上の方を濃い「ビチレット」の溶液で下の方凡そ二分位白の所をのこして模糊します。


第三圖

蕋を作りますのは蒲公英の時と大抵同じやうに致します、即ち黄色の木綿糸を蒲公英の蕋の大さに鐵の針金で束ねまして、其結び目から凡二分程上を少し丸みを

付けて鋏みます（第二圖の（エ）のやうに）夫れから「グリーン」「チウラミン」を淡く解しまして、其先の所を少々染めます、これは開きの蕊で御座りますが、半開、蕾などは段々と糸を少なく用ゆるので御座ります。

花瓣に鏝をあてますには先（ア）、（イ）、（ウ）の各の瓣へ下の方凡二分位殘して圖のやうに鋏を入れ置きまして後、筋鏝で（ア）の瓣を端から成丈丸く成る樣にあて蕊から凡二分程上げて三卷程つけます、其次は（イ）の瓣を筋鏝で丸くひきましたとのを初めの瓣よりも少し上げて三十五枚付けます、次の大の分は外へあてかへしまして、此度は少し下げて四十枚形よく實物にならひまして付けます、半開は（ア）の瓣三卷、（イ）の瓣三十枚、（ウ）の瓣二十枚位成丈開きませぬやう造ります、又蕾は（ア）の瓣三卷き丈で宜しう御座ります。



第四圖

萼は、葉と同じ布で第三圖のやうな形に切りまして、（花一輪につき凡十三枚位つゝの割合に）裏から先の方を



第五圖

筋鏝でひき下の方に「中の瓣鏝」を輕くあて、大の分は外へ少しあて返しに致します、先づ小から十三枚つゝ花の元の所へ一所に重なりませぬやう、段々に三通り付けます、尚半開にも、蕾にも同樣に致します。

葉は、青布で實物の形と大小凡五通り程とります（第四圖のやうに）そして、一枚に付き各三四枚つゝの割に切りまして、青紙でまきました針金を裏へ付け、表を「筋鏝」でひき、又裏から「中の瓣鏝」をあてまして後臘をしきます。

花の莖には鐵の針金を入れて、下卷を致しまして其上

は綿を細くまきつけ、青紙で實物に倣ひまして、小の葉からまとめ初めます、まとめ上げました後は「マゼンタ」を解かしまして、實物のやうな色合に筆で其枝を赤く模糊すので座ります。

習字法心得

小野鵞堂

普通習字は實用を主とするもので、美術の意は含で居ないといふ説があります、けれどもこれは私は取らない、實用といへば讀めて通用が出來れば濟むのですが、少しにてもよく書きたいといふ希望がある以上は既に美術界のものであろうと思ひます、衣服の如きも寒暑を凌ぐに足るといふばかりならば、それだけのものですが、其仕立又は其品に付て彼是意匠を凝すに至ては、最早實用のみのものでない、これと同じ事であるからして、書といふものは實用以外に美術の意を備へて居るもの、又之を習ふ以上は一つの高尙なる美術の研究と心得たいのであります、

書は右の如きものですから、拙きにも限りがない、巧みなるにも限がない、そこで實用のみの目的で習ふと、美術の考へがあつて習ふとは、其効をあらはす上に於て、大に相違があろうと思ひます、書は心書とも筆の華とも申しまして、平常の氣位がおのづから顯はるゝものですから、此邊の心得も必要の事でしやう

平常の氣位はどこ迄も優美に高尙にありたい、威ありて猛けからずといふやうにありたい、此心懸を書に顯はるゝやうにしたい、否、もし此等の氣位を眞實に備へたる人は必ず其書に顯はるゝに極つて居る、書はもと一小技術であるけれども、詮じて此に至れば、世道人心に裨益ありといつてもよかろうと思はれます

優美といひ高尙といふのは、言語動作のしとやかにて、思想の氣高いといふ事を意味して居りますから、之を文字に譬ふる時は剛柔偏よらず風韻の高いといふ事にも當りましやう乎、扨其風韻があるとか、雅致がないとか、いふことは他人の書を見る毎に誰でもいふ言葉で

すが、これは形外の趣を許する、つもり人の風采といふに當ります、此風采は天性か人爲かといふに、私は天性せわろうが、人爲でも或る程度までは左右する事が出來ると思ひます、其人爲とは何かと申しますると平生の氣位です

畫法指南解

野口小蘋

こゝに寫し出すは秋蘭なり、九月ころ花さき香淸し、春蘭は一莖に一花を生じ、秋蘭は一莖に數花を生ず、葉も春蘭よりは大なり、ながく巾も廣し、花のかたちさしてかはりなしと雖も、春蘭と異なれは、そのこゝろしてゑがくべし。

石を畫く皴法多し、こゝに寫し出す石は、披麻皴なり解索、折帶、小斧劈、大斧劈、其他數法あれど枚擧にいとまなきを以て省略す、石のかたはらに竹を添へたり、この竹の葉は魚尾法なり、されど此圖は石を主とし畫きたるなり。

翡翠を畫くにも、やはり嘴よりはしめ、眼次に頭腦次に背次に翅、胸、肚と漸々に作り、而して足を畫く、總て鳥の形は卵相を離れざる樣作るべし、鳥全く成りて後、柳枝を畫き葉を着くべし。

蘆に月雁の圖先づ蘆をはじめに畫き、蘆は枝より葉を作り花を描く蘆成りて後月と雁をゑがく、此雁は點景なれば三筆にて輕く畫くべし。

音樂の栞

大林小星

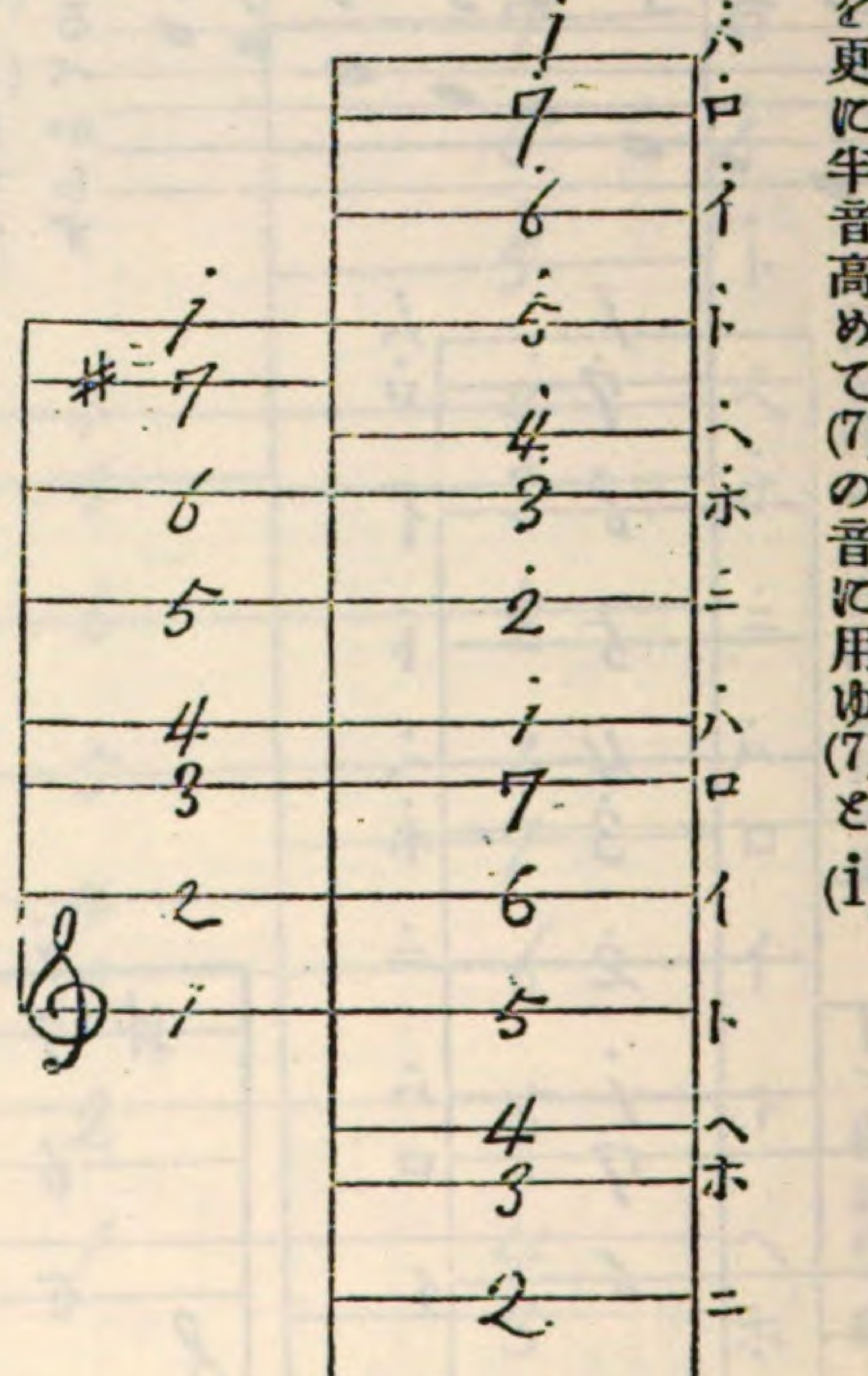
(四)移調法

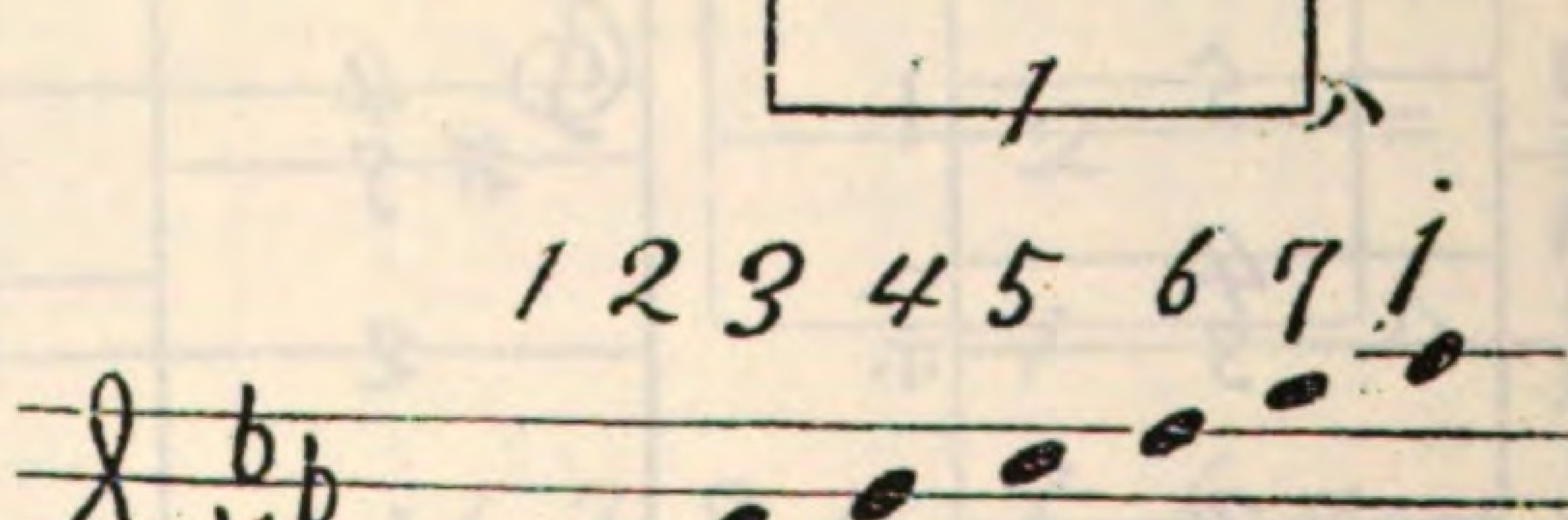
音階は單に(ハ)調音階一個のみにあらず此の(ハ)調音階より正しき順序に於て數多の長音階を隨意に作出することを得るなり

嬰音即ち(シャープ)を有する長音階

(ト)調音階　此音階は(ト)音を基音(1)と定めて作るもの

にして前章の(ハ)調音階の如き距離の順序を以てす圖の如く(ト)(イ)(ロ)(ハ)(ニ)(ホ)は當然の距離に屬すれども(ホ)(ヘ)の距離は半音階なり然るに(6)と(7)との距離は全音階なれば(ヘ)を更に半音高めて(7)の音に用ゆ(7)と(i)との間は半音階なれば(ト)は當然の音なりとす而して(ヘ)を半音高めて正しき順序の音階とせるにより嬰符(#)を付して(ヘ)の半音高めたることを表示す故に(ト)調音に於ては譜表に(#)一つを示す

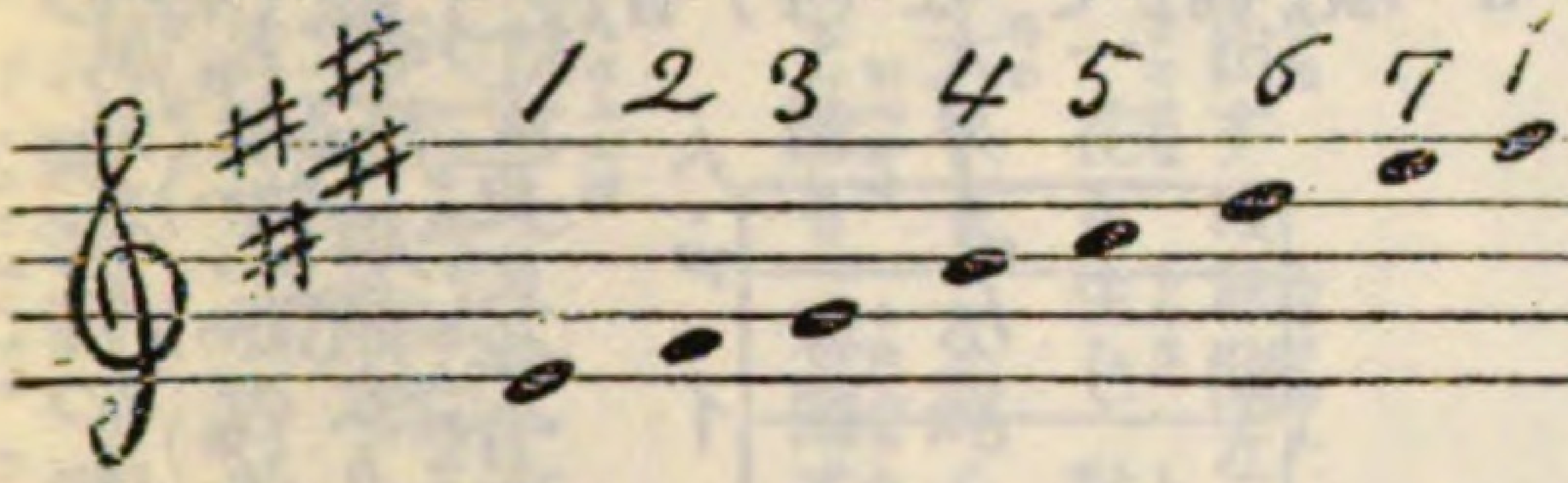




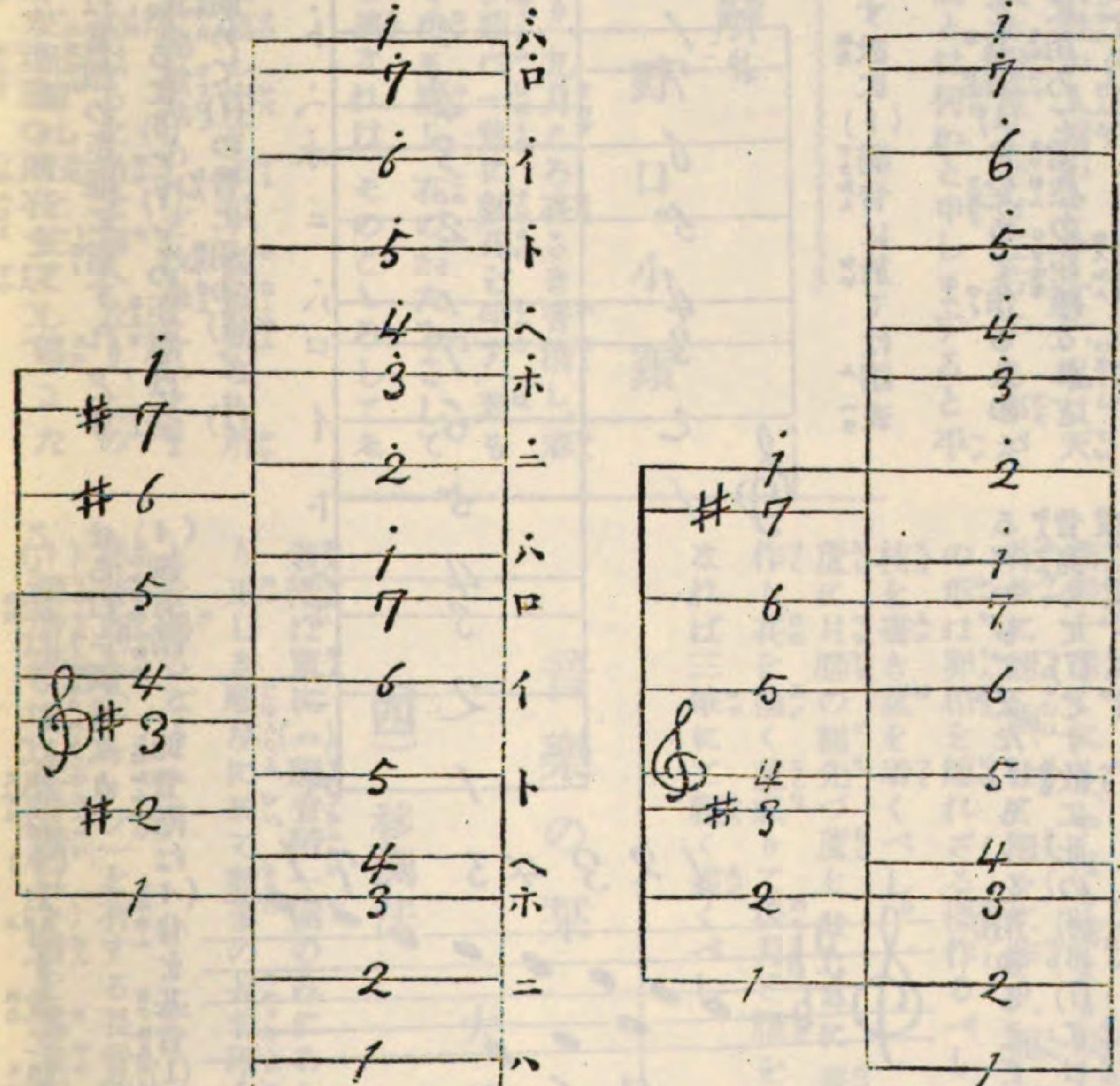
(二)調音階　此音階は(ニ)音を基音(1)と定めて作るものにして(ホ)(ト)(イ)(ロ)は(2)(4)(5)(6)に用ゐて當然の距離なれども(ヘ)と(ハ)とは半音高めざれば(3)と(7)とを全音となすこと能はざれば嬰符(#)を付す故に嬰符二つを譜表に示せるは(ニ)調音なり

(イ)調音階　此音階は(イ)音を基音(1)と定めて作るものにして(ロ)(ニ)(ホ)は(2)(4)(5)に用ゐて當然の距離なれども(2)と(3)(5)と(6)及び(6)と(7)との距離全音なれども(ロ)と(ハ)及び(ホ)と(ヘ)は半音なれば各を半音高めて用ゐざるべからず又た(7)も(ト)を用ゆること能はざれば之を半音高めて(7)とす故に此の(3)(6)(7)には各〱嬰符(#)を付す故に嬰符三個を有するものは(イ)調音を示すなり

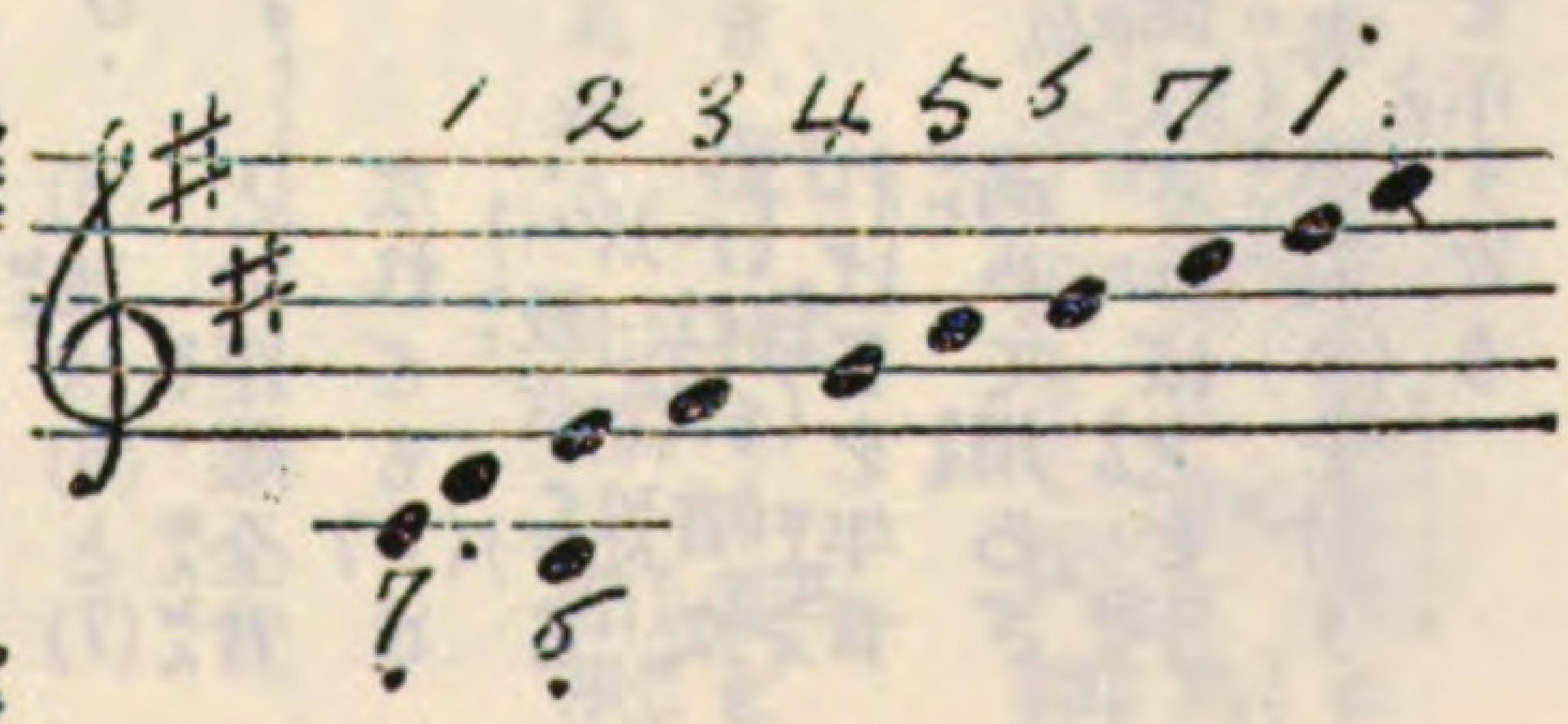
（ホ）調音階　此音階は（ホ）音を基音の(1)と定めて作るものにして（イ）（ロ）は(4)(5)に用ゐて當然の距離なれども(2)(3)(6)(7)は共に全音なれば（ヘ）（ト）（ハ）（ニ）を半音高めて用ゐざるべからず故に此の(2)(3)(6)(7)には各（嬰符）を付す嬰符（♯）四個を有するものは（ホ）調音を示すなり



以上の嬰音を有する長音階の外尚



は數多あれども通例右を以て足れりとす故に之より變音を有する長音階を示す

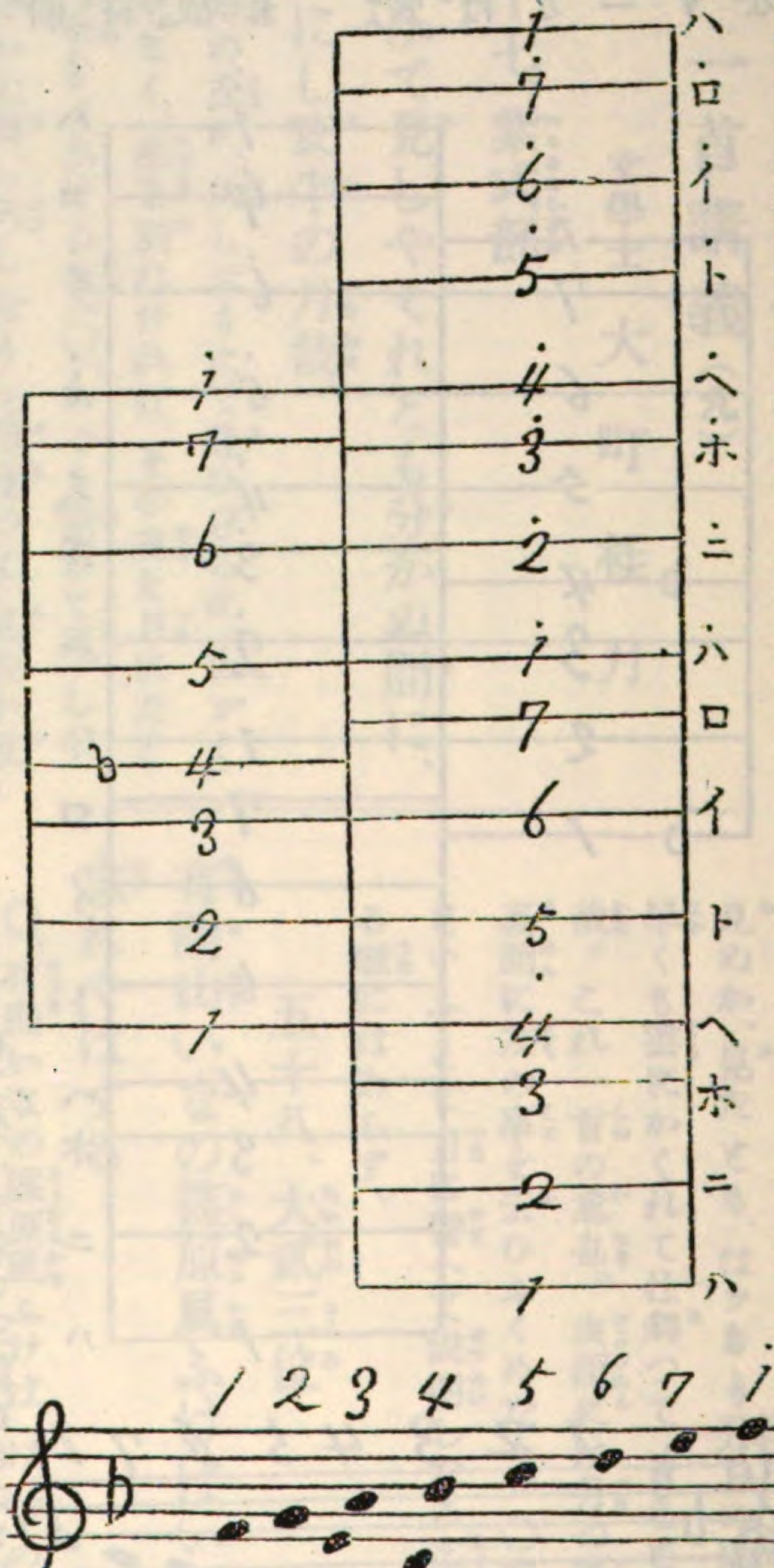


變音即ち（フラット）を有する音階

（ヘ）調音階　此音

階は(ヘ)を基音(1)と定めて作るものなれば(ト)(イ)・(ハ)・(ニ)・(ホ)は(2)(3)(5)(6)(7)に用ゆれば全音なるを以て當然の距離なれども(イ)より(ロ)は全音なり然るに(4)は半音なれば(ロ)を半音下げて用ゐざるべからず故に(4)に變符(b)を付す變符一個を有するものは(ヘ)調音を示すなり變(ロ)調音階

此音階は(ロ)の半音低きものを基音(1)と定めて作るものなれば(ハ)・(ニ)・(ヘ)・(ト)・(チ)は(2)(3)(5)(6)(7)に用ゆれども(4)は半音なれば(ホ)を半音下げて用ゐざるべからず故に(4)に變符(b)を付す(1)は(ロ)を半音下げて調音階を作りしものなれば之も亦變符を付す變符二個を有するものは變(ロ)調音を示すものなり

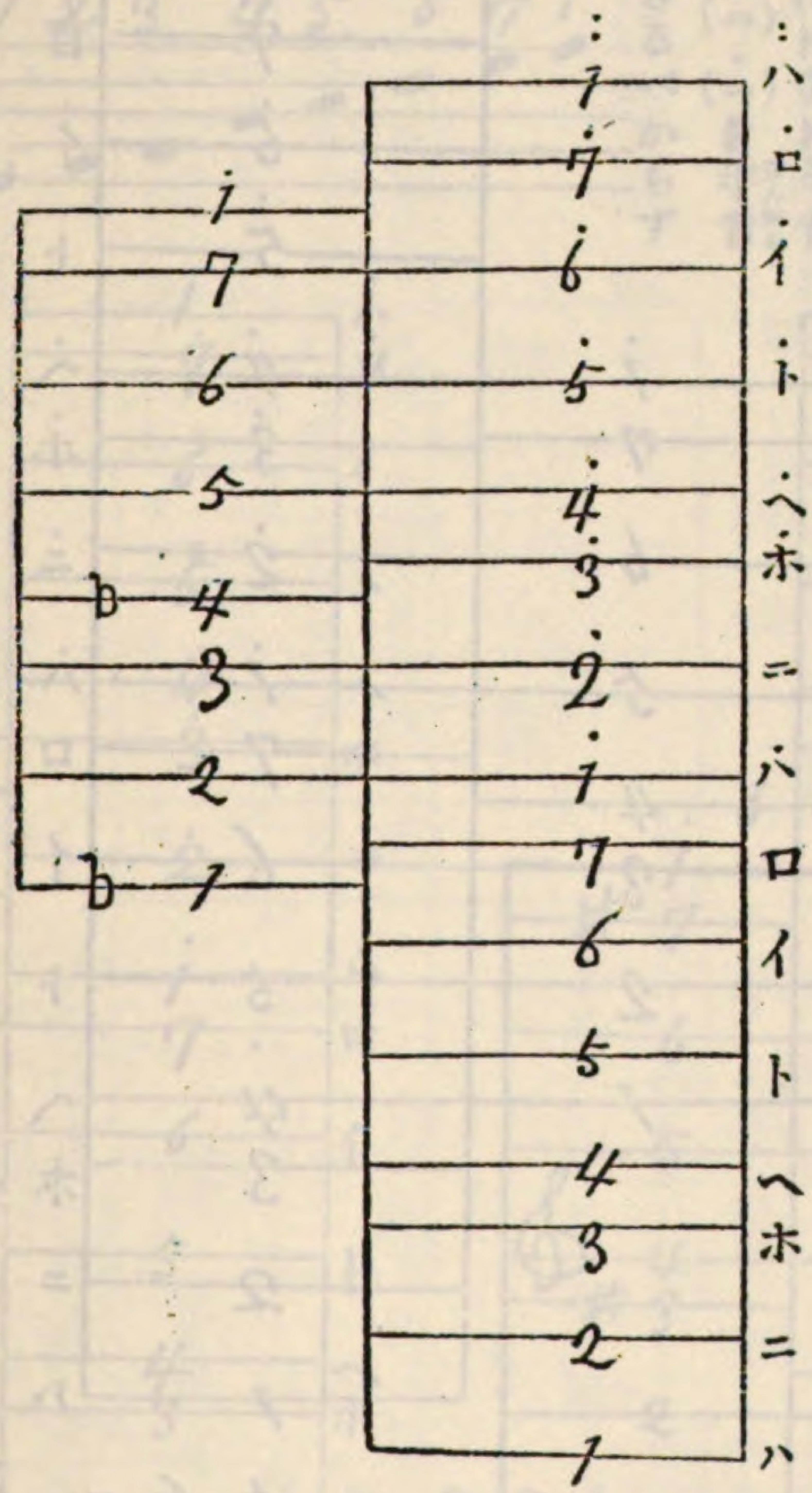


拍子は音を連續せしむる時間の長短をいふものなり而して譜表中縦に五線を通じて引ける線を縦線といひ此縦線と縦線との間を小節といふ此節節間にある拍子の數は其樂曲中皆同一を以て計ふるなり此拍子は音部記號の次に數字を以て之を示す時としてはc字を以て記すことあり

今拍子の種類を左に擧ぐ此横線の下にある分母は全音

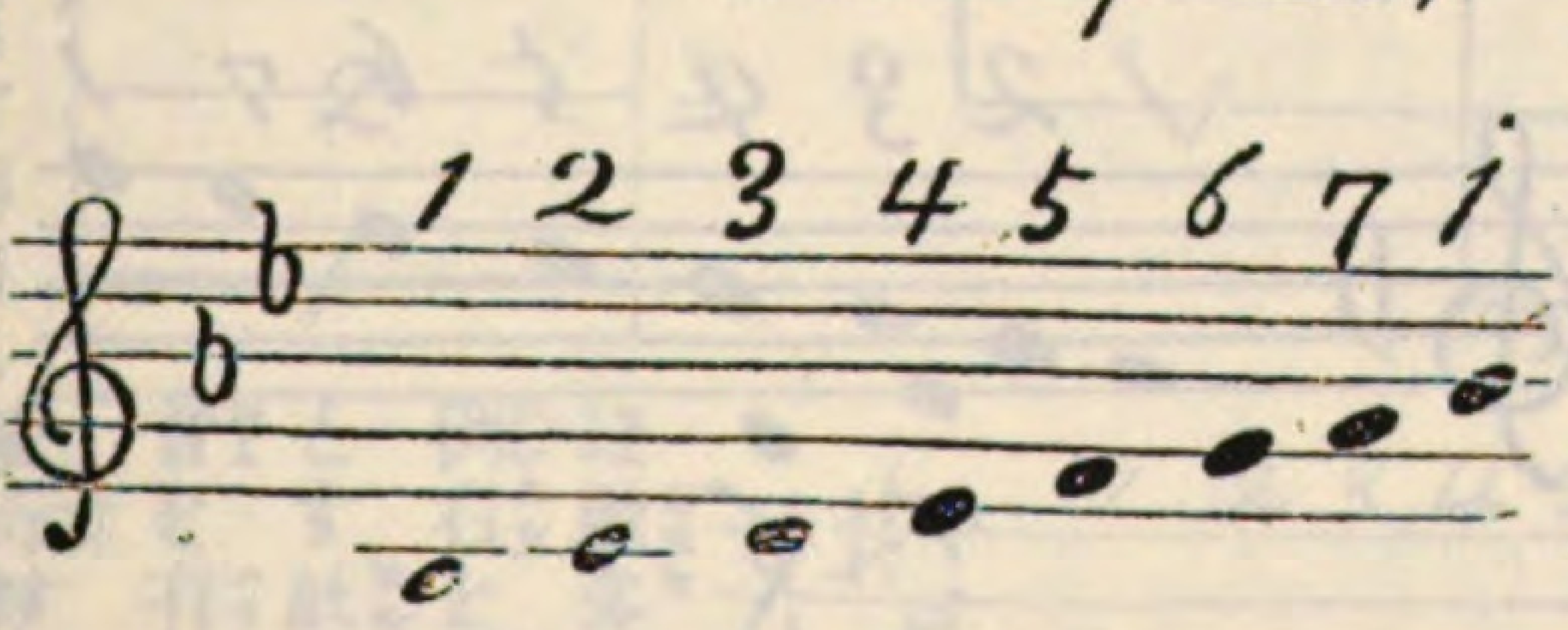
符を若干に分ちたるといふことを示し上にある分子は其若干に分ちたるもの丶一つが一小節中に若干個あることを示すものなり

例へば4/4或はcは全音符を四分したる一符が四個或は全音符一個に當る音符を以て組成することを示すなり



2/4は四分音符二個或は之と同一なる拍子を一小節に有するを示すなり

2/2は二分一音符の二個或は之と同一なる拍子を一小節に有するを示すなり此場合には ₵ の如き記號を用ゆることあり3/8は八分一音符の三個或は之と同一なる拍子を一小節に有するを示すなり3/4は四分一音符の三個或は之と同一なる拍子を一小節に有するを示すなり3/2は二分一音符の三個或は之と同一なる拍子を一小節に有するを示すなり6/8は八分一音符六個6/4は四分一音符六個12/8は八分一音符十二個若しくは之れと同一なる拍子を一小節に有するを示すなり



講義

百人一首講義（九）

文學士 大町桂月

五十七、紫式部

めぐり逢ひて見しやそれとも分かぬ間に、
雲がくれにし夜半の月哉。

○幼年の時の友に、久しぶりにて逢ひけるに、ゆッくり話す間もなく、忽ち別れければ、その友を月にたとへて、この歌をよみける也。○「めぐり逢ひて見しやそれとも分かぬ間、」久しぶりで出逢つて、見たか見ぬか、見たともはッきりとはわからない間との意也。相見し間の極めて短きを形容して言へる也。「見しやそれとも」は、見たか、見ぬか。見たとも分らない中にと也。「めぐり逢ふ」は、人がめぐり／＼て相逢ふことをも云ひ、月がめぐることをも云へる也。○「雲がくれにし」は、雲にかくれし也。「にし」の「に」はたゞ添へたる言葉也。○久しぶりにてめぐり合ひて、見たか、見ぬか、見たとも、はッきり分らぬ間に、夜半の月は早くも雲にかくれて仕舞つて、まことに殘惜しいと哉。これ一首の意也。表面には月の事のみ云ひて、裏面に友の事を云ひふくめたり。○たゞ殘り惜しいといふ事を月に譬へて説明したる迄にて、深き味ある歌にはあらず。

五十八、大貳三位

有間山いなの篠原風ふけばいでそよ人を
忘れやはする

○「有間いなの篠原風ふけば」は、下の句の『そよ』と云はむ爲めの序也。風ふけば、そよ／＼と音がするもの故、「そよ」の序としたる也。一首の上には、何等の意味もなし。又少し無理なる序也。○「いでそよ」

は、「いやもう」との意也。なほ俗語にくだきて云へば、「いゝえ、どう致しまして」の意也。○「人をわすれやはする」人は戀人也。「わすれやはする」のやは反語のやにて、忘れやうか、決して忘れないとの意也。○契りたる男、唯時々來るのみにて、少し疎かりければ、その男、おれの事はもう忘れはせぬか、太だ覺束ないといやみ云ひければ、それに答へてよめる歌也。一首の意は、おぼつかないとは、郎君の上なれ。通ひ給ふことが遠ざかりたればとて、妾の心は少しも變るべうもあらず。そのやうな厭味を言はるれど、いゝえどう致しまして、妾が郎君を忘れませうかいな、決して忘れませぬと也。○贈答の歌としては、多少當意即妙の趣なしとせざれども、もとこれたゞごと也、歌の想には非ず。

五十九、赤染衛門

やすらはでねなましものを、さ夜更けて傾くまでに月を見し哉。

○「やすらふ」は、休むと躊躇との二つの意あり。こゝは躊躇ふの意也。「やすらはで」は、「やすらはずして」也。即ち躊躇はずして也。○「寢なましものを」は、「寢なむものを」也、「寢て仕舞はむものを」也。○「さ夜更けて」のさは唯添へたる言葉にて、單に「夜ふけて」といふに同じ。小夜など書くは宛字也。小の意にあらず。假名にて、さと書くがよし。○「傾くまでに月を見し哉」の「までに」は、「まで」といふに同じ「月が傾くまで、月を見た」との意也。即ち夜を待ち明かしたると也。○藤原敦通、赤染衛門の妹に通ひけるが、約束したる夜來らずして妹は空しく待ちあかしければ、翌朝妹の爲めに代作して、その戀人に贈らしめたる歌也。○郎君來ぬと知つたら、躊躇はで、サッさと寢て仕舞つたものを。あのやうに堅く來るとおッしやつた故、ねもせずに、空しく夜をふかし、月が傾くまで、空しく月を眺め、空しく一夜を待ちあかしました。まことにひどい御方哉と也。○妹に同情を表したる、まことに粋な姉様なれども、たゞ

言也。歌の想に非ず。

六十、小式部内侍

大江山いくの丶道の遠ければ、まだふみも見ず天の橋立。

○和泉式部は有名なる歌人也。小式部内侍はその娘にて、亦歌をよくせり。されど、人みな、その年若き故、母の代作ならむと歟へり。和泉式部、夫藤原保昌に従ひて丹後に赴き、小式部は留りて宮中に事へけるに、歌合あらむとする二三四前、中納言藤原定頼といふ人、小式部の局にたりより、歌合せも近づきたるが、丹後の國へ人を使はし給ひたるや、その使かへりたるや、さぞ御心配ならむと、冷かしけるに、小式部、其袖を捉へて、忽ち此歌をよみける也。○生野は但馬、天の橋立は丹後、大江山は丹波丹後の間に在り。京都より丹後に赴くに、必ずしも生野、大江山を通りしにあらざるべけれど、有名なる處にして丹後に近ければ、この歌によみ込たる也。○行くを生野に言ひ懸け、蹈みも見ずを文も見ずに言ひかけたり。京都より丹後へゆくには、生野大江山などありて、路が遠ければ、まだ丹後へ參つて天の橋立などは蹈んだ事はありませむ、これ正面の意なるが、蹈みも見ずに文も見ずの意ありて、母と手紙のやりとりするに由なしとの意をふくめり。○例の頓智を味ふべきもの也。單に歌として味ふべきものにはあらず。

六十一、伊勢の大輔

いにしへの奈良の都の八重櫻今日九重ににほひぬるかな。

○「いにしへの奈良の都」、西京が帝都となる前に、奈良が帝都なりし故、古の都といふ也。九重は御所のと也。○「にほふ」は、色にも香にも用ゐれども、こゝは色についていふ也。つやめくと也。櫻の花の、色美にして、つやめくとを、にほふと云ふ也。○今は故都となりたる奈良の地に咲いた櫻の技を、一條天皇に奉りけるに、天皇その花を伊勢にたまはりて、歌よ

めとおほせられければ、このうたをよみける也。○意味はよく別り居れど、一言すれば、昨日までは古の都たりし奈良に咲き居りし八重櫻、今日はこの花やかなる御所にもたらされて、至尊を始めまつり、多くの殿上人に賞玩さるゝよと也。○八重九重と言葉のあやをなしたるも面白し。唯にほひぬるかなとのみ言ひて反て餘情あり。舊都の櫻新都の帝闕の上ににほひ、見る人もなき舊都の櫻、至尊の覽にまて入る。花よりして故都を聯想し、昨日の寂寞にかへて、今日のはれやかなる花の上を思ひやるなど、無量の感慨こもりて。いと面白き歌也。殊によく場合によみ合はせたる當意即妙の才を見るべし。

六十二、清少納言

夜をこめて鳥の空音は謀るとも、世に逢坂の關はゆるさじ。

○「夜をこめて」は、夜の明けない中に也。「はかる」は欺く也、だます也。○「夜をこめて鳥の空音は謀る」とは、孟嘗君の故事なり。孟嘗君、秦の國に赴き居たるに、害せられむとしければ、逃げて函谷關まで來りけるに、夜まだ明けずして、門をとざせり。孟嘗君の臣下に雞鳴の眞似に巧みなる者あり。雞のなく眞似(即ち空音)しけるに、本當の雞が鳴き出しければ、關の番人起きて門を開き、それにて孟嘗君は早く關を通ることを得て、難を免れし也。○大納言行成といふ人、夜、清少納言の許に來りて、色々話しけるが、御所に用あればとて急ぎかへり、その翌朝、「鳥のなく音に催されて」と言ひおこしぬ。鳥のなく音に催されてと云へば、朝までもとまつて居りしやうに聞ゆ。行成は、よい加減な虚言を言ひし也。學問ありて且つ才氣ある清少納言の事なれば、鳥の鳴く音といふより孟嘗君の故事に思ひあはせて、「まだ鳥のなく時分ではなき夜中に歸りながら、雞聲に促されてと云はるゝは、彼の函谷關に於けるが如く、眞の雞聲にあらずして、空音なりしか」と云ひやりけるに、行成もさすがに才人也。「いゝや、函谷の關にあらずして、逢

坂の關なり」とふざけて答へぬ。逢坂の關とは、男女相逢ふことにたとへて言ふ也。清少納言その言葉尻を捉へて此歌をつくれる也。○「空音は謀るとも」は、「空音は函谷關の番人を謀るとも」と解すべし。「世に」は、「世にも憐れなり」などいふ「世に」と同じつかひざまにて、「げにも」、「いかにしても」の意也。「世間一般に」の意にあらず。○夜の明けない中に、鷄の鳴く眞似して、函谷關の番人を欺いたとはありしが、そのやうなとでは、どうして〳〵、逢坂の關を欺くことは出來ぬ。君が我と逢つたやうな虛言云ひ給ふとも、決して君と我との逢坂の關をば許しませぬぞとの意也。○鳥に促されてといふより、直に函谷關の故事に思ひ合はせて、函谷關のことにやと云ひ、函谷關より一轉して逢坂の關といふより此歌をよむに至れる來歷もと一場のじやうだんなれど、今の世の駄洒落とは異なりて、古の才人才女の才學氣轉を伺ふべし。此歌の味ふべき點は、玆に在り。單に歌としては、感服すべきものに非ず。元來歌の一方面は、一種の遊戯也。單に歌としては取るに足らざるも、贈答唱和の際に趣味あるもの多し。大江山の歌の如き、又此歌の如きは、其一二の例也。

六十三、左京大夫道雅

今は唯思ひ絕えなむとばかりを人傳ならでいふよしもかな。

○「思ひ絕えなむ」は、「思ひ絕たう」也、「思ひ切らう」也。○「人傳ならで」は、「人の傳言を賴まずして、自分で逢ひて」也。○契りたる女との中を隔てられて、未來永劫また相逢ふに由なし。此上は思ひ切るの外なし。せめて唯一言、思ひ切るといふとだけを、まのあたり逢ひて言ひたきものかなと也。人傳にては、十分意を通ずると能はず、或は我を恨むとあるべし。直接に逢ひて、双方納得の上にて戀をやめむ。浮世の義理の爲めに戀愛を犧牲に供せむ。かく悟れども、逢へばまた未練起りて、或は心中もしかねまじかるべし。○「人づてならで」といふに多少の味あり。名

歌にはあらねど、ひと通りあはれなる歌也。

六十四、權中納言定頼

朝ぼらけ宇治の川霧たえ〴〵にあらはれわたる瀬々の網代木。

○たえ〴〵には、とぎれ〴〵になりて也。○あらはれわたるは、あらはれ切る也、現はれて仕舞ふ也。○瀬は、川の淺き處也。淵の反對也。川の深き處を淵といふ。瀬々といへば、彼處の瀬、こゝの瀬と、多くの瀬をさして云ふ也。○網代木は、川瀬に竹木をからみつけ、網に代へて魚を捕ふるもの也。○一面の濃霧、咫尺も辨ぜざるばかりなりしも、漸くうすらぎゆき、終にとぎれ〴〵になりて、幾んど霧はなくなりて、網代木が全く見え切るやうになれりとの意也。

○川邊の曉景、睹るが如し。おだやかにして、一寸面白き叙景のうた也。

六十五、相摸

恨みわびほさぬ袖だにあるものを、戀に朽ちなむ名こそ惜しけれ。

○「恨みわび」は、恨みて困りて歎息するの意。男のつれなきか、薄情なるかによりて、大に恨めるなるべし。○「ほさぬ袖」は、常に涙をこぼして、ほす暇なく、袖が朽ちむばかりになりたるをいふ也。下の句の朽つと重複するを避けむ爲めに、苦心してほさぬと云へり。○一首の意は、我戀はまゝならず、常に恨んで歎息して袖は涙に朽ちむばかりなるに、知らぬ世間よりは浮名をたてられ、遂に名まで戀の爲めに朽ちはつるは殘念千萬也と也。こは契冲の說也。舊註の說は、朽ち易き袖でもなほ朽ちざるに、名が先つ朽つるが殘念なりとあれど、契冲の說を可とす。○ひと通りは、戀の切なる情をうたへる歌也。

六十六、大僧正行尊

もろともに憐れと思へ、山櫻、花より外に知る人もなし。

○山櫻よ、汝もこのやうな山奥に咲いて、見て呉れる人もないが、同病相憐れむとやら、まあお互に憐れと思つて呉れよ、我も世に離れて知人がなく、唯汝山櫻を見て慰むのみなりと也。○「誰をかも知る人にせむ高砂の松もむかしの友ならなくに」と同工異曲の歌なれど、非情の花に物云ひたる處に、切なる情見えて、あはれ也。

六十七、周防内侍

春の夜の夢ばかりなる手枕にかひなく立たむ名こそ惜しけれ。

○夢ばかりなるは、夢のやうなほんの一寸の意也。○手枕は手の枕也、手をまくらとする也。○かひなくは。詮なく也、しかたがなく也。○ふの字つきて、「ふがひなく」と云ひても、「かひなく」に同じ。「ふがひない男」と云へば、しかたの無い男の意也。甲斐なく、腑甲斐（或は不甲斐）なくなど書くは、宛字也。字其物には意味なし。○春の夜、二條院にて、人々物語りしけるに、周防内侍といふ才女、心地や惡かりけむ、横になりて、枕もがなと云ひければ、藤原忠家、これをとて、手を出しければ、内侍この歌をよめる也。○この殿御の御手を、妾風情の手枕にとは、ぞくぞくする程うれしく辱なく存じまするが、然しお斷り申しまする。ひと晩ほんの一寸手枕をした丈けで、詮なくも、しかたがなくも、浮名がたちましたら、さぞ口惜しいとではござりませぬかと也。○忠家返歌をつくりて曰く、「契ありて春の夜ふかき手枕を、いかゞかひなく夢に爲すべき」と。いづれも例の頓智を見るべき歌にて、贈答の際に味あるもの、單に歌として珍重すべき者に非ず。

土佐日記講義（九）

文學士　壚井雨江

十九日。日惡しければ、舟出ださず。

○十九日も、日和惡しく、天氣が惡き故に、やはり室津にとまり居るなり。

廿日。昨日のやうなれば、舟出たさず。皆、人々愁へなげく。くるしく心もとなければ、たゞ日の經ぬる數を、今日幾日、廿日三十日と數ふれば、およびも損はれぬべし。夜はいもねず、いとわびし。

○廿日の日も、昨日のやうに、日和あしき故に、出船せず。舟中の人々は、都へ疾くと思ふに、かゝる天氣にて今日も室津を出船し難き故に、皆、悲みなげく。誠に、かゝる有様にては、何時旅路を終りて、都へ歸へり着くべきか、心も安からず思ひ悶へて、いと待ち遠しければ、唯徒らに過ぎたる日數のみ、いとくちをしく思ひ出でられつ。今日にて既に幾日になりぬ、二十日三十日と指折りて、日數を數ふれば、はては指も損ぬいたむであらう、誠に少き日數にはあらざりけり。いとゞ思ひ悶ふれば、夜は寐られず、甚だ困しく悲し。○心もとなしは、待ち遠しき意なり。およびは單に指といふに同じ。

廿日の夜の月出でにけり。山の端もなくて、海の中よりぞ出で來る。かうやうなるを見てや、昔、安倍の仲麿といひける人は唐土に渡りて歸へり來たる時に、舟に乘るべき所にて、かの國人、餞別し、別れを惜みて彼處の唐詩つくりなどしける。飽ずやありけむ。二十日の夜の月出づるまでぞありける。月は海よりぞ出でける。それを見て仲麿の主、我が國には、かゝる歌をなん神代より神もよみたび、今は上、中、下の人も、かうやうに別れをおしみ、喜びもあり悲みもある時には詠むとてよめりけるうた、

青海原、ふりさけみれば春日なる
御笠の山に出でてし月かも

とぞよめりける

○此の段は、貫之が、はかどらぬ海路、今宵も室津の浪枕、ねられぬまゝに起きて居て、折りから海上より出でつる二十日の月がげを見て、阿倍仲麿が唐土にての詠歌の事をも思ひいでてながめたる記事なり。その心にて見るべし。○山の端もなくて。都ならば、月は山の端より出づるならひなれど、今は海邊なれば月は海上より出でたりとなり。○からやうなるを見てや。かくの如き有様の月を見てにかありけむ、安倍の仲麿が末の如き歌を、唐土にてよみたりといふ句なり。○安倍仲麿。靈龜二年留學生となりて、唐土に赴き、その後、歸國せんとして、舟出したる途中にて、暴風にあひ我が國に歸るを得ず、再び漂泊して、唐土にたどりつきつ。彼の國にて重く用ひられてありけるが、終に、我が寶龜十年、そこにて亡くなりたる人なり。かへり來たる時とは、初め本國に歸へらむとしたる時を言へるなり。○餞別。廿二日の條に詳しく註せり。仲麿の歸國せむとするにつきて此の年月親しくしたる唐の人々が、餞別として物を贈り、また別れを惜みて、唐の詩をつくりなどして、仲麿に贈りたるなり。○あかずやありけむ。餞別をなし詩を詠み贈りて、いろ〳〵離別の情を盡せど、なほ別れを惜む情の、いと限りなく名殘りのとゞめかねたてあらうか、夜になるも、なほ立ち去らず、二十日の月の出づる頃までも、別れを惜みあひて居たりとなり。○それを見て云々。折りから海上より出でつる月を見て、仲麿ぬしは、我が日本國にては、かくの如き歌を、神代より神さまもお詠みになられて昔より我が國人の詠みますもので、今は、社會の上中下を論ぜず、一般にかく別れを惜しむ時、また、喜び悲みのある時、すべて、心に感動せる時には詠みますとて、一首の歌をよまれたりとなり。

○歌の意は、渺々たる蒼海遠く見わたせば、をりから、一輪の月の海上にのぼりたり。あはれ、彼の月こそは、我が昔、故郷の國にありける時は、幾度か春日なるみ笠の山より出つるを見たる月かなマアーといふ

事にて嗚呼なつかしき故郷よと、日本國を慕ひたる心をこめたる歌なり。一言のなつかしとも悲しとも言はずして、萬里の雲波を隔てたる他國に、故郷を慕ふ孤客の情、限りなく深くこもりてきこえたる、かゝるをや、誠に歌の粋を得たるものといふべき。別離離の悲みを言へるにあらず。故郷の日本國を慕ふ情をよめるなり。○青海原とは大海の意、春日なるみ笠の山とは、大和の春日の里にあるみ笠の山にて、春日もみ笠山も、此の頃の帝都奈良の近傍なり。かもはかなに同し、感動詞なり。

かの國人、きゝ知るまじうおぼえたれど、事の心を、をとこ文字に、さまを書きだして、此處の詞つたへたる人に言ひ知らせければ、意をや聞き得たりけん、いと思ひの外になんめでける。

○かゝる歌を言ひ聞かすとも、唐の人は、了解しまいと思ひたれど、此の歌の意を漢字にて書きて、日本の言語を傳へ知り居る唐人に、語りきかせたるに、その歌の意を了解したのであらうか、迚もわかるまいと思うて居た所が、案外にも、唐の人々が、大にこの歌を賞めたりといふ事なり。○をとこ文字とは、此の時代、男子は專ら漢字を用ひ、女子は專ら假字を用ひたるより、假字を女文字といひ。漢字を男文字といへるなり。「さまを書きだして」のさまとは、その意といふ意なり。

唐土と此の國とは、詞異れど、月の影は同じことなるべければ、人の心も同じ事にやあらん。

○唐と日本とは、言語は異なりたれども、月のあらはれる影は同じ事ならむ故に、其の月に對して、さま〴〵のあはれを身に感じ、殊に萬里他郷の故郷、孤眠故郷を慕ふ感情なども同じ事なるべしといふ事なり。これは、貫之が、安倍の仲麿の月に對して故郷を慕へる歌の意をきゝて唐人の嘆賞したるにつけて、人

情の變はりなからむことを評したるなり。

さて、今、そのかみを思ひやりて、ある人のよめる歌、

都にて山の端に見し月なめ
海より出でて海にこそ入れ。

○さて、今、其の昔の安倍の仲麿が當時の情を思ひやり、今の我が身の上にもくらべられて、ある人が歌をよみたるに、都にては、出づるも入るも、山の端に見たる月なれど、今はその月が海より出でゝ海に沒するよ。さても〳〵おぼつかなき旅路よ。さても戀しき故郷よと詠みたりとなり。ある人とは、貫之自身なり此の歌は、宛がら一の説明にして、何の情も感も動かず。安倍の仲麿の歌に比べなば、生きたると死にたるとの別あり。

廿一日。卯の刻ばかりに船出す、皆人々の舟出づ。これを見れば、春の海に秋の木の葉しも散れるやうにぞありける。

○卯の刻。今の午前六時頃なり。○これを見れば。人々の乘れる船が皆漕ぎ出でたる故に、その海上の舟のありさまを見わたす時は、春の海に秋の木の葉の散りたる如くなりといへるなり。春海に秋の木の葉の形容、面白し。今日嬉くも舟出するを得たる滿腔の喜び、何んとなく一句の間に浮びて見ゆ。○しもは、語調を強めたるまでの詞にて利意なし。

おぼろげの願ひによりてにやあらん、風も吹かず、よき日出で來て漕ぎゆく。

おぼろげの願ひ。「おぼろげならぬ願ひ」といふべきを、かく略して言へるなり。大かたならぬ願ひにて、即ち、深く意を込めたる心願といふ事なり。○深く意を込めて願ひたる故であらうか、よき日が來たりて、今日は風も吹かず、波も立たず、海上うれしくも漕がれ行くなり、

この間に。使はれんとて、つきて來る童あり。それが謠ふ舟歌「なほこそ國の方は見

やられ、我が父母ありと思へば、歸へらや」と謠ぞあはれなる。

○この間に。かく漕ぎ行く程にといふ事にて、この句は、末の謠ふに續けて見るべし。「使はれんとて」に續く句にあらず。○使はれんとて云々。舟に使役せられん爲めに室津より雇はれて此の舟につき來たれる童ありけるが、舟の上にて働きながら舟歌をうたふなり。

○歌の意は、かく賃銀を得ん爲めに雇はれて來たりたれども、我郷には、我が父母の居ますと思へば、父母の戀しく、故郷のなつかしく、やはり故郷の方が見らるゝ。歸へらんか〱といふ意なり。

○あはれなる。その童の謠ふをきけば、親子の情、さもこそときこえて、誠に身にしみておぼゆるとなり。

かく謠ふを聞きつゝ漕ぎ來るに摀といふ鳥、いはほの上に集り居り。そのいはほの下に、浪白く打ち寄す。檝取りのいふやう。

くろとりの下に白き浪を寄すとぞいふ。この詞、なにとはなけれど、ものいふやうにぞ聞えたる。人のほどにあはねば、とがむるなり

○この詞、云々。この檝取りの言ひたる詞が、何にといふわけありてにあらざれども、雅なる意ありて、わざと面白く言ふやうにきこえたり。さる船頭などの賤しき身分の者の詞としては、不相應なる故に、かくは我が耳にとめて評するなりといふ事なり。咎むといへるは、普通の叱り正す意にあらずして、耳にとめて評する如き意なり。

かくいひつゝ行くに、船君なる人、國よりはじめて海賊報いせんといふなることを思ふ上に、波のまた恐しければ、頭も皆白けぬ。七十八十は海にあるものなりけり。

我が髮の雪と磯邊の白波と

楫取言へ。　いづれまされり沖つ島守

○船君なる人。舟中の主君にて、貫之の事なり。○國よりはじめて、云々。貫之が土佐の國守たりし時、海賊を捕へて罰したる事などありたれば、今度、貫之の歸京の海路にて、海賊どもが、その怨みをかへさむとするといふ風說を、まだその國にありて未だ出船せぬ時より聞き居りたれば、貫之が甚だそれを恐れ心配するのみならず、また、海波の誠に恐ろしければそれやこれやの心配恐怖にて、貫之の頭髪は、七十八十歳の老人の如く白くなりたりとなり。○七十八十は、云々。かく海上の心配によりて、七十歳八十歳の老人の如く白髪になりたれば、老といふものは、海にあるものなりと戯れたるなり。

○歌の意は、沖の島の番人よ、我が雪なす白髪と磯邊によする白浪と、どつちが餘計に白いかと問ひかけたるなり。○楫取言へ。我が白髪と白浪と、どつちが白いか、船頭も言へよと、歌にて沖の島守に問ひかけたるまゝ、直ちに、その事を、また船頭にも問ひかけたる筆づかひなり。いと面白し

廿二日。昨夜の泊りより、こと泊りを追ひてぞ行く。遙に山見ゆ。年齢九つばかりなる男の童、年齢よりは幼くぞある。この童舟を漕ぐまに〱、山も行くと見ゆるを見て、あしき歌をぞよめる。その歌、

漕ぎて行く舟にて見れば、あしびきの
山さへ行くを。松は知らずや

とぞ言へる。幼き童のことにては、似つかはし。

○昨夜の泊り。昨夜泊りたる所なり。名を言はざるは、海上にて泊りたるにて、港などに泊りたるにあらざればなり。○こと泊り。他の泊りといふ事なり。

○年齢よりは幼く云々。

年齢よりは頑是なく見ゆるといふ事なり。この童

子が舟の行くにつれて、彼方の山も歩くが如くに見ゆるを見て、奇妙なる歌をよみたりとなり。○歌の意は、漕ぎ行く舟の上にて見れば、彼方の山も歩きて見ゆるが、その山上の松は、行くとも知らぬてあらうかといふことにて、何の意味もあるにあらず。あしびきは山の枕詞なり。○童のこと。童の歌といふ如し。○につかはし。つりあひたりとなり。

今日、海あらけ、磯に雪ふり、浪の花咲けりある人のよめる。

浪とのみ一重に聞けど色見れば・
　雪と花とにまがひぬるかな

○海あらけ。海上荒くなりたりとなり。○磯には、うちよせては碎くる浪によりて、磯には雪が降り浪の花が咲きたりと、磯邊の浪の碎くるさまを形容したるなり。○歌の意は、單に浪とばかり聞けど、今その色を見れば、雪の如くも花の如くも見え、一つものとは思はれずといふ事なり。平凡なる歌なり。

廿三日。日照りて曇りぬ。此のわたり海賊のおそりありといへば、神佛を祈る。

○わたり。あたりに同じ。此の近邊なり。○おそり恐れに同じ。古言の言ひかたなり。

廿四日。昨日のおなじところなり。

廿五日。檝取等の北風惡しといへば、舟出たさず。海賊追ひ來といふこと、絶えず聞ゆ。

○室津を出でてよりは、今日までの如く港に入りて泊らざる故に、泊りの名なきなり。

廿六日。まことにやあらん、海賊追ふと言へば夜半ばかりより舟を出して漕ぎ來る、道に手向する所あり。檝取して幣奉らするに、幣の東へ散れば。檝取の申してたてまつる事は、此の幣の散る方に御舟速に

漕しあたまへと申し奉るを聞きて、童のよめる、

わたつみのちぶりの神に手向けする
幣の追風やまず吹くなむ

とぞよめる。

○まことにやあらん、云々。眞實であらうか、海賊が、かねての仇をかへさむとて、後を追ひかけ來たると言ふ事故に、かく泊り居りては危險なりとて、急に夜半頃より舟を出だして漕ぎ行くに、その途中に、海神に海上の無事を祈る爲めに供物を爲して祈る所あれば供物なさしむとなり。○手向。すべて神佛に幣を奉ることをいふ。幣とは供物なり。昔は今の如く、交通の便も開けず、旅路は極めて恐ろしく危險なるもの故に、旅行に出づれば、殊に途中の山や海にて、神に供物して、途中の無事を祈りたり。故に手向山といふ名さへ負ひたる山もあり。海上にても爲すなり。○楫取して云々。貫之自身にて幣を奉らずして、船頭をして、此所にて海神に幣を奉り祈らしめたるに、今神に奉りたる幣は、東の方に飛び散りたり。そこで、船頭の神に祈り願ふには、何にとぞ、この供物の飛び散りたる方に向つて、御船を速に漕がしめ玉へと祈り奉りたり。それをきゝて、側にありける童が、歌をよみたりとなり。

○歌の意は、海上の道の神に供へたる供物の飛び散りたる方へ、速に此の舟をやるべき順風をなにとぞ、神さまよ、絶えず吹かしめたまへと祈る意なり。

わたつみは海のことなり。ちぶりの神とは、道觸の神といふ事にて、その道にあたれる神といふ事なり。追風とは、志したる方へ舟をやるべき順風なり。

此の間に、風よければ、檝取、甚く誇りて、舟に帆あげよなど喜ぶ。その音をきゝて、童も嫗も、何時しかとし思へばにやあらん、甚く悦ぶ。此のうちに、淡路のたうめとい

ふ人のよめる歌、

追風の吹きぬる時は、行く舟の
ほてうちてこそ、嬉しかりけれ。

とぞ、ていけの事につけて言へる。

○此の間に、云々。かくなす間に、順風都合好く吹きいでたれば、船頭は、さればこそ、我が祈願の効驗は著し、我が祈りたればこそ、此の順風を得たれと甚だ得意の樣子にて、舟に帆をあげよなどいひていと威勢よく喜びあへりとなり。○その音を聞きて、云々。舟中の人々は、子供も老女も、皆、早く都へ歸へりたいと思ふ故にやあらん、船頭の帆を順風にあぐる物音を聞きて、甚だうれしく喜ぶとなり。○その中に。其の喜ぶ人々の中にてといふ事なり。○たうめ　老女といふ事なり。○歌の意は、順風の吹く時には、舟に漕れ行く身は、うれしくてうれしくて、誠に手を拍ちて喜ぶよといふ意にて、ほてをうつとは、喜びて手を拍つ事をいふ。さて、舟の帆にひきかけて細工せるなり。○ていけ。天氣といふ事なり。天氣のことにつけていへるとは、順風となりし天氣のうれしきにつけて、かく詠めりといふ事なり。

眞箇の快樂は到底口に言ふ能はす　ルウサウ

人を知り己を知りてこそ業に强けれ　楠公

速かに潔よく與ふるは信して與ふるなり　ゲーテ

かくばかり樂しく見ゆる世の中を羨ましくやのぞく月影　蜀山人

天才ありと雖も勉强力を要す　スマイルス

物言へば唇寒し秋の風　芭蕉

嬋娟たる貞婦は上帝の完全なる妙作なり　ハームス

春風桃李花開夜、秋雨梧桐葉落時　白樂天

小説

幼稚園（上）

柴田流星

誰しも一さうであらうが、樂しい幼な時のことを思ひ出すと、恰ど旅人が山の頂から故郷を望む時のやう、何とも言へない心地になつて、平和の泉が最う止めどもなく胸に湧いて來る。

自分は失望の谷に落ちた時、悲みの淵に沈むだ時、いつもこの事を思ひ出して、そしてこれに救はれて居た。アゝ二度と歸らぬ幼な時!、自分は渠からこの大なる賜を受けて居る、何でそれが忘られやう、何でそれが思ひ出さずに居られやう?

さうだ、今それを繰りかへさう。が、あの時——自分がはじめて幼稚園へ這入つたあの時の一週間だけを繰りかへさう。……何故?……何故つて自分が一生に忘れることの出來ない紀念日の一つだもの!

月曜日

「坊や、最う起きするんだよ、よ。」

つひ耳元でやさしい聲がして、誰やらの柔な手が自分の頭を撫でゝ居る。と、まだ半ば夢路を辿つて居た自分は、手ざわりにすぐ夫れと知つて、また眠氣ざして來るのをヂッと堪え、パッチリ眼を開くと、母さまの麗はしい笑顔が自分を眺めて居らしつた。

「母さま!」と、覺えず御頸に手をかけると、母さまは恁う御顏を寄せて居らしつて、あの燃えるやうな御唇で、自分の頬に接吻して下すつた。

「さ、最う起きおし、今日は幼稚園へ行くんだよ。」

兩の手で抱へるやうにして起して下さると、最うすつかり眼醒て仕まつた自分は、すなほに起き上つて、寢間衣を着換へさして下さるにも、顏を洗つて下さるに

も温和くして居ると、「坊は温和でいゝ子だこと。」と、また頭を撫でゝ下さる。

それから祖母さまと、父さま母さまと、兄さまに「お早うございます」を濟まして御膳に坐ると、梅(下婢の名)が小さなお茶碗に御飯をよそつて呉れる。で、自分が喫べ出すと、母さまは初中終豐かな頰のあたりに微笑を御浮べになつて、昵と自分を瞻つて居らつしやる。……その御眼と云つたら、暖い愛の泉をたゝへた、それは〳〵美しい――恰どお池の氷を解かす太陽さまのやう、人の心をとろ〳〵にして仕まいさうだ。

御飯が濟むで三十分程すると、母さまが白いリンチンの胸掛をして下すつて、

「坊はいゝ子だから、幼稚園へ往つたら温和くして、よく先生の仰しやることを聽くんですよ、いゝかい。」と、嚙で含めるやうに仰しやる。

自分はこの間から度々これを聞くので、最う遠くに承知して居ると云ふ顔つきで、無言に首肯く。いや、それも無意識で……白地に言へば其時小さな胸は、幼稚園、先生、お朋友と、いろ〳〵な空想に支配されて居たので。

それから祖母さま、父さま、母さまと順に「往つて參ります」を申し上げて、一足さきへ往しつた兄さまに追つゞく氣で、昨日勸工場で買つて頂いた帽子を被つて、梅と同道に御門を出ると、小刻みに走け出した。二町ばかり來て曲り角の處でちよいと家の方を振りむくと、昵と母さまが此方を見て居らしやたと、自分の足は立ちすくんで仕まふ。

「さ、坊ちやま參りませう!」

梅の聲に促されて、嫌々角を曲ると、最ういくら振りかへつても母さまは見えないので、また思ひ出したやうに走け出す。

遙か前方に二三人のお朋友と連れ立つて往しやる兄さまのお姿が見えた。自分の足はいよ〳〵早くなるが、奈うして追つゝかない。

「兄さまア……待つて――」と、二三度呼んで見た、け

れどもお耳に達かなかつたのでわらう、兄さまは振りむきもなさらないで、ずん〳〵往つてお仕まひなさる。その内に學校の前へ來ると、いつか兄さまのお姿は門のうちに消えて、最う何處へ往しつたかわからない。

自分と梅とは幼稚園の門を這入つて、小使部屋へ往くと、小使の爺さんに案内されて、先生たちの大勢居らつしやる所へ連れて往かれた。自分の小さい胸はその時、何とも言へない一種の臆氣を感じて、頭は自づと下つて來る。

梅がお辭儀をしたので、自分もわからずなりに禮をすると、やさしい、朗かないお聲で、

「此方へ來らつしやい。」と言ふのが聞えた。

自分は梅の袂につかまりながら、恐々そこへ往くと、

「いゝお子だこと、お幾歳?」と、仰しやる。

自分はそれに答へやうと思つたが、奈うしても聲が出ない、で、頻りにもぢ〳〵して居ると、梅がそれに答へて呉れた。やれよし、嬉しやと思つて居ると、

「お名は……?」と、また尋ねられた。すると梅が帶の間から小さな服紗包を取り出して、何やら書付のやうなものを出したので、見ると父さまが書いて下すつた願書であつた。

受取つて口のうちで讀むで居しやつた先生は、やがて彼の朗かなお聲で、

「土屋さん、このお方をお頼みします。」と、他の年若い先生に仰しやる。

「かしこまりました……(と、帶の間から懷中時計を出して、ちよいとそれを御覽なさると)おゝ最う直九時ですから、ちや彼方へ參りませう。」と、半ば獨語のやうに仰つて、つと椅子をお離れになると、つひ自分の側へお來になつて、

「さ、參りませう!」と、柔なかお手で自分の細い小さな手をお採りなさる。

さう恁うして居ると、恰ど始業の盤木が鳴り出したので、先生は自分の手をひきながらこの部屋を出て、教場の方へお越しになる。自分はひかれながらちよい〳〵後を振り向ひて、一間ばかり離れて附いて來る梅

にはぐれてはと氣遣ひながら往くと、とある敎室の前で立ち止まつた先生は梅を顧へつて、

「あの、あなたは扣所で待つてゝ下さい、敎室へは附添の方は入れないことになつて居ますから」と、さらに自分を見て、

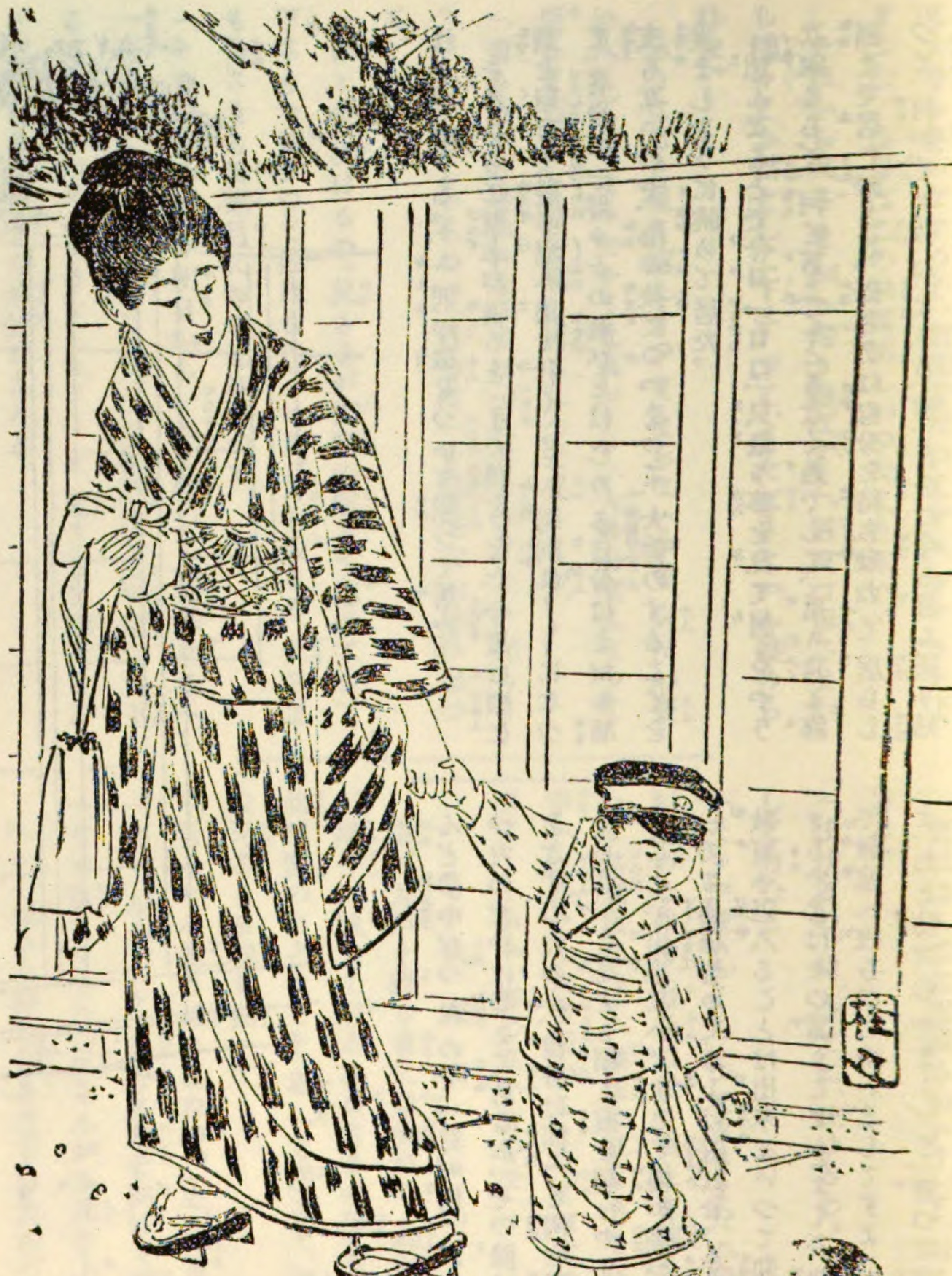
「ね、よござんしよ。貴方には先生がついて居ますから……」と、あの優しいお顏に神樣のやうな笑を浮べて、自分の顏を斜にお覗きなさる。自分はこの場合、一番依賴に思ふ梅に離れるのは、よし三十分か一時間であるにしても辛らいのであるが、「坊はいゝ子だから、幼稚園へ往つたら温和くして、よく先生の仰しやることを聽くんですよ、いゝかい。」と、この間から幾度となく噛むで含めるやうに仰しやつた母樣のお言葉もあるので、知らない山路を獨旅をするやうで心細さの限りではあるが、兒供ごゝろにも否と云はれないものに斷念めて、僅に――自分でもしたか爲ないかわからぬ位に――首肯くと、

「さう、よござんしよ、お怜悧だこと。」と、戸を開けて突と中へお這入んなすつた――自分も一所に――最う梅の姿は見えない。

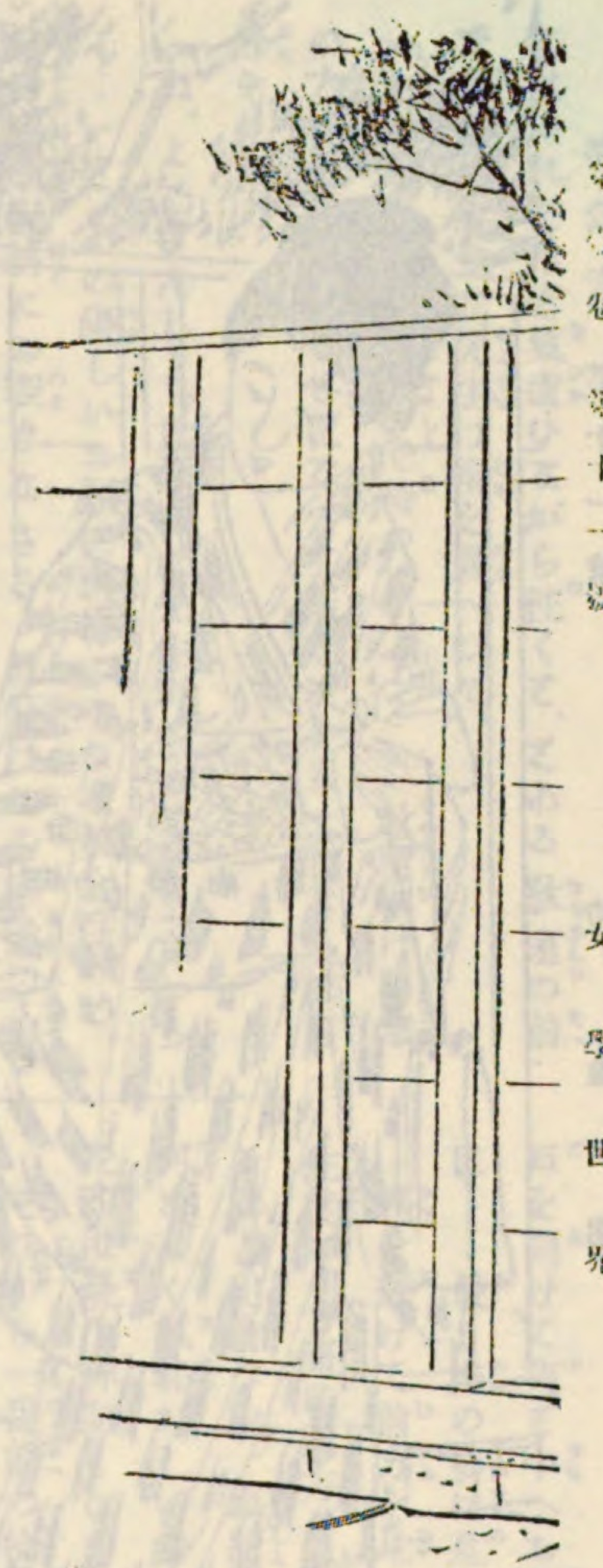
顏を擧げて前方を見ると、自分と同年配位な男女の生徒が、一齊に此方を向いて居た、自分の眼は端なくもそれと出會つた。場所なれない所爲であらう、自分は何となく氣恥かしいやうな心地がして、自づと俯向いた頭は最う仰向くことが出來なかつた。

それから一番前の椅子に腰掛けさせられて、やはり俯向いたまゝ固くなつて居ると、程なくオルガンの音がして、一同が立ち上つたので自分も知らぬながら一所に立つと、再びそれの低い音がして、隣席の人たちが禮をしたで、自分も頭を下げて他人のする通りに腰を掛けると、さらにブーと云ふ音がして、また一同が立上る、こんどは「君が代」がはじまつた。

自分は兄さま方がよく唄ふので、最うすつかりそれを知つて居たのだが、どうしても此時は聲を出して唄ふことが出來なかつた。いや、これはかりではない、その他の唱歌も大方は知つて居るものであつたが、何



幼稚園



れも口のうちで、一同の後をついて唄つて居た。
　そのうちに盤木が鳴ると、また禮をして、今度は順に列を組むで遊歩場へ出て行く、と、一同別れ／＼になつて、各自に一群々々の遊びをはじめる自分はまだお朋友もないので、梅の袂につかまつて、大勢のすることを羨ましさうに眺めて居た。
　恁んなことで今日一日は、只最う夢を見て居るやうな氣もちて、何と言ふこともなく過ぐして、兎も角も終刻まで居て歸ると、母さまは自分を待ち兼ねて居らしつて、何かとお尋ねなさる、が、自分は今も言ふ通り殆んど夢中だつたので、「君が代」だの「水車」だのを唄つたのだけは覺えて居るが、その餘は先生が何のお話をなすつたのか、自分は同一と何を習つて來たのか、いくら考へて見ても頓と雲を摑むやうで、明白お答をすることが出來ない。すると梅が側から口を添えて、
「でも奥樣譽めてお上げ遊ばせ。先生樣が梅と一所に敎室へ這入ることは出來ないつて仰しやいますと、坊ッちやまはその言ふことをよくお聞き遊ばして、一人で敎室へ往らつしやいましてすよ、おきつう御座んしよ、ねえ坊ッちやま！」と、言つて呉れたので、母さま

も大層お譽めなすつて、御褒賞だつてビスケットを下すつた。自分はこの時程嬉しかつたことない。

それから父さまがお歸り遊ばすと、這度は母さまから種々とお話をして下すつて、また父さまから譽められた。

恁うなると最う嬉しくつてならないので、何だか豪い人にでもなつたやうな氣がして、大層得意になつて居ると、父さまのお側に居らしつた兄さまが、

「晋ちやんは豪いけど、まだ一人ぢや往けないだらう？」つて仰しやるので、自分は一寸躊躇たが思ひ切つて、

「むゝん、往けるの、兄さまが御門の處まで連れてつて下さりや晋だつて往けるの！」と、首を振ると、父さまも母さまも眞面目におなんなすつて、

「そりや豪い、ぢや明日から一人で往つて御覽、坊さへ一人で往く氣なら、兄さまだつて御門まで位送つて下さるつて、ねえ、さうだらう？」と、兄さまを御覽なさる。兄さまは默つて承知なさると、

「晋はほんとに出來るかい？」と、母さまが又お尋ねなさる。

「往けるの。ほんとに、往けるの。」と、恁う肩を聳やかして力むと、

「そりや豪い、〱」つて父さまだの母さまだの梅までが譽めるので、自分は最う無上に嬉くしつて〱、すつかり其氣になつて、寢床に就までそれを云つた居た。辛い思ひをした晝間のことなどはすつかり忘れて仕まつて……いや、罪のないもので……！

火曜日

梅が天戸を繰る音に眼覺めて、仰向に寢たまゝ上眼で障子に映つて居るお日さまの影を瞶めながら、最う幼稚園のことなどを考へて居ると、隣へ寢て居らしつた兄さまも眼を開いて、

「晋ちやん最う起きしたの。」と、此方を御覽なさる。

「えゝ、今！」と、自分も頭を向けて莞爾すると、

「ぢや起きしやう、兄さんがお床を上げて遣るから、‥」と、兄さまがお起きなすつたので、自分も續いて起

きた。すると折よく母さまが遣つて居らしつて、
「おや、二人とも早く起きしたね、おゝ感心!」と、自分に衣服を着替さして下さる。その間に兄さまは手敏く蒲團を疊みなどして、さつさと顔を洗ひに往つしやるので、自分もいつしよになつて、
「母さま、お坊も獨でお顔を洗ふの、ね、」と、首を横にして御尋ねすると、母さまはおこと輕くお笑ひなすつて、
「おや、お顔も獨で……?」と、殊更に驚いたやうな風をなさる。自分はいよ〳〵得意になつて、
「母さま、お手拭は……?」と、早一足は兄さまの後を追つてお湯殿の方へ往かうとして居ると、母さまはやはり笑つて居らつしやりながら、お手拭を取つて下すつて、自分がお湯殿の方へ走けて往くと、その後から尾いて往しつた。
で、自分がおしやまな風をして顔を洗ふ間默つて眤と見て居らしつたが、洗つて仕まふと側にお寄んなすつて、差して居らしつた櫛を濡らして髪を梳て下さる。

それが濟むとお座敷へ來て、さて平生の通り順に御挨拶をして、兄さまと差向ひで朝飯を喫べ、兄さまが用意をなさる間、ちやんと坐つて待つて居ると、
「坊はほんとに獨で往けるかい?」と、母さまが又氣遣はしさうにお聞きになる。自分は昨夜から其積りであつたのだが、あらためて恁う云はれると奈うしやうと云ふ疑問がふいと浮むで來て、一寸考へる氣になる。けれども一端往くと言ひ切つたので、見供でゝろにも往けないとは言ひかねて、
「往けるの、ほんとよ……」と、きつぱりお答へした。
「坊は幼穉園へ往つてから、一日で大層豪くなつたんだね。」と、心から愛情の籠つたお聲でお譽めなさる。自分は例の得意になつて、
「坊はほんに豪いの……あの兄さまよか?」
「あゝ、豪いとも〳〵、兄さまだつて、父さまだつて比敵やしない……ほんとにも!」と、仰しやるので「母さまの仰しやる事を疑つたことのない自分は、何よりこの言葉を嬉しく思つて、兄さまの用意が濟むと「往つて

參ります」を濟まして、勢よく門を出た。
昨日の曲角へ來て振りかへる、やはり今日も母さまが門の處に立つて居らつしやる。自分はその角を曲りしなに最一度禮をして、兄さまに手を曳かれながら遣つて來ると、やがて幼稚園の門へ來た。と、兄さまが立ち止まつて、
「最ういゝかい?」と、お聞きなさるので、ちつとばかし嫌だつたけども、默つて首肯くと、
「ぢや兄さんは往くよ」と、走け出して學校の方へ往らしつた。自分はその後姿が門へ這入つて仕まふまで立ちすくんで見送つて居たが、漸々に思ひ切つて門を這入ると、昨日の先生が遣つて居らしつた。自分はあわてゝ禮はすると、
「おや、今日は最うお一人、まアお怜悧だこと!」と、さも〳〵感心したやうに譽めて下さるので、彼の得意に支配されて、どうか恁うか敎室へも獨で往くことが出來た。
併しまだお朋友と言つては一人もないので、一同が樂しさうに遊むで居る時も、隅の方に小さくなつて、物淋びしく羨ましげに見て居なければならぬ仕儀、これが一番辛らく心細くあつた。
それでも途中で歸らうなどゝ云ふ氣は微塵もない、遊戯の時も授業の時も、先生がよく氣をつけて下すつて、自分には母さまとちつとも變らないやうに感じられたもの!
で、歸途も獨で來やうと思うて、兄さまの學校はまだ退けなかつたのであるが、往きによく覺えて置いたので、そんなに遠くもなしするので、兄さまを待たうともせず、一同のなかに交つて門を出ると、
「坊ちやま〳〵」と、梅の呼ぶ聲がした。はてなと思つて振りかへると、つひ後ろにやつて來て、
「おきつう御座いますね、獨でお歸んなさるお積りで?まア、」と、譽めて吳れる。自分はまた例の、
「梅、最う來なくつてもいゝんだよ、途なんかすつかりわかつて仕まつたんだから!」
「おや、最うおわかりで、お怜悧で居らつしやいますこ

とね。」
「だつて近や、ぢきだねえ梅！」と、自分はいそ〳〵と先に立つて途を急ぐ。やがて家に着いた。
「母さま只今！」
玄關を上ると勢よく恁う云つて、直ぐに茶の間の方へ往つた、と、母さまは半紙に包むだお菓子を出して、
「さ、御褒美！」と、自分の小さな掌に上せて下すつて、
「今日は獨で嫌ぢやなかつたの？」と、微笑みながら仰しやる、自分は何とも無かつたこと、獨りで歸る積りで居たことまで繰かへし〳〵お話すると、母さまは喜ばしさうに絶えず笑みの影を見せながら聞いて居らつしやるその樣、自分は又その樣を見て何より嬉しく思つた。いや、それはかりではない、今日のお手柄は祖母さまにも、父さまにも、皆に譽られたので、自分の心と云つたら…無邪氣な滿足に充たれてゐたのである。

泰西お伽噺

金持と貧乏者

女子英學塾　月子女史

昔々神樣が人間の貌をなさつて此世界にお住ひの頃でしたが、或日、見すぼらしい風をして旅びをしてゐられます中に夜に入つたのに近所に宿屋は無く、また非常にお勞れになつたので、大層困つてゐられましたが、フト直ぐ側に大きくて立派な家と、貧乏な小い破屋とが、向き合つて建て居ましたので、是は仕合なことだ、此金持の方なら一人の客位は左程の迷惑でもあるまいから、一夜の宿を賴まうと思召して門口をトン〳〵
『御賴み申ます。』
と聲をおかけになりました。すると窓から首を出しましたが、至つて因業な顏の男でして『誰だ〳〵、何の用だ。夜分に人の寢込みを叩き起して……』と慳貪に呶鳴りました。神樣は、ハア此處の主人は性根の善く無い奴だ、神に對して無禮の事を云ふと御立

服になりましたけれど、なほ丁寧に又御自分の素性は御明かしにならずに、旅の者だが、夜に入つて宿が無くて困つてゐるので、どうか一晩、何處の隅へなりと泊めて頂きたいと仰いました。主人はマサカ今時分に神樣が獨旅をなさらうとは思ひ付きませんから、盜賊か又は乞食では無いかと、忌やな目付で、神樣の頭の先から足の爪尖までジロ〳〵睨み付けましたが、いかにも穢い衣服を着てお出でなのでテッキリ乞食と思ひ込み頭を振つて『ナラン〳〵、わしところは木賃宿ぢや無いよ、御前の樣な者を泊る事は眞平御免だ。木の下でもが、丁度似合つてゐるぢや無いか、屋根の下へ寢やうなンて、分不相應だ。エヽ、馬鹿〳〵しい。コンナものが來やがつて、あつたら夢を破られた。』とクド〳〵云ひながら、ピシと窓を〆めて仕舞ひました。神樣は仕方なく直ぐ其處を立退いて、今度は向ふの貧乏家を叩き起しますと亭主が戸を開けて、『何處の御方かは存じませんが、今晩は眞の暗闇で一寸先きも見えませんから御歩きは御難儀でしやう、此樣な汚くろしい處でも御構ひなくばドウゾ御泊り下さい』と云ふので神樣は大きに悦ばれて家に御這入りになりますと、內儀も出て來て、『マアよくいらつしやいました、御覽の通りの破屋で、何もムいませんが、マア何卒御自由になすつて下さいませ。ホンの有合せのものでムいますが一ツ夕飯を差上げませう。』と云つて、甲斐々々しくお芋やお味噌汁の御馳走をこさへて、神樣に差上げました。御飯が濟むと內儀さんは亭主に『モシ御前樣、今晩は私共は藁の上で寢ませうや、そしてお客樣を粗末でもあの蒲團でお寐し申しませう、餘程勞れておいでの樣ですから』『ウ、さうとも〳〵それが良いとも』と云ふ詞も終らないうちに早速お客樣に若しあなた今晩は御心地が惡くも、どうぞ私等の蒲團でお寐み下さい』と申と、神樣も餘りの親切に氣の毒がられて、それには及ばないと再三お斷りになりましたが強いての勸めに其好意を御受けになりました。翌朝主人夫婦は早朝から起き出して、出來るだけの御馳走を整へますうちに御客樣も起きておいでになり、心入の手厚い饗應

を御受けになり、大層御悦びになりまして、丁寧に禮をお述べになつて、いざお出かけといふ時に『お前樣方は餘り親切に待なしてくれたので御禮のしるしに何なりと三つの望を叶へてあげやう』『それは有難う御座います、イヤもう私共は二人揃つて永生きをして居られますれば何より結構で御座います、そして生きて居るうちはどうかマア、樂しくして身體が丈夫で、食ふ丈のものさへありますれば、それに越した事は御座いません。今一ツはさうですな、何も別に是と云つて望ましい事も御座いません』『どうだね一ツ此古い家をよして新しいのと建替へて貰つては』『左樣で御座います、此處の地面に建てゝ頂かれゝば、それも亦結構で御座います』すると神樣は『ヂヤ、其望はどれも叶へてやるぞ。』と仰ると、乍ち、今までの倒れかゝつた荒屋の見る〱向ふの金持の住居よりか、ズット立派な新しい瓦葺の家になりました。

向ひの金持の家では主人が遲く起き出して、何の氣無しに眼をこすりながら、窓を開けますと昨宵まで穢い草葺の小屋のあつた、丁度其處に今朝は急に立派な新しい瓦屋根の家がチヤンと建つて居ますので、驚いて内儀を呼んで『オイ〱あれはどうしたのだ、昨宵迄アンナ穢い家であつたものが、アレ見ろ、マアあんな立派な家になつてゐるぜ、眼はモウ醒めた筈だから、まさか夢ぢやあるまい、ドウシタンだか、聞いて來い。』内儀周章て急いで向ひに往つて尋ねますと其屋の亭主が昨晩のお客の事から、其人が三ツの望を叶へて呉れた事迄すつかり話しました内儀家へ飛んで歸て來て、のこらず主人に傳へますと、『さうか、それを知つて居れば昨晩泊めてやる處だつたが殘念の事をしたなア。』とこぼしますと、内儀は利口ぶつて『あなたが鈍だからアンナ福の神樣を逃かしたのですよ、サア今からでも早く馬で追跡てお出なさい、必と追付きますよ、そしてあなたも是非三ッの望を叶へてお貰ひなさい、早く〱。』

慾深者はサウだ〱此機遁す可らずと直ちに馬に跨つ

て一目散に追ひかけて行くと、案のじよう神樣に追ひ着きまして『モシ〱旅の御人、昨夜私はあなたを御泊め申す積りで、鍵を取りに奥に這入りましたあとで、向への貧乏者の内へ往つておしまいに成りましたので、誠に御氣の毒樣なとを致しました、ヘイ〱ドゥか惡く思召さないで頂きたう御座います。若し私宅にお泊りになりますれば向ひよりかモットよい御饗應をするので御座いました。』とペコ〱頭を下げて申しますと、神樣は腹の中で可笑しく思召しめして『よし〱そんなら歸りには泊りませう』『ドゥかサゥ致して下さい。ですが、其時とは云はず、今直に私にも三つの望をどうか叶へて頂きたう御座います。』『よろしい叶はせてやらう、が……しかし、お前は望まん方がよいかも知れんよ。』

と仰られました。慾に目がくらんでゐますから、どうして〱望まないで居られませうか、心中ではもはや何を望で見やう、金銀を富士の山程欲しいと云はうか、天子樣の御殿のやうなのを建てゝ貰はうと云はうか、死んでも生命があるやうにと願はうかなどゝ、いろ〱慾の深か過ることを考へてゐました。神樣は『是非共、叶へて欲しいのなら、よろしい承知したから、モゥ家へ引き返したが可い。歸り途にナンでもお前の望みを三つだけ叶へて上げやう。』と仰せられたキリ、又たヅン〱と先きへ御出になりました。

慾深者は此言を聞いて笑壺に入り別を告て歸る途中、ハテナ何を望んだらよからう、何ぞ一番甘い事はあるまいかと熟々考へて居ると知らず識らす、手綱が弛んで馬が暴れ出して、切角考へてゐるのを邪魔されましたから、エ、ヂレッタイと思ひましたが輕く馬の頸を叩いて、靜かにしろ〱と宥めました。いかに宥めても、賺しても彌々以て暴れ出しますので、遂々眞赤になつて怒つて、『エ、畜生！　首でも折れろ！』と云ふが早いか折れるが早いか馬の首がポキリと折れて道端に落ちました。ヤレしまつた事をしたナと後悔しましたが、ナァニ搆ふもんか、未だあとに二ツの望があるぞ、エ、どうともなれ、と呟きなから例の慾深の根性を出し

て、馬はもう仕方が無いが、せめて鞍だけでも持て歸れと云ひさま御苦勞にも重い鞍をエンサ〳〵と肩に擔いて晝中の暑い最中に歩き出しました。非常に骨が折れて、息はきれるし、汗は出るし、おまけに重みで肩は擦りむけるし、痛いのも痛いが置いていくのも惜しい、やつとの事で家に近づいて來ますと、ふと心の中に、定めし女房は涼しい部屋に氣樂に座つて歸つて來るのを待つて居るに違いないと思ひ出しますと、いよ〳〵以ていま〳〵敷てたまらなくなり、『ゑい、畜生!、彼奴こそ此鞍に附着て仕舞つて離れられなけりやいゝに!』と申や否や、不意に肩の鞍が消えて無くなりました。ハテナ不思儀だぞ、又是は困た事になるものではあるまいか、と思つて眞赤になつて、息せき切つて、歸つて見ますと、案のぢよう内儀は座敷の眞中に鞍に跨がつて悲鳴を上げて泣て居ます、いくら離れ樣としても彼樣にも此樣にも動きがつかないでしたが、『エ、さうしてゐろ!、望はあと只一つだけだ己は世界一の良いものを望むから、』と云ふと内儀は首を振つて、『イエ〳〵どんなに良いものを望んだつて私をこんなにして仕舞ては何の役に立つものですか、あなたが斯樣なすつたのですから、あなたが離して下さらなけりや承知しません承知しません。』とて、泣き付きますので、いかに慾張の先生も仕方なくしてとう〳〵『どうぞこの鞍が元の通に離れますやう。』にと望みますと、直に離れました。是で最早三つとも望か叶へて慾深の先生何の得た處も無いのみか大切の馬を一匹失ふやら色々の困難を引起すやらして散々の目にあつただけで御座いました。



雑録

物語の發達

文學士　中内蝶二

二　物語文の祖

平安朝は非常に文學の隆盛な時代であつた。これまでは、日本の國に日本の文字なく、たゞ、三韓、支那などより傳はつて來た漢字、漢文を以て、我國の詩人や、文學者の思想を發表して居たのである。彼の古事記とか、萬葉集とかいふやうな有名な書物でさへ、皆漢字を用ひて書いてゐるので、隨分不便なことが多かつたであらう。ところが、此時代になつて、假名文字といふ一種の簡易な字體が作り出された。即ち平假名と、片假名とで、平假名は弘法大師(僧空海)の作る所、片假名は奈良の朝に、吉備眞備が作り出したものだと、世に普ねく傳へられて居るが、其眞僞は兎も角、この假名文字の發明によりて、我國文學に進路を開いたことは爭ふべからざる事實である。

物語文の起つたのも即ち此時代である。物語と云ふものは、元來談話を文字にして見せるものであるから、未だ發達しなかつたうちには、只人の言葉のまゝを寫した、平凡な文章であつたが、それが、次第〳〵に進歩してきて、文句をも華麗に飾りたてるやうになり、また、趣向とても其通りて、初めは小兒だましのやうな、極めて單純なものであつたが、後には、緻密に意匠を凝らして、やゝ當時の人情を穿ち、世態を寫し、人間一生の盛衰などを書き綴つたものも出來るやうになつた。其中にて、最も古いものは竹取物語で、次に出たのは伊勢物語であらう。この外、宇津保物語、住吉物語、落窪物語、濱松中納言物語、大和物語、とりかへばや物語、多武峯少將物語など世に知られたもので、また、この外にも、名ばかり聞こえて、其書物は今の世に傳はつて居ないものが、三十種餘りもある。是等の多くの物語は、何れも、得意の筆を揮つて、面白き趣向を搆へ、世態、人情を寫してゐるが中に、其趣向、文章、共に絶世の佳作とたゝへられて居るのは、源氏物語で、物語文中最上點に達したものと云つても可い。源氏物語の後に出た狹衣物語なども、多少見べきものではあるが、詞の花の色あせて、彼の紫の匂ひには、かけて及ばない。

三　竹取物語

前にも述べた通り、物語文の祖は竹取物語である。

此物語は、何人の作つたものであらうか、其作者を詳かにしない。或は、源順の作であると云ふ說もあるが、恐らく、貞觀、延喜の年號の間に出來たものであらう。或說には、仁明天皇の頃よりは後、醍醐天皇の頃よりは四五十年前であらうと云ひ、または、嵯峨天皇より、清和天皇の頃までの間に、才學文章のすぐれた人の書いたものであらうといふ說もある。本居宣長の源氏物語玉の小櫛には、

竹取物語は、いつの世に作れりとは、定かに知られねど、いたく古きものとも見えず、延喜より以來のものとぞ見えたる云々

とあるを、田中大秀の竹取物語解には、

されど、源氏物語に、繪は巨勢相覽、書は紀貫之かけりと見ゆれば、延喜の以往よりありしものなるべし。元來作物語なれば、拘はるべきことにはあらざめれど、彼の物語は、作主のいたく心しらひせられたる物なれば、徒然草にいへる、小野道風朝臣の書ける朗詠集のたぐひにはあらで、古くよりもてあそびて、時代も似つかはしければこそ、相覽ぬし、貫之ぬしなどの物せられつる由に云はれけめ。據として作れりと見ゆる寶樓閣經は、高野大師の將來なりといへば、大同の比より後なるべきは更なり云々

といつてある。此說が先づは正しからうと思ふ。

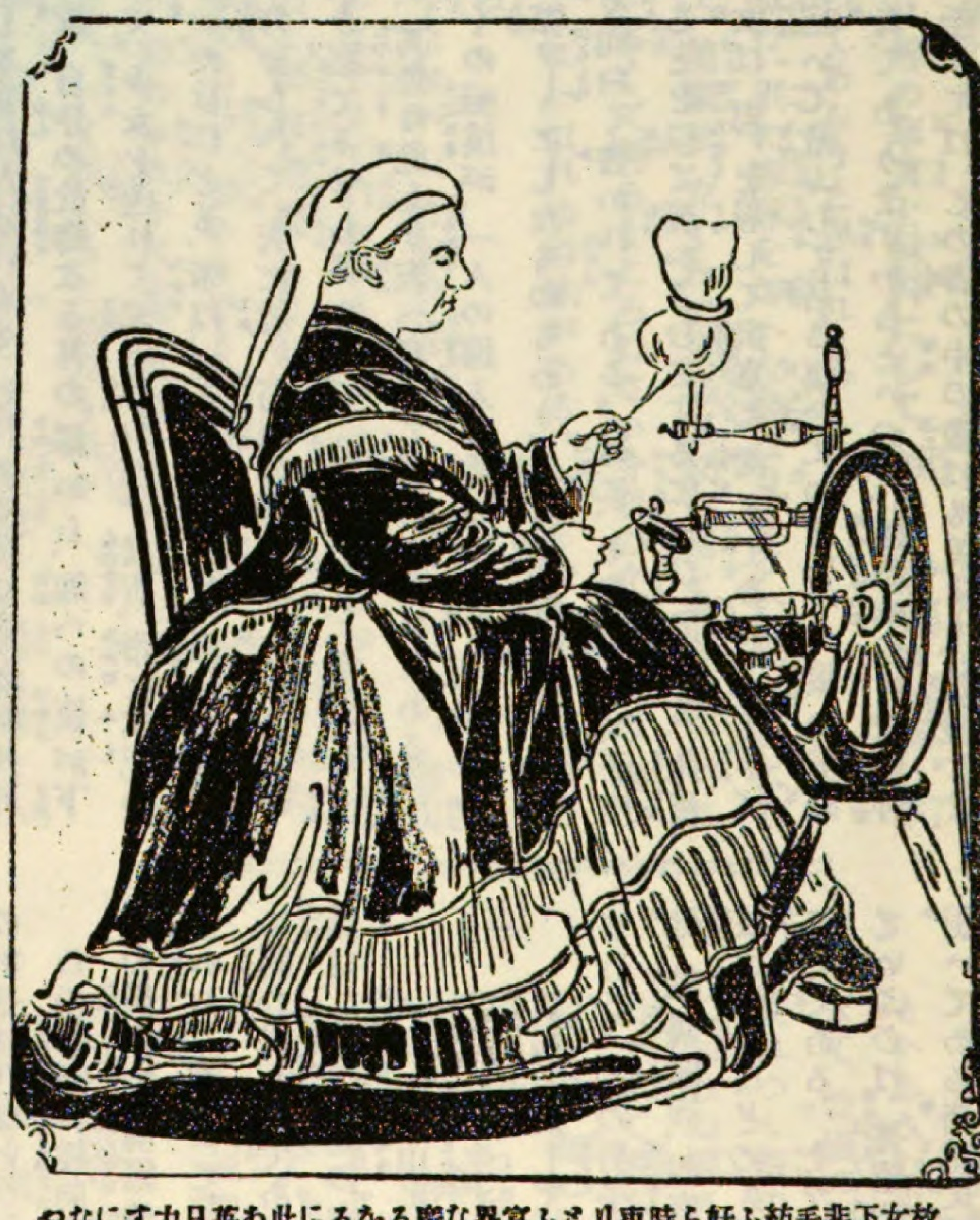
竹取物語の如き名高い書物が、何故作者を詳らかにせぬのであらう、思へば怪しいやうにもあるが、併し、これには理由のあることで、此物語の出來たのは、假名文字が作られて間もない時分であるから、昔しの習慣は猶ほ去り難く、男子は、依然として漢文を得意とするものが多くて、假名文の方は、多くは婦人の間に玩ばれて居た。男子にして、たま〱假名文を書いたものがあつても、何れも世間を憚つて其名を隠し、或は、故さらに、女の作つたやうに書いたものもあつて、かの紀貫之の土佐日記の冒頭に、

男のすなる日記といふものを、女もして見むとす

るなり云々

と書いてあるのも、即ち其一例である。當時の文學社

故英國女皇陛下紡車に寄り玉ふの圖



故英國女王陛下は、非常に毛糸を紡き玉ふことを好ませられ、時々紡車に寄り玉ふと云ふ、其富強世界に比なく、廣大なる領土を有する君主にして此行爲あり、英國今日の勢力を有する豈に偶然ならんや

會の風潮が、この樣な狀態であつたから、自然作者の判然しない物語の多い道理である。また、此時分に、假名の異名を、女文字と呼むで居たのを見ても、假名文が、主として婦人の間に玩ばれて居たことがわかる。

竹取物語に書いてある筋の大略は、誰も知つて居る通り、昔竹取の翁といふ親爺があつて、竹の中に、光り眩く輝いて居る少女を見出だし、それを我子として養育して居るうちに、忽ち生長して大人になつた。この女は、世にも珍らしいほどの美人で、其噂が廣く四方へ聞こえたから、高貴縉紳の君達は、何れも想ひを懸け、何とかして、自分の妻に申し受けたいものであると、種々艱難辛苦を嘗めて、競うて心をつくしたけれども從

はない。最後に、其時の帝、この由を聞しめして、宮中へ御召しなされたけれども、これにも從はず、終に八月の望の夜、自分の故郷なる月の都から、迎への使が下つて來て、少女を連れて天へ昇つた。其折、帝に不死の藥を奉つたけれども、帝は、これを見るさへ思ひの種であると仰せられて、天に近い高山の頂上で、彼の不死の藥を焚き棄てさせられたので、其山をふし(富士)の山と呼び、其煙は絶えず天へ昇つて居ると書いてある。中には多くの痴漢が、一人の婦人の爲めに心を迷はして、身を滅茶〳〵にしたものもあり、其有樣、滑稽をつくして、頗る面白く書かれてある。殊に、その末段、天子の富と尊さとを以て靡かさむとするに及び、讀者も、此度こそ少女は志を屈して御意に從ふであらうと、半ば疑ひを抱いて危ぶむで居る塲合にのぞむで、妾は元來變化の身でありますからといつて、飄然去つて天に昇る處に至つては、この書の中の帝はもとより、讀者をまでも呆然たらしむる作者の意匠と技倆とは、實に賞嘆すべき者である。思ふに、これは、作者が當時の世の中の狀態に慷慨する所があつて、諷刺の爲めに書いたものかも知れない。

この物語の趣向は、既に契仲阿闍梨も云つた通り、種々の佛書や、漢籍の中にある說を取り、これに、我國で昔から、傳はつて居た話などを組み合はせて、一篇の文に綴つたものである。竹の中から人の出て來たといふ話は、寶樓閣經の中に、

一の寶山に三仙人あり、その三人の沒處に三つの竹を生ず、その竹の中に各々一童子を生ず、容貌端正にして、色相成就す云々

とある。この男子を女子と變つたばかりである。この他、華陽國志、西南夷傳、幽怪錄、甘蔗氏經、佛說柰女耆域因緣經などにも、同じく、竹の中から人の出たことを記してある。また此物語の本文の中にある佛の御石鉢といふのは、普曜經に出てゐて、龍の珠は、太平廣記に引いてある奇傳に載せてある。また、月の都の事は、起世經、龍城錄等に見え、天の羽衣の事は、捜神記に、昇天のことは、靈異記に見えてゐる。此時分には、支那の

魏晉このかた行はれてゐた搜神記だの、續齊諧記だのといふやうな、怪幻奇異な小說類が、既に我國へ舶來して、學者の讀みものとなつてゐたから、文才のある人々が、これ等の事實を材料にして、始めて架空の物語を作つたのであらうと思はれる。

文章は、別に彫琢を加へた痕は見えないが、いかにも古雅で、簡潔で、たくみに哀怨喜怒の情を描き、徒らに飾りが多くて得るところのない今頃の文章とは違つて、云ふにいはれぬ妙味がある。今その文例を擧げて見れば、

今はむかし、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて竹を取りつゝ、萬のことにつかいけり。名を讃岐造麿となむいひける。その竹の中に、本光る竹一筋ありけり。あやしがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いと美しうて居たり云々

前一昨年の二月十日ごろに、難波より船に乗りて、海中にいでゝ行かむ方も知らず覺えしかど、思ふことならでは、世の中に生きて何かせんと思ひしかば、たゞ空しき風に任せへありし、命死なばいかゞはせむ、生きてあらむ限りはかくありきて蓬萊といふらむ山に逢ふやと、浪にたゞよひ漕ぎありきて、我國の內を離れてありき廻りしに、或時は浪荒れつゝ海の底にも入りぬべく、或時は風につけて知らぬ國に吹き寄せられて、鬼のやうなるもの出で來て殺さむとしき。或時には來し方ゆく末も知らず、海にまぎれむとしき。或時には、いはむ方なくむくつけなるもの來て、食ひかゝらむとしき。或時には、海の貝をとりて命をつぐ。旅の空に助くべき人もなき所に、いろ〳〵の病をして、行方すらも覺えず。船の行くにまかせて海に漂ひ、五百日といふ辰の時ばかりに、海の中に遙かに山見ゆ云々

我弓の力は、龍あらばふと射殺して首に玉はとりてむ、遲く來るやつばらを待たじとのたまひて、船に乗りて、海ごとにありき給ふに、いと遠くて、筑

紫の方の海に漕ぎ出でたまひぬ。いかゞしけむ、はやき風吹きて、世界くらがりて、船を吹きもてありく。いづれの方とも知らず、船を海中にまかり入りぬべくふき廻して、浪は船にうちかけつゝまき入れ、神は落ちかゝるやうに閃めきかゝるに云々　（未完）

三十二相を具へたる人

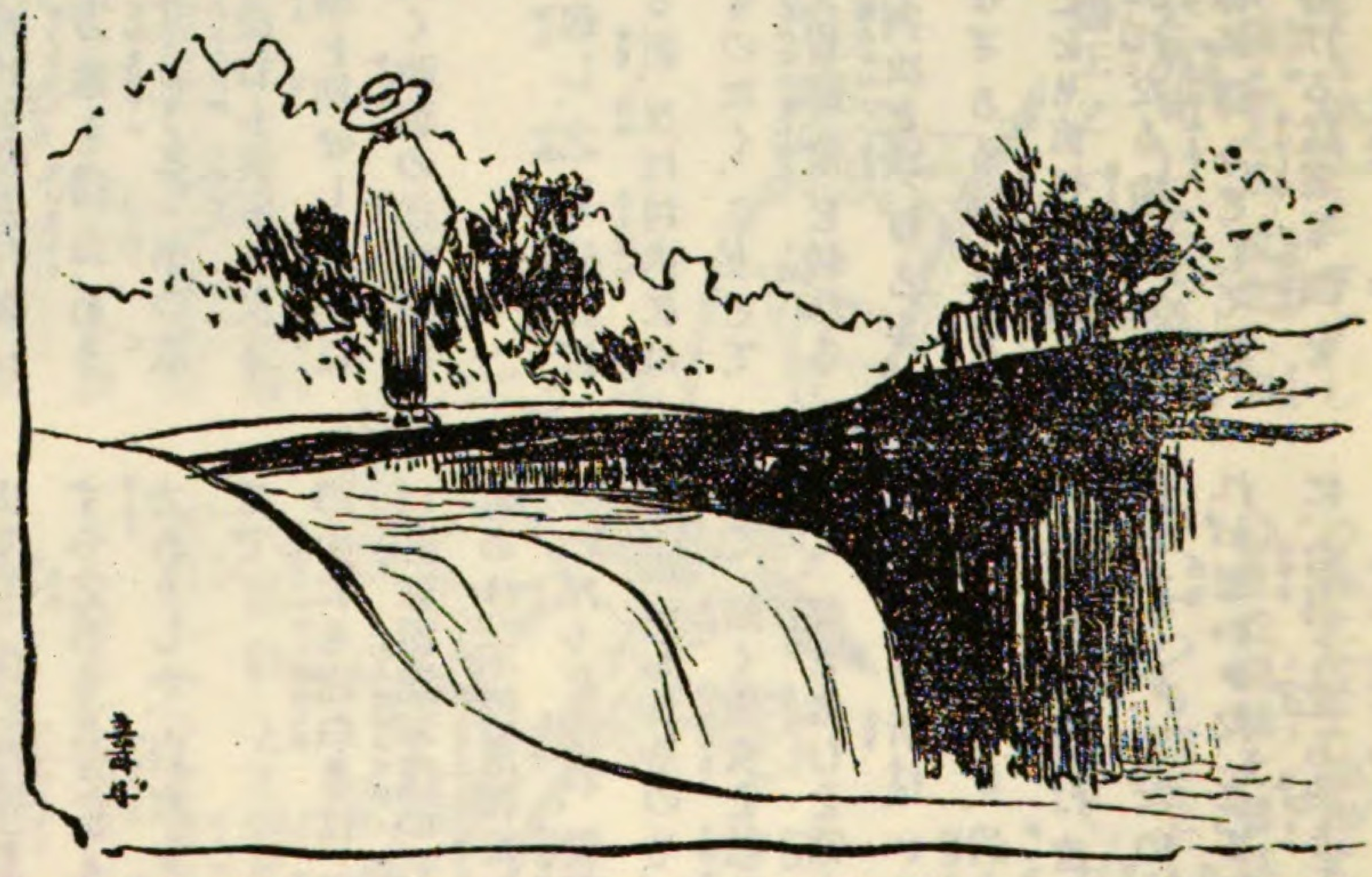
九皐生

三十二相を具へたるを最上の美人と世人は想ふめれど、こは大いなる誤りなり。三十二相を具へたるものあらば、そは化物にこそあれ、人間にてはよもあらじ。況してや美人をや、

三十二相とは佛典の説にして、敎祖佛陀の御身に具はりし相好なりきと傳ふ。かゝる馬鹿々々しき説は素よりお釋迦様自身の口より出でしにはあらざるべけれど、生理を無視し自然を蔑如せることの餘りに太だしければ、玆に其の大略を擧げて讀者に示めすべし。

三十二相の第一箇條に『足善安住、趾痕隨地密接』と云ふことあり。こは足のすはり好く、足のひら常に地上に密着すとの義也。足のすはり好きは可なれども、足のひらの平にして地に密接するは、遠路に勝えざるしるしにて、現に今の徴兵檢査規則には不合格と定められたり。人は足のひらの地に密接せざるこそ望ましけれ。第四箇條には『指纎長』、第五箇條には『手足細輭』と云ふことあり。こは指の細長く、手足の細やかに軟かなるを云ふ。何れも肺病患者などの特徴にして新日本の美人には望ましからぬ骨相なり。第七箇條には『立手摩膝』と云ふことあり。立てば手が膝頭にとゞく程長しとの意味にて、こも亦餘り好ましからぬ事なり。第十三箇條には『身毛上靡』とて、身中の毛髪凡て上方になびくの義、恐ろしき相なり。第十四箇條には『諸毛孔一々生毛、紺青色、螺文右旋』とあり。毛孔ごとに毛ありて而かも其毛は紺青色なりとは少しく化物じみたり。第十五箇條には『皮膚金色』とあり。人の膚は眞白にてこそ美はしとも見られ、如何に金の世の中と

は云へ、皮膚までが黄金の如くにては興醒むる心地せずや。第十七箇條に『兩手兩足兩肩及項七處悉滿』とあるは、手、足、肩頭の諸處すべて圓ろく肥りて、筋肉の伸縮、骨格の形狀など外に現はれざるを謂ふ。手足の圓ろく肥りたるを練馬大根の樣なりとこそ云へ。第二十二箇條には『其四十歳悉齊直』とあり。齒四十本ありと云ふだに驚るゝを、其の四十本の齒悉く齊しく且つ直しと云ふに至ては、吾等人間にはあるまじきことなり。第二十六箇條には『其舌廣長、若出於口、覆面到髮際』とあり。口より出せば顏を覆ひ、額のはへぎわまでも達く程の廣長舌は、いよ〳〵化物じみたり。如何なる美人にてもかゝる廣長舌もて額の上までも舐められては堪つたものに非す。第三十二箇條には『眉間有毫、其色光白、螺文右旋』とあり。眉の中間に白きちゞれ毛なとありては聊か薄氣味はろし。



三十二相を具へたる人

三十二相とは大かた右に說ける如きものにて、美人の相などゝは思ひもよらぬなり。

瓜生岩女（四）

文學士　常盤大定

◎感化力

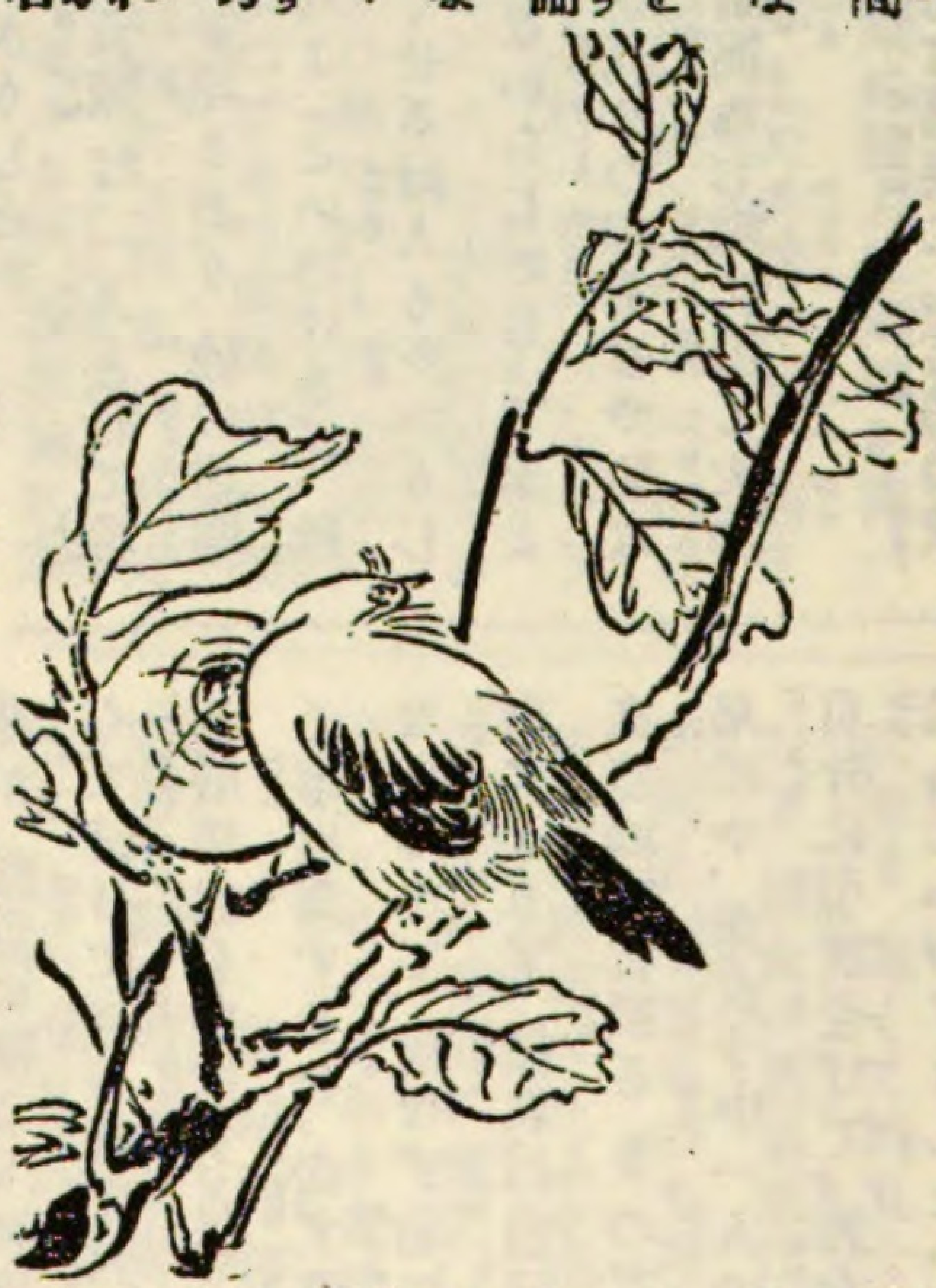
◎郷內の腕白少年他の害を爲すものあれば、岩女は竊かに其師に就きて賞品を授けしめ、後岩女は其家に至りて、其父母の膝下に於て、懇々少年を賞め、且つ將來永く其賞與に背かざらん旨を諭し、諄々の溫容、懇篤の

緻論、能く其効を奏すると少からず、又壯丁の素行修らず、他の厄介となるものあれば、其地方最も勢力ありて、彼壯丁の畏服するものと謀りて、某壯丁に一事の取るべき事あれば頗る、之を賞せしめ、後自ら其家に至りて、將來此名譽を損する事なからん事を期せしめ、或は賞し、或は戒め、恩威幷び行ひて、能く改善の途に向はしむる事も多かりとかや、

◎岩女の近在にて家庭の葛藤を惹き起し、之を法廷に訴ふれども、法官が其判決を好まざる折、又は村内にはしたなき爭論あり、誰とて仲裁するものなく、さりとて公の沙汰とするも如何はしき時、人皆腦漿を絞れる後、結局はいつも岩女を請じて、その判決を求むると、珍らしからざりき、誰一人岩女に服せざるものとてなかりければなり、岩女は如何なることをも直に承諾して之に赴き、古き諺又は經文に說かれたる諭などを引きて、兒童などにかみて含むる樣に諄々として說き諭せば、今迄は互に角をたて牙を磨ける猛者も涙を流してほと〳〵感じ入りつ、心のもつれも忽ちに解け去りて、後には罪を自己の身に受けんとて互に爭ふとすら之ありしといふ、その如何にしてかくまでの感化力ありしや、岩女も自ら不思議に思へるほどなりしとぞ、

◎中にも面白きは、其地に三人の惡漢あり、其中の一人は殊に頑迷不逞のしれものにて、村役場にあれ、警察署にあれ、不遠慮に推し行きて、つまらぬ理窟を並べ、種〳〵のだゞを捏ね、警部も村長も手に餘せるものなりしが、このしれものも、如何なる故にや、「オッカー」と呼びて、深く岩女を敬ひ、岩女を見れば、忽ちに怒りを收めて、笑を含むを常とせしかば、このものゝ暴行して手に合はざる折は、いつも岩女を迎へて、之を退治するとに定まり居りき、岩女は常に「又か」といひて其家に至れば、しれものは直に尾を垂れて、「オッカーが來ては仕方がない、まだいふべき理窟はあれども、まづ〳〵おれが惡かッた」などいひつゝ、岩女に連れらるゝまゝに、容易く立ち去りしといふ、岩女笑つて家人に語りていふやうは、「おれはあの惡漢の頭分だらうか」と、

◎岩女が斯く惡漢にまでも敬服せられしは故なきにあらず、その同情の深き、如何なる人をも他人とせずして、全く自己の子か又は弟の如く扱ふとを、又之に加ふるに婦女に似合はぬ氣丈の魂を有せしによる、其一端をいへば、慶應元年世論囂々、勤王といひ、佐幕といひ、日夜腥き風の絶ゆる間なく、暴漢處々に横行せる折なりき、岩女一日二本松の街上を通行せるが、喧嘩ありとて、雜閙甚しかりければ、岩女何心なく、群衆の後に從ひ、就て見れば、棍棒と白刄と互に相雜り、一方の長は隣村の俠客某なりければ、岩女心中大に之を憐み、兩者の間に入りて、百方町吏に説き、遂にさしもに深き葛藤を平和に收めければ、此後岩女の名は頓に俠客暴漢の間に傳へられ、如何に爭論の甚しき折も、岩女一たび至りて、流るゝが如き辯舌を以て、能く其是非曲直を判ずれば、兩々相執りて下らざるものも、忽ち酒杯獻酬の間に笑て相和するに至れりとぞ、



◎また裁縫を習はんとて、岩女の家に集れる近郷の女子、いつも四五十人はありき、岩女は一人とても賄料を收めしとなく、又こゝに裁縫を依頼すれば、一文の賃錢をも取らず、無賃にて四五十人を養ひ、無賃にて他の仕事を爲せり、されども賃錢の代りとて、大根を持ち來るあり、芋を送るあり、米を運ぶあり、これらの穀物野菜の類は、年中四五十人のものにて、食ひ盡されざる程なりしとぞ、而して四五十人の中には、富豪の女子あり、貧家の女子あり、富豪のものは、賄料とて別に之を送りしも、岩女は表面上一般に無賃といひて貧家の女子をして、慚愧畏縮の擧動なからしむるに注意し、又菓子或は魚類など送り來る事ある際にも、皆岩女の手よりせるものとして、之を一般に

等分せり、されば豪家の令嬢も、貧家の娘子も、取扱上に些の區別なければ、女兒等も又自家の大小などには一向に頓着せざるに至り、一同皆刀自に見ならひて、粉黛せず、油膩をつけず、櫛簪を用ゐず、貴賤上下の隔てなるものは、こゝに影さへ見えざりしとか、

◎授戒會の折、岩女の率ゐたる少女隊は一人として粉黛裝飾せざりしを、偶々導師の之を見るあり、他の虚飾に流るゝを戒め、「あの少女等を見よ」といひけるに、陰かに自己の裁ける櫛簪を取りかくせる婦人も多かりしといふ、斯く少女をして粉黛に意なからしめしは、素より短處もあるべきも、其取るべき長所の存するや論なし、他事はさておき、女子の抱負を高めし點に於て大功ありしなり、

◎又無賴よるべなき不具の徒、又は廢疾にして他の救助に洩れたるものを、岩女は拾ひ來りて之を一室に集め置き、令嬢も、娘子も、隔てなく、かはる〲之に給侍して食を勸める、事もありしとかや、

◎岩女の少女等に語る雜話は、往々にして人の意表に出で、而も其間に興味の津々たるもの少からず、其一例を擧れば、曰く、「他の過失を我身に引きかぶるほど德用のものはなし、たとひ一旦は之をかぶるとも、いつか明白にならざる事やある、他日我過失ならざりし事が、衆目に觸るゝに至れば、衆皆我を信用すべし、斯くて後日に至り自身大なる過失を犯す事ありとせん、其時に之を白狀するも、衆皆あの人ならば、よもやかゝる事は爲すまじ、必ず復他の過失を引きかぶれるものならんとて、信ぜず初に些末の他の過失を引き受くる事によりて、後には自己の大なる過失が、自己の過失とならぬ樣に至るものなり」云云、かゝる雜話などの効果にや、衆女子中一人の過失を犯すものあれば、其罪を自分に引き受けて、岩女の前に謝し出づるものあると珍らしからざりしといふ、

◉疫癘

いつの頃なりけん、熱鹽附近の地に疫癘大に流行せる事ありて、朝夕茶毘の煙の絶ゆる折なく、田は荒れ、牛馬は瘠せて、慘憺たる光景目もあてられず、されども田

舍人の常として、浮説流言に惑ひ、唯祈禱祈願をのみ唯一の頼みとし、遂にまた醫師に就て療藥を乞ふものなく、病は益々猖獗に赴くのみ、岩女之を聞き、憐愍の情に堪へず、鄕人に謀りて米穀味噌の類を贈り、加之自ら貲を投じて醫師を傭ひ、共に疫癘の地に趣かんとせしが、鄕人留めていふやう「彼地に至らば病毒を傳へ來るべし、其毒一たび傳らば我鄕また非常の患に惱まん、他鄕の爲に自鄕の患を來す、理に於てあるべからず、我鄕の爲に必ず流行地を蹈む勿れ」、岩女曰ふやう「難を見て互に相救ふは人の情義なり、平素互に親交を通じ、地異天災の時に於て互に救ひ救はれしは、從來の例なりき、今流行病に限りて相救はざるは前後甚だ相合せず、是人情に戻れるもの、一朝我に不利なればとて、之を捨てゝ顧みざるは義の許さゞる所、我彼地に至らば、病の全滅までは、誓て歸鄕せじ、此身よし仆るゝとも、毫も恨む所なし、唯願ふ、彼地に至るを難んずるものは、應分の飲食品を惠めよ、之を頒ちて彼等不幸のものに頒たん」、聞くもの甚だ情と義とに逼まられ、其言ふがまゝにせしかば、岩女即ち之を馬に載せ流行地の村端に至りて馬を止め、次で病家に至りて健なるものに之を頒ち、病者には伴ふ所の醫師をして藥を與へしむ、之が爲に癒ゆるもの多し、こゝに鄕民は祈禱のみに一任するの無効なるを知り、遽に相競ふて治を請ふに至り、斯くて四五十日を經て、病勢漸く衰滅に歸したり、岩女の勇氣或は無謀と笑ふものあらん、又暴虎憑河と嘲るものもあらん、然れども岩女が慈善心は到底此擧に出でざるを得ざらしめたるなり、鄕人皆岩女の義烈の精神に感じ、後日に至り談此事に及べば、涙を垂るゝものもありきとぞ、

◉福島移轉

廢藩置縣の際、會津藩は若松縣となりしが、後福島縣に併せられ、山吉、三島、赤司、折田などの良二千石代る〳〵來任あり、會津地方巡視の折は、皆每に岩女に賞詞又は金品などを賜ひて賞せられけるが、岩女も亦福島に出でゝ、是等令尹の門を叩きて、救育所設立の事を計りしが、三島縣令は取りわきて岩女が志に感じ、補助

せられし事尠からざりき、後年同縣令の警視總監に榮轉せられし後も、岩女は幾度となく、出京して何くれとなく、諂ひ謀りけり、好事魔多しの諺に洩れず、岩女が熱心なる奔走遊説も意の如くならざるものあり、岩女思ふやう、救育所設立の事は年久しき心願なるに猶事の成らざるは力を用ふるの足らざるにもよるべけれど、僻地にありては何事にも便りよからず、寧ろ福島に移り住まんに若かじとの志あり、偶々須賀川長祿寺の僧其志を稱し、刀自の爲に一身を捧げんとて福島移轉を勸めければ、岩女は遂に意を決して明治十九年の秋、女と女子を隨へて、福島に引き移りたり、岩女は無二の知己を得て、深く喜びし甲斐もなく、痛むべし、彼僧は岩女が移轉後間もなく彼世の人となりてき、岩女の志はいかにありけん、思ふだに切なる心ちせらる、されども田中信夫郡長、三浦縣吏等の助けによりて、縣下遊説の事なりしを以て、岩女の名は縣下に高く時には旗を揭げて歡迎せらるゝ事もありしとか、是に至りて會津の悲母は、今は轉じて福島縣の悲母となるに至れり、

米國女氣質（其三）

在米スタンフォード大學　飯島立峰

三　女子の敎育

◉混淆敎育の利害、之は當米國多數の學校が、採用して居るに拘はらず、今尙ほ敎育界の問題となつて居ります。偖て其利害に付いては、經濟上、管理上、道德上等に方つて論ずる方が判然します。大體に就いていへば至極便利な仕組であります。同一の建物、敎師、管理者の下に於て、同一の順序方法に依つて、同一の學科を授くるのでありますから、經濟上、管理上の便益は至て明白であります。けれども此便益に伴ふ弊害は、道德上、風儀上に現はれて來るのであります。

此仕組は男女互に相助け相勵み、以て互に進歩するの益があり、男子は女子の天性に習て、益々文雅秀麗となり、女子は男子の勇壯活潑なるを見て、彌々活氣體力

を養ふに至るから、大に賞すべきことである　又彼等兩性の往々にして、戀愛に陷ることがあるとも其の場合には、卒業後必ず伉儷の式を擧ぐるのであるから不可はない、啻に不可なきのみならず、斯る結婚は、廣き社會に於て男女相互に相識るの淺きより、結婚後往々家庭の圓滿ならぬ弊があるのに反して、其識るの深きより概して幸福なる生涯を送るもの多し」と云つて居る。其の實際を聞くのに彼等の多數は、同窓者と結婚を擧げ、又毎日曜には必ず二三の結婚誓約を爲すものがあると申します。此中には實際神聖無垢、玲瓏たる明月の如き戀情に出でたる者ばかりでなく、幾條の鐵鎖も之を繋くことの出來ぬ意馬に驅られた結果、此擧に出たものも亦少なからぬと思ひます。是れは憂ふべきの弊害であますり。

青年學生(男子)中には大に此混淆主義に反對を表するものがあります。蓋し此仕組の學校は、多少女子に顧慮する所あるを以て、其學科程度も比較的に低きを覺ゆ、されば斯る教育を受くるは、吾人の不利益でもあり又耻づる所である。故に斷然分離すべしといふのであるから、是には幾分の眞理を含むで居るに相違ありますまい、しかし唯一部の論で一般に通ずる論ではありませぬ。偖て序でに述べ度いのは、修學上女子の能力が、果して男子と併行することを得るや否やの點であります、之は解釋に困難なる問題でありまして、第一學科の種類に因つて差があることでありませう、併し私が在學する當大學に於て、實驗する所に依れば、男子の數は女子の殆んど倍であるのに拘はらず、圖書館にありて勉强する男女の數を、一週間一定の時間に於て統計したるに、二者の數は平均殆んば同一なることを知りました。故に各の總數から云へば、女子は男子の倍圖書館にある割合であります、加之試驗前などは遙かに女子の數が多いことを確めました。又同一教場内に於て、其々の問題に對する彼等の論點、(討論でありまず)を聞きますに、どうも考の及ばぬ點が多い樣に思はれます、現に其教授に就て、女子の能力如何を質したるに、大體に於て卑いとの答を得ました、是等

の現象を綜合して見ますと、女子の能力（此では無論智力を意呈すは、男子に及びぬもの〻様に思はれます。併し勿論男子に優る女も澤山あるに相違はない東方諸州（ニユヨーク其他）と西方諸州とは女子に對する教育の方針が、稍異て居るとは、前にも少し陳ましたが、即ち前者は歐洲諸國と稍傾向を一にして、女子の教育を男子と離してする様になつて、居りまして、第一にハーバード大學の女子部の外、有力なものが五ヶ所、其他程度の稍下りたるものが、隨分澤山あるとの事であります、之に反して西方に於ては、多くは混淆主義を採つて居りますから、從つて青年男女の交際が、東方よりも頻繁であるといふ結果が、來るのであります。併し其割合に過失の少ないは、女子が自重自治の精神に富むで居るからといふ事です、けれども其等の統計があつて云ふ



所以でありませぬから、私は保證はいたしませぬ。之を要するに米國は、女子教育に對して非常の寛大主義を採り、十分の便利を與へつ〻あることは明である。聞く處に依れば、此點は歐洲諸國も到底及ばずとの事である。果して然らば米國婦人は、世界中で一番幸福の境界にあると謂つて宜いと思ひます。更に米國は女子教育を以て公共事業中の肝要なものとして居ります。從て米國女子は偉大なる勢力を以て居ります。思想界に於て又は實行界に於て、彼等の有する位置如何は、彼等の深く覺知する所でありす、天眞爛熳たる青年男子が、嬋研窈窕たる佳人少婦と相接し相交るの機會多きに拘はらず、將た又緑蔭深き所に手に手をとり、或は共に輕車を驅りて、喃々絶えざるにも拘はらず、而かも光風霽月能く青年の躰面と品格とを維持する所以のものは、米國女子の徳性に期せ

ざるを得ませぬ、それですから區々の小過は、咎むるに足らずと思ひます。

◉女子の躰育、以上のは、主として智育智力に關する事であるが、今此躰育について少しく述べます。何事も男子のする事は我が爲すといふ米國女子は、實際躰育上に於ても、之を表證し居ると見る。「女子が男子のする事を何でも爲す云々」に付ては、近來日本國に於ては、餘程喧しくなつて居る樣でありますが、私も矢張之れに贊成いたしたい。之は日本の女子をして、實際帝國臣民の一人、五千萬人同胞の一人として、所謂國家構成の一分子たる本分を、盡くさしむる樣に致しいといふ考へから、主張するのであります。下層社會の婦人を除きて、中流以上の女子は、大躰に於て片輪が多いといふて、不可なしと思ひます。躰育上は勿論、智育に於ても、乏しい方が多數であると信じます。想ふに一朝國家に緩急ある場合になり、昔時の婦人の如く薙刀を提げ、若くは駿馬に鞭ちて、戰場に出るといふ、婦人は幾何ありませうか。

米國女子の有樣を見ますに、彼等は體操としては、小中大を通して、殆んど男子と同樣の運動を爲て居ります。勿論多少の相違はありますが、なか〳〵荒々しき事を致して居ります。ボートも漕ぎますし、乘馬、自轉車は之を能くせざるものはない、而かも其巧みなことは、毫も男子に劣らぬ。特に乘馬の如きは、御承知の通り、鞍が男子の其とは異つて居りまして、餘程困難であります、而かも男子と共に常歩、速歩、驅歩何でも行ります。近年英國の某俳優が、其鞍の害(むしろ便否)を論して、男子と同樣の鞍に乘り始めましてから、漸く男子同樣に跨つて乘ることが行はれました、馬車を御することも、大概の女子は行ります、聞く所によれば、近來は角力迄も行るとの事であるが、日本ではやつと觀世物で見る位である、山野はどし〳〵馳つて歩きますし、攀木も致します、斯く述べ來れば、殆んど男子と同一の事をいたします。否却つて日本男子よりもえらいのがあります、若し日本の御婦人方で之を御覽になつたら、米國の女は非常な御轉婆者斗りだと、云はれますに違ひは

ない。其代りに米國の女から、日本の婦人を許する時には、日本の女は臆病者、無藝者、日蔭の草又は病人の樣な人斗りだといふかも知れませぬ。婦人も國家の一分子であります。優勝劣敗の競爭は、國民中の男子同士の事ばかりではありませぬから、日本婦人、我敬愛する淑女諸君、奮勵百番せられむ事を切に望みます。

女界雜感

婦人と時勢

日東生

近來の婦人界は、中々賑かになりました、學校も多くなり、雜誌著述等も增加したると共に、世の少しく學識を具ふる人は、男女を問はず、皆此の婦人問題に對して、目を着け心を注くやうになりました、是れ或は邦人が一時の流行熱に出づるやも知らねど、強ちそうのみも言へぬ、何んとなれば、社會文明の發達と共に、婦女子に關する智識も、漸次に向上的傾向を生ずるものだから、近來婦女社會の情態は、兎も角一般社會の發達に伴ひて、發展の氣運を開けるものと見て差支ない、又た歐米では勿論我國よりも盛である、されば、外國の人の言葉に、二十世紀は婦人の舞臺なり、と言へたるも、決して放言でない、架空的の現想でもない、或は此豫言は實現せらるゝやも知れないと思ふ、だから吾人は、チト可笑しい口吻だが、將來の時代は、正しく婦人勃興の時代であると申したいのである、換言すれば、婦女子が其天性能力を發展すべき時代である、人或は吾人の說を以て、婦人萬能の陋見と思惟し、一笑の下に葬むらんとするものあらん乍併、靜かに理論上より考ひ見よ、婦人の智識と性情が十分に發達して、始めて人間社會は圓滿なる發達を遂げ、人類畢竟の目的たる幸福を增進し行べきやも知れないではないか、故に吾人は社會文明の為めに、人類生存の爲めに、婦女子の完全なる發達を希望するのであります、

完全なる家庭

家庭を修むるは、主として婦人の任務である、男は外の仕事を働くのが主務たるが如く、婦人は內に在りて、家政を整理し、圓滿なる家庭を造るのは、主婦たる資格に於ての唯一の責務である、されど、修め難きは家庭なり較もすれば、一家を紊亂し、圓滿なる家庭を造る能はざるは、世間屢々見る所の事實である、言ふ勿れ、內を修むるは外を修むるよりも易くと、其性質こそ異なれ、一家を修むるの道また容易ならざるものである、然り而して此の如く、家庭を修むる術の至難事たるは、如何なる理由に由るやといふに、他なし完全なる家庭を造るの難きに在るのである、

さらば、完全なる家庭とは、如何なる種類の家庭を指して云ふや、之れ一寸答に苦む問案である、何んとなれば、人各其見る所を異にし、其執る所の標準を異にし、從つて家庭に對する理想を異にするからである、されど之れ各人各自の見解に止まり、一般の人々が執るべき標準、即ち家庭に對する理想は一定せるものではなからうか、いま少しく吾人の所見を述べんに、

生活に不自由なきの家庭、必ずしも完全の家庭にあらず、榮華を貪るの貴族的家庭、必ずしも完全なる家庭にあらず、さればとて、赤貧洗ふが如く、十分なる生活を爲し能はざる家庭は、たとへ精神上に於ては、家族團欒の樂を失はざるにもせよ、未だ完全なる家庭と言ふことは出來ない、さらば、如何なる家庭をか、完全なる家庭と稱すべき、抑も完全なる家庭とは、言はゞ今日の社會標準より見て、所謂模範的家庭を指稱するに外ならない、故に一言すれば、完全なる家庭、即ち模範的家庭とは、唯に物質上の滿足のみならで、精神上の充足をも兼ねなければならない、世人の多くは、單に物質生活の滿足を以て得たりとなし、別に精神的生活の尙ぶべきを知らず、或は適ま心的生活を解得するものと雖ども、較もすれば、物的生活を輕視し去るを以て、到底完全の家庭を造ることを能はず、されば、模範的家庭は、物的生活を心的生活の充足を兼有せざる可らざるは勿論なるが、尙ほ一層進歩したる人類社會に於ては、精神的生活を重要視しなければならない、否自然此の如き

傾向は生じ來たるものであらうと思ふ、

女學生の素行

學生の最も重んずべきは品行である、いかに學問が上達するとも、品行にして惰落せば、學生たるの體面を全うせるものと言ふことは出來ない、况して學問も甚だ佳ならざる學生に於ては、其品行を愼重せざれば、其人毫も取るに足らない、之れは人間の價値を論定すべき準繩にして、男女二性を分たぬものではあるが、殊にも婦女子に在りては、最もそうであらうと思ふ、男子は其性質上より見るも、強ち單純なる道德のみに照らして論ずることは出來ない塲合もある、又た之れのみに由りて支配せらるゝものでもなからうが、婦女子は於ては、其性質上已に男子とは異なるものであつて、從つて品性の淘治及び行爲の修練にも、最も愼重の用意を以てしなければならぬものである、要するに、婦女子たるものは、其學識よりも、寧ろ其品行を重んずべきものでおる、道德の規準に照らして不可なる婦人は、婦人としても取るに足るべき價値はないのであると思ふ、



然るに近頃女學生の不品行を耳にするもの多し、而して唯に口に傳ふるのみならず、新聞雜誌は堂々之れを書して天下に曝露し、而かも全然無根の事實とも見えず、中には高等敎育を受けたるものあるに至ては、敎育の爲め、國家の爲めに、之れを慨嘆せざるを得ない、世人は言ふ、女子敎育は著しく發達した、女子の智識及び德行も餘程進步したと、果して眞なりとせば、吾人は此の如く女子敎育の進步せる社會に於て、此の如き不品行者を續出せる、奇異なる現象を怪まざるを得ない、即ち敎育の効力未だ十分に貫徹

せぬと言はざるを得ない、乍併品行の事たるや、强ち敎育の罪に歸すべきものでもない、即ち主として各人自已の心掛一つに在るものである、故に現今女學生の不品行は、其敎育より得たる學識を惡用し、否沒却して唯情慾の奴隷となりたるものである、何ンと思ざるの甚だしきものではないが、此の如くんば、敎育いかに盛んなるも何んの効かあらん、敎育は進歩して婦德は退歩するに至らんのみ、されば世の女學生たる者は、宜しく世間同性の惡例に省みて、其品行を正純にし、其行爲を淸美にすることを勉むべきであらう、又た將來の賢母良妻たる德操を修養しなければなるまいと思ふ、さるを若しも、不足なき敎育を受けて、身に錦繡を飾りながら、醜業婦の爲すが如き事を學ぶものあらば、噫、之れを何んとか言ふべき、

江湖談片

◎下田歌子女史曰く　私が歐米を廻りました時には何所に行つても一番先に案内されるのは孤兒院貧民院病院などでありました貴夫人の外國人に對して誇りますのは庭園の美でもなく邸宅の立派なのでもない、先何よりも先きに自分の關係して居る、何々の慈善會は何年の間に何れ丈の人を救ひましたとか幾人の孤兒が成長して家を持つて居りますとか云ふやうな事で每日く々その樣な所に連れますから偶には奇麗な所も見せて貰ひたいと思ふ樣な事もありましたそれで參つて見ると立派な邸宅に住んで居る贅澤極る貴婦人が日本の貧民などよりは一層不潔なトテモ鼻もちのならない樣な人々をあつめて話したり看護したりするのですぞ。

◎山根正次氏曰く　私も下田さんと同感です何うも日本の婦人方は慈善事業に冷淡で困る或立派な奥さんは慈善市に案内されて町で買ふよりも大邊に高いと云ふてハンケチを値切つたと云ふ事を聞いて居ますまた或婦人は正月の贈物に盲啞學校で出來た製作品を貰つて「今年はマア縁儀でもない片輪者のつくつたものなんぞ」と大に機嫌を損じたと云ふ事ですが淸國事件以來西洋に行つて日本の赤十字社事業の盛大を賞められ

ろ度に一般の慈善事業の振ないのが殘念ですと。

◎慈善に冷淡　女史又曰く之に反し我國は何所の慈善會に參まして(も)大底同じ樣なお顔ばかりを拜見します即ち一般日本婦人は遺憾では有升が慈善の事に冷淡で有ます隨分衣服とか芝居とか贅澤をなさる方で慈善のためにはまだ一度も金錢をお出しになつた事のない向もあらうと思ひます、それ故自然氣の附いて居る小數の婦人は彼所にも此所にも關係して負擔も隨分重くなるのです日本婦人は自分の財産と云ふ者は大抵有つては居りませぬし、少數の方に丈社會的事業を負はせる事はお氣の毒だと思ひます何卒成るべく新しいお顔を慈善會にお誘ひ申したいもので御座います』とは女史が慈善會での談話なりき。

◎女ハイカラ　風俗改良に熱心なる某新紙は曰く今の世にお孃樣を躾け玉ふ親御の心配は並大抵でない、廿世紀の婦人は理想が高なくてはならぬと殊勝な考へをするかと思へばイヤ日本人の理想は低いから其低い人と結婚はイヤだとやごとなき方々の娘御が飛んだ了見を起すのは困つたものだ、右の樣な連中は殊に外人の管理に係る基督敎主義の學校に多い、これといふも其の學校には外國から派遣された獨身のミス先生が澤山居て自然其感化を受るからであらう、生半可に獨身主義など、悟つた女子の末路は氣の毒なものだ、家風に從ふも厭だ、父母の命に從ふも可厭だ、果ては無分別にもアメリカの自由鄕へでも逃げて行かうといふ寸法になる、基督敎主義の女學生といふと十中八九迄はこれだ父兄たる者は餘程注意せずばなるまいと眞逆そうでもあるまじ。

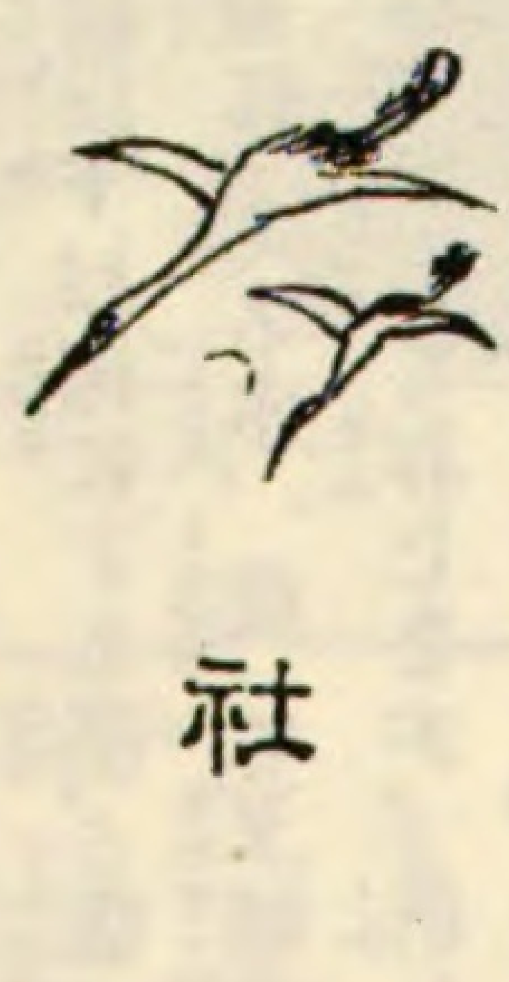
◎女子のハイカラ風俗　或人女子のハイカラを數へて左の數け條を得たり曰く金緣の眼鏡、殊更に入れたる金歯、必しも束髮ならぬ束髮、手提の小カバン、帶怠り服惰く、讀書を好まねども、必小冊を懷にす、琴を罵りて暗夜に三味線を拜戀す、炊事を退けて犬を近づく、英語漢語の必不熟なるを喋々す、破れたれども必ず足袋を穿ち、禿げたれども常に粉白を粧ふ、親不孝しても絹服を裝ふ、牛肉鍋を喰ふ、自轉車を若し果して

然らば好ましからぬ風俗といふべし。

◎蠻風夷俗　ハイカラの風俗元より好ましからねどさればとて日本婦人の小さなる頭の上に、島田と名つけ、丸髷と名つくるものをさま〳〵に建築し、櫛簪を陳列し、髪附油にて塗り固むるなども、初めて見ん人には猶ほ奇異の感をおこさしむるに至るべし。畢竟は國々の俗なれば、いづれをよしともあしとも定むべきものならぬども、彼の五重塔的、牛鼻的なるは、蠻風といふを憚らざるべし。

◎女の衣服　女は幾つ衣服を持つても其の上へ其の上へと拵へたがる年に一度か二度着るばかりで簞笥の中へ仕舞つた置く其内に蟲が喰つたり年數でビリ〳〵と切れる樣になつたりする、譬へ左樣までは無くとも柄が流行せなく成つて着られなくなるされば一枚着物を拵へたら其の柄が廢らない内に早く着破つて了ふ樣にすれば大に資本の流通を助ける譯であるのに全國の女の簞笥の中には固定資本が一億圓ぐらゐは慥かに寐て居るとは不經濟の譯だと某氏の戯言穿ち得て妙

◎西洋と日本の女服の差　西洋の服は男女に依つて仕立の形が遽かに變つて行くゆえ今年仕立てた服は來年に至つて少し時候後れと云ふ事になるそれゆえ簞笥の中へ固定資本にして置く事は出來ない日本のは仕立方は別に變化は受けないで色や模樣の流行がある丈けであるそこで唯西洋と違ふのは西洋では老人と若い女との衣物の柄が左程違はないのに日本のは嫁入前と嫁入後との衣物の柄はガラリと違ふそれゆえ自から簞笥固定主義をやらない樣に成つて居るのに世の中の婦人は是に氣が付かずに頻りに簞笥へ溜め込んで居るとは笑止。



女子服裝の改良

野中千代子女史談話

日本も世界大國の仲間入を致して、將來は夫等の大國

と勢ひ競爭を免れ得ぬ事を世間一般に覺得するに從ひ、今日の少女は他日の母たるべき者であるから、今より其身躰を健全にして競爭に打勝ち得る程の覺悟を要する、即ち生存競爭の點から、先以て其準備の一として我國に於る女子の服裝改良を刻下の急務とする程に必要なりとの聲が、大分世間に高くなりましたのは眞に喜ぶべき現象かと存じます、物事は何か必要に逼らなければ中々行はれないものです。或は早晩北天の原野に鷲狩が始まる時があるかも知れぬと云へる今日を利用して、斷乎たる改良を行ふのは多く得易からざる好時機ではあるまいかと存じます。我國の女子の服裝は、第一運動に不便なるが故に身躰の發育を妨げ、又經濟上からも少なからぬ不利益であるなどゝいへる事は、苟も常識を備へたものには分り切つた話で、最早左樣の知れ切た事を繰返して解釋して居るべき時ではない、今日は進んで改良服は如何なる形式に依るべきか、又如何なる手段方法によりて實行すべきかを講究すべき時で御在ますから。何卒一日も速かに眞に適當なる形式を案出し得て、恰も吾人が昔時の上下を見る時のやうな觀念を以て今日の服裝を見るやうに斥けて仕舞たいと思ひます。

形式に就ては目下服裝改良家の唱へて居る如く、第一腰以下は袴にする事、從て半股引を用ゐる事、袖を筒袖にする事、從て又幅廣の帶を廢する事は是非共免れない事と存じます。併し單に短い筒袖では餘り殺伐なやうに見ゆるかも知れませんから、西洋婦人の服のやうに袖口に別に花瓣形のヒダを取付て、手の甲を半ば覆ふ位にしたらば可也映りが好くはあるまいかと存じます。併し西洋婦人の服のやうに袖の緊小なのは衛生上如何だらふかと存じます。故に亞米利加あたりの處女の服のやうに肩にヒダを取て袖をダブ／＼に大きくいたし、手首のところにて稍緊縮して前に申した花瓣形のヒダで半ば手の甲は被ふ位にしたらば、衛生上にも害がなくて、見たところも活潑で而も優婉の容を失ふまでには至るまいかと思ひます。上衣の丈は無論腰下を限りと致しますから、若し腰以下が袴一枚で

薄いと思へば、半股引の上即ち袴の下に從來の腰巻の代りに朝鮮婦人のやうに一枚でも二枚でも腰衣を重ねて差支ないと思ひます。偖斯うなると髪や穿物も改めたくなりますが、是等は是非改めねばおかしいといふ程でもあるまいかと存じますから、假に束髪を之に伴ふ髪と定めて置て從來の髪でも差支なからふかと思ひます。又履は雨天の時に實に歩行に困るのみならず皮の濕つた履を穿て居るのは衛生上如何なもので御座ませうか、夫等の事を考へますと先づ道路の改正からして頂きたいやうな事になりますから、先づ假りに履を改良服に伴ふ穿物と定めて、日和の時には成べく之を用ゐる事にする位に致して置て下



駄でも差支ない事にして、先づ髪と穿物は當分隨意にして置く位のところで如何で御座ませうか。餘り最初から何も彼も一時に改めんと致せば自然圓滑を欠て却て行れがたくはあるまいかと存じますから、先づ差當り必要の部分丈でも速に實行してあとは徐々改めても好からふと思ひます。

◎扨之を實行するには社會の如何なる部分より始むべきかは餘程考へもので、斯改良服の容易く行はるゝと行はれざるとは一に斯點に在ると存じます。私の考では先以て上流社會より實行して頂きたいと思ひます、上の爲すところ下之に倣ふて、忽ち四海を風靡するであらふと存じます。先第一に

宮中の女官方に於て斷行して頂きたいと存じます。次に華族方に斷行して頂きたい、さうなれば舊藩士の子女などは自ら其方にならふと思ひますけれども、舊大名華族の方々の方には隨分舊習を固守してお出の方がお在のやうですから、慣例の點から俄に行はれ難いかと存じます。夫から又一方には女子に關係ある全國の各學校の女教員生徒に對して文部省から訓令して頂きたい、何事によらず改良に關することは、訓令を以て行はるゝところから始めねば中々容易に行はるゝもので御在ませぬ。前に女官方などよりこゝは一つ國家の爲に率先してお始め下されば特に宜いと申したのも即ち其の意味で申したので御在ます。全体は學校よりも先以て宮中に於てお試み下さつて、幾分か欠點に改良を施したところで之を世に發表した方が最上策だと思ひます。結果が好ければ即ち宮中が改良服の源泉となり、萬一結果が惡くても宮中丈けに止まるから、之を中止するにも甚しく目立ません。故に先以て宮中に於て模範をお示し下さるやうに願ひたいと存じます。如何に下流を改めやうと思ふても社會の上流が先以て改まらんでは到底駄目で御在ます、上流は矢張何處までも舊習を固守して下流を睥睨して居られた日には到底一般に改良の實効は上りませぬ。服裝改良など申す事は國家の休戚の上から見て隨分一大事ですから、こゝは大英斷を以て實行して頂きたいと存じます。私は從來世人の感覺上學校の教員よりは寧ろ第一着に上流より初め試みて頂きたいと希望して居ります。爾して改良した以上は勿論從來の服裝の者を賤しむの風習を盛に養成したいと存じます。兎に角何事も初から完全無缺のものの出來やう筈は御在ません、最初は何か物足らぬ事があつても大躰が極れば他の細い事は年所を經るに從ひ各自に好い工風が出ないとも限りません。今の束髮の經歷を見ても分ります、最初から見れば餘程發達して來たでは御在ませんか。

◎序に一言して置たいのは婦女子の禮服の事で御在ます。當時の禮服では兎角費用がかゝりて朝廷の大禮などに參列し得る資格はありながら衣服の點から陪席の

榮を得ることの出來ないものが澤山にあるやうで御在ます、眞に殘念な事で申さば唯今の分では此等の場合に服制で以て間接に婦女子の自由を檢束するやうな姿になつて居ます。女子も將來は益々交際社會に出て外國婦人など〻肩を比べねばならぬといふ今日に、右の次第では何共殘念の事では御在ませんか、衣服の改良は專ら母躰を健全にして强壯なる國民を作る爲に相違御在ませんけれども、女子自らも亦無論昔日と違ひ交際場裡に出て自ら競爭を免れざるに至るは當然の勢と存じます。然るに衣服の爲に顔出の出來ぬとあつては一身にとりては遺憾此上なく、又第一國威に關します、今日の有樣では女子が全く服裝の爲に盛典などに參列の出來ないことは殆ど公然の秘密で、普通の挨拶となつて耻しいとも殘念とも思はず歸らぬ何人も改良の道を圖らぬのは如何にも怪しむべきこと〻思ひます。總じて人は屢高尙壯嚴なる儀式などに臨むと自ら氣品が高くなるもので御在ますから、修身の上から見ても大に助になりますから必要な事だと思ひます。故に女子などは一人にても多く朝廷のお儀式や女子の加はるべき公會などには力めて出らる〻やうに及ぶだけ致したいもので御在ます。扨爾う致すには先に立つものは何かと申すに禮服の改良です、故に前に陳べた改良服を土臺として夫に少し裝飾を附加する位の事に止め、可成費用のか〻らぬやうにして之を禮服と定めて、先づ式部職あたりで制定して頂いて是又女官から始めて頂く事に致しては如何かと存じます、女子の禮服は早晩是非共改良せねばなりませぬ。之を改良せざる限りは自然間接に女子の勢力の瀰蔓を妨げ、又高尙なる氣品を養成するに足るの機會を逸する事になります、宮廷の御宴などに外國婦人の跋扈せるに拘らず日本婦人の寥々たるは眞に心細い次第で御在ます、夫も堂々たる理由があつての事なれば仕方もないが決して爾ではない、全く衣服の爲であるとすれば何共耻かしく、なさけないわけでは御在ませんか。今一朝管易なる禮服を制定せんか、昇殿の資格ある婦人は恐らく過半拜謁するに至らん、斯くてこそ女子の遺憾も消

るのみならず、自ら其勢力を擴張し得て從て外國婦人にもひけを取らぬやうにならふと存じます、又斯くてこそ第一大御心にも適ふ事であらふと存じます。故に女子の禮服制定の事は改良服の出來た曉に必ず續て起すべき問題で、女子の地位を高め勢力を擴張する上から、又女子の氣品を高尚にする事の上から、又外人の輕侮を避る事の上から如何しても今の儘に差措く事は出來まいと存じます。

流行のしをり

○アルミニユームの前差

アルミニユームは水にも浮く位なれば、之れより輕き金屬とてはなく、且つ油や汗のために汚點の出づることなく、夏季の差物としては尤も適當のものなれば、先頃束髮のピンとなして賣出したる向きあり、殊の外好評なりしが、先頃は、おもだか、しをん、なつぎく、よめな、あさがほなどのアルミの花附にて、花蕊に切子を篏めたる前差、代價參拾參錢位にて出來榮面白く、平常ざらに差すには之れに限るとて、十七八歳より廿七八歳の婦人間に頗る流行なり

○夏季用の差込簪

水も滴るやうな無地本甲の一本脚に夏の草花を差込となしたる（花は無垢、葉は赤銅象嵌）清らかなる簪、島田丸髷にも映り好ければ貴婦人令孃方の流行とはなれり。代價は九圓五拾錢位（神田區須田町長岡店販賣）

○變り團扇の前差

近頃流行の團扇形を變へたる簪にして、拂子に額に鏡な生地拓植、蒔の盛繪となしたる黑甲脚蒔繪附の簪、三十歳前後の婦人には氣に入る品なるべし、價は壹圓七拾五錢位なり。

○絽の花根掛

薔薇、牡丹、菊、葛の葉など、周圍を絹の打紐にて、縁取りたる絽の花寄せ根掛、季節柄とて色彩鮮かに、可愛盛りの頭髮の上に艷を競ひ（價拾錢位）尙ほ銀水晶の束髮簪は、硝子を蕨手に吹上げたるにて、縞、白、赤、青などのもの、娘子連に殊の外喜ばれ居れり（價四五錢位）

○新製組絲の帶締

當地日本橋區芳町佐竹組絲店の新製帶締にて、尤も需用多きは左の種類なりと云ふ

美幸締　兩端千鳥打の房附、中は細の打紐（價五拾錢）

若葉締の細　兩端寶打の房附、中は寶打を伸したるもの（價貳拾八錢）

染分千代田締　兩端二寸位は四ツ打の房附、中は細の平打、十五六筋のばら紐（價七拾錢）

若葉締の太　兩端寶打の房附、中は寶打の伸したる打方、差圖參照（價九拾錢）

謎締　兩端吾妻打の房附、中は細の鎖編二十本程のばら（價壹圓）

彌生締　兩端新都と云ふ丸打の房附にて、中は平打に松皮菱、松竹梅等の花形を編出したるもの（價壹圓拾錢）

以上色合によりて若向きも年増向きなもり、薄牡丹、古代紫、藤花、桃

紅、牡丹、等は若向にて、鼠色、海鼠、梅鼠、鶯茶、柿色、御召、利休焦茶、黒鼠、墨等は、年増に似合の色合なり

○時計の紐

近來和服着にては鎖よりは紐の方流行の模樣、なるが暑さに向ゐては猶更紐の需用多く、打方は種々あれども、圖の如き丸打と平打の二本紐が、人氣に適ひ頗る賣行ありと云ふ

價　格

平打の二本紐　七拾錢より　丸打　六拾五錢より



娛樂

重陽

重陽とは、端午上巳など、共に所謂五節句の一なり。ことのおこりはと問はゞ、古へ後漢の世に、費長房となん呼べる仙人のありけるが、或時その弟子なる、桓景と云へるに語りけるやう、來ん九月の九日、汝が家に恐ろしき、わざはひ有るべし、されば今、赤き嚢に茱萸の實を盛り、汝が臂にかけて山に上り、菊の酒を呑まゞ此わざはひをば、まぬがるなりと、桓景之を打ちきゝて、恐ろしき事に思ひ、家に歸りて見れば、飼ひおきたる家畜、皆死し居たりと、古き書物に有りとなん。

されば此の事、いつの頃かは、彼の國より傳はりて、今も田間赤飯をたき、栗の實を味ひ、菊の劍先さしたる酒をのみて、一家の無事を祈るならはしあり。

その上朝廷にても、重陽の御宴とて、いと花やかなるお祝ひありしとなり、彼の菅公が『秋思』の詩篇を物して、帝の御感に預かりしは、この九月九日のことなりしとなり。

あはれ菊の蕾こそ、未だ太らぬが、野邊には秋草錦かざりて、招く尾花にすがる白露、葛花白く女郎花黄に、いづれやしき草花の、女性に緣ふかきに、まして松蟲すゞ蟲の、得ならぬ聲をたよりにして、さえ行く月を賞するも、實にこの節のたのしみならずや。



婦人問題

婦人の地位の改良（概要）

東京帝國大學教師
瑞西ジュネーヴ大學教授
ドクトエール
アンドロアー　ルイ、ブリデル講演

野澤武之助口譯

婦人問題は文明國に於て最も重要の問題である、然らば婦人問題とは何ぞや、即ち一言すれば、婦人の地位の一般の改良を目的とする所の自由及び改革の說で御座います、そうしてそれは、啻に婦人の權利か保護し、其利益を保護するといふ目的を以て婦人の爲めにするのみならず、尙ほ正規及び人類全體の最も大なる幸福の爲めにするのであります、即ち一方に於ては正義及び自由の本黨でございまして、他の一方に於ては社會一般の秩序及び社會改良の事氣で御座います、サテ如何にせば婦人の地位を改良し得べきや、といふに吾人は種々なる觀察を以て此問題を解釋し、幾多の方便を以て此の婦人界を包括せる大問題に對し改良を施さんとするのである、而して其方便は如何、即ち道德的、教育的、經濟的、法律的、政治的の五改良策であります、今之れに付きて簡單なる說明を述べませう。

▲道德的改良　或說に曰く、男女間の關係に付ては、男子と女子とは決して同じ道理の法制を以て對することは出來ない、即ち男子の行爲及び常軌を逸したる品行は大に寬大なる取扱を受けなければならぬ、之れに反して若し女子にして此の如き行爲を爲したる塲合には、非常に嚴重の取扱を受ければならぬと申すのでありますと、然るに此の如き正義の否認に付ては、婦女子自ら之れに絕對的反對を表さなければならないと思ひます、併しながら、今日の所では、婦人は男子を目的として、男子の都合の爲めに養育せられて居つて、且つ其判斷力を誤らせる所の僞の扱事の空氣の中に生長するのでございますから、婦人は此等に對して正しい判斷を下すが爲めに何處から其必要なる原素を取りませうか、假に或種類の慾情は、男子に於ては女子に於てよりも强く發するとした所が、之れが爲めに婦人が男子よりも斯う云ふ塲合に於て罪が深いと決することは出來ないのであります、實際若し男子が婦人を求めるは唯其天性に從ふに過ぎないと云ふならば、矢張女子が男子に從ふのも其天性に從ふに過ぎぬと云ふことが出來ます、一方は發動的、一方は受動的で、其發現の有樣は違ひますけれども、併しながら之れが互に相引く所は同じことでございます、尙ほ婦人の行爲だけが天然に反して居つて、男子の行爲天然に從つたものであるから正當であると云ふことが、何うして出來るのでございませうか、若し天然の慾情を抑へると云ふ事が、婦人に於ては義務であるとすれば、矢張男子に於ても天然の發情に任せて自由に我儘を働いてはならぬ、即ち天然の慾情は制限しなければならぬもので、謂る所婦人と男子との間に於て異なる道德の法則があると云ふことは、決して承認することは出來ませぬ、一方に命ずる所のものは、他の一方にも命じなければならぬ、一方に向つて正當とせられる所は、他の一方に向つても亦矢張正當としなければなりませぬ、男子を許すとすれば女子も亦許してはならぬ、若し女子を罰するとすれば男子も亦罰してはならぬ、寬大にするか若くは嚴格にするか、何れにしても男女間に於て同等の原則が承認されなければなりませぬ、之れに反する解釋は男子の爲めに一の特權を作るやうに

なります、此の如き特權は消滅させなければなりませぬ、又た實際他の澤山の特權が消滅したる如く、此の如き特權も總て消滅するものを信じます、

▲教育的改良　婦女子の教育は婦人及び其職務に付て世人の有する所の一般の觀念から來ります、若し婦人を以て男子の爲めに存在し、其終局の目的を持つて居るものとすれば、勿論男子を目的として婦人を教育しなければなりません、婦人自身の爲めに之れを教育すると云ふ必要はないのであります、只今までは總て此の如き方法を執つて居つたのでございます、併して之れに反して女子が獨立の權利を有し、十分なる意味に於て眞の人格を有するとすれば、其全體の死力を出來得る限り發達せしむることを許さなければなりませぬ、是れが今より段々此の如き傾向になつて參ります、而して近來は世界各國に於ては婦女子の教育が盛んになり、種々なる女學校を設けらるゝやうになりました、殊に米國、佛國、瑞西等にては、大學にすらも矢張り女子の入學を許します、そうして女子は能くそれを利用します、瑞西の中で「チユウリツヒ」「ベルン」「ジユネーヴ」等の都會に於ける大學の中で、女子の學生は學生全體の數の四分の一を占めて居ります、此の如き趨勢に伴ひて、輿論も段々變更して參りました、等しく之れ兄弟姉妹の中で、男子にばかり教育の恩惠に浴せしめ、女子は之れを無學の地位に置くの不當なるは理解するやうになりました、されど男子と女子を少しも區別せずに、同等の教育を施すやと云へば決して然らず、只費用の點に於て、男女兩教育を平等にするといふに外ならぬのであります、

尙ほ少しく性質を異にする所の教育的改良が必要であります、それは今日少青年を教育するには、他日一家の長となつた時分に、其負擔に歸する所の義務に關して、また婦人に對して尊敬を持たなければことに付て教へますが、男子が婦人に對して持たればならぬ所の責任及び義務に付て教へますが、此等の點に關しては大なる缺點があるやうに思ひます、此の如き缺點は速に之れを補はなければなりませぬ、一體男子は婦人に對しては、自分の爲めに婦人を愛すると云ふことを減じて、主として婦人の爲めに婦人を愛するといふことであります、此點に於ては今日の文學上の書物は、決して善良なる教を與へるものではないと思ひます、人類の言葉の中で最も美しい言葉――愛情――は今日は如何なる汚れの中に陷れられましたが、如何なる泥土の中に引き入れられましたか、眞の教育の名を値する所の善良なる教育は、此愛情と云ふ言葉に對して、最も深遠なる眞の意味を再び與へる事が出來ると信じます、

▲經濟的改良　婦女子と男子と同じく矢張獨立して生活を營むに足るだけの報酬を得る仕事を與へればならぬ、婚姻の時になれば一家の經濟の取締と兩立し難き事務は自然に廢せらる、併し凡ての婦女子が必ずしも婚姻を爲すものとは限りませぬが、又た婚姻をした所の女にも矢張或る事情に依つて自ら其生活の費用を儲けなければならぬと云ふ必要に迫る事が起ります、それのみならず、矢張小供の教育に必要なる費用までも自ら求めなければならぬと云ふ事情が起ります、是れは實際見る所でございます、

凡ての種類の職業が女子に向つても與へられなければなりませぬ、今日までの所では男子は自分の利益の爲めに獨占の事業を持つて居るのであります、がこれはモウ終りを告げることになるだらうと思ひます、若し女子が或職業に於て男子と競爭することは出來ないとか、又は或職業に付て劣等の地位に立つとか、若くは不適當であるとか云ふ事情があるとすれば、女子は自分で其職業に就くことを斷念するでございませう、それが爲めに外から我儘の方法を以て婦人を排斥するの必要はございませ

ぬ、能力の選擇は自由淘汰に依つて自ら行はれます、

婦人の職業に向つて新しい途を開くと云ふことは非常に必要でございます、そうして之まで生活の費用を得るの途がなくして、非常な地位に陷つた婦人の爲めに、其障碍を除いてやると云ふことは必要でございます、併し婦女子に對して總ての職業に就くことを許すと云ふだけでは未だ十分でございませぬ、尙ほ其外に其總ての職業に就くことの出來るやうにする方法を講じてやらなければなりませぬ、即ち種々なる特別の學校を開き、及び之れを補ふ爲めに實地の修業を爲す所の方法を設けてやらなければなりませぬ、此の如くすれば、始めて彼の貧窮なる女子が今日よりも容易く生活の困難に反抗することが出來ます、此の如くにして始めて彼等を付覘ふ所の惡弊、彼等を脅迫する所の踏着を遁れることが出來ます、即ち、婦人の職業に向つて一の門戶を開けば、隨て他の方面に於て困窮及び自暴自棄に導く所の一の門戶を閉ぢる譯でございます、尙ほ此上にも工場に於ける女工の保護及び改良等に付ても意見がありますが、それは深く此には說きません、（未完）

女子と服裝（報知新聞拔萃）

監獄へ往つて女囚の風采を見ると誰しも其慘憺たるに驚かぬものはあるまい、柿色の筒袖を着、同じ色の細紐を締め、頭をモクシツた樣子は實に見られたもので無い、彼等は揃ひも揃つて醜婦ではあるまい、中には娑婆に居て隨分多くの男を迷ばした國色の美もゐるのであらうが、此奈落に陷つては誰一人三途の河の脫衣婆に髣髴たらぬものは無い、女が飾を全然撤去した姿は目を開けて見られたもので無い、だから昔の人は女訓の一ヶ條としては假令我が夫に對しても顏の生地を見せるもので無いと教へた、フインク氏の說の如く女は野菜となつて實用に適すべきもので無く。花となつて社會てふ庭園を飾るべき天職のあるものなる以上は相應の飾はし無ければならぬ、これが即ち女の身だしなみであつて身だしなみの教養は女子教育家の忘るべからざるものである、日本の女子は古來身だしなみに秀で優美なるを以て稱せられてゐたのに維新以後女子は大に不躾になつて來て血の道と云つて口を譜んでゐたものが子宮病などと剝出しの言語を口にして恥ぢ無いやうになつたのは新教育の一弊である、かの女服改良と云ものも或點より見れば日本女子の風采をして粗笨に陷らしめんとする者ではある勿論日本女子の服裝は優美ではあるが其實用に適し無のと不健康なのとは大に改良を加ふる必要があるか今の女服改良を唱ふる者の多くは獨り實用々々とのみ稱し、女子に必要なる優美の點を忘れて一般の女子をして一樣の實用服を着しめんとするもので、其極女學校の如きは之をして印刷局工場の觀あらしめんとするものである、目下女學校生徒は大抵海老茶か紫の行燈袴を着けるやうになつて大分自由なる運動にも適するやうになつて來て、これが漸次年を經れば、おひ〱優美の點も多く添へるやうになるであらうに性急なる改良論者は之に滿足せずしてなほ一層過激なる變化を施さうとするものだ、まだ地方によると海老茶袴などは不經濟だからとして他の方法を執り大きなる前掛を垂れさせて學校を以て西洋の臺所然たらしめ生徒をして其下女然たらしむるものがあり、これは經濟ではあらうが、之が爲に女子の優美を損する大不經濟をなすのを心得無いのである云々

家政改革（時事新報社說要領）

從來我國の物價が低廉にして、一般人民の生活安樂なるは西洋人などの羨む所にして日本は世界の樂園たりとの評、實際に空しからず、僅々五

六十圓の收入に生活する輩にても家には下女を雇うて炊事洒掃等の用を辨ぜしめ細きみの如き徒に春日の永きを喞つのみ、況んや夫れ以上の家に於ては雇人の數いよ〳〵多くして五人十人の婢僕を使用するの家は珍らしからず家庭は恰も一個の小王國にして、嬉々悠々穩に太平の春を樂しみたるごとなれども、茲に大に考ふ可きは今後の成行なり、殖産興業の盛なるに隨ひ、賃銀の騰貴は必然の勢にして現に貧家の婦女の如き今日とても工場に入り、又は自宅にて工藝に從事すれば、相當の賃銀を得ること容易なるが故に、些細の給料を以て窮屈なる下女奉公などに出づるものなく相率ゐて女工に就くの有樣なり殖産事業の發達は單に賃銀の騰貴のみならず、諸物價の騰貴も之に件ふの常にして其收入に限りある一家の女王の如き、何時までも安座無爲の生活を樂しむこと能はざるは明白なれば今に於て豫め家事經理の仕組を改め時勢の變に應ずるの心掛け最も肝要なり、扨その改革の工風は如何と云ふに社會生活の狀態が次第に多忙切迫の實を呈して、日本風より西洋風に移り行きつゝあるは爭ふ可らざるの事實なれば、之に處するの法は我習慣を改めて彼の風俗に倣ふの外ある可らず、即ち下女雇人の如きは第一に無用のものにし或は全く廢するに至らざるも成るべく其數を減じて主婦自から家事を處理せざる可らず、彼の住宅の入口に、玄關など稱するものを構へ隨て來客の取次の雇人を使用するは無益の沙汰なれは普通の家にては其構造を改め、間取りを變更すると共に表口には電鈴又は呼鐘等を裝置し、來客の相圖に應じて家內何人にても自由に取次を爲さしむるときは、雇人を要すること少くして實際ば却て便利なる可し、殊に食物は人間生活の最大要件にして、其調理鹽梅の如何は家族の健康快樂に關すること大なるにも拘はらず、今日の如く多くは下女に一任して主婦は更らに手を下さゞるが如き不心得の甚だしきものなり、斯くては好味も變じて不味となり折角の滋養も其效を爲さゞるのみならず、或は調理の際に餘分のものを造り又は有用の殘物を放棄するなど每日のことゝすれば、其損失は積り〳〵て容易のものに非ず、一家の主婦たるものは食物の調理には必ず自から手を下して之に任ずるか、或は然らざるも親しく勝手元を監督して粗漏なきを期せざる可らず。又食料品を始め諸般の買物の如きも一切雇人任せにするときは或は同じ價にて同じ品物を買ふも其性質の良否善惡を問はずして實際の不經濟は決して少小ならずして西洋婦人の如きは一品一物の買入にも必ず自から出でゝ手輕に辨ずるの習なり、宜しく倣ふ可きなり、今後殖産の發達と共に賃銀物價はます〳〵騰貴して一般に生活の困難を感じ今日の如き始末にては到底家計を維持する能はざるに至ることと必然の勢なれば一家の主人たり主婦たるもの能く此邊の事情を考へて篤と相談の上今より徐ろに家政改革の方針を定むること肝要なり、

才媛詞藻

第八回懸賞文披露

和　歌

文學士　大町桂月先生選評

《天》　月下蟲聲　横濱市西戸部町一一　伊東蕭子

月のかげちるもいとをし虫の聲
　とめんもつらしたちつくさばや

評　想新しきに非ず、調子も佳なるにはあらねど、月光虫聲を描き出して、多少の情景なしとせず

《地》 健康　埼玉縣北足立郡保谷村上保谷　岡本志津子

初孫の虫氣もなくてすこやかに
　育つを見れば老も若やぐ

評　飾らずして反て眞情の躍動を見る、健康の作中、自からこれ白眉

《人》 健康　麹町區隼町五番地　中春子

人にわがとつがむとするこのころを
　母のみからだすぐれまさぬかな

評　題意に遠けれど、母をおもふの情掬すべし、

《秀逸》 健康　赤間關　熊谷ふさ子

かへるさのいへづとにせんたらちねに、此の暑さにも恙なき身を

《秀逸》 月下虫聲　赤間關　熊谷ふさ子

歸るべきほども忘れて遊ぶ野は、月夜となりて鈴虫のなく

京都　河合かつ

八千草に宿れる月の影すみて、虫の音しげし深くさの里

赤間關　熊谷ふさ子

月かげの更ゆくまゝに虫の音の、あはれ身にしむ淺ぢふの宿

武藏　保合てい子

すぎし世の月に殘れる淺茅原、夜露にきほふ虫のこゑごゑ

伊豫　菅つゆ子

おばしまに一つすがりてなく虫の、聲すみわたる秋の夜の月

河内　大矢たね子

闕が原飛づめのあとも草むして、むかしの月になく虫の聲

京都　藤原りつ

秋萩の葉末の露をいのちにて、月にうかろし虫の聲かな

周防　井上靜衣

村雨のはれ行く峯に月出て、またなきしる虫の聲かな

水戸　稲葉ゑん子

おばしまに月ながめ居る宮人の、袂にかよふすゞむしの聲

下谷　白井すみ子

曉の月かたむきて武藏野に、すだく虫の音いやはそう

つゝ

鳥取　尾崎なみ子
虫の音も見ゆるばかりに照る月の、ひかり限なき武藏野の原

神戸　水越秀子
賤のめがくだまく音もとだえして、月にふけゆくはたをりのこゑ

備前　岩藤みよ子
高殿の琴のしらべは打たえて、つきと虫とのよとなりにけり

播磨　中村益子
さよ更て月のみさゆる秋の野に、たれまつ虫のなきあかすらん

北海　川島とく子
かなでつる琴の音やみてふくる夜の、月にすみ行くむしのもろ聲

岩代　遠藤はる子
淀下る船の苫あけながむれば、虫の音白く月すみわたる

廣島　石川とみ子
さゑ渡る月を晝とや思ひけん、松の梢の蟬のひと聲

但馬　小出親子
秋風になびくすゝきの荒野原、三日月細く虫なきしきる

愛知　和田とも子
月影の清き垣根に啼く虫の、こゑもあはれに夜は更けにけり

滋賀　畠中隆子
月さえし川下一里乳母が家、萩さく垣にすゞむしのなく

茨城　山口すみ子

◉月下虫聲　信濃　平林とみ子
母君の御墓つめたく月さえてさゝげし花にこほろぎの聲

◉仝　神戸　志村近子
聞きなれぬ虫の聲して武藏野の果てなき原に月澄み渡る

◉仝　芝　酒泉すみ子
そゞろ神のみそのに遊ぶ思ひあり虫なく露にやどる月かげ

◉仝　近江　手塚淵子
露ふかきあさぢが原に月ふけてよさむなわぶる虫の音あはれ

◉仝　東京　上野松野
月宿に木のもと涼し袖しけばあるじ顔なるむしの聲かな

◉仝　大村　寺井ちく子
小萩さくのべのはたみちふみゆけば月さえわたりきり〳〵すなく

◉仝　大分　藤崎志づ子
つゆふかき草葉を照らす月影に、虫のなく音もすみ渡りけり

◉仝　大阪　伊勢村春子
照りわたる月もくもなき秋の野にさやかに聞ゆ虫のこゑ〳〵

◉仝　麻布　伊藤ふく子
月見つゝ琴弾き居れば松虫の草葉がくれに聲合すなり

◉仝　本郷　岡ゑい
こゝかしこ虫音高しよもすがら月影清き庭の草叢

◉仝　伊勢　東山富子
行くれて野邊の細道たどり行けば虫の音さびし月清くして

◉仝　廣島　井手睦世子
打まねく尾花か袖につゆ見えて虫の音寒き月夜哉

◉仝　神戸　青木京子

夜すから草のやとりに鳴虫の涙かつゆの月にきらめく
◎仝　柳田益子
月清みかしこく袖の手枕に秋もうからぬ虫の聲かな
◎仝　廣島　佐武松枝
露ふかきあさちが原に月澄みて遠近になくきり〴〵すかな
◎仝　横濱　松野雪野
小夜ふけて月さやかなる秋の夜のあはれを添ふるまつ虫の聲
◎仝　横濱　志村まき子
思ふ節ありと斗りに鈴虫の聲ふりあけて月に鳴かな
◎仝　下谷　白井はま子
月影に直衣すかたのこゝかしこ宮人のむれ虫の聲なく
◎仝　大村　寺井ちく子
なりはひにいとまなけれどすこやかに鍬取しづぞさちはたがる
◎仝　尾張　内田德子
くさむらの石の御佛やせはてゝさやけき月のきり〴〵す鳴く
◎仝　高知　小西雅子
あきらけき月にしらぶるつま琴にたぐへて鳴くかまつ虫のこゑ
◎仝　奈良　鹽見策子
草の葉の露に宿れる月ふけてあはれを添ふる虫の聲に
◎仝　横濱　松野操子
すみわたる月にうかれておりたてばまがきのもとに鈴虫のなく
◎仝　石川縣　河崎あや子
賤かやの軒もる月にこゑたてゝいねがてにするつゞれむしかな
◎仝　芝　大柳錦子
月清くくまなく照す庭面のこ萩か下にすだくむしの音

◎健康　芝　清泉すみ子
たらちねのつゝかなしてふ古里のたよりを妹につたいてしがな
◎仝　廣島　井手睦世子
ふるさとによはひ重ねし親の身のすこやかなりてきくがうれしさ
◎仝　はすえ
父母のつゝがなきこそうれしけれなほすこやかは千代もまさなん
◎仝　赤間關　梶門ひさ子
健康なるしるしとおもへは初孫のいたづら多きもうれしかりけり
◎仝　河内　大矢たれ子
すこやかに子等もそだちて絶えて世にいたつきしらぬわが身うれしも
◎仝　上總　白石貞子
いとし子はま白に肥えて恙なくはいて歩み二才となりぬ
◎仝　岩代　遠藤雪子
いかにせばやまひなき身とわれならぬ田草とるなる賤の女のごと
◎仝　備後　小林すゞ子
つゝかなきみにはしかじな百千ゝの黄金しろがねつみゝつむとも

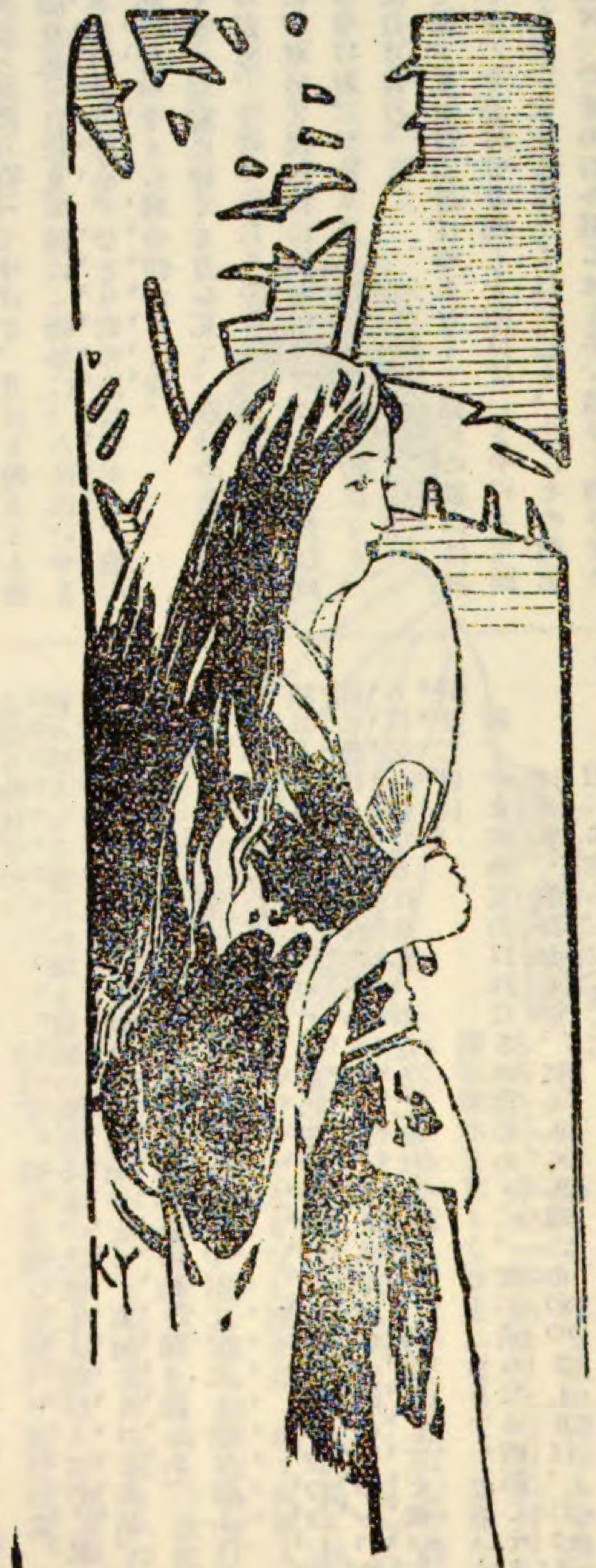
文章

《天》秋夜の感想

東京牛込天神町廿三番地早川方　早川たけ子

今日もまた日影ははやくおちて、夕暗の空鐘の音悲しう、ほろ〴〵となく鳥のこゑ、あれも父母戀ひしとなくにやあらむ。わたる雁がね、すだく蟲の音、世の常の人は悲しといふめれど、かゝるなしも悲しといふ人

の心ぞ羨ましき。
竹よ、竹よ、と今宵もいたく呼ばせ玉ふに、母君の沈透に心もとなく侍りて、つく〴〵と眺め入れば、長きいたづきにやつれさせ玉ひて、顔色青白う、肉おち骨高く、此の世の人にあらぬさま、見る眼に涙催されぬ。さるにても兄上はいかにしかたまへる、去年の春家出したまひしより、そよとの便だに迯らせ玉はれば、定めて、母君の病の事は知り玉ふまじ、貧しき家も二人打ち揃ひて、みとりしまゐらせむには、いかばかりか心强からむを、かよわき女の身のげに心もとなし、母君も兄上の事案じさせ玉ひて幸作はかへりしや、いまだかへりこずやと、幾度か問はせ玉ふ心の中、おもひはかりまゐらするにつけ、またほろ〳〵と涙こぼれぬ。世の人が淸しとみる月影、妾が眼には曇りがちに、美しとめづる紅葉さへ、悲しき色に見ゆるぞかし。あはれ富も貴きも物かは、妾は命にかけても母君の病いえんとを祈る、此のせつなる心根、神もくみ玉はざるか、あはれ果敢なし。折からそよふく風、破戸をもれて、燈火いと細く、空にはわたるかりがね數聲、母君やいかにとさしのぞけば、すや〳〵と快よく眠り玉へり。



花咲く頃にいえんと笑みつゝ仰せられし母君の病、かく重りゆかんとは思ひもかけざりき。げにや人の身は明日をもはかられじ、こし方行末おもふ事しげければ、そは物の數ならず、かゝる夜長も短かしと嘆ちし昔、はらからの健かなる、まどゐみむ事の、いたくも望まるるよ。忽ち遠くより音して歩みくるやうなるけはひ、もしや兄上のかへりき玉ひしはあらずやと、外面うかがへば、あらず、雨のばせをに音づるゝなりけり。あゝ何事も過ぐ世の因縁ぞ、たゞ尊き神の御心にまかせまゐらせむ、やがて母君のいえ玉はゞ、笑ふて昔をかたる時もあらむ。母君はいまだ眠り玉へり、いざしばしと、縫ひかけし衣服取り上ぐれば、縫の蟲も心ありてや、一としきりなく音をとゞめぬ。

評　親をおもひ、はらからをおもふやさしき心のほど、筆の面によく

あらはれたり。人の子のせつなるこゝろ、神もなどかくませたまはざるべき(蝶二)

《地》 秋夜の感想

姫路市北條口六五 高井かづ子

夏の末つ方獲し病の立つ秋風と共に、衰へてゆけど、月にも餘るうき寢に、氣もおとろへ、身も細りて、目に見耳聞くに、物毎に、あはれいやまさりぬ。殊に今宵待宵のさやけき月影を、ひとり寢の床にながめ、籬にすだく虫の聲々うらむを聞けば、千々に思の碎かるゝ哉。

世が世なりせば、高樓近く淀の川瀬に碎くる月を見て、歌けの莚に樂ませたふまべき父上、母上ながら、今はやれたる茅の庵に、朝夕の水仕業、額に寄る年なみの皺見ては、せめて已れだに健かなりせばと、人知れぬ涙に枕うるほせしも幾度なりけむ、せめて兄上だに此地に居給はゞと、寢ざめの床に嘆ちしも幾度なりけむ。

過ぎし年隣の國と戰ありし時、兄上は「吾は幸ちなくて徵兵の數には洩れたれど國に盡さむは此秋ぞ、千島の守り薄しと聞けばいざや行きて國の爲めに殉はむ」との給ひし時、父上も母上もはた已も、共にその門途を祝ひて、一ふりの劔を送りて、その行を盛にせしが、隙ゆく駒の足搔はやくて早も七歲の月日は逝きしか。

其後も父上は細き御腕に畑打ちなどして居給ひしが、流石に年寄らせ給ひし事とて、月の夕雨の朝には、兄上をしのび給ひて、朝餉夕餉の膳に就かせ給ひても、兄上いまさぬが淋しとて、そと涙を拂ひ給ひつる事も幾度なりし、そを見奉る已の胸の內やあゝ如何なりし。あはれ兄上いま如何にますらむ。鬼が住みしてふ千島のはて、今も降り積む雪に、縷の貧乏しくて、住む人も稀なりとかや、されば暖き國より移り住むもの、ともすれば病勝ちなりと聞くに、いかに兄上健かにおはすらむか、便あしき地の文の便りもと絶え勝ちなるを實に健かにおはすか、國の爲めには身をも家をも顧みすとは云へ、家には年寄らせ給ひつる親君のいますをせめて一度は歸りませ、つらき我身の胸の內を思へ給ひて。

今か打ち給ふ砧の響、腰は梓弓をなせる母上の遠き兄上にとて打ち給ふと知り給はずや。

撓み勝ちなる響はか細き御腕の爲なるか、しばしと絶ゆるは月に思をや碎かせらるゝ爲か、たとえ海山千里を隔つとも、眞情こもりし此砧、千島の里に響かぬ事やはあらむ、あはれ誰が爲の砧と聞き給ふか。

漸う打ち終へて卷き給ふ音もさら／＼と、やがて父上と語り給ふは月に何をか噂し給らむ。

照りまされる月は、いつしか庭の樹立の上に登りて、明け放たれし病の間の疊に、冷けき松の影をうつしぬ。折しも鳴き渡る雁の一つら、前なるは父か後なるは母か、中なる二羽は兄か妹か、何地さしてぞ飛び行く睦まじげに。

評、いとせめてあはれなる水莖のあとに、君が淸らなる面影こそしのばるれ、親をおもひ、はらからを思ふ心のやさしさは、たけ子の君にも劣らじな(蝶二)

《人》 秋夜の感想

麹町區飯田町四ノ一山下方 山內すゞ子

夕顔のやう／＼小さく咲きにし垣のもと、蟲の聲さへ鳴きよはりて、いつしか黃ばみかけたる青桐の、一葉二葉はら／＼と力なく、落つる日影

ともろともに、西へ／＼と消えて行く、孤雁のこゑの秋の夕、何となう涙を誘ふ種なるを、一きは涙に咽べよとては殘さゝりけむ、友のうつしゑ。

枕に通ふ鐘の音近くして、靜かなる夜は長けれど夢徒に短く、寢られぬまゝに起き出でゝ、思へば去年の夏なりき、年ごろ姉妹のちぎりも淺からざりしわが友の、ひさ／＼にて寫眞を撮らむと云はるゝに、われも嬉しくして共々に近き町に至りぬ。其歸るさにも互に微笑みつゝ、七日の間こそ、待遠しけれと云ふひまもなき其三日目より、友は重き熱をわづらひて伏し給ひしかば、わが心も身に添はず、みとりせむと請へども醫師の聽き容れざるまゝ、日に一度二度僅に顏を見るを得たりしのみ。友は必ず其度毎に寫眞は未だ出來ずやと云はれしが、約束の日も來ればとて朝早く町に出で、急ぎて寫眞持ち歸り、病の床を慰めむものとて走るばかりに家に到れば、すゞ樣や寫眞／＼と云ひつゝ今の今息絶えぬと、泣き迷はせらるゝ母君の聲、あはれ如何なる世の有樣ぞ、待ちわびし言葉は何の約束なりしぞや、寫眞は玆にあり、今わが手のうちにあるものを、清眸一たび閉ぢてまた何かせむ、その母君は袖の涙をとゞめえず、あゝ今まで待ちしならずや、せめても見よやわが娘よと、萎みし顏に押しあてゝ、早や色變はり行く花の唇をうちまもり、魂も消え行くばかりに歎かせ給ひしは、何處まで哀れなる世の有樣ぞ。

寢ても見む寢でも見るべき空蟬の、夢より淡き人のおきふし、わたり川に涙の水を増せども、終天また此世に歸り來まさずや、翌くる日、その母は簞笥にみてる娘の衣とり出し、親戚にかたみとて贈らむ品を撰みつゝ、さてもつれなし、床しき蝶の花の袖、裳すそに輝く紅葉さへ、主なきものを如何にせむ、仇野の露の形見はしげかるに、うつしゑまでも撮りおきて、永劫妾を泣かすかと、袖くひしばりて果てなき哀れに伏し給ひ、目もあてられぬその母君の、側に侍りしわが胸の思ひは如何なりけむ。



このさまの悲しさ、宛ら眼の前なる心地せらるゝに、早や一年あまりとなりにけり、落花流水またゝくひまになりて、鳥春を迎へて人の心を誘へど、手どり遊ばむ野邊もなく、秋はうしとてもろともに、袖かたしきてまた語ふ夜半もなし、辿らぬ路に枝折れて、ひく人もなし捨小舟、あゝ何事も語らじな思はじな、迚も返らぬ夢なれば。いざや今日の終りを告げ むものと、伏床に入りしが、いよ／＼思ひ募りて眠られぬまゝ、枕をはなれて窓を推せば、千里月明かにして、地上の影も婆娑たり呉竹の露、身のおきどころいとも哀れに夜ふけて、限りなき愁を袂に拭へど又も落つ、そも如何にしてこの一夜をば明さなむ、この秋の夜。

評、ことば美しくざえある筆つきなれど、なほをさなきふしすくなからず、よく／＼こゝろしてみがきたまへ（蝶二）

◉秋夜の感想

筑後　十時やゑ子

折につけての花のいろ鳥のこえ、何れもあはれにはおほゆれど、月すむ秋の夜こそ、ひとときは身にしみてあはれにおほゆれ。かすみていにしと云ひひけん雁がねのこえも昨、日ばかりとおほゆるに、はや立ちかへり音信るゝ、秋霧の上なるこゑのなつかしく、思はず端近う出でゝながむれば、今しも日は西の山のそがひにしづみはて、遠方にひゞくたそがれの鐘の音も、今日はいと心ありげにきこゆつ、吹くとしもなき秋風は、一葉二葉しづかにくれ行く夕をのせて、散り行くさまのおかしきに、雲井はるかに打ながむれば、一むらの雁がねのはるかこなたへ渡りくるかげの小さく見えたる、たが玉章をかけてかと思ふにつけても、更になつかしきは都にものし給ふ姉の君になんありける。淋しさは都もひなもけじめはあらざるものから、わきて今宵の空を如何にながめ給ふらむと、そゞろに御心の思ひはかられてなん。折からさやけき月の雲井にすみのぼれるは、一しほあはれにおぼゆるに、さま〳〵と叢にすだく虫の音をきゝては、亡き父母の言の葉かとうたがはれ、千ゝに思ひ重なりぬ。あゝ思ひめぐらせば、いにし年のこの頃にやありけん、父君とゝもにさやけき月を愛でにしは、母君にともなひて愛らしきすゞ虫のこえをきゝしは、月のさやけきも、虫の音も、つゆむかしにかはられど、移ればかはる人の世の中なるよ。あゝ我が父母の君はいつしかなき人の数に入り給ひぬ。さやけき月よ、こひしき父母の君の面かげをうつし見せずや。愛らしきすゞ虫よ、なつかしき姉君のことづて、つたへずやなど、ひとりごちつゝあるほどに、十六夜の月はます〳〵てりかゞやき、肌さむき夜風にましらのなくこえさへきこえつ。

◉同

横濱　長川さく子

ものゝあはれは秋こそと、ならびの岡のひじりが言ひけんも、實にさることにて。目に見ゆる色、耳に聞こゆる聲、一つとして腸を斷たん種ならぬ人なきが中に、とりわけおのれが心にしみて、魂もそゞろに消えや果てなん心地のするものあり。千々にものこそてふ月の影か、あらず。世の中よ道こそなけれてふ鹿の聲か、あらず〳〵。我が身一とつと擣ちいそぐ夜半の砧の音にはあるなれ。子を秋風にあてじとて、夜寒むの月を身に浴ぶる母もあらん。親の肌寒むからせじの心より、更くる夜風に身を暴す少女もあらん。あるは、旅なる夫の衣たち縫はん料にとて、よもすから眠らぬ妻、さては渡るにからき世のなりはひとて、おのが身を掩はん料にもあらなくに、夜を晝にしていそしむ賤の女もあらん。思ひやり忍びいたれば、他所に聽きなす我が身にも、そゞろに憂き世の秋のかこたれて、日頃心にさげすみし世捨て人の、今はうらやましき心地のするにつけても、如何ばかり深きあはれなるらん。さるにても幼かりし昔には。月の兎の影を喜びつゝ、乳母の背なに負はるゝ夕べ。この音もこのひゞきも、面白きものに數へし秋もありしを。ゆめとるまじきは齡なりれり。

◉同

米澤　馬場春子

今宵の空やいかならめと、東の妻戸おし開けば、まどかなる望月いつしか遠く松ヶ枝にすめり、げにとぶ雁の數さへ見ゆる月ぞよく物よりことにあはれなるにきりぎりすのあはれそへたるいひしらずかし。さるほどに松ふく風の便えて琴のつま音さやかに聞ゆ、其妙なる音月より澄みてまこと水底にきゝたらん心地しつ、其いみじさそゞろに嵯峨のあはれをぞしのばさぬる。あはれ男鹿なく嵯峨のかりやに、きのふ雲井にすさめ

しまゝの月影に、さりにし昔なつかしみ、すさませ給ふ琴のつま音、などてあはれの淺くやは。げに秋の夜な／＼すめらぎには羅穀の袖の露しげく、くまなき月もさこそはいかにくもりけめ。あゝ己か御女故さしも御覺えめでたかりし君をしもうしなはんとた計り給ひし入道殿のおそろしさ、あはれ武臣にて中宮を奉り、位人臣をきはめ、王土の半を領しつゝ、己が御族のみ時の花をかざし、まいて綸言を輕しめ、法皇をおしこめ奉りたる、かしこしなどいふもなのめなり。ことに福原にはえもいはぬ宮造して、萬づきよらをつくし、みがきしつらひ給ひしものから、彼の郷だにおはしまさずは、さかりなりし花の都も、長へに紫蘭の野らと荒れにけむを、まこと其勢の猛なる唐にも其例あらざめり。其威におぢては星の位も光をかくして空しうかこつのみ。まいて皇にはよそに見給ふ大御心、さこそとくひとりごつほど、琴の音なんひきやみぬ。仲國の笛まなびし人もやと、あはれなるに、月いとさえていにし昔をいはましがほに中天にかゝりぬ。さるほどに虫の聲も靜まりて、古井に落つる露の音のみ、ひとり高くて冷やかなり。



◉同

名古屋　和田鞆子

月見れば千々に物こそ悲しけれ我身一つの秋にはあらねどと、古人の歌ひしはげに理りなり。風清く月澄みたる秋の夜は、金殿閣上榮華の夢を貪る素封の大人も、何とはなしに此世を悲觀して、思ひ碎くは世の習ひ、まして郷にありては不幸に泣き、都に出でゝは不遇に沈む、妾か身には雨夜鈴を聞いては膓を斷ち、秋風梧葉落ちては心を亂す、思へば今年も既に半ばを過ぎて、けふは早や長月廿日、げに光陰は箭の如く、歳月は人を待たず、妾が笈を負ひて都に出てしより、今や三星霜、都に來りても家富まれば學資も儘ならず、父無ければ何事も思ふにまかせす、されど我が家名をつぐは只妾一人、さるを如何でかくはか弱き女の身に生れしぞ。妾若し男の子ならば斯うもしあうもせし者をと、自ら淚にくるゝも是非もなし。かゝる責任ある妾が身とは云へ、老ひし母一人を百里のあなたに殘し奉りしとは、吾れながら其餘りに心强きをいぶかり、且つ母の御心を煩はし奉るの大なるを畏る。子を思ふ親の心は決して暗にはあられども、一人の子を都に遣りて、獨り寂數故郷の山川を眺め玉ふ母の御心や如何ならん。忘るゝ譯にはあられど、此方よりは兎角たよりも忘りがちなるに、母上よりは必ず一週に一度は音づれ玉ふ書中記し玉ふ所は御身に恙あらずや、けふ此頃は暑さ增したるに、此二日三日は冷氣催したるにと、又或時は、きのふの夢見惡しかりしが、御身に異狀は非ずや、鷄の夜鳴きを聞きしが病めるにはあらずやと、何につけかにつけ、只管妾が身を思ひ玉ふ、又風のたよりに聞けば、妾が身に恙あれかしと思ひ玉ふの餘り、家に祀る紳々には、一夜の怠りもなく、御燈捧げ玉ふは、云ふ迄もなく、風の日も雨の夜も、家より一里もある萩野村の觀世音に日參し參ふと、夫れを思うては餘りの勿體なさに、妾は只妾が不孝の罪を天に仰いで謝するより外を知らず、夫れに又妾が幼かりし頃の事を思ひ回ぐら

せば、只子供心に記臆する事のみにても餘りの罪多かりしとに胸ふたがる心地す、み雪ふる嚴冬の半夜、齒痛むとて母の眠りを破りしと幾度ぞ、蚊軍襲ひ來る夏の夕、腹いたしとて母の御心を煩はせしと幾度ぞ、母は妾が爲めに幾度の徹夜を續け玉ひしともありしならむ、妾が爲めには自から好き玉ひし物を斷ち玉ひしともありしならむ、又今宵の如く月明かく風清かりし夜、母の背上に圓かなる月を眺めつゝ清き聲、澄みたる調子にて母が謠ひ玉ふ兒守歌に慰められ、知らず〳〵夢境に辿りし古へもありし者をと、今も尙ほ月見る每に其有りし昔を忍ぶ、魚は水を出でゝ初めて水の力を知る、人は旅に出でゝ初めて海山も只ならぬ親の情を悟る、嗚呼罪多き哉妾の身、近き頃に寫せしとて送り玉ひし母の寫眞を拜するに、俄かに白髮の增し玉ひし樣なるも、亦げに妾の罪か、身を立て名を揚げ、父母を顯すは、孝の終りとは古聖の言、今に當て妾の服膺すべきは只此一句、思うて玆に至れば、心緒亂れて麻の如く、杜鵑ならねど血に啼く思ひあり、窓を開けば月旣に西廂に落ちて涼風冷露秋蕭索。

許、今すこしやさしき筆づかひこそのぞましけれ（蝶二）

◉同　門司市　田川つる

なべて我が國の女子のいとかよはきは、世の人の皆知り給へるところにして、そが因の遊戲にあるもはや人々に認められたれば、女子に運動の必要なるを說き示し給ふ文の、いと數多く見らるゝ樣になりぬ。されば富み榮えませる上つ方の君達はよく此事に心し給ひて天晴美くしく生ひ立ち給ふめれど、あはれ中つ方より下の者こそかなしけれ、それも都離れし里に住み給へるは怨み給ふ事もあるまじけれど、黃金色なす塵に埋れて快からぬ空氣を吸ふなる都の人は年と共に弱くなり行くにこそ。この門司の地の如きも先つ年迄は家數いとゞ稀にして、後の山の綠濃く海原渡る清き風の飾らぬ袖を吹き拂ひて、家々の後ろにつゞく田や畑の中をば縫へる叢に住む蟲の數も知られず、澄みゆく月に鳴き出してはいつしか身をも誘ひ出されしが、今は其樣も見るに由なく、日もすがら業に從ひて、胸くるしき迄塵を浴びつ、僅かに樂しき夕餉をおへて、昔ながらの窓に倚れど、光すさまじき電燈はあれど、やさしき月かげはもるゝことなく太き家の我がかしらを壓する樣に建てられたる快からず、時に海邊をさまよへば、こゝもかしこもさふ〴〵しく、立騷きのゝじり叫ぶ聲に、已が身を四方より包まれて居るにも堪えずなん。かくの如くして里も次第に都となりゆけば、かよはき女子はいよゝ增しゆくなるを、など世の人の心なくしてこをば助けむ事をなし給はさるらむ、元より活潑ならぬ我が國の女子のならはせよりそゝるありきをさえ除かれたらむにはいかにかなしき結果となるべきや、あはれ上つ方の誌友の君達よ願はくば此かなしき樣をなさけ深き君達のたらちねに告げ給ひて早く我等を救ひたまえかし。

◉同　神戸　神中しづ

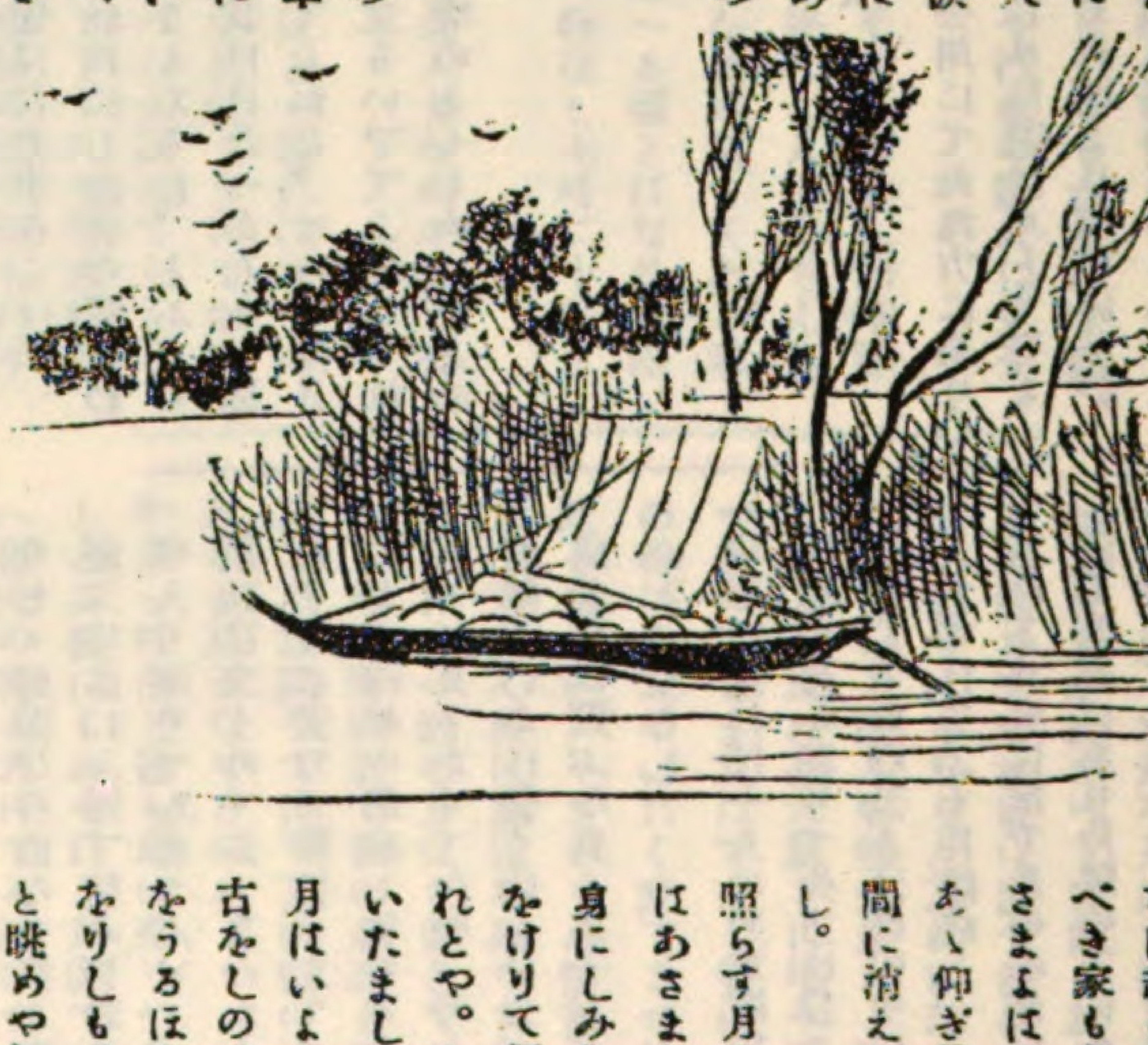
秋風さむくなりゆくこの頃の、夜ころ殊に、なかしけれ、籬のもとに咲き亂れたる、白菊の花の、さやけき月影につくろはぬ心の奥も見えて、いとゆかし、おく白露を玉と見せてすみ渡りたる秋の夜の月たれかあはれとめでざらむ、さては露むすぶあさぢが原に月影こぼれ、さをしかの妻やこふらむ一こゑ近く一こゑ遠くなくこゑの、きこゆるからに、いとゞ秋のあはれをそへてむしかの人の、こゑきくときぞとかこたれし其のかみもしのばれていともあはれふかし。てる月さやけく雁がれの、一つら

なき渡り、かきならすつま琴に松虫の音のかよいたる何にたとへむ、村雨さびしく降り暮し、燈火さへくらきに夜もすがらなきあかすこほろぎの音に、いよ〳〵ふし床も靜けくなりゆくこそいとも〳〵さびしけれ。あはれみやびをたちは、かゝる夜ころとうち集ひつゝ言の葉の匂ひをきそはせ、或は月清き夜とて舞つゝうたひつ月影に一夜をくみあかすたはれ人もあるべくまた古人のちゞにものころとかこたれけむごとくうき事のみ移れる人はいとゞあはれに見るもの聞く物なべてかなしく涙の種とやなりにけむ。さては千里の外に物學してははるかに故郷の空を打ながめつる學び子も、さはにあるほど何れかあはれならざるべき。あなおもしろの秋の夜やあはれ。

◎同

高知　小西　雅

限なき月にもよほされていつしか迷ひきぬる空地のほとり、くづれに崩れやれにやれたるまがきは、草のみ我はがほに生ひ茂りたるに、葛かつらの一面にはひまつはれる、先づ云はん方なう哀れになむ。草いと深きにもすそ稍かゝげて、草葉の露をふみしだき、空地をたどれば、こゝかしこに缺けたる礎の、昔をしのび顔に草のあはひよりあらはに見ゆる、いとあはれなり。又わづかばかりの水のにごりに濁りて、月の光をやどしたるあたりに、古びたる岩の立ちたるは、池にやありけむ、築山にこそありつらめ。大きなる銀杏、桐の木など、昔の名殘として半は枯れてうらさびしう廣ごりたるなど、心浮きたつ春見るもなほ悲しきを、まいて月のさやかなる、虫の音の恨みがましき、秋の夜は今一しほの哀をそへて、そゞろに其かみの忍ばれてなむ。



あはれ、いかに移りやすき浮世とは云へ、誰か思はむ、朝には玉のうてなに起き臥して、うき事知らぬ富人が、夕には住むべき家もなく、まとふべき衣もなく、哀れ道のべにさまよはんとは。

あゝ仰ぎ見し宏壯たる邸、今はたいづこぞや。時の間に消えさりて、僅に殘る一片の草原。あなはかなし。

照らす月かげはありし昔に變られど、てらさるゝ地はあさましくもかわりはてけるよ。吁。

身にしみわたる秋風の桐の一と葉を伴ひ、草葉の露をけりて尾花が袖にかよへば、昔の榮華今一度かへれとや。かよわき手もてうち招くさま、あはれにもいたまし。

月はいよゝ澄みあかり、虫の音はます〳〵しけし。古をしのぶ情はなほつきず。はては怪しの露さへ袖をうるほして、いとゞ浮世をはかなみける。

なりしも、うらかれたる讀經のこゑの聞ゆるに、ふと眺めやれば、彼處の木の間より、もの古りたる寺の見ゆ。これぞ浮世をわびし人の住居になむありける。むぐら生ひ茂れる柴折戸に、夕がほのもつれかゝり、かやふける軒端に散りくる落葉の、二ツ三ツ。小き窓より細きともしびのほのかに光りて、木魚の音ぞ冴え渡る。

虫の音にたぐへて聞けば、いとゞなほものわびしくもおぼゆるかな。み山にきこゆる小鹿の音、賤がうつきぬたのおと、折柄いとゞ心を動かしつ、しばしが程はたゞずみき。

さはれ、いつまで斯くてあるべきかは。名殘はいかにつきじとも、いでやかへらむと古寺のかたを見れば、徐なる讀經の聲はたえずきこゆ。尾花はなほ留まれとや穂にいでゝうち招くらん。枯れにし銀杏の葉のわが袖にちりかゝるは、汝もなごりを惜しむとや。さもあらむ、とふ人も無き此空地。されど夜も更けたらんやうなるに。我にはなつかしき父母あり。一時も早く歸らなむ。淋しくともあす迄待てよかし。せめては月を友としてありし昔をしのべかし。いざさらばと立ちいでてふりかへればさやかなりし月はいつしか村雲におほはれて古寺のともし火、いと心ぼそし。

雜文

◉嚴島より防州に遊ぶ

安藝　みぎは

東の都の某官省に奉職せる從兄の君の先つ頃より公用にて此地方に來り居給ひけるが幸休暇を得たれば嚴島より防州あたりに遊ばんとて妾も共にいよ／＼明日出發する事にきまりぬ去るを夕ぐれ頃より空のけわいたゞならず果ては雨さへ降り出でぬ斯くてはあすの出立如何あらんかと空のみ仰ぎ見る夜に入りては風さへいたく吹き加り面てを向くべくもあらず舟人の助けを呼わる聲ときれ／＼ていと哀れなり伏床には入りても岸打つ波の音のみ高く夜半過ぐる頃迄まどろみも得でありしに舟人等罵りさわぐに目覺めて起き出つれば吹き荒びし風もなき降りしきりし雨も名殘りなうはれ渡りて朝日の影うらゝかにそよ吹く風もいと長閑なればうれしくて急ぎ仕度を調へ午前十時と云ふに家を出で大阪商船田川丸に乘つボーイの案內する室に通りて新聞など見てある程に何所よりか音樂の聲嚠喨と聞ゆ耳そば立てつゝ甲板にのほれば果して此處に樂隊の一團今しも船遊びの曲を合奏し初めぬいとおもしろくて船の進むも知らず程經て宇品に入港す積み荷おろし荷の數多く碇泊時間いと長ければ小き艀等入り來りてお客さんビールは宜うあすかー夏みかんは宜うあすかーと口々に黄なる聲振り立てしつこく進むる樣の哀れにも亦おかし

やがて汽船の進航し初むると共に彼の奏樂も初まりぬ人々珍らしげに打寄りて見るかくて午後一時と云ふに嚴島に着す海岸通りを過きて紅葉谷岩總といふに暫く休らい先づ神社に參拜せんとて立出づ道すがら鹿の其處此處に遊ぶを見る菓子など購ひてなげやれば靜かに集まりて食す樣のいといぢらし

海廊に至れば一人の男草履揃へて差出す銀貨一つあたゆれば下駄は早や神殿の外を廻りて先方に持ち行く樣なりほかに案內者と見えて木綿の袴つけたるか四五人連れの中に交わりてかゝげある額などの說明口より出まかせに云ふも片腹痛し

其れより町に出で島の名產など求め千疊閣に上れば先きの程同船せし樂隊も此處にあり片隅の方に小店出したる老女の力餅とて器に盛りて進むうるさければそこ／＼に銀貨あたへて立つ再び紅葉谷に至る小高き處の紅葉の許に西洋人の男女余念無く空のみ仰き見てありしか妾等の行き過くるに心附き笑みもて見送りぬ

此處等の風景の佳なる得もいはれじ彼の西洋人等もしきりに小首かたむけつゝながめ入る樣なり

暫くして旅館に歸へる今宵は此所に一泊して邇郷の郭公聞かん豫定なりしも餘りに早ければ直ぐに岩國に至らんとて立出づ

海岸に淀泊せる小蒸汽船に乘る屢々汽笛をならせ共そは唯遊客の足を促すのみにて更らに發船する樣もなし斯くては汽車に乘り後れんかと心も心ならねど詮しやかて漸々發錨〻程經て對岸なる赤崎に着す

上陸する間もなく汽笛の音聞ゆ人々乘り後れじとなりふりもかもわず急ぎ行く樣のいとおかし妾等の停車場に至りし時は早や汽車の影だに見えず次の車待つより外詮なし

待てど／＼汽車は來らず大屈さに堪へで其所此處とそゞろ歩きしぬ下等待合所の前に至れば先きの程急ぎし甲斐もなく乘り後れし人々ならん皆大屈げにあくびして涙浮べし眼にいぶかしげに妾等を見る斯くてある程に日はいつしか西の山の端に沈みて鳥はねぐらに歸へる頃とはなりぬ停車場に入れば瓦斯燈の光り月の暗き場内を照らして物凄し七時二十分と云ふに開札口は開かれぬ

人々よみがへりたる樣にて今か今かと滊車の來ると云ふ方をのみ見る待つ間程無く轟く音と共に停車す

汽笛一聲跡に殘して車は輾り出しぬ窓にのそけば日はとく暮れはてゝやみにきらめく星の影田の面の水に映じて物凄く何處を見渡すもたゞ暗くて時々一きわ黑き山ほの見ゆるのみ玖波大竹もいつしか過ぎてうとうとなれる頃驛夫の岩國々々と呼わる聲に驚かされて下すれば早赤帽の甲斐々々數調へ吳れし車あり足元危く漸々乘りつ一里餘の道をゆられゆられて本町なる米久となん呼べる旅館に着きに……は正に夜の十時にてありき湯など命じ置き斯くおそくなると知りしならば嚴島に泊るべかりしになどゝ返へらぬ操事くり返しつゝある程に早や下婢のお湯召しませ御案内申べしと云ふに供なわれ行く夜汽車の勞れも洗ひ捨てゝ心もすがすがしく室に歸へれば夕飼の膳は運ばれぬそこ／＼に濟して餘り夜も更けぬればとて伏床に入りぬ夢も長閑に全く曉を知らず

五月七日

ゆる／＼起き出でゝ欄に倚れは此處は岩國川に添ひて建てられたる家にて川幅廣く向岸を見渡す樣さながらわか家の景色に似ていとおかしかくて此好景を眺めつゝ朝飼も終り宿を立出で俗に算盤橋と名づくる錦帶ばしを渡り吉香神社に詣ず側に小さき茶店ありあるじとも見ゆる者年の頃五十餘りにもならん哀れに落ちぶれたる樣なれど昔氣質の武士の果ならんかといと床し卷物短册など取り出して橋の由來お手植の松の來歷委しく話し出しぬ妾大屈さに堪へで暫く公園を散歩して歸り見ればまだ中々やむべしとも見はず主じ妾に一寸ゑしやくして語り續づくるを聞けば彼の松は主君のいたく愛でさせ給ひしものなればせめてあれ丈はとて殘し置きぬしか／＼とそゞろ懷舊の情に堪へぬさまなりき漸くにして此處を立出で此ん度は裏道を廻りてはしに出づ處々に一尺四角の板に白きぺん塗りたるへ池の月はと書きてかゝけあり如何なるのもにやといぶかしそれより新町に出で彼の名高き松金油など購ひて宿に歸り着く間もなく晝飼の用意調へて出す其折彼の「池の月は」とあるは何なるやと尋ぬればあれはお菓子なりと云ふ

午后一時命じ置し車に乘りつ此處を出づ暫くして野外に出づさして光景といふ程にもあられど見渡すかぎり萋々としていと心地よし其れに引かへ車夫の苦るしげなる汗びつしよりになりていと哀れなり二時新港停車場に着きぬ先の夜の赤帽見忘れずやありけんにこやかに走り來りて例の如く甲斐々々し待つほとも無く汽車は來れり急ぎ乘る者下る者數知らず妾等の入りし室には外に一人も無くいと靜けかりき汽笛の音と共に車は軌り出しぬ硝子窓に日光反射してあつさいみじく外

の眺めも眼に附かす三時大島といふに着きぬ此日此處に一泊す

五月八日

早朝起き出で小舟にて小松志佐村間作となん云へる處に至るこゝらは訪ふべき人ありて立寄りしなれば別に記すべき事もなし夕ぐれ頃海岸を散步す沖合遠く走り行く滊船のやがてはやく家の前過ぎ行くならんにと憂き旅にはあらねどそゞろ懷し宿にかへりて蓐に附く此の家は宿をなりわいにすにてもなく土地の富豪の別莊とかにて下男一人下婢一人にていと心安し

五月九日

此日下婢の御大屈に候はむとて出し吳れし「オールゴール」に半日を過ごぬ午後一時此處を出で小船に乘りて久賀に向ふ海上穩かにいと心安かりしに何時の程よりか風なきに浪起り船の動搖甚たしく船端を洗ふ波の音騷まじく耳元に聞えて生きたる心地もなし程へて船頭のいさ上りませと云ふに初めてよみかへりぬ此處水淺くして岸迄船着け難ければとて船頭にお負さりて上陸す程近き福田屋と云ふに宿りぬ浴終りし後も猶船心有りて氣分すぐれず例の散步も見合しぬ後にて聞けば大畠の瀨戶とて名に高き難所の由又更にぞづとしぬあすは廣島へ向け出發の豫定なれば上り滊船の時間見ばやと定期時間表取寄見るに午前三時と有しかば直ぐに伏床に入るされどまた頭の病めて中々目も合はず二時過ぎしと思ふ頃寐す番の下婢入り來てそろ／＼お仕度をと云ふに起き出つ

五月十日

滊船待合所に至る程無く三時を報じぬれど船の來るけわひもなし餘りに大屈なれば海岸より町筋を廻りて歸り見れば早や人滿ち／＼しぬ中にこわく哀れに感ぜしは繩目にかゝりし三人の男にてありき一人は年の頃二十四五歳他の二人二十歳未滿何れもほうかむりなし居りぬさすか恥かしかりしならん集りし人の中より折々ものいひかくる者あれはおもはゆげにうなだれぬ思ふに彼れら此土地の者にやあらん去るにても如何なる惡事はたらきしにや定めて親兄弟姉妹の如何に慨きかなしらん彼れらも今は前非を悔ゆるならんにとそゞろ哀れに感じぬかくて四時もすぎ五時も過ぎ今又六時を報じぬれど船の影だに見えず問屋の男らも餘りの事に變のありしにはあらすやなど云ひつゝ波止場に走り行き沖の方をのそみ見るつどひ來人々の珍らしげに妾らを見るに恥かしくて濱邊におりてまつ二十分もたちしと思ふ頃滊笛の音遠く聞ゆ急ぐとしにはあらねど待ちわびし身にはげに郭公の初音にもまして嬉しく聞きなされぬ人々艀船に乘り移り沖合遠く漕き出づやがて本船に近付くや先きを爭ひ乘る者おりる者中々に混雜しぬボーイの案內する室に通りすぐに甲板に上れば積荷おろし荷の掛け聲勇ましく終りしと共に滊笛一聲耳を聾く聞きなれざる人々の驚きあきるゝまに艀船と本船とは遠く隔たりぬ

程なく岩國の新港に着きぬ此處より乘りしは水兵一人なりき休暇を得て國にまします父母を訪ひまつりしならんといと床しおるゝ者彼の三人の繩目の男に巡査二人のみなり滊笛の音と共に本船よりはなるゝ時心細けに此なたを見返る樣のいと哀れなり是れより岩國監獄に送らるゝならん哀れ彼の三人の男よ期滿ちて歸りなは本心に返りて父母の御心安んせしめよや

船は全速力を以て進航し始めぬ八時頃ボイーの知らせこせしまゝ食堂に入るまたたぬ終りて甲板を逍遙しぬ見る間に變り行くをち方の景色中々いひ知らす今日の如き靜かなる日にはいつもならば醉ひるにはあらねど昨日の船心のまた失せやらぬに夜一夜まどろみもせさりし爲め頭り何となく重く室に入りて横になりぬ

とかくして船は宇品に入港す陸には客引共數多集まり吉川で御ざい、加

川で御さいーと先を爭ふ樣うるさし人こみの中をようく〱おし別け車に乘りつ大手町三丁目なる長沼旅館に投じぬ過ぐる日志佐村にて結はせし髮の餘りにおかしければ早々髮結ひをと命じぬ程無く侍女の只今といび越せしまゝすぐにとて例り如くいてふがへしに結はせつ

浴終りて欄に倚れば上氣せしをも涼風に拂はわせつ云ひ知らす心地よし折ふも川の下手より勢ひたけく上り來る四五のボートあり興かりて見てある程に船端に立ちし一人如何なるはずみにやざんぶと水中に落ち入りぬ其音に隣室に居たまいし某大佐の君驚きて出で給ひしが落ちし人のボートに得およき附かすして妾らの下の岸にぬれ鼠の如くなりはい上る樣のおかしくて果ては大笑となりぬ

夕ぐれ頃より散歩に出づ中學生女學生あるは兵士など道もせまきまでに見受けられぬ九時歸りて寢に付く

五月十一日

午前十時車にて二葉山公園に至る藤の少しは盛り過ぎたれとかれて愛する花なればいと興深かゝりき

其れより宇品に出づ折好く汽船利根川丸着ししかば直ぐに乘りつ程なく發錨す吳軍港江田島へ寄午後一時漸々かへりつきぬ

日頃見なれし山水の景なんとなくなつかしくも亦珍らしかりき

◉遠征中の軍人をおもふ

久留米　有馬かつら

立秋の文學こよみの上には見えたれど、暑さはなほ昨日にかはらざりき。山水清く涼しき梟御國の內にありて、あつければ海水に汗を流してなほたえ難き今日この頃、寒暑ともに烈しき北淸の野に明しくらす我同胞の、あゝ其朝な夕なやそも如何なるらん。

砲煙みなきり銃聲とゞろき彈丸雨の如き朱羅のちまたを、君の御爲國のためとてかけまはりつゝ、數多の軍勢の其なかに、流石は大和島根の山櫻散るをなしまぬその雄々しさは一際にして、攻むるごとにたゝかふ每に或は規則正しとて或は武勇比びなしとて、稱贊の聲は砲聲と共にとゞろきて、天晴うるはしき御國の光を天涯の異鄉世界人種の集合地に、かゝやかし給ひしことといと嬉しともうれしけれ。

されど如何せん、喜怒哀樂は常に相交りて、嬉しきことの裏面には、又かなしきことも有るものを。

あはれ異鄉にある我が同胞よ、あまたの人に見送られて、足をかの地にむけし時、老ひたる父母、やさしき妻、可愛き兒等のおもかけを見て、之や見納めと思ひし時、よしんば表面は笑ひてありしにもせよ、あゝ其心の內や如何、万感胸に極はまりて、見えぬ涙にやむせびけん。

玄海の波にゆられつゝ遠く御國をはなるゝ時、分每に秒ごとに、影うすれ行く山の姿を見送りけん。あゝ其折の思ひや如何なりし。

炎天白妙の服をこがすが如き夏の日、いかに行軍に惱みぬとも、咽喉をうるほさんに一滴の淸水なく、日光をさけんに一の樹影なき原野を過ぐる時、ぶどう棚の下涼しかりし風を思ひ出でゝは、如何なる感の起るらん。

銃を旅れの枕に替へて、露營のねぶりまどかならぬ夜牛、老ひたる父母がうればしげなる姿、やさしき妻が薄紅のほゝに淚のあと淋しげに「どうぞ御無事で……」幼なき兒は小き日の御旗打ふりつゝ「お父ちやん何時かへるの」と幼な心にとはれたる其當時の樣の夢にや見ゆらん。あゝ其時の心や如何。

口惜しくも飛びくる敵の矢彈に、輕からぬ負傷して、心ならすも勇ましき進軍のラッパをよそに、今しも鳴りうご

く胸をむなしく看護婦のなすにまかせて、遙かに銃砲のとゞろき凱歡の聲をきゝたらん時其口をしさやいかに。負傷せるみにも苦痛を忘れてや立上るらん。

異域の鬼とならん時、其胸の内や如何……

あゝ戰爭を野蠻の行爲とはきゝしことありき。されど已むを得ざる今日の雲風、なほかく人を泣かしむるか。

あゝ暑ければあつしとて、寒ければさむしとて、冬は衣とり重ね夏は涼しきうす物の袖に風むさぼりて、飽くこと知らぬ世の人々よ。夏の日も冬の夜も只一定の服に身を保ちて、正しき規則のもとに心をくだき身を粉にして、世の爲にかくまでつくせる軍人の、其功勞は實に海山もたゞならじを、我等は如何にして慰むべき。

あはれ異郷にある我同胞よ、重任終りなばとくかへり給へ。君が恙なくかへり給はんをいのる者あに君が父母兄弟のみならんや。

◉岩津山に遊ぶの記

それがし

頃しも明治三十四年五月一日

なりひびく起床の鈴になかば渡りし夢の浮橋とだへしてふしどいづるもなか／＼にけさは心嬉しくまづ空のさま見上ぐれば豐榮登る朝日子の光まばゆく木々の若葉に照り添ふ風情見なれしあたりのけはいとも思はへずさるは皆見る折々の心にやあらむ七時頃朝の飯たうべ終りて皆々袴のよそほい凛々しく師の君にともなはれ樂しき笑顔に校門を出ぬ。岩津山までは聞しにまさる遠みちにてたゆからぬにはあられど樂しきけふのあゆみなるにやさばかりつかれをも覺へず道すがら伊賀八幡宮にまうでなほふたところの寺院に立より師の君よりかず／＼歴史上に付ての御物語を承りぬ。其一寺の名は今得思ひ出されば記さず大樹寺は我身未だ家に在りし頃ほい一たびは行きて見ばやと思ひ居たりしもあまりに道の遠々しきため其事叶はざりしをけふはからず師の君をはじめ友どちの君など打つれ樂しくとひこし事のうれしさよさるにても忍ばるゝを見ぬ世のあと梢をならす松風はありし昔の矢叫びかゆかり色こき一もとのすみれ花咲くかたへには朽ちたる太刀も殘るめり恨みに燃ゆる岩つゝじくれない匂ふ其色は殘る血しほのあとかとも思ほへてそゞろ哀れをもよほされぬかくて岩津山に着きけるは十時過ぐる頃なりきまづいたゞきなる天滿宮に拜して後何とやらむ云へるかたへの掛茶屋に入り茶菓などたうべつやすらひぬ。あな美はしき四方の景色や見渡すかぎりはてもなく深みどりなすそが中に麗流るゝ磯部川のみほの白うさながら布などさらしたらん樣見ゆるなど實に世の塵知らぬながめにこそ。こゝにてひるの飯たうべ終りつ暫しいこひし後家路につきぬ歸へるさは矢作の流れに添はむは如何にと師の君か仰せに皆々足のつかれも打忘れるこそれがふところなれなど中々に勇み立てこゝを出けりされど中途にて皆々困じ果あなくるしき事よかゝる道まわらざりせばなどいまさらくやみごと云ひつゝ何とやらむ云へる松のなわてゐ來かゝりし時いづこよりかいとも勇ましき喇叭の音のきこゆるに思はず心はげまされつらくとも今暫し矢作の橋は早まぢかきものをなど友どち互に語り合ひつゝ新橋とやらむ云ふはしの上にたゝづみつ白帆はる船のゆきかふ樣などはてもなくながむれば實に清き流れに心さへすか／＼しうなりぬ。川の面見やりて餘念もなくたゝずむ折から一艘の船の風に帆はらませつ此橋の下に來かゝるあり夫と妻とは船べりにて何やらむいそがはしげに立まいそがいとし子にやあらむ七ッ八ッばりなる少女となほ三ッ四ッ年下なるべきをの子とは樂しげに遊び居り其少女のたすきあやどりたるに何をかなすらむと思ひ居しにやがて

此橋の下過ぎて先になろせし帆あぐろに此少女綱とりて力のかぎりひきあぐろさま何となう哀れにも思ほへぬ。いざゆかむと師の君の仰せらろゝにさま〳〵と心に描きし空想やぶられつ夢などさめし心地にてつきぬ名殘りを惜みつゝ又もやあゆみ出せしにこたびは少しつかれを忘れしよう覺へぬかくてやう〳〵歸校せしは午後三時頃なりき實にくるしくも亦樂しかりしけふの日よ此夜は夢さへ彼の清きほとりに遊びぬ其折はしるしもとめざりしを一月あまりもへしこよひふと思ひ出しまゝをせめては後のかたりぐさにもと日記のはしにかくなむ筆加へぬ

◉習字の互評會を起さんとして

備後 岡崎 穎

昔支那の戰國の代、項羽といへる武士の、劍は一人の敵、書は姓名を記するに足れりとや、いひけるより、書の道に拙き者の口實となりたりけるも、そは亂れし世のことにて、區々たることを顧みるに暇なければこそ、斯はいひたれ、さるを書を修むることは、無益の事の如く思惟するは、愚なることの限りなり。相互に思想を交へ、あるは、事を後の世に記さんとするには、書の道をおきては、他に依るべくもあらず、ことに一つの文綴りたらんにも、水莖の跡麗はしければ、何となふみやびてぞ見ゆるものなり。まして、こは誰の書なりとて、愛で賞されんには、其嬉しさは、如何ばかりならんか。ことに書は人の性、心立をも知り得べきものなりとも言ひ、亦みめ形をも、畧推し量り得べしとも、申しぬれば、常々、心をこめて修めでやはあるべき。さればにや、世の開け行くに隨ひて、彼の項羽の言の葉も、次第に世に捨てられ、水の泡と消え行きて、今は我國の美術として歡び迎へられ、名ある人の書なんどは、數千金の値をも、なすに至りたるならめ。斯る折柄を窺ひて、少しく此道に心得ある、好ましき輩共の、世の爲め人の爲めならば鬪りもせで、徒らに已が私利をのみ營まむとて、何々會或は何々など稱へて、仰々しくも新聞雜誌などに廣告し、斯道に熱心なる人々をそゝのかし、貴重の金錢を貪り取らんとするあり、まことに忌はしく憎むべきことにて歎かはしき限りなり。おのれ亦斯道を深く嗜みて、古人も人なり、我れも人なれば、學びて得べからざることはあらじと、古の聖の後の爲めにとて、書き殘し給ひたる法など、彼處に此處に搜し求めて心を盡し修むること、茲に年あるも、筆取れば則ち澁り滞りて意の如くならず、所謂病字たり俗字たるものゝみにて、僅に其形をなすといふに止まれば、朝に夕に種々思ひ煩へども、またせんすべもなし、開け行く御世の事にしあれば、大家先輩も尠からねば、之れが斧正を仰がんとするも、鄙に育ちし身なれば、門に入らん道もしらず、又其禮に習はざれば、徒に已が不幸を喞ちつゝ病筆を弄ぶのみぞかなしき。よりて茲に習字互評會なるものを設けて、各其の書きたるものを相交換し、忌まず憚らず、互に評し互に正し、其足らざるを相補ひたらんには、其益は少なからぬことよと希ひ起したり。元より書は男女の區別あるべきもなければ、世の斯道を嗜まれ、志を同ふせる人は我が心根を推し量りて文の拙きをば咎め玉はず讃し給はらば、我がさち喜びは此上なき事にて、又相携へて此道の進歩を圖ることにもあらんか。あはれ世の心あらん人、男と女とに係らず、我が望をして全からしめてよ。あなかしこ

◉養老浴瀧の記

岐阜 高橋 現子

のどやかなりし花さく春もいつしか送りはてあつさはいやましに增して夏の季節にと移り今日は土用のあつさ最早酣ならむと思はれし葉月五日

の事にやありけむあざやかに照らす朝日の登ると共に常ならぬあつさは膚を透しあまつさへ日頃の徒然に身を疲らし心の空いつはるべうも覺へず、あはれ如何はせむと思ひ居りし折柄ふと養老行きを思ひ立ち心の惑ひもひもとけて倉皇としてそが行にと出でそめぬ我が大垣より四里に餘らぬ道のり車を雇ひて行く程に二時間計りにては着きにけり、あつさいとはげしきにつれて右の事など思ひ出で嗚呼、こゝこそは何處ぞ懐へば雄略の帝の頃かとよ源古內てふ孝子又となき老父を愛み養ひしと之れげにや養老の名の由來する所なり程經て月落ち星變りて元正帝の御宇に至り畏くも御鳳輦をこゝに運ばせられ親しく御觀覽あらせられ泉をば菊水と名づけ給ひ玉體の痛所を癒し給ひしと靑史にいとこまやかに見えたり古はかくもやむごとなき所たりしも現今は畏きこが跡をしのびて俗人のつどひて春はこの公園に櫻花を弄び夏は浴瀧に身を冷して暑さを忘れ秋は紅葉狩る折柄錦着て歸り冬は雪見にと歩を進め寒さを忘れてもどり來る等四時人の行きかひを絕たずいと／＼快き事どもなり、わらはは幸にもかゝる天うらゝかに氣靜かなる日をトして玆にと出で來りしなれば暑さのあまりにと、いそぎ水衣を借りて瀧坪に入りけるが暫しが間は身軀擊たれだるが如く〳〵、得も言はれず其心地言葉に言ひ顯はし難し浴すること凡そ一時間、髮膚蒼ざめ心の玉漸くもづれむとして心苦しく思はれし折あはれ浴をもやめにけりそを終へてし後は頭の內何となう爽然として身恰も別天地にあるの思ひありき、さらばよ最早歸らむかと思へどもあたらこゝ迄來りしに早や止めむも本意ならぬば一たび身を休め菊水を尋ねぬ水いと淸らかに翠色を呈し掬へは其冷藏腑に傳はり身體縮まるの思ひあり、あつさはげしきに暫しが間こゝに憩ひ晝食をも終へて再び瀧の元に至れば返す／＼も古の事どもなむ思ひ出されて

いにしへの大御車のとゞろきを聞く心地せり多藝のたきつせ

と。

已にして再び浴しあつさも忘れて衣纏はむと思ひし頃は日は早や西山に近づき梢の間にかゞやけり、さらばよといそぎ裝を調へて歸らむとせしか何か後ろより引かるゝ樣になむ思はれて一歩々々に顧みつゝ歩を運びしが心ひそかにあはれ養老や心あらば古の芳しかりし話を永く後世に語れかし、あはれ菊水よ心あらば古の香を失はざらむ樣に守れかしと別れを告げつゝ谷川の見ゆる迄顧みつゝ送られつゝも知らぬ間に我が大垣へはつきにけり嗚呼景色よしの養老や我が國土に生ひたちしものどもよ一たび行かむものを養老へ。

◉身は世を渡る船

名古屋 堀田露子

古語に世は海なり身は世を渡る船なりと宜なる哉人の世に處するは恰も海に船を遣るが如し氣は水先案內なり心は梶取なり力は風帆なり機關なり諸般のもの具備して後即ち船を遣るべし世を渡るべし然れども梶取聊かも其措置を誤らんか船は行かんと欲する岸に向ふ能はず他の方向に轉じ或は暗礁に坐し或は黑潮に漂はされて彼岸に達する能ざるのみならず遂に船體を覆沒せしむるの危嶮を免れざるべし故に船行の安否は偏へに梶の取方如何にあり左すれば吾人が世に處するも亦た此の如く心氣力の三者を養ひ內に足つて外に恃つなくんば世波の雜風潮の嶮敢て行路を妨けす能く抱負を行ふを得べく能く目的に達するを得べし之れに反し或は客氣に制せられ或は情慾に驅らるゝときは抱負を顯すを得す目的を達するを得す甚しきは其の身を亡すに至る戒めざるべけんや愼まざるべんや

女學世界定期增刊秋の卷
第一卷第拾貳號
糸すゝき

（九月十五日發行）

●●●●糸すゝきは女學世界才媛詞藻秋の卷として來九月十五日を以て發行せんとす、時方に秋季金風徐ろに吹き來つて涼氣肌に宜しく、庭園の蟲聲喞々として燈火親しむべきの好季節に際す、本誌の增刊か高尙清新にして趣味の富贍なる如何に諸孃が學窓の好伴侶たるに適するかは今之を贅せず、其の體裁は例に依つて紙數二百八頁、內三分の二を以て募集の懸賞文に充て殘餘の紙數を附錄として左記知名作家の美文佳什數篇を收む、口繪には內外の人物風景等嶄新警拔なるもの十二葉を添ふ

附錄

▲富士のあけぼの　田山花袋

海拔一萬二千尺の峰頭に踞して、雪花を茹ひ天風に御し以て、徐ろに八荒の大觀を靜視す、一讀下界の塵緣を忘れ、人をしてそゝろに羽化登仙するの想あらしむ、這個詩的の妙文字

▲湖畔の夕暮　神谷鶴伴

茅屋三四、依稀として行人罕なるの處ろ、旅人老僧に遭ふて古墳の由來を聞く、凄氣蕭殺、鬼氣人に迫る

▲米國女學生の狀態　江湖逸人

頂天立地獨立自由、自から營んで自から活く、敢爲にして活潑米國女學士の眞面目這裏に在り

▲佛國婦人の眞相　管原白峰

優美にして高尙、保守的にして又實際的なる、家庭を愛し國土を愛する佛國中等社會の婦人の狀態描き得て餘蘊なし

▲題未定（小說）　大塚楠緒女史

▲題未定（隨筆）　片山廣子女史

▲箱根紀行　中島眞子夫人

閨秀作家として令名江湖に馳せたる中島夫人が其の良人に伴ふて箱根山聚を跋涉せられたる記行文なり、文字優麗又詞壇の珍とするに足るべし

懸賞文募集

本誌は初號以來『才媛詞藻』の欄を設け賞を懸けて廣く才媛の詞章を募集し來りしが、今回より改めて毎回必らず文題を設くる事となしぬ。其の選評者は孰れも國文學學界の泰斗とも稱すべき名家也、海內の才媛乞ふ其の美感佳想に成れる玉作を投寄されんことを九月分月題左の如し（〆切九月十五日）

讀書の趣味（文體隨意）

秋の山つと（廿四字詰五十行）

（賞品）
甲　一人（圖書切符）金貳圓
乙　二人（仝）金壹圓
丙　三人（仝）金五十錢

和歌兼題（〆切九月十五日）

秋夜感興

蛬

（天、地、人、三名選び前揭賞品の乙以下を呈す）

投稿規程

一、本誌は女子の手に成れる投稿を歡迎す
一、投書の種類は文章（文體は國文及普通文に限る）詩歌（新體詩及短歌今樣の類）小說は優美にして卑猥ならざるもの等とす
一、投書の期日は規定なきも懸賞文は所定に依る
一、投書の用紙は半紙二ッ折（和歌は端書に限る一葉一首の事）半面十行一行二十四字詰にて文字は正楷に限る
一、投書は各種類を別紙に認め匿名を欲するものと雖とも必ず其姓名住所を記載するを要す
一、投書の送附は博文館編輯局宛にて封筒の表面に『女學世界原稿』と記載すること
一、投書は採否に拘らず一切返戻せざるものとす

（寄稿募集）本誌の材料として、家庭及び地方風俗、婦人社界の狀況、孝女節婦の美談佳話、各女學校の狀況、その他有益の資料を寄せられんことを希望す

學校案內

成女學校參觀記

もう今日一日を送れば、あしたは母上の膝元に行つて久しぶりで我儘がいへる、あしたは父上と鎌倉に行つて海水浴が出來ると、何れを見ても嬉色滿々たる同校終業式の朝、記者は麹町區下二番町なる同黌を訪ふた。同校は前號に紹介した女子學院の三町ばかり西によつた同町の角屋敷であつて、旗本の屋敷あとを其まゝ使用したものだから、外部から見ると不整頓で有るが、案内につれられて入つて見ると外部の見惡いとは正反對で生徒の品位、生徒相互の友情、講師の熱心、生徒の成蹟など、實に近頃稀に見る美しいものであつた。聞けば本校は其の精神に於ては飽くまで日本固有の貞婦を理想とし、一家を理むるに當つては良人を助け子女を教へ家庭諧樂の保維者たらしめ、外に對つては時勢に適應して交際に老け、新知識を有し、あつぱれ中等社會の細君として缺くところなき淑女を育成するを目的とするのださうだが、成程一日の參觀でも將來は此處から自分等の理想とする主婦が出やうと思はれた。そこで此校の生徒は何れも皆海老茶の袴を穿いて居るが、目に着たのは袴の裾に黒い筋のついて居る事だ。一寸不思議に感じたから聞いて見ると是は學校が命じた制服ではなくて古の武士が旗印をつけた精神に倣ひ生徒各自が清潔と質素を旨とし此の徽號に對しても品操を保持して他から非難を受けない爲め、また多少其氣品を他に示すために相互相談して出來たものださうな。とにかくこう云ふ風を見ても生徒間の友情が如何に暖くまた其思想が如何に堅いかは直ぐ知れると思ふが、自分は此汚れた校舍に稀に見る美しい學風を見たのを此上なく嬉しく思はれた。猶ほ同校に從事し居る講師諸氏の氏名及び規則の概畧をあげれば

○職員及校則

◉職員　（校長）吉村寅太郎、（主幹）水谷直孝、（幹事）嘉悦孝

◉講師　（修身）吉村寅太郎、（歷史地理理科）水谷直孝、（禮法數學家事習字編物刺繍）嘉悦孝子、（國文）風當咲子、津川家立、（繪畫）村山委山

（英語）川瀨フミ子、（英文學）佐伯好郎、（英語、國文學）宮田修、（挿花茶道）畑田勝子、（音樂體操）白井規矩郎、（割烹）松本常二郎、本野村政吉、（裁縫）江川清子、（箏）鈴田榮清、和田濱子

◉囑託講師　（文學）高山林次郎、（生理衛生）川瀨元九郎、（兒童學）高島平三郎、（理科）後藤牧太、

○成女學校規則概要

一本校の教科を分ちて普通科高等科及技藝科の三とし別に豫備科を設く

一普通科の學科目は修身國文英語歷史地理數學理科家事裁縫習字唱歌體操とす

前項學科目の外繪畫、音樂、編物、刺繡、挿花、及茶道を隨意科目とす

英語は生徒の志望に依り缺くことを得

一高等科の學科目の修身國文英文家事裁縫習字體操とす

前項學科目の外繪畫、音樂、編物、刺繡、挿花及茶道を隨意科目とし三科目以內を併修することを得

英文は生徒の志望に依り缺くことを得

一技藝科の學科目は修身、國文、家事、裁縫、習字、編物、刺繡、體操とす

前項學科目の外繪畫、音樂、挿花及茶道を隨意科目とす

編物刺繡は生徒の志望に依り其の一科を缺くことを得

一豫備科の學科目は修身國文算術裁縫習字唱歌體操とす

一生徒の志望に依り普通科の學科目中一科目乃至數科目を選修する者を選科生とし高等科の學科目に就き其の一科目乃至二科目を選びて特に之を專修する者を專攻科生とす

一既に人に嫁し若くは年齡既に長して一定の課程を履修する能はざるものゝ爲に特別の方法を設け其の志望の學科を敎授す之を特別選科生とす

一修業年限は普通科及技藝科を各三箇年高等科を二箇年豫備科を凡一箇年とす

一普通科及技藝科の生徒たるべきものは高等小學校四箇年の課程修了若くは之と同等以上の教育を受けたるもの高等科の生徒たるべきものは本校所定の普通科卒業若くは之と同等以上の教育を受けたるもの豫備科の生徒たるべきものは高等小學校第二學年の課程修了若くは之と同等以上の教育を受けたるものたるべし

一學年は四月十一日に始まり翌年四月十日に終る之を三學期に分ち四月十一日より九月十日までを第一學期とし九月十一日より翌年一月十日までを第二學期とし一月十一日より四月十日までを第三學期とす

一教授時數は普通科及技藝科を各毎週二十八時高等科豫備科を各毎週二十三時とす

一生徒入學の期は毎學年の始とす但時宜に依り臨時入學を許すことあるべし

一入學者は學力檢定の上相當の級に編入す但學力の檢定は認定若くは試驗に依る

束修は金壹圓とし授業料は一人に付一箇月の納額左の如し

（普通科）金壹圓五拾錢（高等科）金參圓（技藝科）金壹圓五拾錢（豫備科）金壹圓五拾錢（選科）四科目以內金壹圓四科目以上金壹圓五拾錢（專攻科）金貳圓（特別選科）四科目以內金壹圓五拾錢四科目以上金貳圓五拾錢

（空齋生手記）

雜報

◉兩陛下の御精勤

夏は避暑、冬は避寒とて少しの氣候にも身を厭ひて、山紫水明の地に靜養を試みんとするは近年の流行にて、世に紳士・貴孃と稱せらるゝものゝ境遇ほど氣樂なるものはあらじと思はるゝが、一天萬乘の君にまします、兩陛下の御平常を伺ひ奉れば、恐れ多き事のみなりき。扨ても兩陛下には今夏侍醫局の奏請し奉りたる京都への御避暑をさへ御聽許あらせ給はず唯御學問所への定時出御を暫く御見合せあらせ給ひし外は御日課を御變更あらせ給はず何時にても各大臣等よりの政務其他に關する上奏を聞召させ給ふは勿論暑中は一切御見合せ相成るべき例なる外國文武官御延見の議も本年は昨年來渡淸中なりし諸外國文武官の續々として觀光のため來るにぞ彼等は孰れも列國のため功勞ありしものなれば之が慰勞のため引見すべしとの思召を以て前例御全廢の上時々御正裝にて謁見仰付給ふにぞ彼等の喜び極り無きは勿論侍醫の如きは之がため或は玉體に御障碍あらんかと私かに憂へ奉る程なりき。扨又陛下には今に初めぬ御儀ながら農事及び衛生に深く大御心を注がせ給ひ日曜日にして御政務御閑暇に亘らせ給ひける折も侍從等と種々御物語あらせ給ひ本年流行病の少きを御滿足に思召させ給ふこと並本年夏作の好結果ならんことを祈らせ給ふ叡慮の程は明かに侍者の幾度か拜聽せる所にして孰れも感泣の外はなかりきと又皇后陛下には暑中といへども御日課を御變更あらせ給はず赤十字社其他慈惠救濟事業に思召を傾けさせ給ひ又時々御歌を遊ばさせ給ふて女官等と御物語あらせ給ふを此上無き御樂みとせさせ給ふ由にて夏季中は何れへも行啓あらせられず斯の如く兩陛下には酷暑の折柄御用繁に涉らせ給ふも天機御機嫌共に益麗はしく在ませりと承るだに畏くも芽出度き御事にこそ

◎故獨逸皇太后陛下

獨逸皇太后フリードリヒ陛下には二年以前より咽喉癌腫に惱ませられ一時は御危篤の事も聞え御容態尤も輕からざるやに承りしが今其の訃に接し奉ること誠に悼まし、陛下は故英國皇帝ヴイトリヤの皇長女、今の英

國皇帝エドワード七世陛下の皇姉に渡らせられ千八百四十年十一月一日を以て降誕あり、エドワード降誕なかりしまでは假に皇太子の位に立たせ玉ひき御容貌は皇妹孰れの御方よりも御母のヴィクトリヤに似させ玉ひ御兩親の鍾愛尤も淺からず幼きより御聰明にましまし淑德の御譽れ高く御體格は小かりしかども御眉目のうるはしさ缺る丶ばかりの御愛嬌あり先帝フリドリッヒまだ皇太子にして千八百五十六年英國の皇室を御訪問ありし時陛下を見そなはせ玉ひて御心寄せ深く越えて二年の一月に御結婚あり此時陛下芳齡纔かに十七、皇太子は二十七去れば御夫婦の御契りも濃かに男女各々四人を擧げ玉ふ

陛下は尤も女子敎育及び美術奬勵の事に心を用ゐ玉ひヴィクトリヤ女子中學校、美術學校、伯林美術館等の起りたる或ひは今日の盛ある偏に其の御力に由ると聞えし銀婚式御擧行ありて後幾何ならず皇太子は咽喉癌の疾に罹らせ玉ひ陛下の御心配は一方ならず爾後幾年の久しき間も御懇ろに看護慰撫に勤させ玉ひしが斯る程に維廉一世崩御ありて皇太子位を嗣ぎ陛下は獨逸帝國兼孛國皇后に踐祚ありしも皇帝遂に癒え玉はず在位纔かに九十九日にして崩御あり陛下の御悲みは今更申すまでもなし皇帝の御紀念にとて御名のフリードリヒの一字を取りて我が御名とし玉ひ爾後今日に至るまで十三年自ら世と絶ちて專ら老を養はせ玉ひき去冬陛下御重態の節は御母の英國皇帝ヴィクトリヤ殊に驚かせ玉ひて御健康にも支りたるやうにも聞えたりしが陛下は却て後て六月の今俄に御後を慕はせ玉ふと御母の皇帝を失ひ玉へる御力落しも加りけん御年六十一上は獨逸皇帝　皇室　幷に御姻親の外國君主の御悲み下は獨逸臣民の嘆き左こそは深かりけめ中々申さんに辭なし

◉婦人凌辱問題

還回忽突として起れる、米國布哇に於ける日本婦人の凌辱問題は、我が內國人をして痛く憤慨せしめたり、吾人は平素米國を信じ、米國は正義人道を標榜せる國なりと思ひしも、今回の如く、米國官吏が我が同胞姉妹に對して、容易ならざる侮辱を加へたる事實ある以上は國家の躰面上斷じて假借すべきものに非らずと思惟す左に其事件の經過を概記せんに

▲凌辱の事實　七月十六日横濱を發して米國に向ひたる東洋汽船會社の亞米利加丸は其廿五日布哇ホノルヽに入港したるに玆に我が同

聽船客に對し噴々怪事こそ起りたれ幵は同船には香港より乘込みし下等船客の支那人中に一名のペスト疑似患者ありし爲め先づ同人を檢疫所に移し米國官醫ゾクトル、コーフアーなるもの部下の檢疫官吏と共に出張して順次船客の健康診察を行ひ終て上等船客に移るや一同を食堂に集め先づ西洋人の船客より始めしが之れに對しては唯其顏色を見るに過ぎざりしも西洋人以外の船客には全く檢疫の方法を異にし男子はコート及びヅボンを寛め其衣服の上より腋下並に股を探り見し由にて布哇領事館に赴きし領事官補岡部三郎、南米に赴く殖民協會幹事鎌原幸治、淺田伊三郞三氏及び支那人一名にして婦人は別室に連れ行かれたり其人々は岡部氏の令閨、同侍女、米國に赴く芝公園紅葉館野邊地尙義氏の令孃眞末子（十六）シカゴの某大學に赴く小石川小日向臺町一丁目四番地今井爲子（二十七）の四名なりしが檢疫官吏は此四名に對し一人宛壁に向ひて起立せしめ皆な其着せし日本衣を寛め手を其腋下並に股に差入れて探りし由にて野邊地眞末子の如きは眼を泣腫して其無禮を怒り涕泣して止まず今井爲子も非常に悲憤し甲板に上りて彼人に向て「何うかして此敵を取て下さい日本に來る西洋婦人を皆な裸にして同じ樣に檢査して遣りたい」など激昂し居りし由、其他の人々は云ふを好まざる如くなれど眞末子の口供中には「右腋下を檢し更に袴を脫し兩股下へ兩手を挿入して皮膚を直接に檢し終れり」との言あり又今井爲子の分には「腹部全躰を現はして乳房の邊を多く診察し最後に陰部を現はす程なる所置を行ひて左右の股間を檢し或る婦人の言には陰部の全躰を一の健康診斷外になせしもの多し」との言あり上等船客に對してすら此の如し下等船客の婦人に對しては如何なる淩辱を加へしや蓋し想像に難からざるべし

▲志士の運動

右の事實は殖民協會幹事鎌原幸次氏が布哇に上陸して廣島移民會社員に談話したるより始めて同地在留日本人の耳に入り捨て置き難き椿事なりとて直に志士の集會を催し鎌原氏を請じて更に詳細なる說明を聞き岡部氏夫妻を訪問して事實を確めんと打揃ふて領事館に赴き齋藤領事に面會事情を述べしも同氏は至極冷淡なることのみ言ひ岡部氏に逢はんとするも逢はしめざれば孰れも領事に愛想を盡かし引返して再び集會を催し當局者に對して强硬なる抗議を提出し其責任の所在を問航ふと、法廷に起訴して權利の伸張を計ると、在留臣民一般し公憤を發表する爲め日を期して大會を開くとを決議し在留日本人擧て運動し非常の騷ぎを爲し居れり

▲外務官廳の公言

右事件に關して、前きに齋藤領事より、外務省に向けたる報告の要領は、全躰は知るに由なきも、大躰は檢疫を爲すに際し、人種を分ちたること、直接身體に觸接したること等はありたるも、淩辱と稱すべきが如き事なし、然るに、日布兩國人間の感情より事件を誇大ならしめたるは遺憾の至りなりと、又た其後岡部領事官補の證言する所に依れば左の如し

余は日本婦人は淩辱せられたりとは思はず先づ一等乘客の檢疫を行ふ旨を申來りたれば余は之を諾せり檢疫官は男兒を壁の方に向けて直立せしめ其衣服を緩めて腋下を探り次で股間に手を接觸したり其れより女子をば一室に伴ひ別に檢疫することゝなせるを以て余は其後の事は知らざるも一等乘客八十餘人の中露佛獨米の洋人をば何等の事をなさず只だ日本人のみに向つて檢疫せる事に就ては余は甚だ不滿に堪えざる所なるも既に檢疫を諾したる上は食言すべきにあらざれば遺憾ながら默止せり既にして彼の婦人等が檢疫室より出で來れるを見るに一少女の如きは涙を吞で日人と洋人と待遇を別にするは不當なりと憤り居れるを以て余は其の事情を聞けるに檢疫官は最初彼等を一室に導くや

室は暗室にして電燈を燈し居り一人を檢する時は他の三人は傍らに控え居るにて檢疫法は男子に異ならず妻にも精しく聞きたるが別に凌辱といふ程の事にあらずといへり

▲米國官吏の辯解　我が領事の報告右の如くなれども、現に檢疫官たるドクトル、コフアー氏の辯明によれば、明かに檢疫官自身に於て、或る程度までは陳謝すべき事實あるを自狀せしものにて、固より此陳謝によりて、同胞の受けたる凌辱を雪ぐに足らざるは言ふ迄もなく、人種の區別若くは中等下等に於ける同胞の凌辱に對しては、一言の之れに及ふものなきは奇怪なり、又た殊に我が齋藤領事が、日本人自ら事を好みたる如くに報告せるは、甚だ其意を解するに苦む所也今コ氏の辯解書を見るに、其一節に曰く、今度の差誤の生じたるは以前に下等船客中の日清客に限り檢査すべき命令を下し置きたる爲め船中の日清兩人は何人も此命令を適用すべきものと誤解せられたるによりて起りたる次第にて當日は船中にペスト類似症ありたるを以て余が上等をも檢すべしと命じたるを下等と同じ樣に檢査すべしと命じたるものと心得たる譯にて若し責任ありとせば其責は船員にあらずして當局にあり若し此間過誤あらば常局は岡部氏夫妻並に他の船客に陳謝せん云々とあり

右事件の有樣此の如くなれば、布哇在留日本人は、何れも領事の無能を鳴らし居り、現に凌辱を受けたる一人今井爲子の如きは、悲憤の餘り躍起となりて運動し、先づ岡部領事官補に訴へたるも、滿足なる挨拶を得ざるより、遂に邦人の一團結を組織して、是非を天下公論に問ひ、飽迄も同胞の凌辱を雪がんとの決心を表し居れりといふ。

◉女學生の寄宿舍

大日本婦人教育會にては近頃男女學生の風儀兎角正しからず且女生徒に就ては針小棒大はまだしもなれど全く無根の事柄をすら好んで云ひ傳へまた筆にする輕薄者流の多きより益々完全なる寄宿舍の必要を感じ會長毛利公爵　母堂及副會　頭鍋島侯爵夫人その他主なる會員諸氏の間にその議熟し差當り赤阪表町二丁目十三番地なる同會事務所に女生徒の寄宿を許す由なほ同寄宿舍は女學校教育の缺點をも補はん爲適當の監督兼教師を置きて女生徒をして日常家庭の實務に習はしめ父母の膝下にあるにも等しく和樂の中にその業を終えしむる目的なりと

◉クリューゲル夫人

過般物故したる、南阿大統領クリューゲル氏夫人は今の世にはなか／＼に、聞くも稀れなる美はしき性質をば備へたりき、凡そ一たび渠女に會したる者の、其愛は富めるを稱して「慈母の如し」と云はぬはなかりき、ミス・シユライナルの作「亞弗利加の運命」中なる、タン

ト、サンナや以て渠女に比ふべき、其夫君の事業に尠なからぬ興味を有し、自國の繁榮に付て、熱心なる希望を屬せるは、國母としてさもありぬべき事ながら、夫人は政治に熱中して、家政を忽せにする某國女子とは、全く其選を異にしたりき、夫人はクリユーゲル氏との間に、十六人の子女を生みたり、其内今尚生存せるは、十一人にして女子は、五人なり、プレトリアに於る大統領官舍は、狭少質朴にして、凡ての家具はまた儉素を旨としたり、國母としての夫人は、他の住民の妻女と、何等の異なる所もなかりき、それは夫人の、平素忠實なる家婦として立働く外、毫も華美を衒が如ヿなかりしが故なり、げに夫人の特性は、凡ての點に於て「完全なる家婦」たりしにあり、夫人は佛國の名門チユプレー家の出にして、クリユーゲル氏に歸けるは其後妻としてなりき、夫人は前にも述べたる如く、國政の上には常に興味を有したるに拘はらず、平素極めて寡默にして公の席にては勿論、其の最も親しき友にすらも、政治上の意見に就ては、少しも語る所なりきされどクリユーゲル氏の、政治に關する夫人の意見に信頼するヿは、なみならざりき夫人の最も尊ふべき點は、前述の如く、其比類なき儉素の徳にして、夫人は毎朝五時に床を離れ、親から甲斐々々しく調理の釜に火を起し、夫君のために朝の珈琲を作るなりき、大統領夫人として勤勉斯の如し、日高き迄惰眠を貪るなべての世の妻の、恥なきを得るや否や、朝餉終れば、クリユーゲル氏は、聖書の一節を一家團欒の中に讀むを例としたり、夫人の儉素斯の如くなるより、人皆な大統領は、其生涯に於て、五千萬圓の蓄財をなし得べしと信じたり、夫人は大統領の咖啡料として、政府より支出せらるゝ四千圓を以て、一ケ年の家計を支へ得たるが故に、其夫君の給料七萬圓は、悉く之を貯蓄したるなり、而して夫人は又時々諸國の外交家、旅行家等を招待するヿありしが、一たび席に連りし者の、夫人の親切と共に其家屋の質素を感せぬはなかりき、夫人の客を招くや、食事の始まる迄は、其最上の日曜服を着するヿなかりき、それは其客の如何に拘はらず、夫人自から調理に從事すればなり、英杜戰争は、夫人に與へられたる最後の試金石なりき、戰起るの後夫人人に語りて曰く、誰れか此戰争の老年のわれに加へたる絶大の痛苦なるヿを量知するを得むや、嗚呼われ等は、父母と共に數十年の以前英國の壓迫に遇ふて此地に流寓し、今や埋骨の地又彼等の慾火に燒かれむとす、何ぞ慨嘆に堪へむ」と、されど夫人は英國將士の母、妻及び姉妹に對

しては、斷へず深厚なる同情を表し、其最愛の子、夫、及兄弟の陣歿によりて受くる痛苦の、如何に劇しきかを思ふて、涕涙滴々たること多しといふ、夫人は實に敵を愛するの雅量に富みたるなり、今や身は異域に流竄し、加ふるに此賢夫人を失ひたるクリューゲル氏の悲みや、如何に大なるべき、過般ボーサ將軍夫人のクリューゲル氏に和蘭に會するや、談亡夫人に及び、兩者黯然として隻語なきこと少頃なりしと云ふ、さもありぬべきとなり

◉鳩山春子女史の洋行

同女史は今回良人和夫氏が米國エール大學創立二百年祭擧行に付き其聘に應じ洋航さるゝに付女史も同伴渡米せられ米國の各都府に遊びそれより英國まで渡航せらるゝ都合にて九月四日出發の筈右に付同女史の關係せらるゝ職業女學校にては去月十七日其の送別を兼ね盛なる懇親會を催ふし校長中川謙次郎同幹事宮川保全及棚橋絢子諸子の演説鳩山夫人の挨拶ありたり

◉繪畫研究大會

上野の日本美術協會育英部は繪畫奬勵の目的を以て來十一月一日より廿日迄本會列品館に於て開催する事となるべく課題の秋意、勇の二題に據らしめ一名に付二葉を限り出品を許し歷史及び眞景の類には詳細なる說明を添へしめ出品領收の締切は十月二十日とすることに定め又出品に對しては鑑別兼審查員を本會第一部委員より選出して鑑別幷に審查をなすこと入場劵は金七錢とし尙ほ巴里大博覽會視察員其他各員購入携帶の各品を陳列して參考のため觀覽に供する由

◉女子醫學研究所

濟生學舍に於て女生徒の醫學修業を謝絕したるより中途廢學の已むを得ざるに至りたる者を收容し其初志を貫徹せしめんとの特志醫家の斡旋に成りたる者にて目下は專ら前期學科の敎授を爲し漸を以て擴張するの計畫なる由敎員は飯盛、石川、曲淵、森安の諸學士入學申込所は神田區北神保町神保院又初期の授業開始は九月二日なりと云ふ

◉日本遊戲調查會

小學兒童遊戲改善の目的を以て起りたる日本遊戲調查會は過般體育會高等小學校、師範、高等師範等の贊成

を得て二週間の講習會を開きたるが成績極めて能く尚其の目的を遂行する爲め來月より機關雜誌「遊戯」を發行する由

◉近藤氏の禮法式服（口繪參照）

近藤氏の新案なる式服は伊勢神宮に於て古來用ひ來れる明衣の制に倣ひて作れるものにて明衣は小忌衣の一種にて昇殿の官人が位袍（束帶衣冠）の上に神事の奉仕服として着したるものなりしが中世以後庭上に奉仕する官人の明衣を略して其の料の絹を三つ折にして右肩より掛けて左脇に結び明衣の代用として之を掛け、明衣と稱へて今日も猶遷宮の際は用ゆるなり、恰も勳章の大綬を帶びたる樣にて頗る優美にして且つ簡便なり、即ちかの禮裝は明衣を衣冠束帶の上に掛くるが如く男子なれば羽織袴にても、フロクコートにても又其他の略衣の上にても、女子なれば白襟紋付にても其他の衣服にても構はず是を懸けて禮裝とするなり、其の品質の如き如何樣にも其の人の好みに任するなり又上流の人なれば緞子繻珍其他相應に好みの模樣織物を用ひて差支なく、質素にすれば金巾木綿にても宜し且つ吉禮には色物の綴れ、例之ば紅葉重、松葉重、卯の花重なども好もしからん、而して其の巾は老人に狹く、若き婦人に廣くするが如きも可ならん、但し凶禮には黑若しくは鈍色を用ふるをよしとす、次には結び樣なり、玆には明衣の結び樣に隨いて圖の如く結びしも、これには又種々優美にして高尚なる結び方もあらん、要するにこれを用ふれば禮裝として議場に出づる事を得る樣にしたきものなり、而して其の名稱も、單に綬と稱せず女子の方にては襠裲と言ふもよく、五衣といふもよからん、又男子なれば社衦となり布衣となり、いづれにしても素とそれ等の服を折りて掛けたる主意なりとぞ、

◉婦人會彙報

大日本婦人教育會の事業なる女學生監督寄宿舍の事は曾つて記載したりしが近來女學生の風儀次第に惡しくなる傾あるを以て此際一層擴張して多數の生徒を入舍せしむる筈なる由入舍希望の人は赤坂表町二丁目十三番地なる同會事務所に申込るべし但し會員の紹介を要す監督主任は清原秋子氏にして教育會評議員の諸婦人外より注意すとぞ

▲愛國婦人會の奧村五百子女史は今尙佐賀縣の郡部を巡回演說中なる由人は皆避暑旅行に夏を忘るゝ折柄熱心感服の外なし

▲福島縣河沼婦人慈善會員は去月六日閑院宮殿下御通過の際一同郡役所構外にて奉迎せしに殿下は有田知事を召させられて彼等何者ぞとの御下問ありければ謹んで其由奉答したるに深く御滿足思召され郡役所內なる休憩所にて會員一同へ拜謁を賜はりあつき御言葉をも下されたりとぞ

▲長野縣高井郡小布施婦人會は去月六日同村小學校にて發會式をあげたり金子醫師の衞生談脇野つい子氏の婦人會の今日に必要なる所以等の談話あり終りて茶話の間に胸襟を披きて退散せり

▲札幌婦人會は去る六日同地方旅行中の湯池丈雄氏を聘し殉難者追吊式を催したり

▲神田區三崎町一丁目三番地國語傳習所講習生の發起にて去る二十八日茶話會を開く上田萬年、關根正直、安井哲子氏等に演說を乞ひ餘興としては會員各自得意のヒヤノ琴舞踏等を演ぜり

◉諸國女皇の體格

歐洲諸國の女皇中にて最も短身にして體量の重かりしは故英國女皇にして其身長五呎に滿ざること一吋なりしも重量は實に百七十一封度を超たる由、最も長身なるは現和蘭國女王ウイルヘルミナにして身長實に五呎五吋半、胸廓四十二吋、腰部二十一吋半、其重量は百三十封度を超ゆる由なるが、總じて各國女皇は身長平均五呎四吋、重量平均百四十一封度、腰部平均二十五吋なりと云ふ

◉世界の長壽者

百歲以上の長壽を有する者獨逸に七十八人、佛蘭西に二百十三人、愛蘭に五百七十八人、蘇格蘭に四十六人、瑞典に十八人、那威に二十三人、白耳義に五人、丁抹に二人、瑞西に皆無、西班牙に四百一人、セルヴィアに五百七十五人、此等の統計より見れば長壽者は氣候の溫和なる地に多く熱度の高き地に少なしと云ふを得べし

◉調理せざる食物の利害

米國のシカゴ此程生食會員なるものを組織したるものありて其會員は一切調理したる物を食せざるとに定めたる由なるが其會長の公にしたる理由書に曰く生存せる原形質（プロトプラズム）は單に之を生存せる原形質より得能ふのみなりされば此原形質を吾人の機關に收むる前に調理して其細胞を破壞するは愚の極なり樫は燒きたる樫の實より生長する能はずこれ火の爲に其細胞を破壞せらるゝが故なり吾人若し吾人の小兒を養ふに調理せざる食物を以てせば小兒は智力體力共に大に發達すべし云々と

右につき佛國の理學者プレボストは同國理學雜誌に於て論じて曰く生食會員は食物を調理することは人類のみに限られたることを忘るべからずこは數千年來文運の進化に伴ふたることにして今日其不可を稱ふべきものに非ず調理の爲に食物の滋養分を失ふとは如何にして發見せられたることなるか之を知る能はずと雖食物は强度の熱を用ひて炭素質に化せしむるに非ざれば普通の竈の火にて其滋養を失ふことなし却てパンの如く調理せざれば食料とならざるものあり要するに調理は度に依ることにして果物或は鷄卵の如きは之を調理せざるも可なり又過度に熱したる食物は齒を害することあり必ずしも調理を是とし又之を非とする能はず結局生食會員は愚者の事なり而して吾人は又調理したるもののみを食する人にも贊成する能はず調理は黴菌を殺すに足ると云へど動物中には實際傳染病極めて少きに非ずやと

◉露國皇帝の生活

先月發行のレイジュア、アワー誌がコロンウォルクツアイツン紙より轉載せし記事に依れば、露國皇帝は每朝八時半に寢處を出で、親ら身仕度を爲しつゝ茶を喫し、九時頃には机上に堆積する國務書類を一々閱覽し、一人の國務大臣と共に之を討議し、十時と十一時の間に淡泊なる朝飯を喫し、其より午後一時頃迄國務大臣の上奏を聽きたる上、裁可を要する書類には一々名を署し玉ふ由、此間には又地方の各知事杯よりの奏書も嚴密に取調べらるゝ由なるが、帝は此奏書の緣に意見を書き記さる嗜好を有し玉ふ由、此二時間中に帝は再び茶を喫するの外、晩食迄は食物に手を附け玉ふこと稀なるも、時としては麵麭や鹽魚を茶と共に召すこともあり、其より四時迄三時間は、全く家族團欒の裡に一日の勞を慰め玉ふことなるが、此間に又侍從の一人は御側近く侍り、新聞を讀み、帝は常

に之に耳を傾け玉ふ、即ち其重なる新聞は倫敦タイムス、フヒガロ、コロンガゼの三種なりと、帝は讀書の嗜好を有せられさるものと見え、其書籍を手にし玉ひたるを嘗て見しものなしと云ふ、四時よりは再び國務を見七時に至り、後ち晩食を喫せらる、若し其御母儀の食卓を共にせらるゝこともあれば帝は十時迄御側に侍し種々の談話に時を移し玉ふ、十時を過ぐれば書齋に退き眞夜中迄國事に鞅掌し玉ふと云ふ

◉風變りの粧飾は命に關係す

近頃の事なり伯林にて一人の若き婦人は狐の毛皮にて其端に狐の頭の附きたる儘の頸卷を附けて市内を通行したるに一匹の犬突然飛び附き狐の頭を啣へて引摺り行きたれば婦人は危く一命を失ふ所なりしを通行の人に助けられて漸く難を免れたりと云ふ右に就き同國の一新聞は身躰の粧飾に極端なることを爲すは大に愼むべきことなり之が爲に命を失ひたるもの少なからず命を失はんとしたるものは頗る多しと云ひ其一二の例を擧けて曰く鳥もて飾りたる帽子を戴きたる婦人にて獵者に眞の鳥と誤られて射擊せられたることあり造りたる雛菊もて飾りたる帽子を戴きて馬に嚙まれたるものありと

◉英帝と皇室附牧師

英國下院委員會に於ける皇室費討議の際自由黨のラボーセア氏は口を極めて其節減を主張し第一皇室に三十六人の牧師を抱へ置くは餘に贅澤なりと迄極論したるも出席の議員は何れも氏の主張を以て法律違犯秩序の破壞なりと論じ多數を以て否決したるが其れかあらぬか皇帝は間もなく三十六人の牧師を減じて十二人となし玉ひたるより、ラボーセアの下院に於ける同僚は彼を王の顧問官と呼び做せる由

◉十九年間に三十七人の子供

澳太利の一農夫エハン、ステイナーと稱するは今を距ること十九年前即ち本人五十二歳の折當時廿五歳なりしマーサと呼べる婦人と結婚したるが其後の十九年間にマーサは三ツ子を産みしこと三回二タ子を産みしこと十二回、一兒宛産みしこと四回、合計三十七人の子供を產みたるが、其第三十七番目の子供は父親ステイナーの第七十二回誕生日に生れたるなりと云ふ、而して現に存在するは三十四人なるか彼等は何れも健康躰にして且容貌風采孰れも普通人と毫も異なる處なく父親のステイナーも七十二歳の高齢なるに拘はらず今猶ほ矍鑠たりと



女學世界第十三號記事豫告

每月一回五日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）……金二十錢
四册（三ヶ月分）……前金七十五錢
八册（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
内（定刊數……十二册 / 增刊四回…三、六、九、十一月價格同一）

郵稅　一册　二錢

廣告料

	二十四字詰一行	半頁卅二行	一頁六十四行
特等	……	……	割引三十三圓
一等	四十三錢	十三圓七十六錢	割引二十七圓
二等	三十五錢	十一圓二十錢	割引二十二圓
三等	三十錢	九圓六十錢	割引十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

注文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず。
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す。
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の分に限る。
●總目錄御入用の方は二錢券相添へ申込あれ。

明治卅四年九月五日發行　第一卷第十一號

編輯人　松原岩五郎
發行人　大橋新太郎
印刷人　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町二十六七番地　株式會社秀英舍
發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番

品切圖書增刷出來報告

- 再版 造家と築庭 全壹冊 金廿五錢 郵税六錢
- 九版 銀行實踐法 全壹冊 金六拾錢 郵税六錢
- 六版 果樹栽培全書(三) 全壹冊 金三拾錢 郵税六錢
- 六版 果樹栽培全書(四) 全壹冊 金三拾錢 郵税六錢
- 七版 二宮尊德翁 全壹冊 金拾貳錢 郵税四錢
- 廿版 近江聖人 全壹冊 金拾貳錢 郵税四錢
- 十六版 農學入門(合本) 全壹冊 金廿五錢 郵税八錢
- 四版 致富要訣 全壹冊 金廿五錢 郵税六錢
- 六版 陸軍一班 全壹冊 金廿五錢 郵税六錢
- 九版 お伽噺日本川中島 全壹冊 金六錢 郵税貳錢
- 六版 お伽噺日本和唐內 全壹冊 金六錢 郵税貳錢
- 十一版 作文資料 全壹冊 金拾五錢 郵税四錢
- 十四版 日本婦女用文 全壹冊 金拾八錢 郵税六錢
- 五版 天則百話 全壹冊 金三拾錢 郵税六錢

- 十三版 日本風景論 全壹冊 金五拾錢 郵税拾錢
- 六版 日本名勝地誌(六) 全壹冊 金三拾錢 郵税八錢
- 六版 日本名勝地誌(七) 全壹冊 金三拾錢 郵税八錢
- 十四版 日本名勝地誌(一) 全壹冊 金三拾錢 郵税八錢
- 八版 新撰日本節用 全壹冊 九拾五錢 郵税拾錢
- 三版 圍碁錦囊 全三冊 金五拾錢 郵税四錢
- 十二版 史記讀本 全二十冊 金三圓 目方八百匁
- 六版 新百人一首 全壹冊 金三拾錢 郵税四錢
- 十版 明治書翰文 全壹冊 金三拾錢 郵税四錢
- 五版 畫法詳論 全三冊 金五拾錢 郵税六錢
- 三版 畧可法 全六冊 金四拾八錢 郵税六錢
- 三版 墨場必携 全六冊 金七拾錢 郵税八錢
- 四版 草叢 全十二冊 金參圓五拾錢 小包目方六百匁
- 三版 行書類纂 全十二冊 金二圓十錢 小包目方四百匁

(後付の一)

四版　六版　再版　再版　三版　廿四版　廿六版　五版　五版　三版　三版　再版　再版　三版　再版

- 楷行菁編　全拾五冊 金参圓　目方六百匁
- 中等教育 東洋歴史　全壹冊 金八拾錢　郵税拾錢
- 謠曲通解（合本）　全壹冊 金壹圓八拾錢　目方六百匁
- 東西南北 探凉案内　全壹冊 金六拾錢　郵税拾錢
- 學生訓　全壹冊 金三拾五錢　郵税四錢
- 歐米山水　全壹冊 金壹圓五拾錢　郵税拾錢
- 改正漫遊案内　全壹冊 金四拾錢　郵税八錢
- 中等教育 日本歴史（下）　全壹冊 金五拾五錢　郵税八錢
- 中等教育 日本歴史要解　全壹冊 金五拾錢　郵税六錢
- 箋註 正續文章軌範讀本　全壹冊 金七拾錢　郵税四錢
- 新撰落語 福　全壹冊 金三拾錢　郵税六錢
- 通俗治療救急法　全壹冊 金三拾錢　郵税四錢
- 相場必勝法　全壹冊 金三拾錢　郵税六錢
- 詠歌辭典　全壹冊 金七拾五錢　郵税八錢
- 義太夫百番（合本）　全壹冊 金壹圓　郵税十六錢
- 名士の平生　全壹冊 金三拾五錢　郵税四錢

- 十三版　帝國六法全書　全壹冊 金九拾錢　郵税拾四錢
- 七版　日本新地理學　上製五拾錢 郵税拾錢　並製卅五錢 郵税八錢
- 四版　肥料學　上製五拾錢 郵税拾錢　並製三拾五錢 郵税八錢
- 再版　農産製造學　上製五拾錢 郵税拾錢　並製三拾五錢 郵税八錢
- 五版　修辭學　上製五拾錢 郵税拾錢　並製三拾五錢 郵税八錢
- 五版　倫理學　上製五拾錢 郵税拾錢　並製三拾五錢 郵税八錢
- 再版　米商寶函　全壹冊 金三拾錢　郵税六錢
- 四版　漢文講讀法（合本）　全壹冊 金廿四錢　郵税六錢
- 四版　讀書法　全壹冊 金拾錢　郵税四錢
- 六版　寫眞術　全壹冊 金拾錢　郵税四錢
- 六版　家禽新書　全壹冊 金拾五錢　郵税四錢
- 七版　百人一首講義　全壹冊 金貳拾錢　郵税四錢
- 四版　圍碁大鑑　全壹冊 金五拾錢　郵税六錢
- 三版　寫眞及幻燈　全壹冊 金廿五錢　郵税六錢
- 五版　易占及骨相法　全壹冊 金廿五錢　郵税六錢
- 再版　新撰代數學　上製五拾錢 郵税拾錢　並製卅五錢 郵税八錢

（後付の二）

工業叢書

工學士 市川俊雄君著（製本出來）

第壹編

水及油

全壹冊洋裝
菊判上製
正價五拾錢
郵錢六錢

水と油とは人生秒時も缺く可らざる必要品なり、人類之に由て生活し、機械之に由て運轉し、萬種之製產之に由て運轉し、萬種之製產之に由て始めて成る、而して其工業上に於ての作用を詳論したるもの、從來我國に此の如き良書なし、世の工業家、機械家及化學者を始めとし艦船鐵道の機關士工業學校の敎員及生徒は勿論其他總ての技師、技手等の必讀すべき良書なり

第貳編

陶器製造化學

（近刊）

獨逸國カール、ランゲンベック氏著
東京高等工業學校敎授 東京帝國大學講師 工學士細木松之介君校閱
尾州瀨戸陶器學校長 黑田政憲君譯

全壹冊洋裝
菊判上製
近刊

本書の譯者黑田氏は我國陶器の最も盛んなる產出地なる尾州瀨戸の陶器學校長にて、校者細木氏は工科大學に於て專門として陶器の製造を硏究したる工學士なり而して本書の原著は歐洲に於て陶器の產出の最も盛んなる獨逸國のカール、ランゲンベック氏が多年苦心して硏究したる陶器製造の原理及方法を編述したるものにて方今世界の各國を通じて斯業の爲めに唯一の原理として賞贊せらるるものといふ、當業者の爲めには無上の參考書たるべし近日工業叢書の第貳編として出版せんとす

●工業管理法

工學士重宗熊彥君著（續刊）

●發兌元 東京 博文館●

（後付の四）

法學博士 有賀長雄君著

東京專門學校藏版

早稻田叢書 國法學

(全部貳卷)

上卷出版發賣

洋裝上製背皮 金文字入美本 正價金一圓七十五錢 郵稅十六錢

本書は有賀博士が從來日本に行はるゝ國法學の大抵獨逸國法學の飜譯に過ぎずして日本國家の編成と相容れざる學說を其儘取次ぐの弊を憂ひ**日本獨立の國法學**を構成せんとして著はしたるものなり其說く所は日本國法沿革に始り天皇政府議會官廳官吏地方自治法律命令行政訴願及行政裁判に及ぶ茲に其特色の一二を擧げば本書は日本の歷史を基礎とし日本の立憲國家編成の歐米各國と異なる點を明にし(一)日本の國法を主幹とし泰西の國法を枝葉として比較論究し(二)又泰西國法學の大家の說にして我國體と相容れざるものと雖其名論卓說は之を細註として參考に供し(三)泰西の國法學者が政治及政黨を以て法律以外のものとし之を國法學に論ぜざるは從來の研究法に於ける一大缺點なりければ本書に於て**政治及政黨の效用**を理學的に解剖し之に基きて國家の運用を開示したるは是れ實に泰西諸學者の右に一步を進めたるものなり(四)本書の上梓は實に從來の**國法學に大革進**を加ふるものと謂ふべく日本人は勿論歐米の學者亦之を珍重せん大方の君子幸に愛讀を吝む勿れ

發賣元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

青少年 雜誌界の大王

總裁 一條公爵 議長 本田男爵 會務監督 篠田法學士

皇太子殿下每號御上覽

青少年筆戰場 議事錄

第三期第三號 九月十日發行

作文和歌俳句漢詩等各課專門ノ師擔任ス

見本郵券十錢

本號には本會獨特の懸賞募集方法詳細あり
本會の支會支部は全國到る處に設置せり

東京神田千代田町二 電話本局(一四四)

帝國少年議會

(議員數一萬有餘)(講讀者三萬有餘)

賣捌 東京堂、北隆館、良明堂 東海信文會社、其他

(後付の七)

中學世界秋期增刊

第四巻第拾貳號

英才詞苑秋の巻豫告

（九月二十日發行）

來九月中旬をトして英才詞苑の秋の巻を發刊せんとす、時方に季秋に入りて學窓淡光なく、庭園爽氣浮び、尤讀書に宜しく、學生諸氏の机邊新讀物なかるべからざるに際す、本誌の增刊が趣味の富贍にして如何に諸子の伴侶たるに適するかは、從來の諸巻に徴して遍く諸子の知る所なれば、今更に贅するの要なけれど、軆裁は例の如く紙數二百四十頁の中、其三分の二を以て七月以來募集せる懸賞文の披露に宛て、殘餘を以て附録とし、之には知名諸家の佳什數篇を收め、口繪には内外人物風景等殊に斬新奇拔なる材料を蒐む、附録收むる所左の如し。

附録

●彼得大帝（評傳）……在露國 法學士 夏秋龜一

篇を別つと九、紙數四十頁、此東歐の偉傑の一代を詳叙し論評せるものにして大帝即位以前の露西亞より筆を起し、帝の幼時、歐洲の旅行境土の廓大、東方政畧等に至る迄、帝が生前の經營載せて洩すなし、行文殊に流麗、

●復讐（小説）……德田秋聲

是泰西名家の筆になる面白き軍事小説を秋聲氏の暢達の筆にて反譯せるものにして快活なる軍人生活紙上に躍動せり、青年諸子には殊に絶好の讀物なり

●物外の偉人 賣茶翁（傳記）……宮田木佛

松籟颯々たる下熱腸を滌はんとして玉茗を烹、たま〳〵篆烟の内に古人高遊外の遺風を見る、此篇は即ち作者が當時の幼覺に筆を起して我國物外の偉人煎茶道の宗祖賣茶翁の高風を描寫せるもの

●文學としての言語（論文）……永井金風

英國の名家ローレー氏「言語及び言語學の方則」中より最適切なる數章を譯出せるものにして、文學に志す者の必讀すべき資料たり、

●文學叢談（逸話）……柳緑郎

我國古今の武士が軍旅野外に在りて文墨を弄せし數多の佳話を蒐録せるものにして英雄の雅懐を窺ふに足る、

（後付の八）

大法典發刊廣告

侯爵山縣有朋君題辭
司法大臣清浦奎吾君序文
博文館編輯局編纂

増訂十一版

現行日本法令大全

製本既成
全部新鑄
活字ヲ以
テ鮮明ニ
印刷

◉全部貳册 洋裝背皮上製 函入紙數四千四百餘頁

◉定價金五圓◉小包送料 ●百里以内貳拾八錢 ●百里以外五拾六錢

我『現行日本法令大全』が他店出版の類似同種の法令書類に比し卓然群を抜くの好法典たるは既に江湖の識認を得たる所なり今や其第十一版の發行を爲すに際し新に大増補を加へ第十版に比し紙數を増加する事 千五百頁 携帶閲覧の便を計り分つて上下二冊となし前版發兌後公布の法令即ち 明治卅二年五月 より今明治卅四年七月 に至る新法令は殆んど細大漏さずして悉く收載したり此に於てか當第十一版の現行法令大全は明治元年より 明治卅四年七月迄 の卅四年七ヶ月間公布の現行諸法令を網羅したる法令大全となるに至れり而して分類最も整正序次配列宜しきに適ひ目次及索引の編製は更に新工夫を用ひ加るに用紙頁好装釘堅牢にして劇しき使用に堪へ校正嚴確にして法則の規定を誤らず實に比類なき最新最良の法典たるは斷言して憚らざる所なり本書印刷部數に限りあり豫約期限中にても品切となる恐あれば大至急御送金御申込あらんことを希望の至りに堪へざるなり

發兌元 東京 博文館

（明治三十三年十二月廿[illegible]日第三種郵便物認可）
毎月一回五日發行
第壹卷第十一號
（明治三十四年九月五日發行）

姉妹を持てる兄弟 娘を持てる親 妻を持てる夫 母を持てる子 女と云ふ女 見よ

姉妹を持てる兄弟に繰り返し〳〵此廣告を讀み下へ讀みて記憶に止め日本國に中將湯と云ふ靈藥あることを……

中將湯の名譽

產科婦人科專門諸大醫の稱贊を得たるのみならず長くも上宮樣方の御用を蒙るに到る故に本劑の名譽にして又同病患者の幸福と云ふべし

- 醫學博士慈惠病院長 高木兼寛先生（東京）
- 產科婦人科專門醫學士櫻井病院長 櫻井郁次郎先生（東京）
- 產科婦人科專門ドクトル 木村順吉先生（東京）
- 婦人科專門病院ドクトル 朝山義六先生（横濱）
- 產科婦人科ドクトル 佐伯理一郎先生（西京）
- 大阪緒方病院婦人科醫長ドクトル 緒方正清先生（大阪）
- 產科婦人科專門ドクトル 小林山卿先生（大阪）
- 愛知病院婦人科醫長醫學士ドクトル 柴田耕一先生 名古屋
- ドクトル婦人科專門クランエト、ハアマシー 大月文先生（福井）

右の外三十餘名の大醫諸君より最も名譽ある稱贊を添ふしたれども略す

●十年のちの道三週間に全治す●

子宮病血の道產前產後の長き患ひ●下腹子宮腰足引つり痛み●下腹より腳先へ差込或は正氣を失ひ●息切し動氣強く腰より足部へ冷込み●手足しびれ●浮腫



中將湯

●月經不順

年頃になりて月經なき人●逆上頭痛眩暈甚しく●又物事に苦にし氣分惡く常にふさぎ勝の人特に子宮出血白血長血帶下にて久しく患ひ身體衰弱せる病にても全治すること請合なり…（論より證據早々試みよ）

定價	郵送料
一日分七錢五厘	二錢
三日分廿五錢	二錢
一週分四十五錢	四錢
二週分八十五錢	六錢
三週分一圓廿五錢	十錢

●中將湯各藥店にあり無ば本舗へ申込あれ●本舗へ御注文の御方は病人の容體を詳しく申込あれ●東京市中は配達し●遠國は郵送す

本舗 東京市日本橋區通四丁目七番地（電話本局千九十七番長距離接續）

本舗 大阪[illegible]町北入（電話東二百七十八番長距離接續）

津村順天堂本店

津村順天堂支店

（定價金貳拾錢）